

京都府遺跡調査報告集

第130冊

1. 府営経営体育成基盤整備事業「川東地区」関係遺跡
平成19年度発掘調査報告
 - (1) 室橋遺跡第11次
 - (2) 野条遺跡第13次
2. 千束古墳群発掘調査報告
3. 河守北遺跡第5次発掘調査報告

2 0 0 8

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方の御理解と御協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

本書は、『京都府遺跡調査報告集』として、平成18・19年度に実施した発掘調査のうち、京都府農林水産部の依頼を受けて行った室橋遺跡第11次発掘調査報告・野条遺跡第13次発掘調査報告、京都府土木建築部の依頼を受けて行った千束古墳群・河守北遺跡第5次発掘調査報告等を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、御活用いただければ幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、京都府教育委員会などの各関係諸機関、ならびに調査に参加、協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成20年 3 月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理 事 長 上 田 正 昭

例 言

1. 本書に収めた概要は、下記のとおりである。

1. 府営経営体育成基盤整備事業「川東地区」関係遺跡

(1) 室橋遺跡第11次

(2) 野条遺跡第13次

2. 千束古墳群

3. 河守北遺跡第5次

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者および概要の執筆者は下表のとおりである。

	遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1.	府営経営体育成基盤整備事業「川東地区」関係遺跡			京都府農林水産部	高野陽子 辻本和美 中居和志
	室橋遺跡第11次	南丹市八木町室橋	平19.4.23～9.7		
	野条遺跡第13次	南丹市八木町室橋	平19.4.23～9.7		
2.	千束古墳群	京丹後市峰山町石丸	平19.8.21～12.6	京都府土木建築部	引原茂治 森島康雄 黒坪一樹
3.	河守北遺跡第5次	福知山市大江町河守	平18.7.24～12.23	京都府土木建築部	戸原和人 黒坪一樹 大本朋弥

3. 本書で使用している座標は、原則、世界測地系国土座標第6座標系によっており、方位は座標の北をさす。また、国土地理院発行地形図の方位は経度の真北をさす。

4. 本書の編集は、調査第2課調査担当者の編集原案をもとに、調査第1課資料係が行った。

5. 現場写真は主として調査担当者が撮影し、遺物撮影は、調査第1課資料係主任調査員田中彰が行った。

本文目次

1. 府営経営体育成基盤整備事業「川東地区」関係遺跡平成19年度発掘調査報告-----	1
(1)室橋遺跡第11次-----	3
(2)野条遺跡第13次-----	36
2. 千束古墳群発掘調査報告-----	41
3. 河守北遺跡第5次発掘調査報告-----	57

付表目次

2. 千束古墳群	
付表 5号墳出土玉類計測表-----	54

插图目次

1. 府営経営体育成基盤整備事業「川東地区」関係遺跡	
第1図 周辺遺跡分布図-----	2
(1)室橋遺跡第11次	
第2図 室橋遺跡・野条遺跡調査区位置図-----	3
第3図 室橋遺跡北地区調査地配置図-----	4
第4図 1区遺構配置図-----	5
第5図 北地区各調査区土層断面図-----	6
第6図 溝S D11101実測図・同土層断面図・土坑S K11102・11103実測図-----	7
第7図 2区遺構配置図・溝S D11201土層断面図-----	9
第8図 3区遺構配置図・掘立柱建物跡S B11301・柱列S A11302実測図-----	10
第9図 4区遺構配置図・掘立柱建物跡S B11405・11406・11407実測図-----	11
第10図 土壌S K11409・11410・土坑S K11408実測図-----	12
第11図 5区遺構配置図・溝S D11501土層断面図-----	13
第12図 6区遺構配置図-----	14
第13図 掘立柱建物跡S B11601・11602・柱列S A11603・11605・土坑S K11604実測図---	15
第14図 室橋遺跡南地区・野条遺跡調査区位置図-----	16

第15図	7区遺構配置図-----	17
第16図	7区土層断面図-----	18
第17図	竪穴式住居跡 S H11710実測図-----	20
第18図	竪穴式住居跡 S H11710竈実測図-----	21
第19図	竪穴式住居跡 S H11706・11711実測図-----	23
第20図	掘立柱建物跡 S B11729・土器溜まり S X11720実測図-----	24
第21図	溝 S D11707・11705実測図・7区溝群実測図-----	25
第22図	室橋遺跡出土遺物実測図(1)-----	28
第23図	室橋遺跡出土遺物実測図(2)-----	30
第24図	室橋遺跡出土遺物実測図(3)-----	31
第25図	室橋遺跡出土遺物実測図(4)-----	33
第26図	室橋遺跡出土遺物実測図(5)-----	35

(2)野条遺跡第13次

第27図	野条遺跡第13次調査区実測図-----	36
第28図	野条遺跡調査区土層断面図-----	37
第29図	室橋遺跡・野条遺跡主要遺構検出地点位置図-----	39

2. 千束古墳群

第1図	調査地位置図-----	41
第2図	東尾根地区調査区配置図-----	42
第3図	西尾根地区調査区配置図-----	42
第4図	5・6号墳平面図-----	43
第5図	5号墳墳丘平面図-----	44
第6図	5号墳墳丘断面図-----	44
第7図	5号墳埋葬施設実測図-----	45
第8図	5号墳埋葬施設内遺物出土状況図-----	46
第9図	6号墳墳丘平面図-----	47
第10図	6号墳墳丘断面図-----	47
第11図	6号墳墳丘上面遺物出土状況図-----	48
第12図	6号墳埋葬施設実測図-----	49
第13図	東尾根地区断面図-----	50
第14図	炭窯実測図-----	50
第15図	5号墳出土遺物実測図(1) 銅鏡-----	51
第16図	5号墳出土遺物実測図(2) 玉類・鉄製品-----	51
第17図	6号墳出土遺物実測図(1) 土器-----	52

第18図	6号墳出土遺物実測図(2) 鉄製品-----	53
------	------------------------	----

3. 河守北遺跡第5次

第1図	調査地位置図-----	58
第2図	調査トレンチ配置図-----	59
第3図	第1トレンチ平面図-----	59
第4図	第1トレンチ断面図-----	60
第5図	竪穴式住居跡SH03実測図-----	61
第6図	竪穴式住居跡SH04実測図-----	61
第7図	掘立柱建物跡SB01・02実測図-----	63
第8図	第2トレンチ実測図-----	64
第9図	第3-1トレンチ実測図-----	65
第10図	第3-2・3トレンチ実測図-----	65
第11図	第3-2トレンチ断面図-----	66
第12図	第3-2トレンチ遺構断面図-----	67
第13図	第4トレンチ実測図-----	68
第14図	出土遺物実測図(1)-----	71
第15図	出土遺物実測図(2)-----	72
第16図	出土遺物実測図(3)-----	74
第17図	出土遺物実測図(4)-----	75
第18図	出土遺物実測図(5)-----	76
第19図	出土遺物実測図(6)-----	78
第20図	出土遺物実測図(7)-----	79
第21図	出土遺物実測図(8)-----	81
第22図	出土遺物実測図(9)-----	82
第23図	出土遺物実測図(10)-----	84
第24図	出土遺物実測図(11)-----	87
第25図	出土遺物実測図(12)-----	88
第26図	出土遺物実測図(13)-----	89

図 版 目 次

1. 府営経営体育成基盤整備事業「川東地区」関係遺跡

室橋遺跡第11次・野条遺跡第13次

- 図版第1 (1) 室橋遺跡遠景(北西から)
(2) 室橋遺跡近景(南東から)
- 図版第2 (1) 1区・2区調査地全景(上が北東)
(2) 3区調査地全景(上が南西)
- 図版第3 (1) 3区・4区・5区調査地全景(上が北東)
(2) 5区調査地全景(上が北東)
- 図版第4 (1) 室橋遺跡北部近景(北西から)
(2) 6区調査地全景(上が北東)
- 図版第5 (1) 1区溝 S D 11101(東から)
(2) 5区溝 S D 11501・落ち込み S X 11502(北西から)
- 図版第6 (1) 室橋遺跡北地区調査前風景(北西から)
(2) 1区東壁土層断面(北西から)
(3) 1区調査地全景(南東から)
- 図版第7 (1) 1区溝 S D 11101(南東から)
(2) 1区溝 S D 11101(東から)
(3) 1区溝 S D 11101土層断面(東から)
- 図版第8 (1) 2区調査地全景(南東から)
(2) 2区調査地全景(南東から)
(3) 2区溝 S D 11201土層断面(南から)
- 図版第9 (1) 3区調査地全景(北西から)
(2) 3区柱列 S B 11302(北東から)
(3) 4区調査地全景(南東から)
- 図版第10 (1) 4区調査地北部全景(上が南西)
(2) 4区掘立柱建物跡 S B 11407(南東から)
(3) 4区掘立柱建物跡 S B 11405-P 1 遺物出土状況(上が北西)
- 図版第11 (1) 4区土坑 S K 11409・S K 11410(北西から)
(2) 4区 S K 11410(西から)
(3) 4区土坑 S K 11408(南西から)
- 図版第12 (1) 5区東壁土層断面(南西から)

- (2) 5区溝 S D11501(南東から)
- (3) 5区溝 S D11501(南東から)
- 図版第13 (1) 5区落ち込み S X11502と新庄用水(南東から)
- (2) 5区落ち込み S X11502(南東から)
- (3) 5区落ち込み S X11502遺物出土状況(南東から)
- 図版第14 (1) 室橋遺跡北地区北東部近景(西から)
- (2) 6区調査地全景(南東から)
- (3) 6区調査地全景(北西から)
- 図版第15 (1) 6区掘立柱建物跡 S B11601(南から)
- (2) 6区掘立柱建物跡 S B11602-P12(東から)
- (3) 6区柱列 S A11603-P9(北から)
- 図版第16 (1) 7区調査地全景(南から)
- (2) 室橋遺跡南地区近景(南東から)
- 図版第17 (1) 7区調査地全景(上が北)
- (2) 7区調査地全景(上が西)
- 図版第18 (1) 7区竪穴式住居跡群(上が西)
- (2) 7区北西部溝群(上が西)
- 図版第19 (1) 7区竪穴式住居跡 S H11710(東から)
- (2) 同上造り付け竈(東から)
- 図版第20 (1) 7区竪穴式住居跡 S H11710竈(北から)
- (2) 同上竈断ち割り(東から)
- (3) 7区竪穴式住居跡 S H11710貯蔵穴 K1内土器出土状況(東から)
- 図版第21 (1) 7区竪穴式住居跡 S H11706(北東から)
- (2) 7区竪穴式住居跡 S H11711遺物出土状況(南から)
- (3) 同上床面検出状況(北東から)
- 図版第22 (1) 7区溝 S D11705・S D11707(北西から)
- (2) 7区溝 S D11707(北西から)
- (3) 7区溝 S D11707(南東から)
- 図版第23 (1) 7区溝 S D11707溝内集石検出状況(西から)
- (2) 同上溝内瓦器出土状況(北から)
- (3) 7区溝 S D11714・11715・11717・11718(北から)
- 図版第24 (1) 7区溝 S D11715・S D11717・S D11718(西から)
- (2) 7区土器溜まり S X11720(北西から)
- (3) 7区土坑 S K11709遺物出土状況(南東から)
- 図版第25 (1) 7区溝 S D11707土層断面(南東から)

- (2) 7区溝 S D11705土層断面(南東から)
- (3) 7区溝 S D11701土層断面(南東から)
- 図版第26 (1) 野条遺跡調査地全景(東から)
- (2) 野条遺跡調査地全景(西から)
- (3) 調査地東部遺構検出状況(東から)
- 図版第27 出土遺物 1
- 図版第28 (1) 1～6区出土遺物
- (2) 7区出土遺物
- 図版第29 出土遺物 2
- 図版第30 (1) 7区出土遺物 瓦器碗
- (2) 7区出土遺物 白磁類

2. 千束古墳群

- 図版第 1 (1) 西尾根地区調査前全景(空撮、右上が北)
- (2) 調査地遠景(空撮、北から)
- 図版第 2 (1) 西尾根地区調査地全景(空撮、右上が北)
- (2) 5号墳埋葬施設全景(南東から)
- 図版第 3 (1) 5号墳埋葬施設玉類出土状況(南東から)
- (2) 5号墳埋葬施設銅鏡等出土状況(南東から)
- (3) 5号墳埋葬施設完掘状況(北西から)
- 図版第 4 (1) 6号墳墳丘上面遺物出土状況(東から)
- (2) 6号墳墳丘上面遺物出土状況(西から)
- (3) 6号墳木棺痕跡検出状況(北から)
- 図版第 5 (1) 6号墳埋葬施設全景(南から)
- (2) 6号墳埋葬施設須恵器出土状況(北から)
- (3) 6号墳埋葬施設鉄製品出土状況(西から)
- 図版第 6 (1) 6号墳埋葬施設完掘状況(南から)
- (2) 東尾根地区調査地全景(空撮、上が北)
- (3) 東尾根地区 4区全景(南西から)
- 図版第 7 5号墳出土遺物
- 図版第 8 6号墳出土遺物 1(土器)
- 図版第 9 6号墳出土遺物 2(土器・鉄製品・銅釦)、5号墳出土銅鏡
- 図版第10 6号墳出土遺物 3(鉄製品)

3. 河守北遺跡第5次

- 図版第1 (1)第1トレンチ全景(北東から)
(2)掘立柱建物跡S B01(南から)
(3)掘立柱建物跡S B02(東から)
- 図版第2 (1)竪穴式住居跡S H03-1(北西から)
(2)竪穴式住居跡S H03-2(北西から)
(3)竪穴式住居跡S H03遺物出土状況(北東から)
- 図版第3 (1)土坑S K104青磁出土状況(西から)
(2)第2トレンチ全景(上が北西)
(3)第2トレンチ全景(南西から)
- 図版第4 (1)竪穴式住居跡S H04(東から)
(2)竪穴式住居跡S H04遺物出土状況(北から)
(3)土坑S K201検出状況(北東から)
- 図版第5 (1)土坑S K201完掘状況(北西から)
(2)第3トレンチ全景(上が西)
(3)土坑S K16全景(西から)
- 図版第6 (1)谷状地形N R07(南西から)
(2)第3-3トレンチ検出状況(南東から)
(3)石見型木製品出土状況(南から)
- 図版第7 (1)堰状遺構S X15(南から)
(2)土器溜まりS X09検出状況(西から)
(3)S X09遺物出土状況(東から)
- 図版第8 (1)第3-3トレンチ完掘状況(南東から)
(2)第4トレンチ全景(上が西)
(3)第4トレンチ全景(北から)
- 図版第9 (1)溝S D17遺物出土状況2(南から)
(2)漆土器184出土状況(南から)
(3)護岸施設S X18・19検出状況(南から)
- 図版第10 出土遺物1
- 図版第11 出土遺物2
- 図版第12 出土遺物3
- 図版第13 出土遺物4
- 図版第14 出土遺物5

1. 府営経営体育成基盤整備事業「川東地区」 関係遺跡平成19年度発掘調査報告

はじめに

今回の調査は、平成19年度の府営経営体育成基盤整備事業「川東地区」に伴い、京都府南丹土地改良事務所の依頼を受けて実施した。

室橋遺跡・野条遺跡は、亀岡盆地北端の旧丹波国に含まれる南丹市八木町に所在する。亀岡盆地の中央を大堰川(桂川上流域)が貫流するが、両遺跡はその東岸にあり、周辺は西に筏森山(標高295m)、北に諸木山(標高496m)を配し、小山に囲まれた小盆地状をなす。この地域では、近年、ほ場整備事業や府道建設事業に伴い、多くの発掘調査が実施され、遺跡の実態が明らかになりつつある。野条遺跡の南に接する低地部の池上遺跡では、18次にわたる調査により、弥生時代中期の墓域をとまなう大規模集落や、古墳時代中期～後期の竪穴式住居跡群、奈良時代～平安時代の掘立柱建物跡群などが調査された。また室橋遺跡の東に隣接する諸畑遺跡では、丘陵縁辺部の調査で弥生時代後期や古墳時代中期の竪穴式住居跡の存在が明らかになっている。

室橋遺跡と野条遺跡は、平成7年度～10年度にかけて八木町教育委員会(現南丹市教育委員会)の実施した遺跡分布調査および試掘調査によって、古墳時代～平安時代を中心とする複合集落遺跡であることが判明した。室橋遺跡では、その後、南丹市教育委員会・京都府教育委員会の試掘調査などによって、南北約900m、東西約300mの範囲をもつ大規模な集落遺跡であることが明らかとなり、これまで10次にわたる調査が行われている。弥生時代後期～古墳時代初頭、奈良時代～平安時代にかけて、主に灌漑用とみられる大規模な溝が繰り返し掘削されていたことや、古墳時代中期～後期の集落跡、奈良時代後期～平安時代初頭の大形掘立柱建物跡の存在が明らかとなった。また野条遺跡では、過去12次にわたる調査が実施され、弥生時代後期の竪穴式住居跡や、平安時代後期の溝や掘立柱建物跡群が検出された。今回の調査は府営ほ場整備事業に伴うもので、ほ場整備によって、遺構面まで掘削が及ぶ地域と切土による造成が及ぶ部分についてこれまでの周辺における発掘調査の成果と試掘調査の結果を受け、南丹市教育委員会および京都府教育委員会の指導のもとに調査区を設定した。室橋遺跡では、遺跡の北部を中心に6か所を、また南部に1か所の調査区を設定して調査を実施した。一方、野条遺跡の調査は、遺跡の北部においてはほ場整備に伴う用水路建設に先立ち、試掘調査を実施したものである。

現地調査は、平成19年4月23日～平成19年9月7日までを調査期間とした。室橋遺跡第11次調査の調査面積は、2000㎡である。また野条遺跡第13次調査の調査面積は200㎡である。発掘調査は、当調査研究センター調査第2課課長肥後弘幸、調査第2課第2係長森正、同次席総括調査員辻本和美、同主査調査員竹井治雄、同調査員高野陽子が担当した。本報告の執筆は、(1)の室橋遺跡第11次報告は、2-aを高野、2-bを辻本が主に担当した。2-bの古墳時代の住居につ



第1図 周辺遺跡分布図（国土地理院 1/25,000 殿田・亀岡）

- | | | | | |
|------------|----------|------------|----------|------------|
| 1. 室橋遺跡 | 2. 野条遺跡 | 3. 新庄城跡 | 4. 新庄遺跡 | 5. 船枝遺跡 |
| 6. 清谷古墳群 | 7. 畑中城跡 | 8. 諸畑遺跡 | 9. 八木田遺跡 | 10. 日置遺跡 |
| 11. 幡日佐神社 | 12. 如城寺 | 13. 野条城跡 | 14. 池上院 | 15. 筏森山古墳群 |
| 16. 城谷口古墳群 | 17. 池上遺跡 | 18. 池上古里遺跡 | 19. 刑部城跡 | 20. 多国山古墳群 |

いては、辻本・高野が分担して執筆し、2-cの古墳時代の土器を立命館大学大学院文学研究科（前期）の中居和志が担当した。また、（2）の野条遺跡第13次調査報告については竹井治雄が担当した。その他の部分は辻本・高野の共同執筆による。

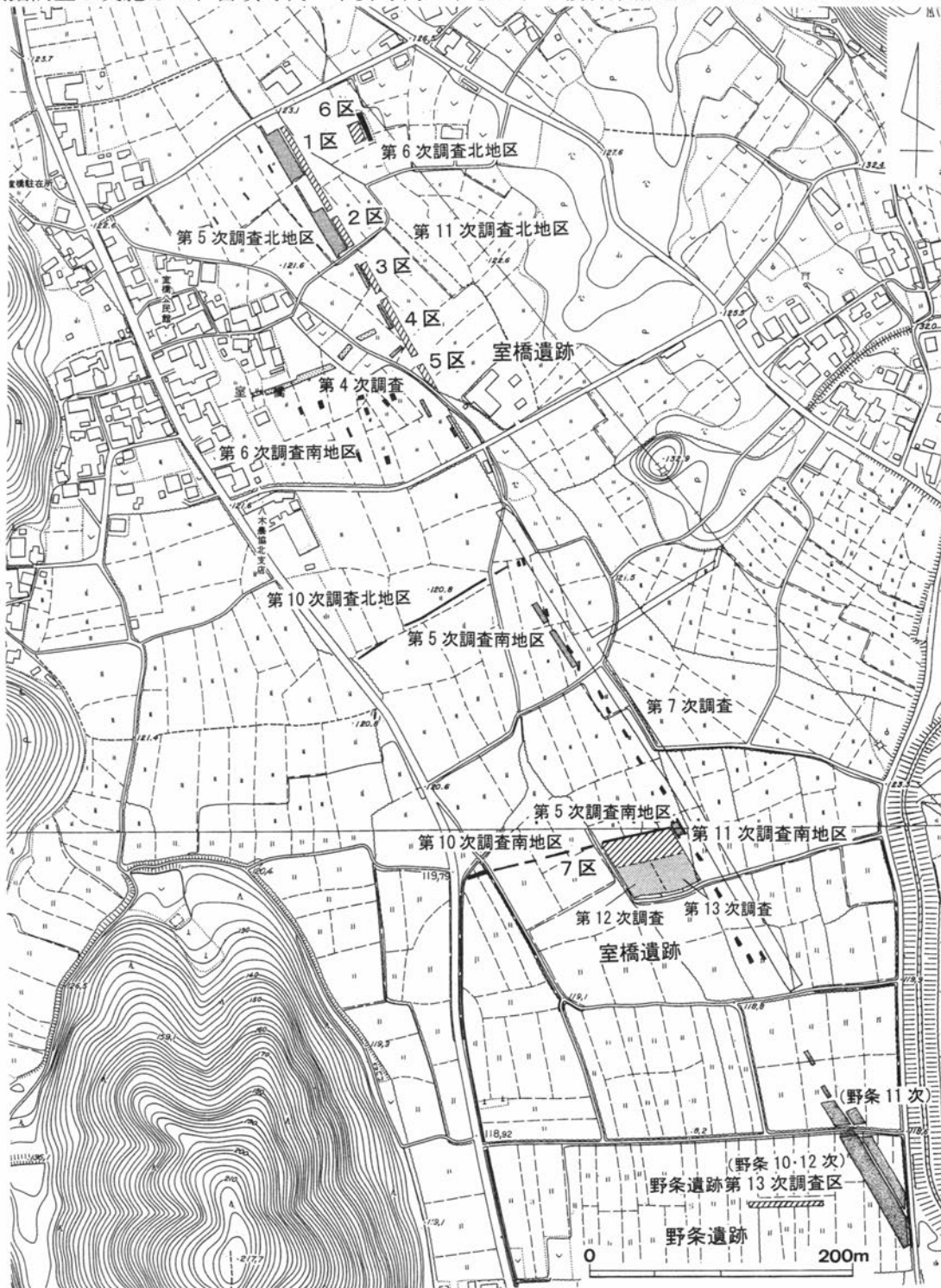
なお、調査に係わる経費は、全額、京都府南丹土地改良事務所が負担した。

調査期間中は、南丹市教育委員会・京都府教育委員会・地元各自治会、室橋地区の方々に多くの御配慮をいただいた。記して、お礼申し上げたい。^(注1)

(1) 室橋遺跡第11次

1. 既往の調査

室橋遺跡は、平成10年度以来、これまで10次にわたる調査が行われている。第1次・2次調査では、府営は場整備に伴い旧八木町教育委員会(現南丹市教育委員会)によって北部を中心にした試掘調査が実施され、古墳時代～平安時代を中心とする複合集落遺跡であることが明らかとなっ



第2図 室橋遺跡・野条遺跡調査区位置図

た。その成果を受け、当センターが実施した府営ほ場整備事業に伴う第4次調査では、遺跡北部において古墳時代中期の竪穴式住居跡群や、平安時代の断面V字形の大溝などを検出した。同じく府道建設に伴い、当第5次調査を実施し、弥生時代後期～古墳時代前期と推定される大溝や、奈良時代の掘立柱建物跡を検出した。また京都府教育委員会による第6次調査では、遺跡範囲の北東部で、奈良時代の掘立柱建物跡群が検出されている。遺跡の南部では、京都府教育委員会による第7次調査や第10次調査で、古墳時代中期の竪穴式住居跡群や平安時代前期の溝、掘立柱建物跡群が確認され、当センターによる第5次調査でも弥生時代中期の溝や古墳時代中期の竪穴式住居跡群、平安時代の掘立柱建物跡を検出した。今回の調査では、北区の調査面積を1100m²、南区の調査面積を900m²とし、遺跡北部で7か所の調査区を設け、また南部で1か所の調査区を設けて発掘調査を実施した。



第3図 室橋遺跡北地区調査地配置図

2. 調査概要

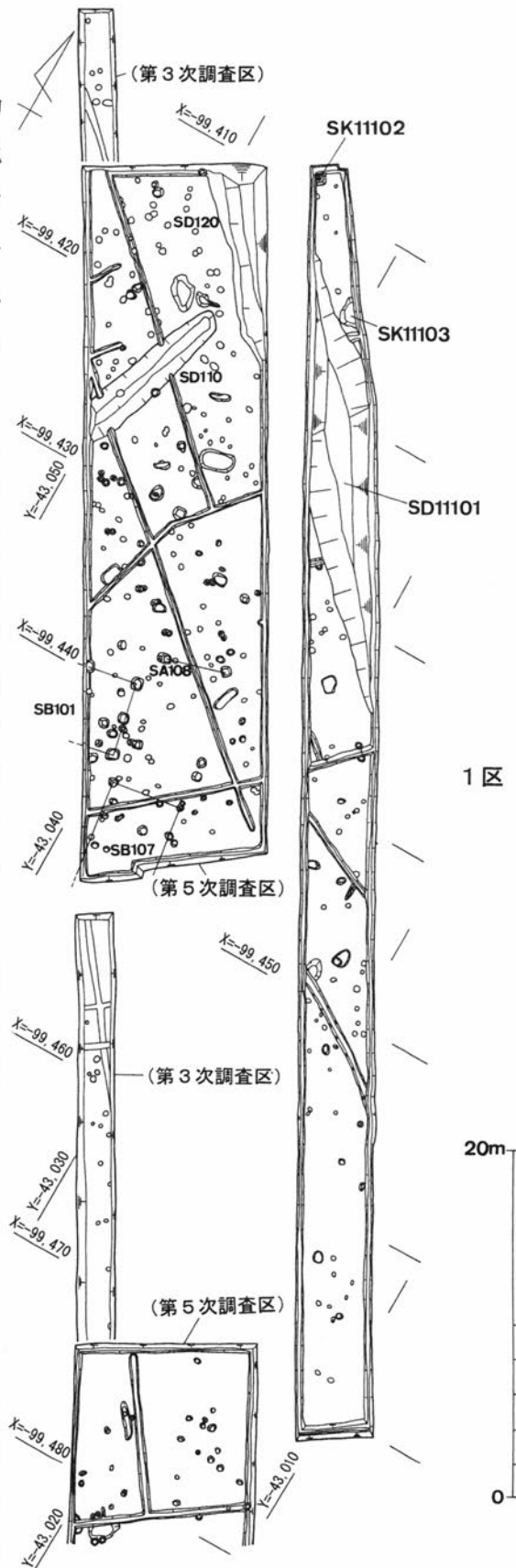
a. 北地区の調査

(i) 基準層序

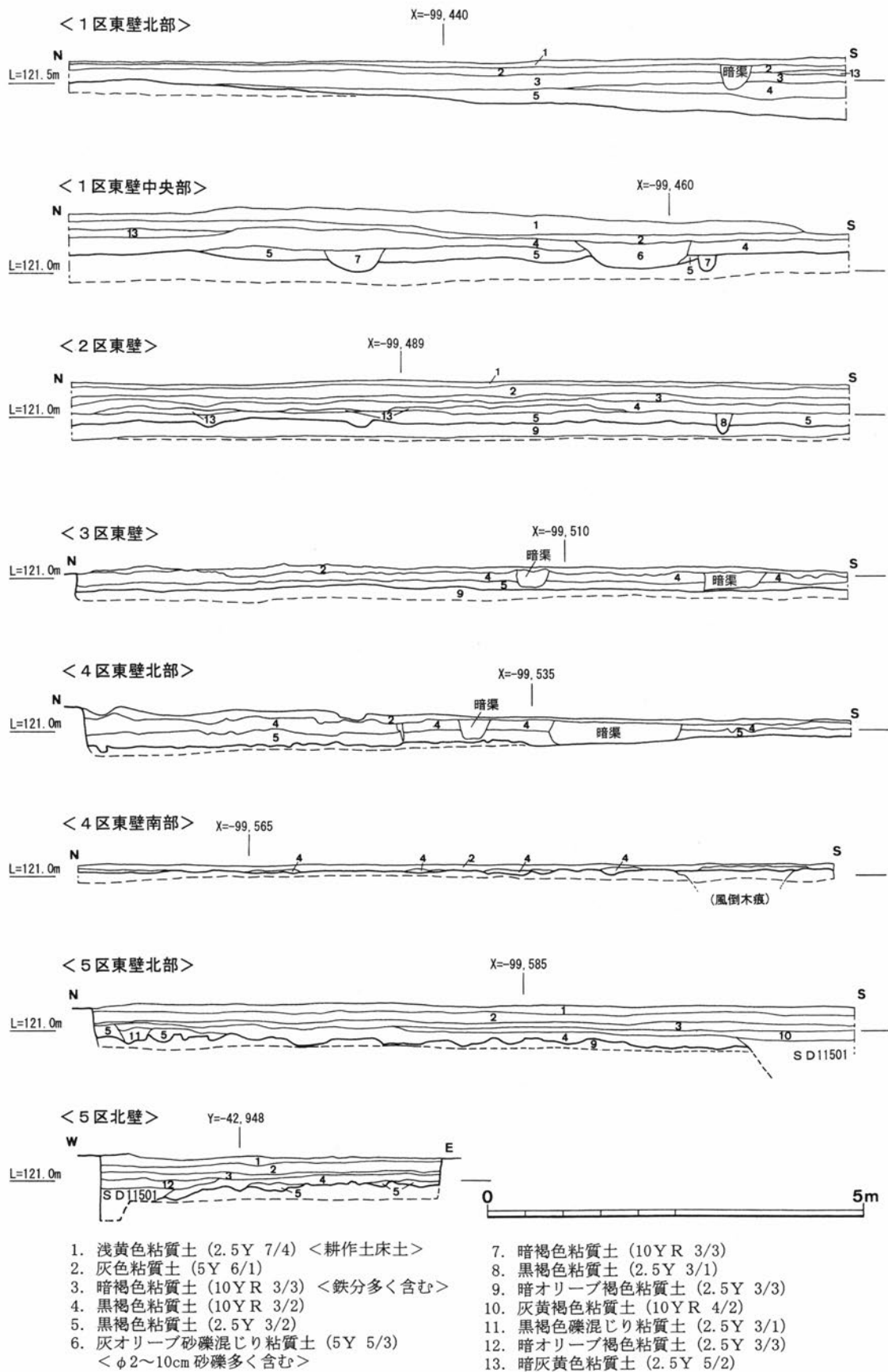
北区における表土の標高は、1区北部で約121.9m、5区南部で約121.4mを測り、調査地周辺は全体として北から南へ向けて低く傾斜する。調査対象地は調査前には耕作地であり、一帯が平坦な地形となっているが、かつては多小の起伏を伴った地形であったとみられ、ベース面の標高は4地区北部が最も高い。層序は、1区・2区では耕作土および床土を除去すると、上層から近世遺物を包含する灰色粘質土(第5図2層)、鉄分を多く含有する暗褐色粘質土(同3層)、古代～中世遺物を包含する黒褐色粘質土(同4・5層)の順に堆積する。黒褐色粘質土は、いわゆる丹波黒ボク層の再堆積層とみられる。遺構面は、1区北部では、耕作土床土直下の標高約121.7mのレベルで、2区南部では標高約121.1m前後のレベルで、黒褐色粘質土の下層中において検出した。またベース層は黄灰褐色粘質土層が各地点でみられたが、1区南部・2区北部ではこの層位が下がり、暗黄灰褐色粘質土層を検出した(第5図9層)。1区南部では上層掘削中に縄文時代前期とみられる石鏃が出土したため、重機によってこの層位を面的に広げ、その下層の黄灰褐色粘質土層まで掘削し精査を行ったが、遺構・遺物ともに認められなかった。

(ii) 1区の調査

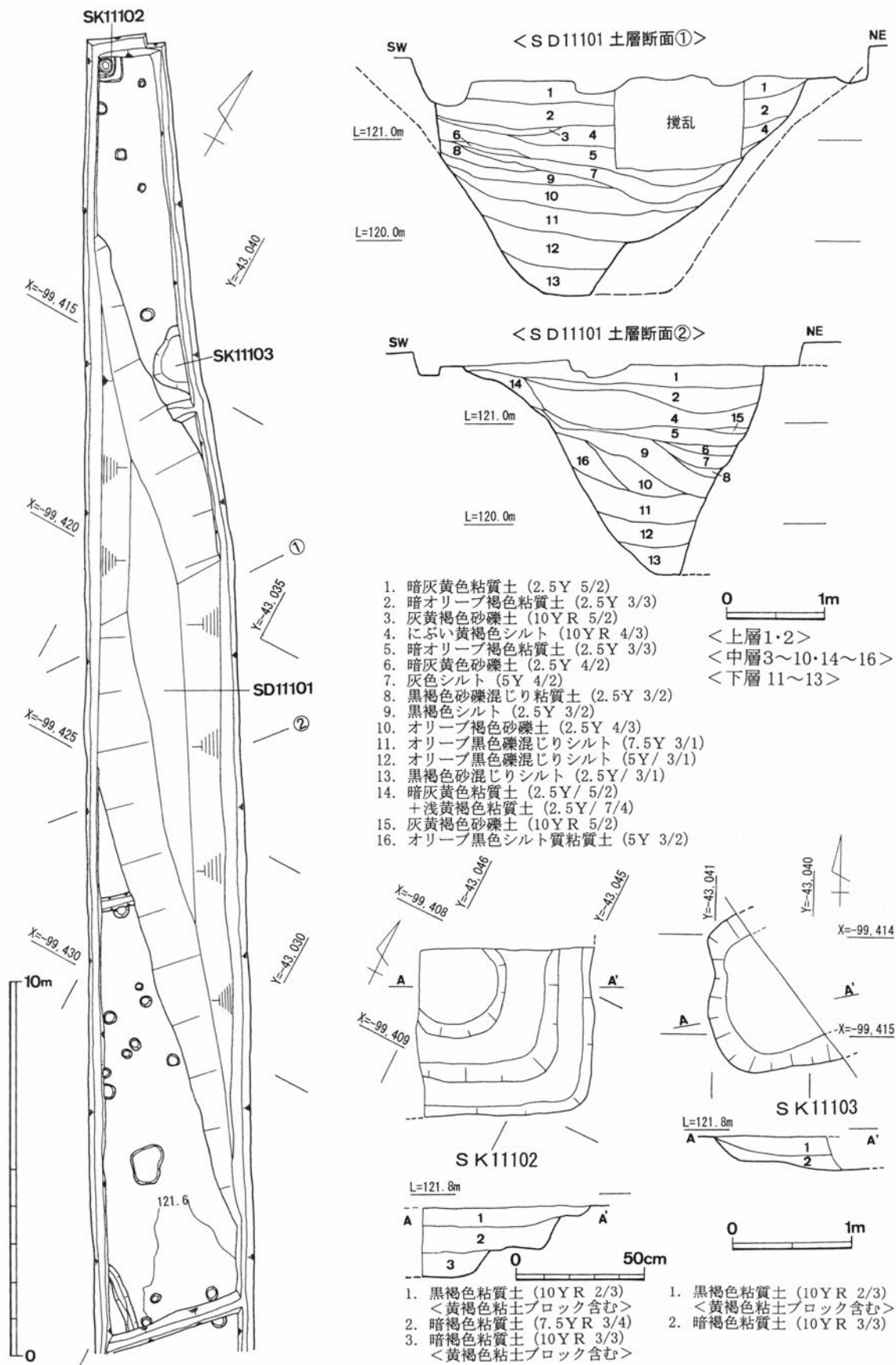
北区のうち、1～5区はほ場整備用地内の用水路建設予定地で実施したもので、南北約250mにわたって幅約4.5mの細長い調査区を設定した。このうち1区では280㎡を調査した。検出遺構は、北部で弥生時代と推定される大規模な溝1条を検出した。また時期は明確ではない



第4図 1区遺構配置図



第5図 北地区各調査区土層断面図



第6図 溝SD11101実測図・同土層断面図・土坑SK11102・11103実測図

が、土坑または土坑状の落ち込み4基と、中央部から南部にかけて柱穴群を検出した。柱穴群のなかには須恵器片を出土したものがあり(第4図P11104)、奈良時代～平安時代の柱穴を含むとみられるが、建物あるいは柵列として復原できるものはみとめられない。

溝SD11101(第4・5図) 調査区北端で検出した溝である。北西から南東に向け掘削されている。部分的な検出にとどまり、溝幅全体を確認することはできないが、検出面での溝幅は最大約4mを測るが、溝幅が完全に確認できる部分はなく、復原するとおおよそ約5～6mの規模をもつ大規模な溝になるとみられる。溝の断面形は、台形状をなす。溝内からは、溝は大きく3層に分かれ、下層から順にシルト性の堆積層(第6図11～13層)、中層にシルト層と砂礫層の互層(同3～10層)、上層に粘質土層が堆積するが、中層と上層との間には不整合面が形成され、中層上面は流失しているとみられる。上層から奈良時代の遺物が出土しているが、これらは溝の埋没後の落ち込みに堆積したものである。溝の堆積環境は、下層はシルト性の堆積であることから、滞水した状況がうかがえるが、中層では洪水砂とみられる砂礫層との互層となり、堆積層の流失を繰り返していたとみられる。下層から遺物は出土していないが、溝の北西延長部を調査した第5次調査で弥生時代後期後葉～古墳時代初頭とみられる土器が出土している^(注2)。なお、今回の調査で実施した溝下層の堆積土のサンプル(2点)による加速器放射性炭素年代測定では、弥生時代中期の年代観が示されている^(注3)。

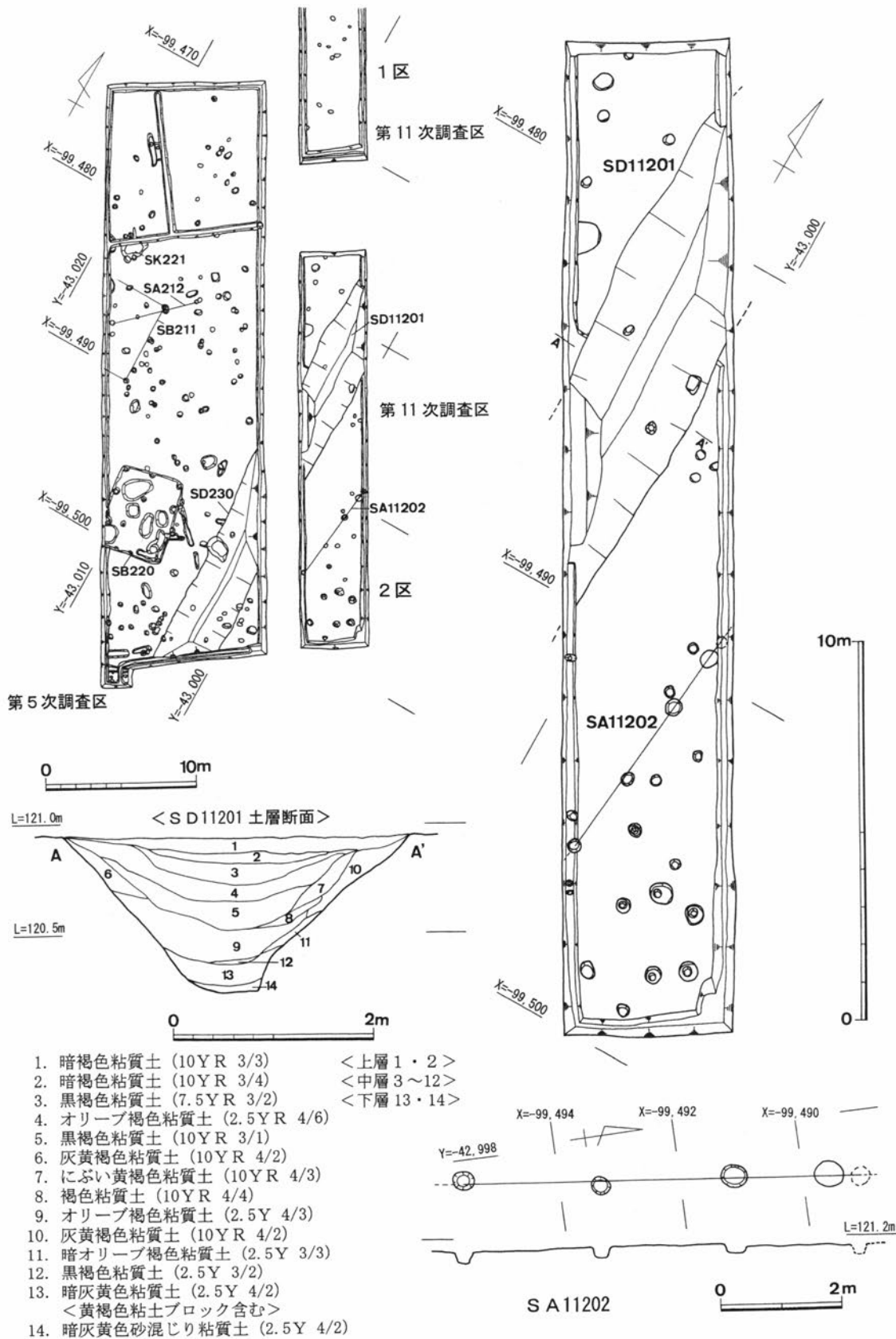
土坑SK11102(第6図) 1区北端で検出した方形の土坑である。断面は、3段の掘形をもつ。残存長は約1.4mを測るが、おおよそ一辺約2mに復原できる。深さは、約0.5mを測る。遺物は出土していないが、埋土の状況から奈良～平安時代の建物跡と推定される。

土坑SK11103(第6図) 溝SD11101の北側で一部を検出した。平面形は、歪な方形を呈する。残存長1.5m、推定復原長約1.7m、深さ0.6m測る。遺物は出土していないが、埋土に黄褐色粘土の小塊を多く含み、奈良～平安時代にかけての土坑とみられる。

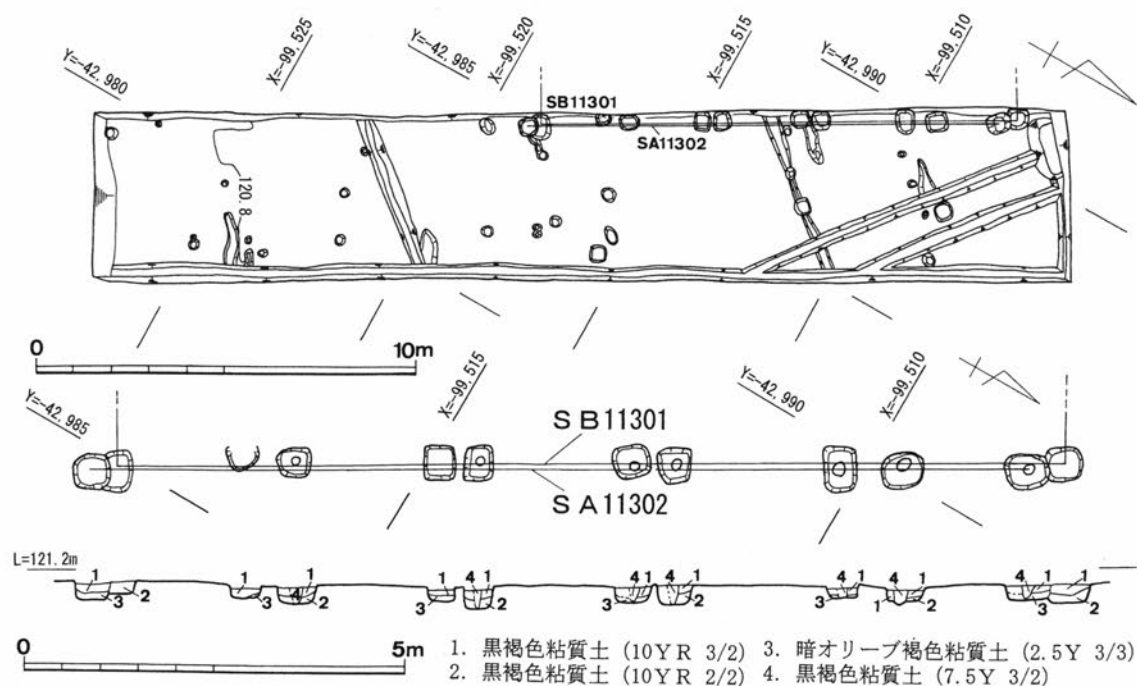
(iii) 2区の調査

2区では、115m²を調査し、溝1条や柱列1基、柱穴群などを検出した。

溝SD11201(第7図) 北部で検出した溝である。北から南へ向けて直線的に掘削された大規模な溝である。検出面での溝幅は、約3.5mを測る。断面はV字形をなすが、溝底部は幅約0.3mの平坦面を形成している。深さは、約1.5mを測る。埋土の堆積状況は、大きく4層に分けられる。最下層には、ベース層の黄褐色粘土をブロック状に含む暗灰黄色粘質土が堆積する。下層のオリーブ褐色粘質土との間には黒褐色粘質土をブラックバンド状に含み、このレベルは再掘削された溝底部の可能性がある。中層はシルト性の堆積がみられ、滞水する環境にあったとみられる。溝内から遺物は出土していないが、溝の南延長部を調査した第5次調査では、上層から古墳時代前期の布留式古相を示す甕が出土し、最終的な埋没の段階と推定される。1区のSD11101とは近い規模をもつが、溝の断面形や土層の堆積状況が異なり、同一の溝と判断する資料は得られていない。今回の調査では、堆積土の下層のサンプル1点を用いて、加速器放射性炭素年代測定を実施した^(注4)。



第7図 2区遺構配置図・溝SD11201土層断面図



第8図 3区遺構配置図・掘立柱建物跡SB11301・柱列SA11302実測図

柵列SA11202(第7図) 南部で検出した南北方向の柵列である。柱間の距離は約1.8～2.2mを測り、主軸はN6°Eをとる。埋土の状況や、主軸が第5次調査で検出された奈良時代の建物跡や柱列と同様の南北方向であることから、同時期に帰属する可能性が高い。

(iv) 3区の調査

3区は110m²を調査し、掘立柱建物跡1棟と柱列1基を検出した。

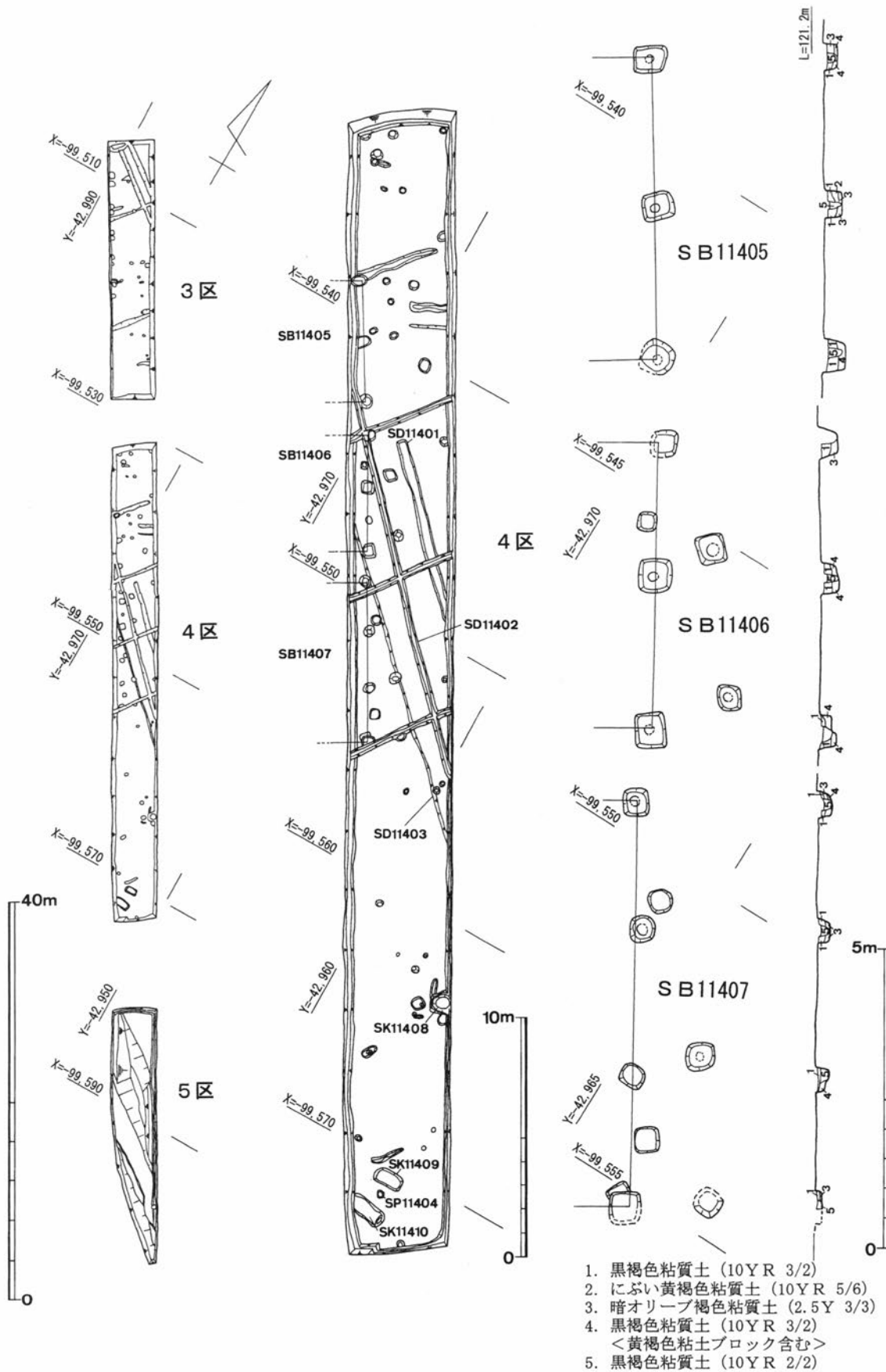
掘立柱建物跡SB11301(第8図) 調査区西壁に沿って検出した柱列である。5間以上の規模をもち、柱穴の規模は約0.4～0.5mを測る。主軸はN31°Wをとる。平成19年度内の第15次調査で西側に対応する柱穴が検出され、掘立柱建物跡の東側桁行の柱列を構成するとみられる。柱穴形態や埋土から奈良時代～平安時代初頭の柱穴群と推定される。

柱列SA11302(第8図) SB11301と一部重複して検出した。5間以上の規模をもち、主軸はN32°Wをとる。SB11301よりも全体に約0.2m南東に位置し、その掘形を削平して掘削される。第15次調査では対応する柱列はみられず、東側に展開する建物跡の一部を構成する可能性がある。

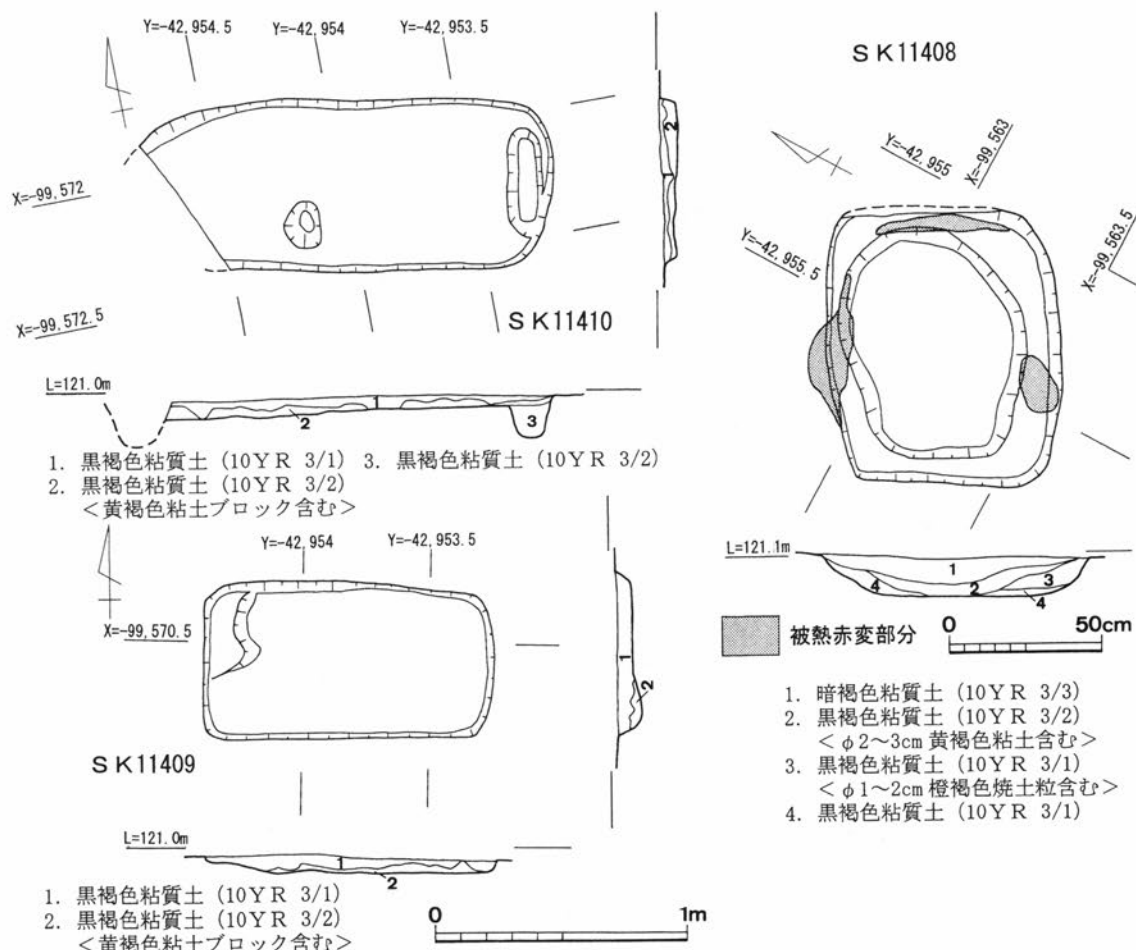
(v) 4区の調査

4区は205m²を調査し、掘立柱建物跡3棟、土壇2基、土坑1基、素掘り溝3条等を検出した。南半部は耕作土直下で遺構面を検出し、遺構面上層は大きく削平されている。4区の西側壁寄りでは方形掘形をもつ柱穴群を検出したが、第15次調査から3棟の掘立柱建物跡の一部を構成することが判明した。^(注5)

掘立柱建物跡SB11405(第9図) SB11405は、北西部で検出した建物跡である。2間(約5.5m)の規模をもち、主軸はN32°Wをとる。柱穴の一边は約0.5～0.6mを測る。第15次調査により、2間×5間以上の東西棟の東の梁間を構成することが確認された。出土土器から奈良時代後



第9図 4区遺構配置図・掘立柱建物跡SB11405・11406・11407実測図



第10図 土壌SK11409・11410・土坑SK11408実測図

期～平安時代初頭の建物跡とみられる。

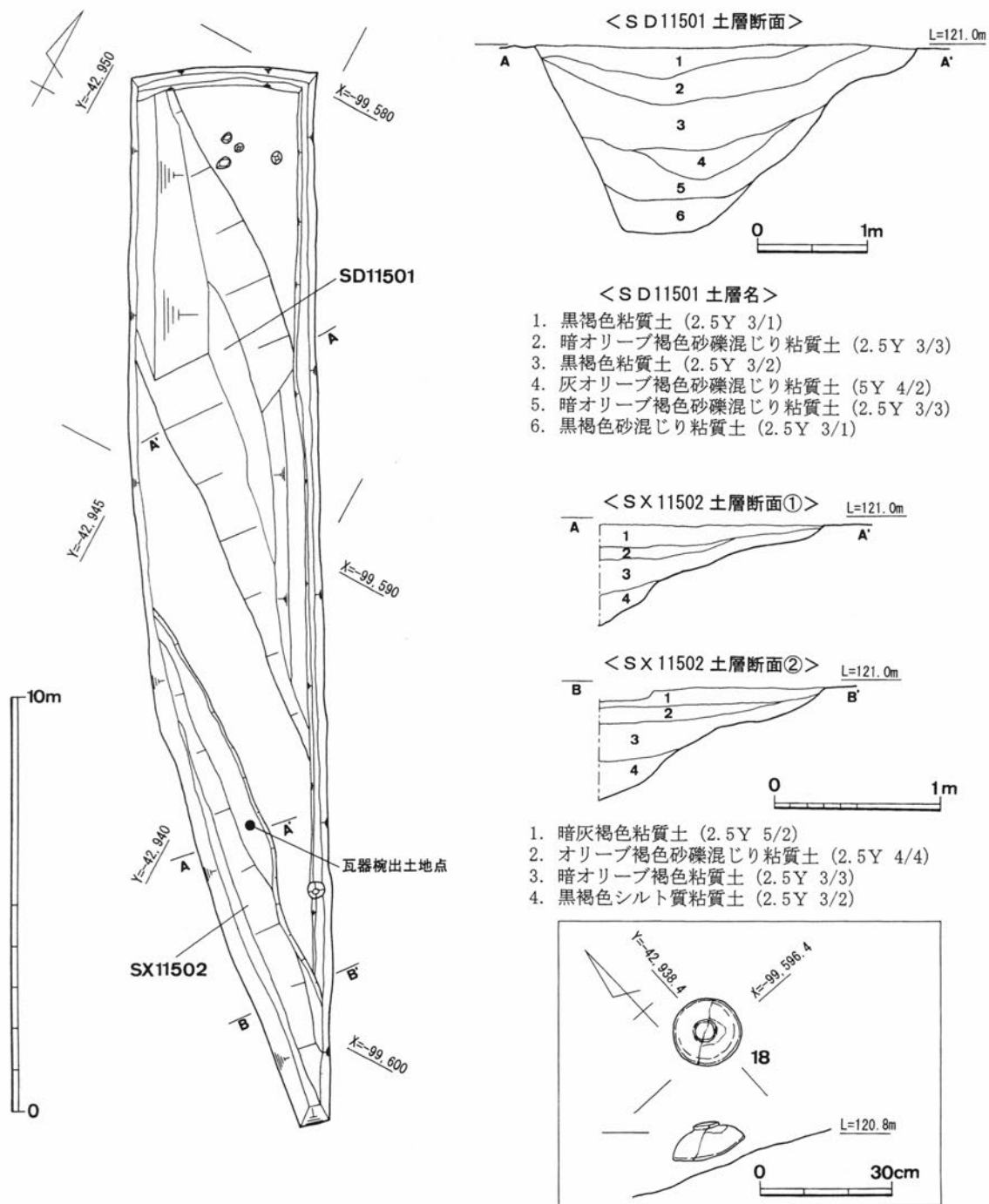
掘立柱建物跡SK11406(第9図) SK11405の南東で検出した建物跡である。規模約5.4mを測る2間分の柱列を検出した。主軸は、N32°Wをとる。第15次調査から、2間×6間以上の東西棟の東の梁間を構成することが判明している。

掘立柱建物跡SK11407(第9図) 調査区中央西側で検出した。規模約7.4mを測る3間の柱列である。第15次調査から、3間×1間の南北棟の東側桁行を構成する柱列とみられる。遺物は出土していないが、検出状況からSK11405・SK11406と同様の時期の建物跡と推定される。

土壌SK11410(第10図) 南東端で検出した方形の土壌である。北西部の一部は調査範囲外にあるが、検出面での長さ約1.7m、幅0.7m、深さ約0.1mを測る。主軸はN81°Wをとる。床面の南東の小口側に深さ約0.15mの小土坑をもつ。遺物は出土していないが、小土坑は造り付けの棺の仕切り板の痕跡とみられることから、弥生時代の墓壇と推定される。

土壌SK11409(第10図) 長さ2.2m、幅0.6m、深さ0.1mを測る方形土壌である。SK11410と隣接し主軸を合わせることからほぼ同時期の遺構とみられ、弥生時代の墓壇と推定される。

土坑SK11408(第10図) 南東部で検出した方形の土坑である。検出面での規模はおおよそ0.8×0.85m、深さ0.1mを測る。土坑の肩部に被熱し赤変した部分を数か所確認した。遺物は出土していないため、埋土に含まれる炭化物の加測器放射性炭素年代測定を実施した。^(注6)



第11図 5区遺構配置図・溝SD11501土層断面図

溝SD11401(第9図) 調査区中央で、北西から南東に斜行して掘削された素掘り溝である。幅約0.3m、深さ約0.1mを測る。埋土から近世以降の溝と判断される。

(vi) 5区の調査

5区は85m²を調査し、溝1条、溝状の落ち込み1基を検出した。

溝SD11501(第11図) 北西から南西に向けて掘削された溝である。規模は、幅3.4m、深さ1.7mを測る。断面形は、台形状をなし、溝底は約0.6mの平坦面を形成する。各層に細砂礫を多量に含み、流路と考えられることから、灌漑用水としての性格をもつ溝とみられる。出土土器か

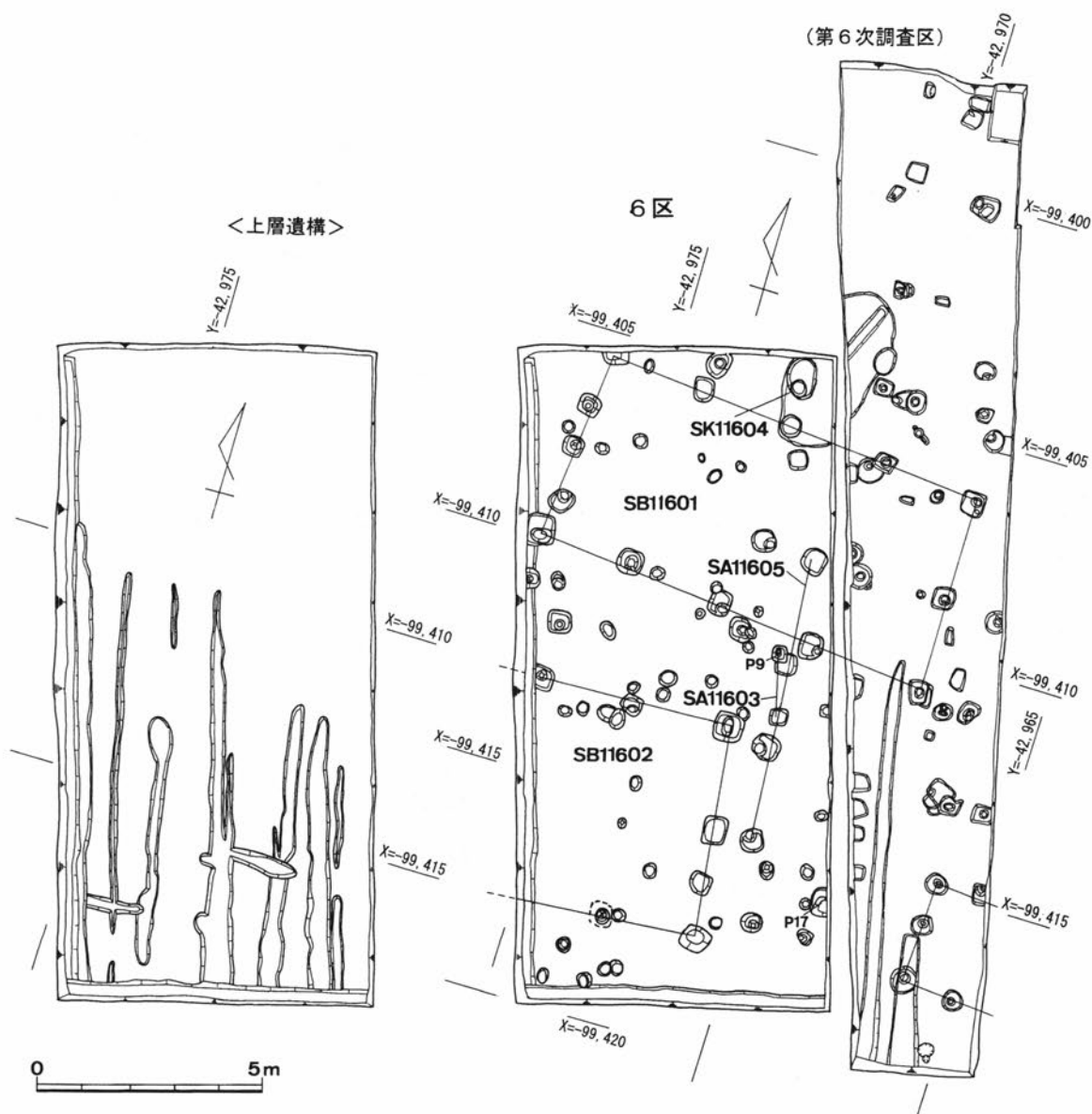
ら、時期はおおよそ奈良時代後葉～平安時代初頭と推定される。

落ち込み S X 11502 (第11図) 南東端で検出した溝状の落ち込みである。南西部は調査範囲外にあたり立ち上がりは確認できないが、溝の南東側の一部と推定される。出土遺物はわずかながら上層 (S D 11502-2 層) から瓦器碗 1 点が出土し、下層 (S D 11502-4 層) から須恵器底部片が出土した。10～11世紀に掘削された溝を、12世紀中頃に再掘削した可能性がある。なお、この2層^(注7)については土壌に含まれる炭化物の加速器放射性炭素年代分析を実施した。

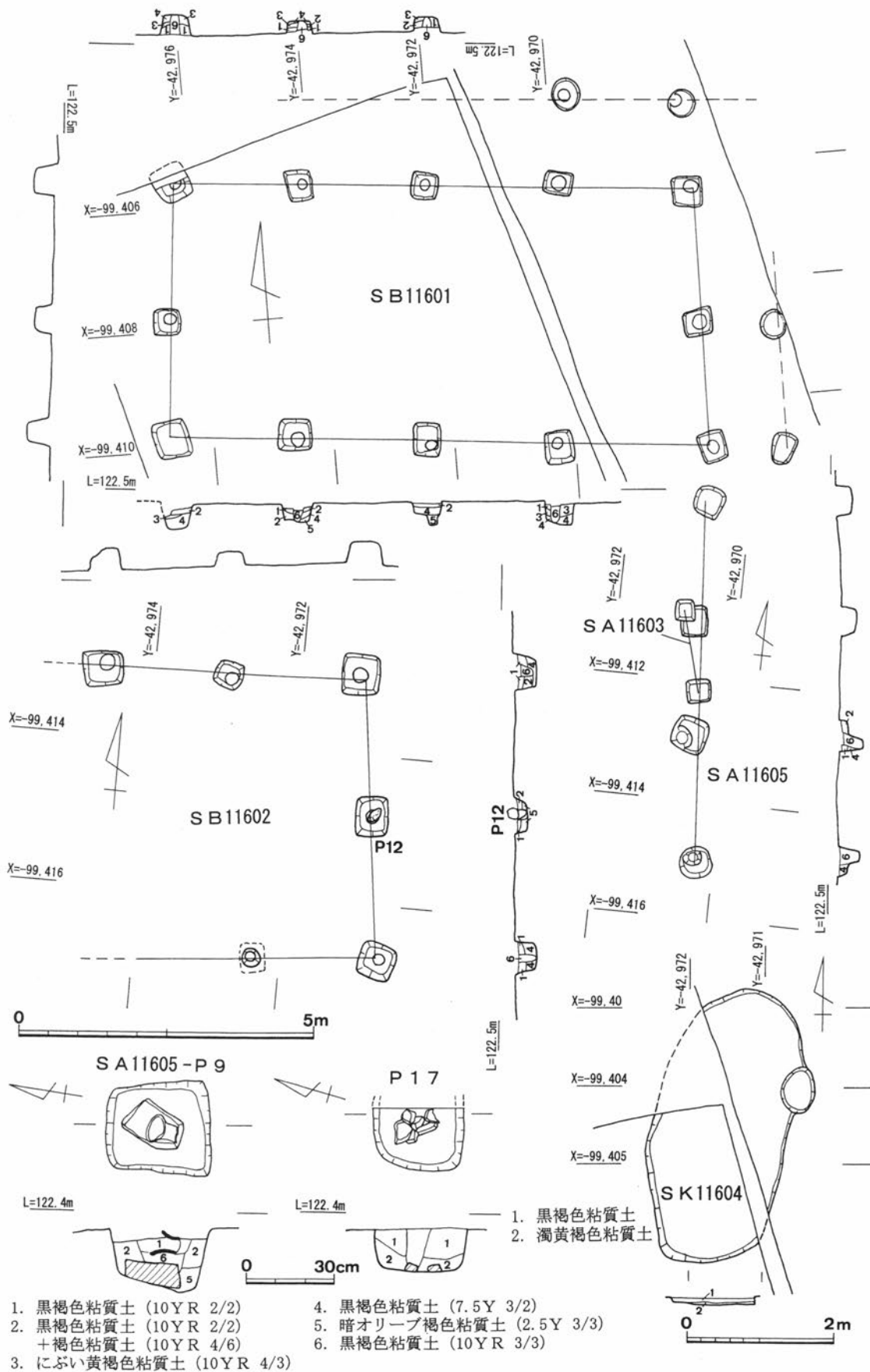
(vii) 6 区の調査

6 区は105m²を調査し、掘立柱建物跡 2 棟、柱列 2 基、土坑 1 基、近世以降とみられる素掘り溝群を検出した。この周辺は微高地で、遺構面は、耕作土床土除去後、近世耕作面とみられる灰色粘質土層 (厚さ約0.2m) 直下の標高約122.2mで検出した。

掘立柱建物跡 S B 11601 (第13図) 調査区北部で検出した建物跡である。桁行 3 間以上、梁間



第12図 6 区遺構配置図



第13図 掘立柱建物跡 S B11601・11602・柱列 S A11603・11605・土坑 S K11604実測図

2間を検出したが、平成18年度の第6次調査で連続する柱列が確認されており、桁行4間(約9.7m)、梁間2間(約4.8m)の東西棟の建物跡として復原できる。さらに、東と北に平行して柱列が認められることから、庇付建物となる可能性がある。主軸は、N6°Eをとる。柱穴の検出状況から奈良時代後半～平安時代前期の建物跡と推定される。

掘立柱建物跡 S B 11602(第13図) 調査区中央部で検出した建物跡である。桁行2間(約5.0m)以上、梁間2間(約5.5m)の東西棟として復原できる。建物の主軸はN6°Wをとる。

柱列 S A 11605(第12図) S B 11602の東で検出した柱列である。一辺約0.5mの方形の柱穴から構成される3間以上の柱列である。主軸は、N6°Wをとる。さらに北にのび、第6次調査区の柱穴に連続する可能性がある。その場合は6間以上の規模が復原できる。

柱列 S A 11603(第12図) S A 11602と一部重複して検出した。一辺約0.3mの方形の小形柱穴からなる1間の柱列である。柱間は、約1.4mを測り、主軸はN12°Wをとる。北側の柱穴(P9)から須恵器壺口頸部が出土し、時期は奈良時代末～平安時代前期前葉と推定される。

土坑 S K 11604(第13図) 北東隅で一部を検出した楕円形状の土坑である。第6次調査区でも検出され、長さ約3.7m、幅約1.8m、深さ約0.1mを測る。遺物は確認していないが、柱穴群を切り込んで掘削されることから、建物の廃絶後の土坑であることが判明した。

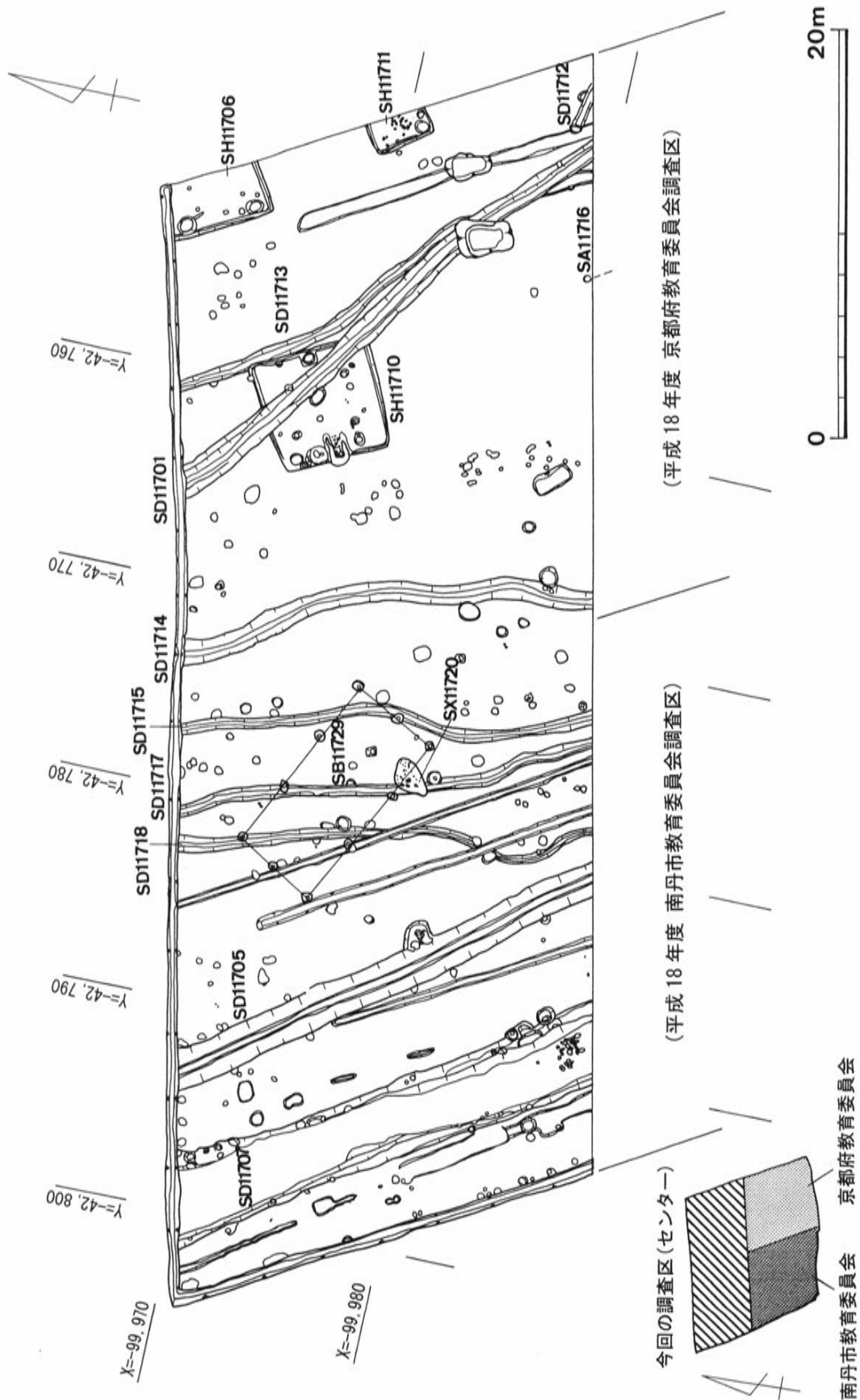
b. 南地区の調査

7区の調査

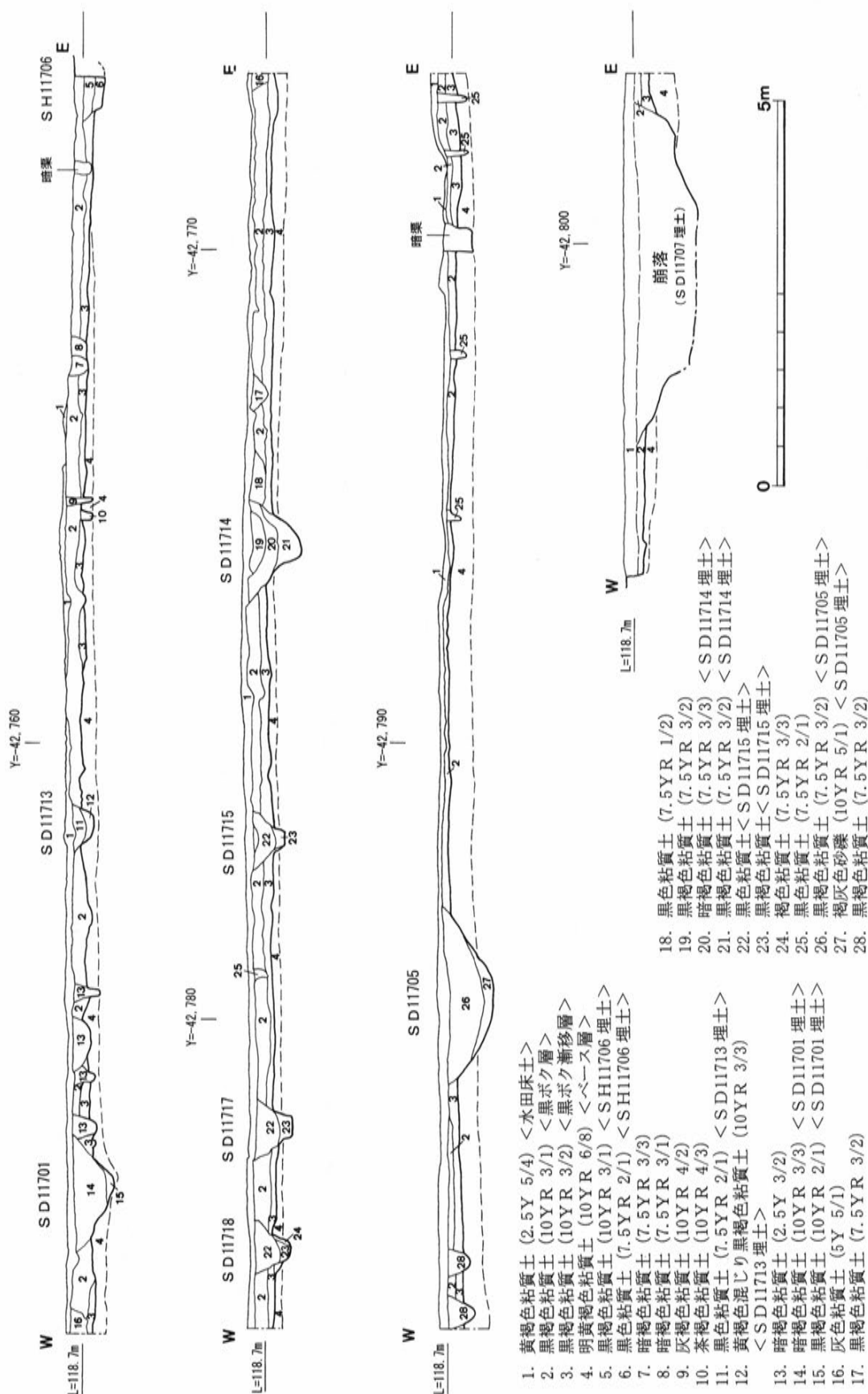
今回の調査対象地では最も南に位置する地区で、室橋遺跡の遺跡想定範囲のほぼ南限に位置す



第14図 室橋遺跡南地区・野条遺跡調査区位置図



第15図 7区遺構配置図



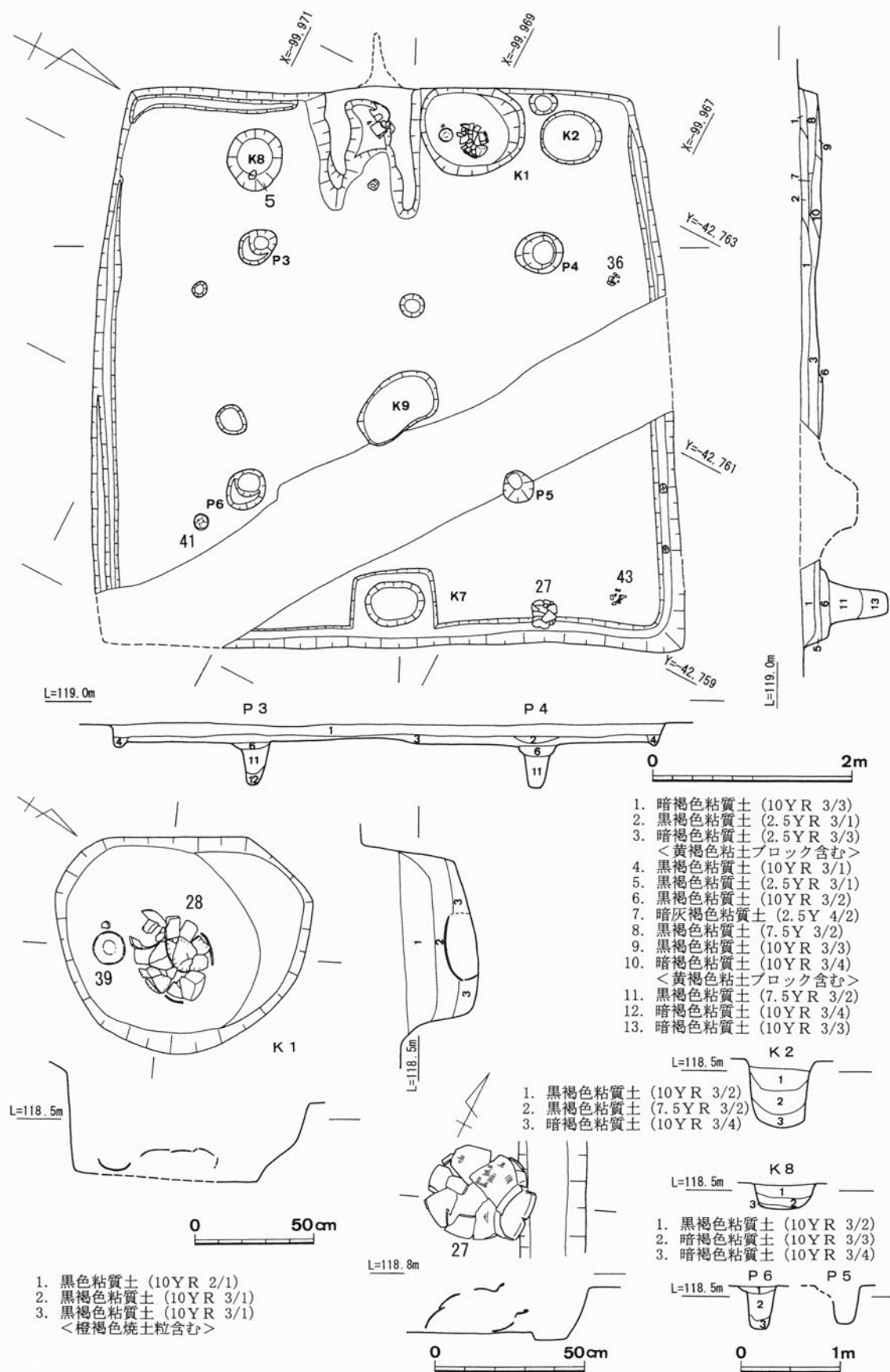
第16図 7区土層断面図

る。調査地全体の合計面積は2,100m²である。今回、当調査研究センターとしては第11次調査第7地区として、このうち北側部分の1,100m²を対象に調査を実施した。なお、当調査地は、南側地区の西側部分を南丹市教育委員会(第12次調査、500m²)が、同じく東側部分を京都府教育委員会(第13次調査、500m²)がそれぞれ分担して調査を実施した。

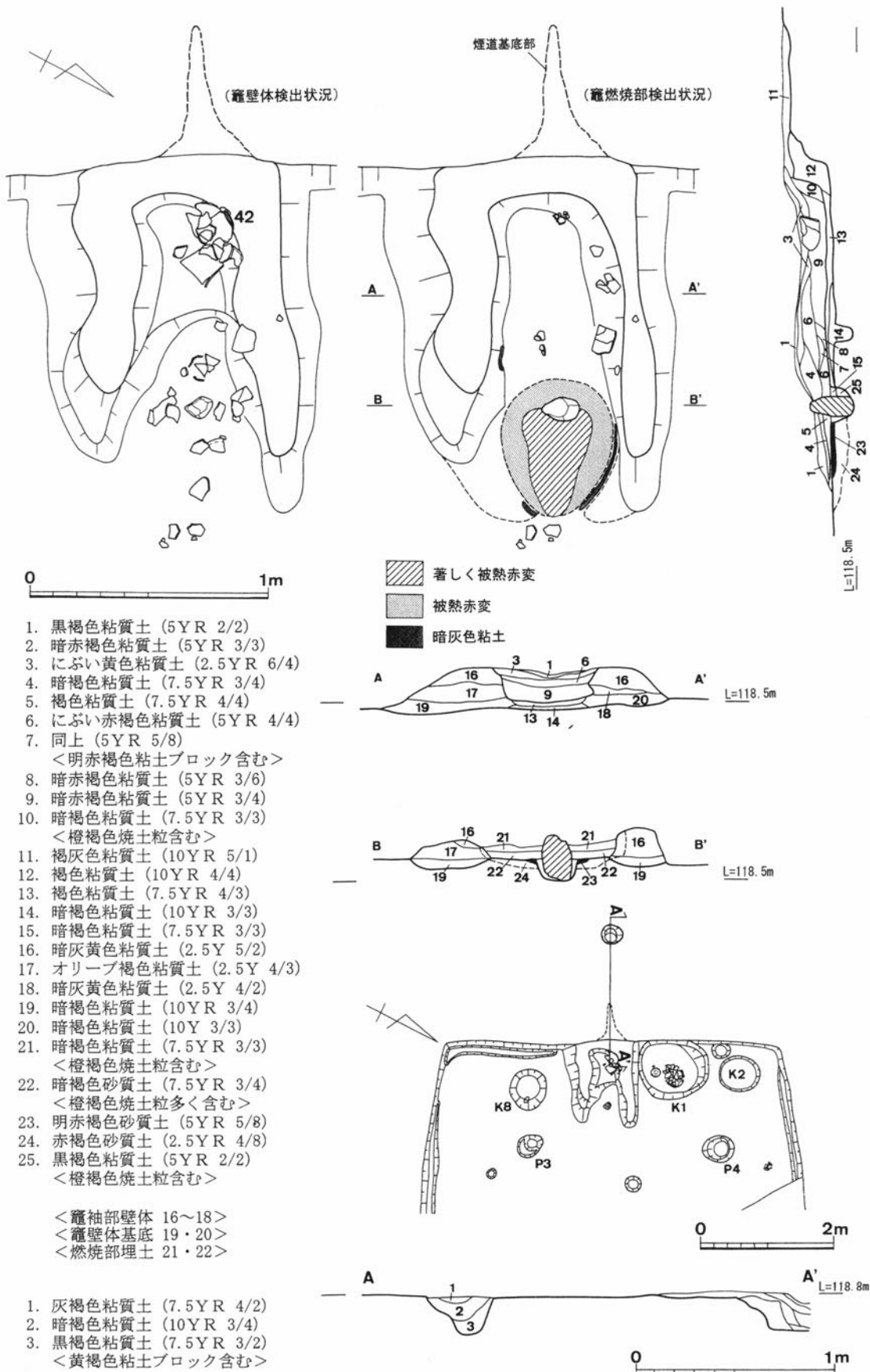
7区では、現地表面は北部で標高約119.0mを測り、北西から南東へ緩やかに傾斜する地形にある。遺構面は、耕作土床土(黄褐色粘質土)直下の黒褐色粘質土層中において、標高約118.7mのレベルで検出した。調査の結果、ほぼ北西から南東方向にのびる溝9条のほか、調査区の東部を中心に合計3基の竪穴式住居跡を検出した。このほか掘立柱建物跡1棟、柵列1条、土器溜まり1基のほか多数の土坑・ピットを検出した。

竪穴式住居跡 S H11710(第17図) 調査区東部で検出した方形の竪穴式住居跡である。住居床面は、S D11701によって中央部が削平されている。住居の規模は、約5.9m×5.5m、深さ約0.2mを測る。主軸は、N30°Wをとる。主柱穴は4基(P3・4・5・6)からなり、対角線上に配される。主柱穴の規模は、径約0.3~0.4m、深さ約0.4mを測る。床面には、周壁に沿って、幅約0.15m、深さ約5cmの排水溝が掘削されている。床面直上から遺物が出土し、貼床は認められない。住居南西辺の中央で、造り付け竈を検出した。竈は、淡黄灰褐色粘土によって壁体を構築し、袖部を住居壁に直接取り付ける構造である(第18図)。全長約1.5m、幅約1.1mを測る。燃烧部は著しく赤変し、その中央部に石製の支脚が据えられている。構造上、特に注目されるのは、袖部長と掛け口から住居壁までの距離が長い点であり、焚口から石製支脚の位置する掛け口まで約0.5mを測るが、さらに掛け口から袖基部の住居壁までの距離は約1.0mを測る。掛け口と袖基部の間には、竈壁体の上面に窪みがあり、この部分に甑の一部が落ち込んだ状態で出土した。土器の出土状況などから、この窪みは掛け口になるとみられ、本例はいわゆる二つ掛けの縦並びの竈と考えられる。西日本では一つ掛けが主流で、二つ掛けの竈は東日本に多いとされるが、横並びが一般的であり、こうした縦並びは稀有な例である。^(注9) 2基の掛け口のうち、手前の焚口寄りの掛け口は通常の煮炊きに用いられ、奥の掛け口は周囲に著しい被熱痕跡は認められないことから保温に用い、機能を分けていたと考えられる。竈煙道部は住居外にのびる一部を検出したが大部分は削平されていた。また焚口と煙道を結ぶライン上で柱穴を検出しており(第18図)、煙道の煙出しに関連する遺構の可能性はある。住居床面では、5基の土坑を検出した。土坑K7は、住居の北東辺中央に接する土坑で、2段の掘形をもつ。上段は浅く方形に穿たれ、下段は楕円形状をなす。上段に木蓋などの覆いを用いる貯蔵穴とみられる。住居中央では浅い楕円形状の土坑K9を検出した。竈脇では、3基の土坑を検出した。このうちK1は大形の楕円形状の土坑で、長径約1.1m、短径約0.9m、深さ約0.4mを測る。土坑内から布留式甕2点と椀1点が出土した。また、竈の南東では円形の小形土坑K8を検出し、土坑内から高杯1点が出土した。出土土器から、住居の時期は古墳時代中期前半~中頃と推定される。

竪穴式住居跡 S H11706(第19図) 調査区の北東隅で検出した方形竪穴式住居跡である。昨年度の京都府教育委員会の試掘調査では、本住居跡の北西角が確認されており、今回の南西側の調



第17図 竪穴式住居跡SH11710実測図



第18図 竪穴式住居跡 S H11710竈実測図

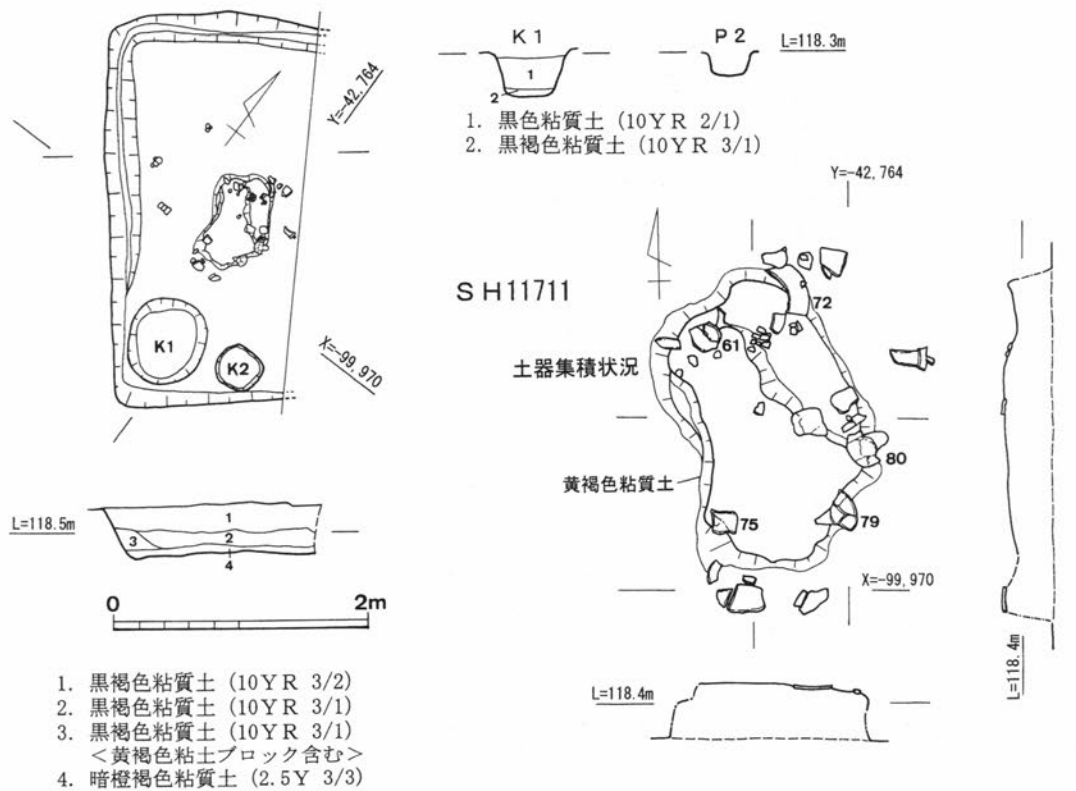
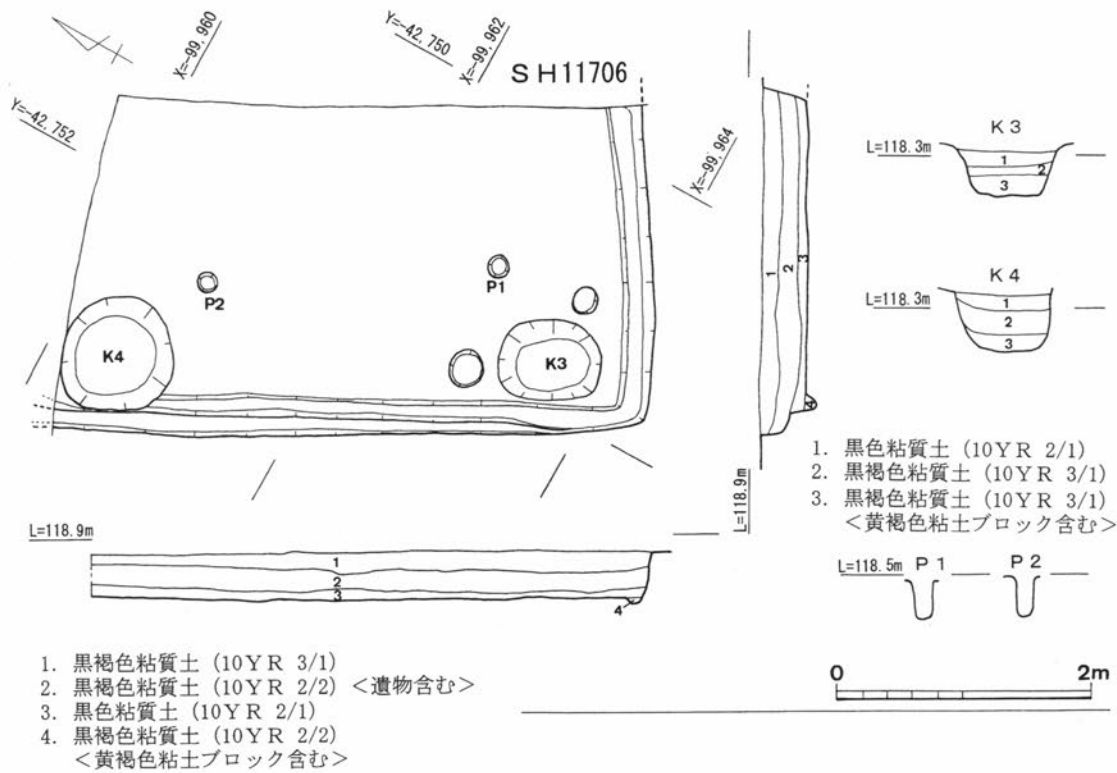
査によって住居跡の規模は一辺約5mを測ることが判明した。主軸はN26°Wである。住居の深さは、検出面から約0.3～0.4mを測る。西壁と南壁側には幅0.25m、深さ5cm程の周壁溝を巡らす。床面からは、住居の南西側(P1)と北西側(P2)の、対になる主柱穴を2基検出した。径約0.15m、深さ約0.3mを測り、二つの柱穴の間隔は2.3mを測る。床面からはこのほかに貯蔵穴と思われる土坑を住居跡南西角(K3)と北西角(K4)の2か所で検出した。K3は長径0.8m、短径0.65mを測る長楕円で、深さ0.4mを測る。内部から土師器甕片が出土した。K4は径0.9cm、深さ1m前後を測るやや規模の大きいもので、住居の西壁にはほぼ接して掘られている。K4からは住居の内側に向かって長さ約0.5m、幅約0.1mの浅い溝がのびる。住居内の排水に係わるものか。上記以外のものとしては、床面から浅い小ピットを4か所で検出した。京都府教育委員会による東側の調査では、焼土の一部が確認されており、本住居は東側に竈をもつ可能性がある。所属時期は古墳時代中期前半～中頃に比定される。

竪穴式住居跡SH11711(第19図) SH11706の南東側約5mの位置で検出した方形竪穴式住居跡である。住居跡の東側ほぼ半分は調査地外になる。今回確認できた西壁での規模から一辺の長さ3mを測る、やや小形の住居であることが判明した。主軸方向はN37°Wである。今回の調査では、北壁側で長さ1.7m、南壁側で同1.3m分を確認した。住居床の深さは検出面から約0.4mを測る。住居の北と西側には、壁際に沿って幅0.2～0.25mの周壁溝を付設しているが、南側では検出されなかった。床面の2か所から貯蔵穴と思われる円形土坑を2基(K1・K2)検出した。K1は住居跡の南西角に接して確認したもので、長径0.65m、短径0.55m、深さ0.65mを測るやや歪な円形を呈している。K2は、K1とは10cmほど離れた東側で検出したもので径0.35m、深さ約0.2mを測る。住居跡の床面から10cmほどの高さで、南北1.2m、東西0.7mの範囲にわたって黄褐色粘土の堆積に混じり多数の土師器片がかたまつて出土した。これらの土器類は、本住居が廃棄された後、一括して投棄されたものと思われる。なお、床面からは住居の主柱穴が確認されなかったため、床面に直接柱を建てたものと思われる。住居の所属時期は、古墳時代中期前半～中頃に比定される。

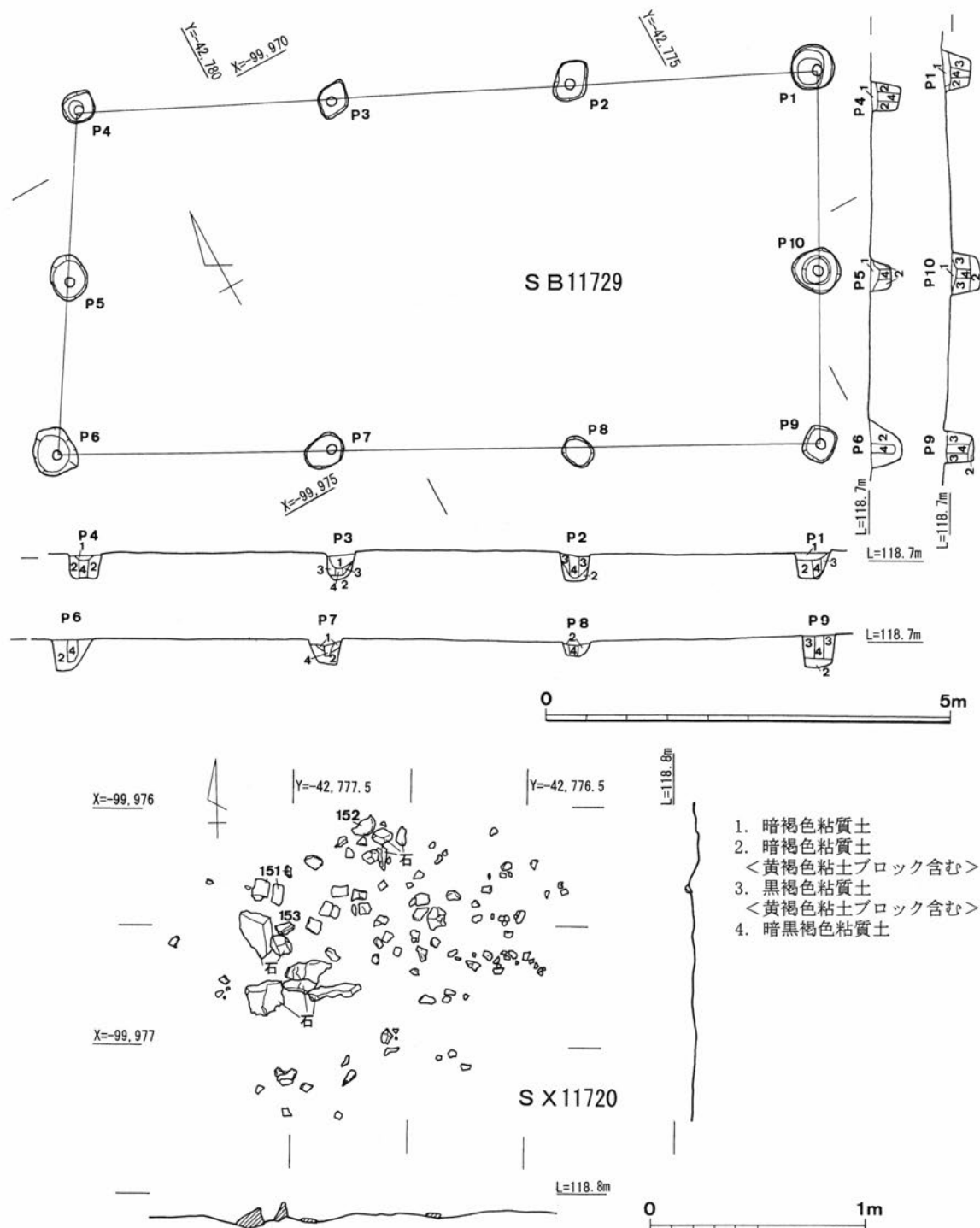
掘立柱建物跡SB11729(第20図) 調査地中央西よりで検出した、桁行3間(9.2m)、梁行2間(4.5m)の規模をもつ東西棟の掘立柱建物跡である。建物の主軸方向はN63°Wである。柱掘形は、楕円形ないしやや不整形な隅丸方形を呈し、長辺約0.4～0.5m、短辺約0.3m、深さは0.3m前後を測る。柱痕跡を残すものでは柱穴の径10cmを測る。各柱間の間隔は、桁行方向で約2.7～3.0m(9～10尺)、梁行方向で約2.1～2.4m(7～8尺)と不揃いで、やや桁行の方が長い。この建物は、溝SD11715・11717・11718と重複し、溝が埋まった後に建てられている。出土遺物が少なく、所属時期についての詳細は不明であるが概ね平安時代後期に属するものと想定される。

柵列SA11716(第15図) 北西から南東方向にのびる柵列で、調査地内で柵列の北端と思われる柱穴1基を検出した。南側の京都府教育委員会の調査地では3間分が検出されている。

溝SD11701(第21図) 北西から南東方向に斜行してのびる、幅1.2m、深さ0.5mを測る溝である。溝断面は2段掘りの形状を示しており、下段の溝の幅は70cmとやや狭くなる。SH11706



第19図 竪穴式住居跡 SH11706・11711実測図

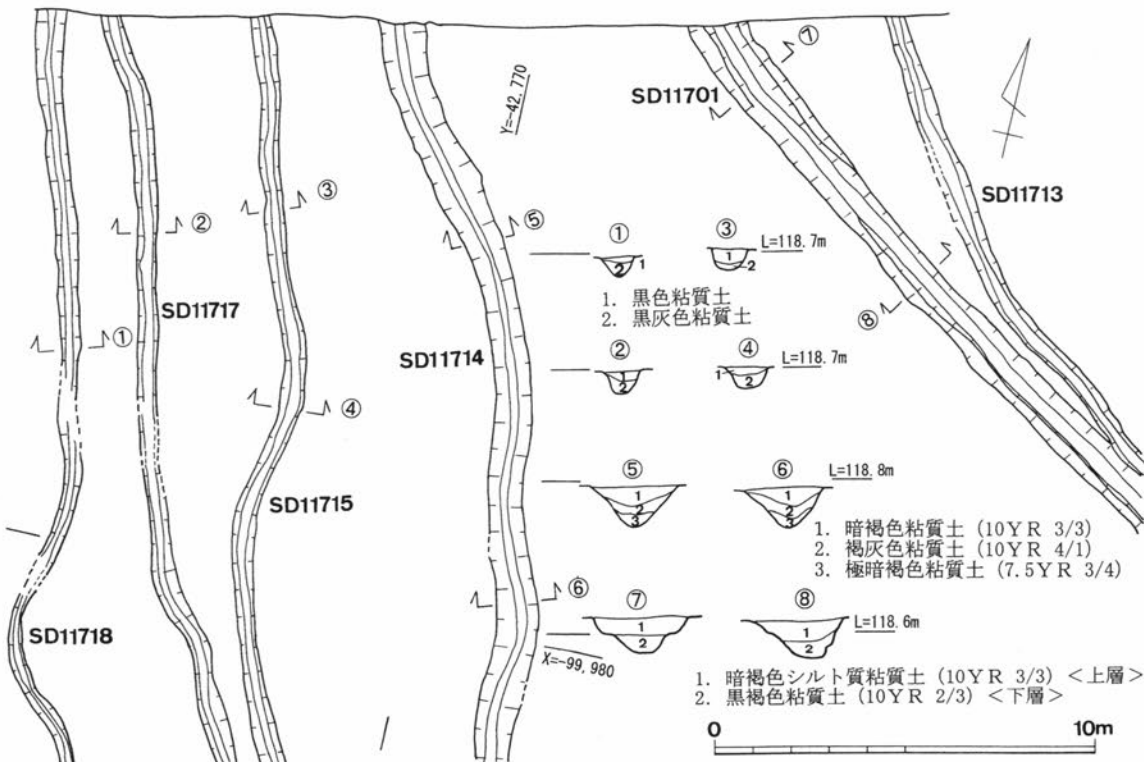
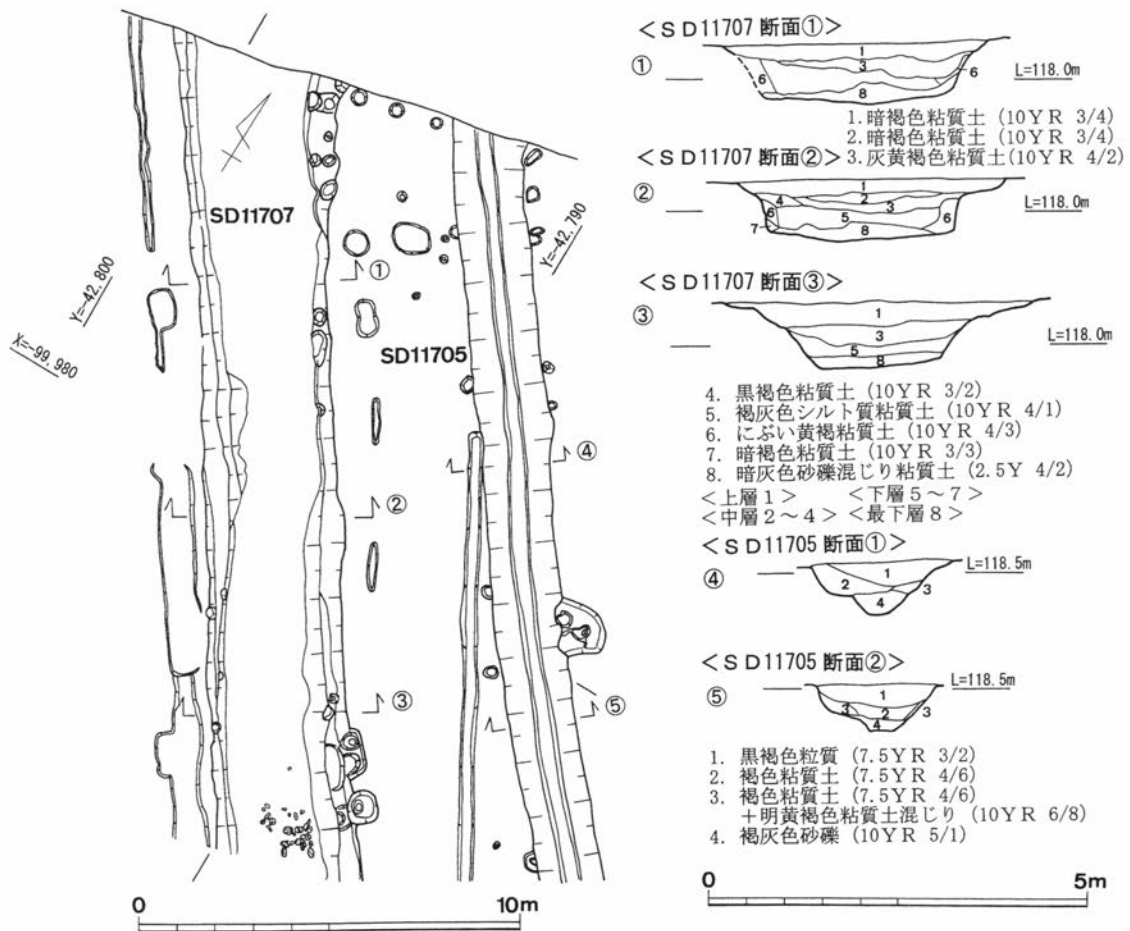


第20図 掘立柱建物跡SB11729・土器溜まりSX11720実測図

が埋まった後に掘削されたものである。所属時期は奈良時代後葉～平安時代初頭とみられる。

溝SD11705(第21図) SD11707の東側に平行してのびる、幅2m、深さ約0.5mを測る溝である。断面は逆台形状を呈するが、中程から一段深く掘り込まれ両側に段を形成する。溝の最下層には砂礫層がみられ流路として機能していたことが窺われる。溝からの出土遺物は少ないが、須恵器片の出土からみて奈良時代後半頃に所属するものとみられる。

溝SD11707(第21図) 調査地の西側部で検出した、北西から南東方向にほぼ直線的にのびる



第21図 溝SD11707・11705実測図・7区溝群実測図

溝である。幅約4m、深さ約1.5mを測り、今回調査地で検出したほかの溝に比べ規模が大きい。溝の断面形は、溝肩から急に落ち込む逆台形状を呈しており、溝底は平坦である。今回の調査範囲では延長25mにわたり調査を実施したが、この大溝はさらに南側の南丹市教育委員会の調査範囲にのびており、調査地全体で確認された総延長は約47mにおよぶ。溝の最下層には、流水を示す砂礫層が堆積するが、上層は粘質土層が厚く堆積しており、滞水を繰り返しながら埋没したものと思われる。今回調査を行った溝南端付近では、溝底からやや浮いた状態で、10～30cm大の石塊が2m×1.5mの範囲にわたって多数出土した。これらの集石は、溝に伴う堰や護岸などに使用された石が転落したものとも考えられる。また、溝の両肩には大小のピットが穿たれており、護岸の杭跡の可能性がある。このほか溝の西肩に沿って平行する浅い溝状遺構(S D 11725)が途中途切れながら走るが本遺構との関連は不明である。構内からは、主に平安時代後期の土師器、瓦器、白磁片が多く出土した。土器の多くは溝の中層から出土しているが、下層から出土した土器から、溝の時期はおおよそ11世紀後葉～12世紀前葉と推定される。出土遺物にはわずかながら奈良時代後半～平安時代初頭(8世紀後半～9世紀初頭)の土器が含まれる。東側で同様な時期の小規模な溝が併走していることから、こうした溝がほぼ同じ位置に重複していた可能性がある。

溝 S D 11712(第21図) 調査地南東角で検出した溝で幅0.4m、深さ0.2mを測る。西側で途切れており、後述する S D 11713、S D 11716と関連するかは不明である。

溝 S D 11713(第21図) 今回調査地の東側で検出した幅0.45m、深さ0.3mを測る断面U字状の溝である。北西から南東方向に斜行して走る。S H 11710はこの溝の埋没後、建てられておりこの溝の方が古い。所属時期は奈良時代と思われる。

溝 S D 11714(第21図) ほぼ調査地中央部を南北に縦断する形でのびる幅1m、深さ0.5mを測る溝で、溝の断面はV字状を呈している。

溝 S D 11715(第21図) 北から南に向かってやや蛇行しながらのびる溝で、幅0.5m、深さ0.25mを測る。溝の断面形は逆台形状を呈する。S B 11720と一部重複しておりこの溝の方が古い。所属時期は奈良時代と思われる。

溝 S D 11717(第21図) S D 11715と類似する溝で、北から南に向かってやや蛇行しながらのびる。溝幅0.5m、深さ0.25mを測る。溝の断面形は逆台形状を呈する。S B 11720と一部重複し、この溝が先行する。所属時期は奈良時代後半と思われる。

溝 S D 11718(第21図) S D 11715・11717と類似する溝で、北から南に向かってやや蛇行しながらのびる。溝幅0.5m、深さ0.25mを測る。溝の断面形は逆台形状を呈する。S B 11720と一部重複し、この溝が先行する。所属時期は奈良時代と思われる。

土器溜まり S X 11020(第20図) 土器および石材が集中して出土した遺構で、長軸約2m、短軸約1.8mの範囲に広がる。S D 11717が埋まった後に形成されており、明確な掘りこみ等はみとめられなかった。石材は10～20cm大で角をもつ山石が大部分である。出土した土器類は主に瓦器、土師器類で、故意に破碎されたように細片になっているものがほとんどである。これらの石材や土器類に混じって部分的に焼土がみられた。

c. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物の総量は、1区～7区まで合わせて整理箱約27箱を数える。

(i)北地区(1～6区)出土遺物

1区溝SD11101(第22図) 1・2・4は、1区SD11101の最上層である灰色砂礫混じり粘質土層から出土した。SD11101の廃絶後の層位である。1は、土師器甕である。口縁部は短く屈曲して外方へ開き、端部に沈線をもつ。石英・チャートなど砂粒を多量に含んだ粗い胎土をもち、淡橙灰褐色を呈する。口径約40cmを測る。時期は奈良時代とみられる。2は、土師器羽釜である。内傾する口縁をなし、内面端部は内側に拡張する。口径約18.2cmを測る。4は、平底の須恵器甕底部である。底径約17.0cmを測る。3は、須恵器杯Bである。口径16.5cm、高さ4.5cmを測る。

1区包含層(第22図) 5・6は、1区包含層中から出土した。5は、瓦質土器の羽釜である。短い鰐をもつ。6は、瓦器碗である。器面は、磨滅が著しくヘラミガキは観察できない。口径約13.0cmを測る。24は、1区南部包含層中から出土した打製石鏃である。基部は凹基をなす。長さ1.5cm、厚さ0.3cmを測る。瑪瑙製(玉髓)で、おおよそ縄文時代前期の石鏃とみられる。

2区包含層(第22図) 7は、耕作土直下の灰色粘質土層中から出土した染付碗底部である。

4区掘立柱建物跡SB11405(第22図) 8は、SB11405の柱穴P38から出土した須恵器杯蓋である。平坦な天井部をなし、端部にかえりをもつ。残存率は約5割程度であるが、杯蓋の中央に近い部分が残存し、宝珠つまみの剥離痕がみられないことから、つまみをもたない杯蓋とみられる。口径15.2cm、器高2.5cmを測る。8世紀後半～9世紀初頭に帰属する資料である。

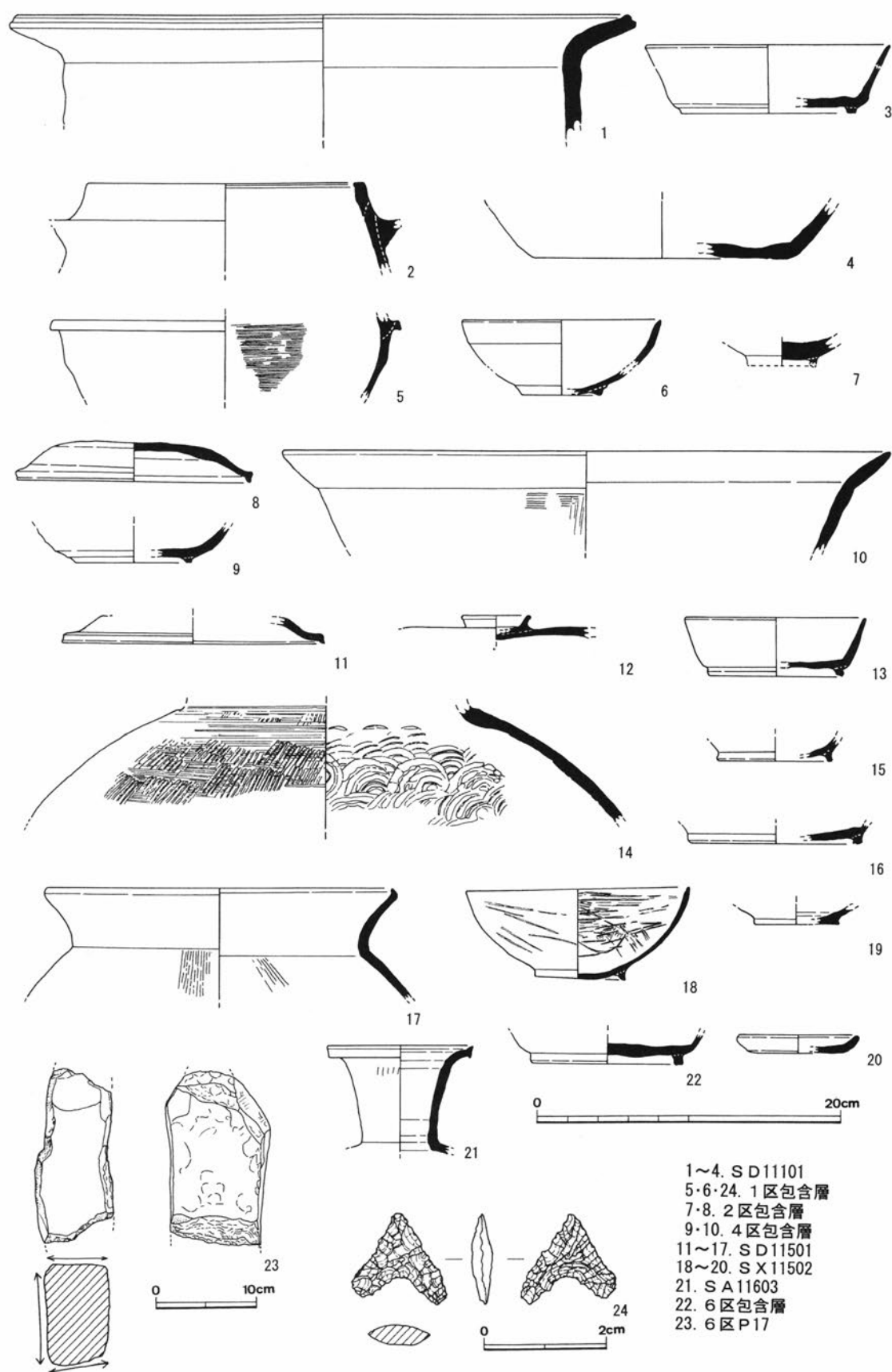
4区包含層(第22図) 9の施釉陶器は、器壁の内外面に施釉され、削り出し高台をもつ。10は、土師器鍋である。屈曲して外方に大きく開く口縁部をなす。

5区溝SD11501(第22図) 11～16は、SD11501から出土した。11は、須恵器杯B蓋である。口径はおおよそ17.2cmに復原できる。12は、環状つまみをもつ須恵器蓋である。13は、須恵器杯Bで、浅い杯部をもつ。口径12.0cm、高さ3.8cmを測る。15は、須恵器杯Bの底部とみられる。底径は大きく径10.9cmを測る。14は、須恵器甕の体部である。外面に縄目タタキを、また内面に同心円文タタキを施す。17は、土師器甕の口縁部である。口縁部は、くの字状をなし、外反気味に立ち上がる。口縁端部を上方につまみあげる奈良時代の甕である。胎土は石英・長石・チャート等を含み、色調は淡橙褐色を呈する。口径は、おおよそ22.6cmに復原できる。11～17の時期は、8世紀末～9世紀前葉に帰属する。

5区落ち込みSX11502(第22図) 18～20は、SX11502から出土した。18は、瓦器碗である。内外面の磨滅が著しく、ヘラミガキは確認できない。口径は14.6cm、高さ6.0cmを測る。19は、須恵器壺の底部である。糸切りがみとめられる。20は、土師皿である。外面に一段ナデを施す。口径7.8cm、高さ1.2cmを測る。

6区柱穴P17(第22図) 23は、6区柱穴P17から出土した砂岩製砥石である。柱穴の根石に転用されていたもので、折損している。3面に砥面をもつ。長さ17.2cm、厚さ6.1cmを測る。

6区柱列SA11603(第22図) 21は、6区SA11603から出土した須恵器小形壺である。口縁端



第22図 室橋遺跡出土遺物実測図（1）

部に面をなし、上下に拡張する。口径9.6cmを測る。

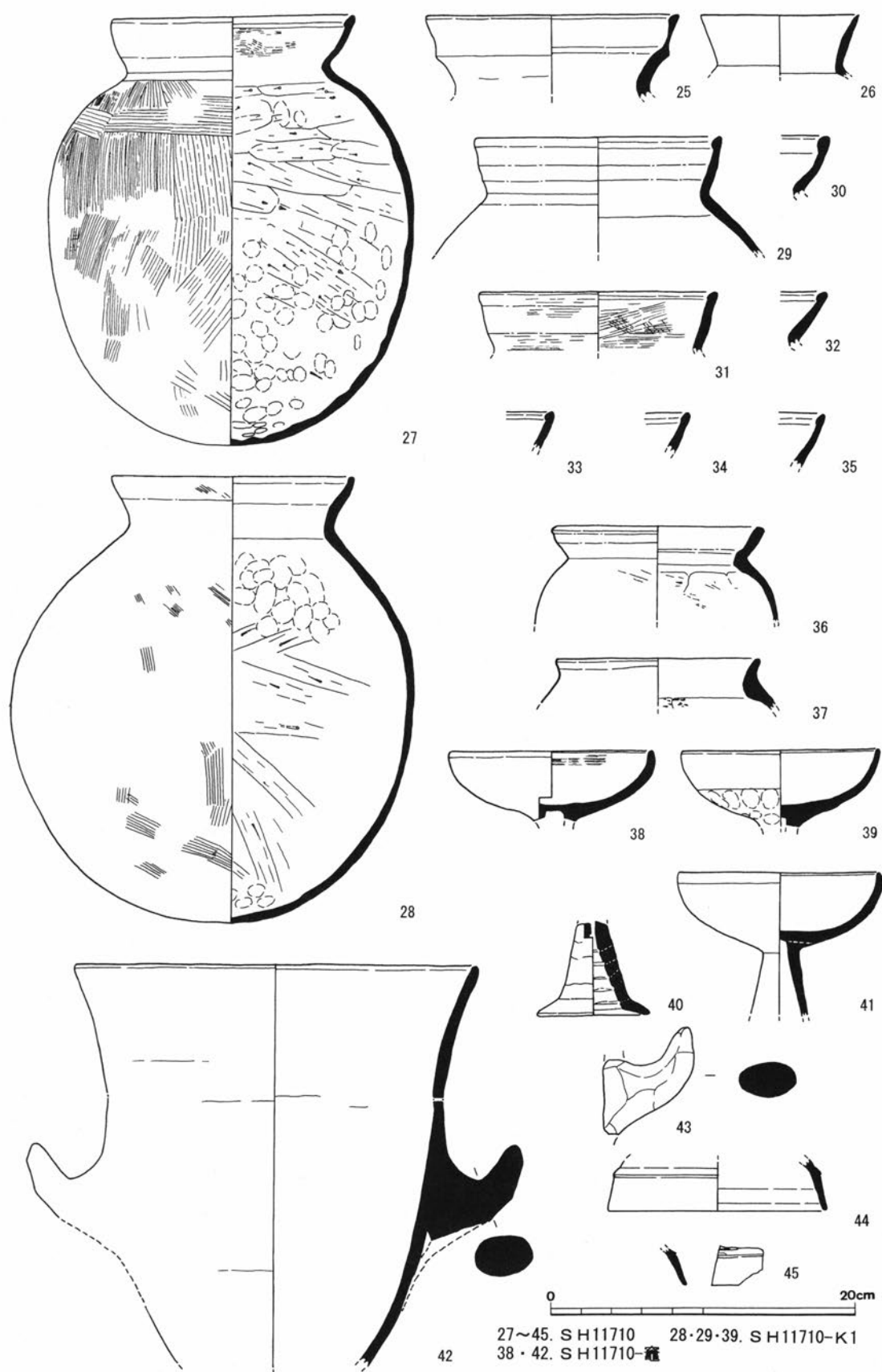
6区包含層(第22図) 22は、東部排水溝から出土した須恵器杯Bの底部である。

(ii)南地区(7区)出土遺物

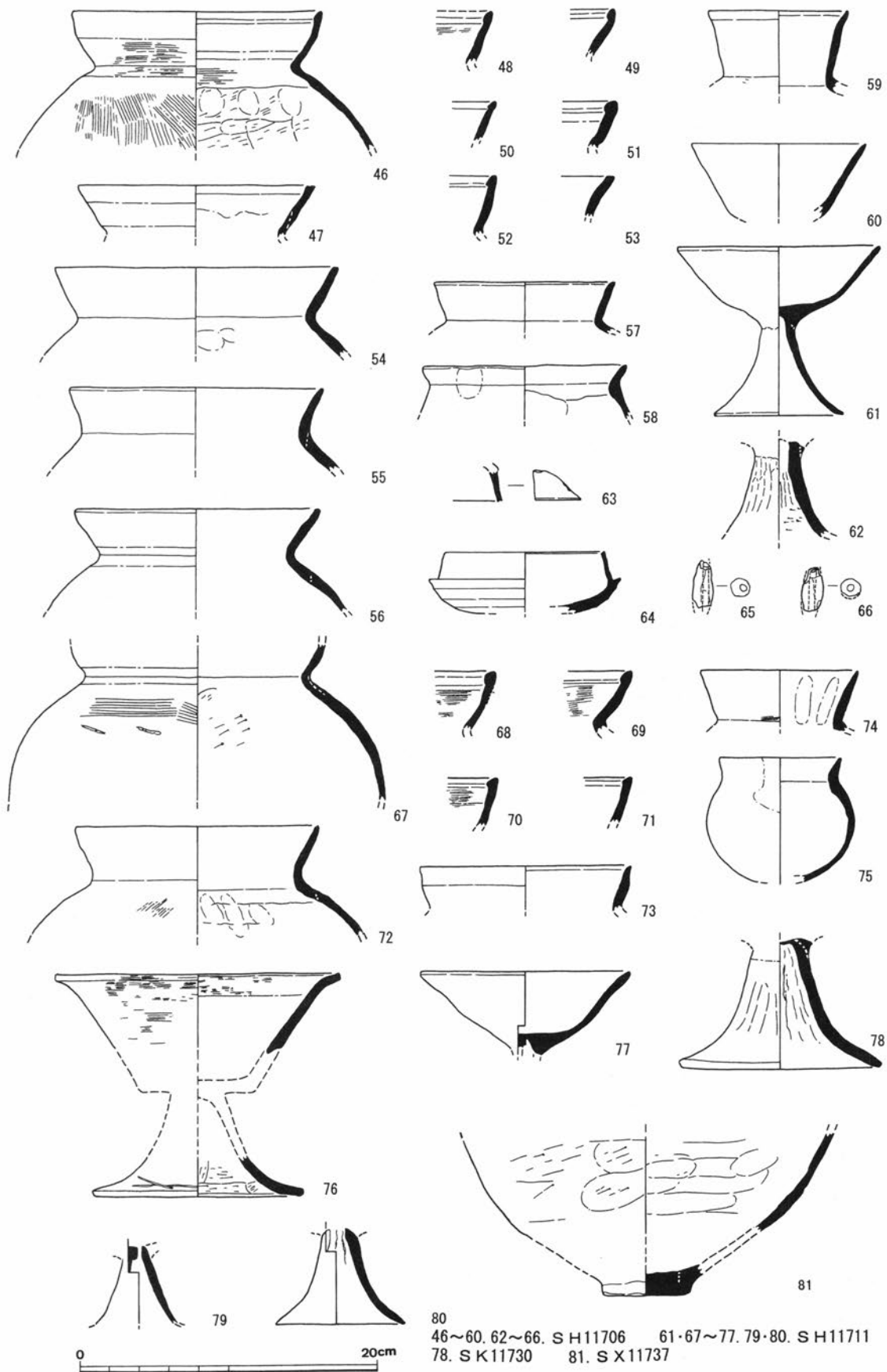
7地区の出土遺物は、大きく竪穴式住居跡に伴う古墳時代のものと、溝そのほかの遺構に伴う奈良・平安時代以降の遺物に分けられる。奈良・平安時代以降の遺物の多くは溝S D11707から出土したものである。

竪穴住居跡S H11710(第23図) 28・29・39はK1、32・38・42は竈、27・34・45は床面直上、他は埋土から出土した。布留式土器は組成が重要であると考え、S H11006・11011ともに破片であっても別個体となるものは図示した。25・26は壺である。25は口縁部に屈曲をもつ二重口縁壺、26は口縁部が直線的に立ち上がる直口壺である。27～35は口縁端部内面の肥厚する布留式甕、36・37は口縁端部を単純に終わらせる甕である。27は口径15.6cm、器高28.1cmを測り、明確に肥厚する口縁端部、肩部ヨコハケ、内面ヘラケズリ、底部内面の指頭圧痕、といった布留式甕の要素を兼ね備えている。外面は目の粗いタテハケのち肩部ヨコハケ、内面ヘラケズリは肩部内面で右回り方向に変化し、指頭圧痕は底部と肩部で確認できる。色調は橙褐色を呈する。28は口径15.8cm、器高29.3cmを測り、口縁端部内面はわずかに肥厚し、外面は縦方向のハケ、肩部と底部の内面には指頭圧痕が見られ、内面ヘラケズリは肩部指頭圧痕付近では右回り方向に変化する。27に比べ肩部ヨコハケが欠落し、焼成も甘く磨滅が著しい。色調は淡白黄褐色を呈する。27～35の布留式甕口縁端部は、27では明瞭に肥厚しながら内傾する面をもち、29・32では断面三角形、30では大きく肥厚し断面円形、33は肥厚部の折り返しが内側に入り込み、35では肥厚部が内面に段をなし、31・34では27に比べ緩やかに肥厚し、28ではわずかに肥厚する。36は口縁端部に外傾する面をもって肥厚せず、外面はナデによって沈線状をなし、体部内面をヘラケズリで仕上げる。37は短く外反する口縁部をもち、体部内面をヘラケズリで仕上げる。体部の一部は歪んでいる。38～41は高杯であり、38・39・41はいずれも口縁端部を単純におさめる碗形の杯部をもち、40は屈曲部をもつ高杯脚部である。全体的に磨滅が著しいが、38の端部内面にはわずかにヨコハケ、39の外面にはユビオサエ痕が確認できる。40は内面に粘土つなぎ痕を明瞭にとどめ、上部には刺突孔が施される。色調は、38・40が橙褐色、39が淡黄褐色、41が明赤褐色を呈する。42・43は甑である。42はやや外反する口縁部とすばまる底部をもち、大きく上方に湾曲する把手を付す。底部は残存しないものの、破損部直下から屈曲して蒸気孔をもつ平底を形成していたものと思われる。43は甑の把手であるが、42とは出土位置が大きく異なり、胎土もわずかに異なることから別個体と考えられる。42・43とも色調は淡赤白灰色である。44・45は須恵器杯蓋である。いずれも稜は明瞭であるが大きく突出はせず、端部もややシャープさに欠ける。T K208～23型式併行と考えられる。S H11006とともに、布留式甕と須恵器の共伴事例として貴重である。

竪穴住居跡S H11706(第24図) 46は住居内土坑K3、57・58は柱穴P2、56は床面直上、他は埋土から出土した。59は直口壺の口縁部である。器壁の凹凸が激しく、やや雑に仕上げられている。46～52は布留式甕である。46は口径16.4cmを測り、口縁端部内面を肥厚させるが、肩部外



第23図 室橋遺跡出土遺物実測図 (2)



第24図 室橋遺跡出土遺物実測図（3）

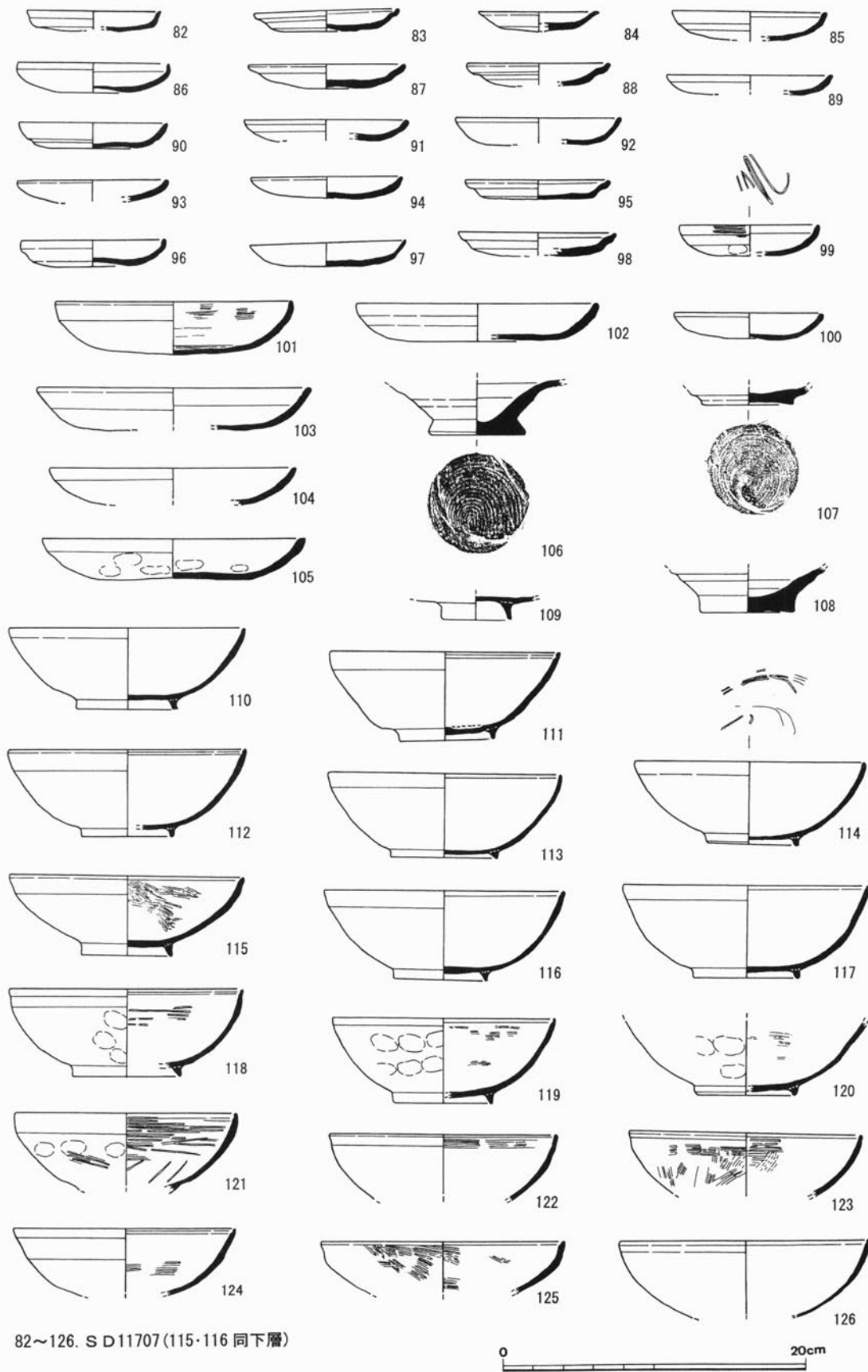
面のヨコハケは認められず、27・28と同様に肩部内面に指頭圧痕を残す。頸部内面上方にはナデの境目が突線状をなしている。色調は橙褐色である。47は口縁部の中位で体部とは異なる粘土をつないでおり、口縁端部の肥厚した面に沈線が入る。46～52は布留式甕の口縁端部で、46は緩やかな断面三角形、48・49は断面楕円形、47は上方に向けて面をもち、51は大きく肥厚し断面円形、50・52は肥厚部の折り返しが内側に入り込む。53～58は口縁端部を単純に終わらせる甕である。53は口縁部内面をごくわずかに肥厚する傾向があるが、口縁自体は外反する。54は、肩部内面に指頭圧痕が認められる。56は頸部内面にやや強めのナデが入る布留式甕の要素をもつが、口縁端部内面はごくわずかに肥厚する傾向をもつにとどまる。54～57は、表面の磨滅が著しい。58は37と類似した形態で、短く外反する口縁部をもって体部内面をヘラケズリで仕上げている。60～62は高杯で、60・61は無稜外反高杯である。61は口径13.7cm、底径8.6cmを測り、口縁端部はやや厚みを増しながら丸く仕上げ、色調は明赤黄褐色である。62は、60・61に比べしっかりとした作りの高杯脚部で、外面は縦方向の押圧、内面はヘラケズリを施しており、76と同様な有稜高杯である。63・64は須恵器杯身・杯蓋である。63は端部平坦面が沈線状をなす。64は口径10.7cmを測り、立ち上がりは高く、口縁端部平坦面は沈線状をなし、受け部の端部はやや丸みを帯びるTK 208～23型式併行と考えられる。65・66は土鍾である。

竪穴住居跡 S H 11711 (第24図) 67～77・79・80は埋土から出土した。74・75は小形丸底壺である。74は直線的に伸びる口縁部をもち、外面は横方向の細いミガキ、内面は強めのナデが入る。75は短く外反する口縁部をもつ。67～71は布留式甕、72・73は口縁端部を単純に終わらせる甕である。67は端部が残存しないものの、頸部の強いヨコナデや肩部ヨコハケをもち、肩部ヨコハケの下位にハケ工具による列点を加える、色調は暗赤褐色を呈する布留式甕である。68～71は布留式甕の口縁部で、68は大きく肥厚し断面円形、69は断面楕円形、70・71は断面三角形状をなす。72は、口縁端部をやや肥厚ぎみに仕上げるが布留式甕とはならない。73は、口縁端部をややつまみ出しぎみに仕上げる。76・77・79・80は高杯である。76は口径19.2cm、底径14.2cmを測り、口縁部は外面と端部内面をヨコナデし、脚部は内面ヘラケズリ外面ナデの後、X状のヘラ記号を加える色調明赤褐色の大形有稜高杯である。77は無稜外反高杯で、杯底部外面には刺突孔をもつ。79・80は緩やかに外反する高杯脚部で、79は脚頂部に刺突孔をもつ。

土坑 S K 11730 出土遺物 (第24図) 出土遺物は78のみである。底径13.4cmを測り、外面は縦方向の押圧を加える高杯の脚部である。

落ち込み S X 11737 (第24図) 出土遺物は81のみである。胎土に角閃石を多量に含む生駒山西麓産の壺底部である。外面は横方向のヘラケズリ、内面は強いナデを施す。底部は包含層出土であるが、特徴的胎土から同一個体とみて間違いないであろう。

溝 S D 11707 (第25・26図82～146) 82～104は土師器皿である。口径8～11cm、器高1.3～1.7cm前後を測る小形のもの(82～100)と、口径16～17cm、器高2.5cm前後を測るやや大形のもの(101～104)に分けられる。口縁部は横ナデを施し、口縁端部は丸く収めるものがほとんどであるが、83・88・95・98は口縁端部が「て」の字状を呈しやや外反する。105は内外面に指オサエの



第25図 室橋遺跡出土遺物実測図(4)

痕が残る。106～109は土師器碗または杯類の底部である。106は平高台でやや大ぶりのもの、107・108は回転糸切り高台、109は貼り付け高台をもつ。

110～129は瓦器碗である。口径15～16cm、器高5～6cm前後を測り、口縁部は体部から内湾気味に立ち上がる。口縁部端は丸く収めており、内面に1条の沈線を施す。体部の内外面には緻密なミガキが施される。底部に残るものでは、高台の径約6cm、高さ0.6cm前後を測り、断面は逆台形状を呈する。99・100は瓦器皿で、口径9cm、器高2cm前後を測る。口縁部は内湾気味に外上方にのび、口縁端部は丸く仕上げる。底部から体部外面にかけて指オサエの痕がみられる。99の見込み部にはジグザグ状のミガキが施されている。

130・131は須恵器杯である。底部から体部が直に立ち上がり、口縁部は外上方にのびる。底部に貼り付け高台をもつ。132は貼り付け高台をもつ壺底部とみられる。体部の下半部の一部に釉がかかる。133は平高台をもつ須恵器碗である。高台の底部には回転糸切り痕がのこる。134はやや軟質の須恵器鉢で口径31.4cmを測る。口縁および体部は底部から斜め上方に直線的にのび、口縁端部は強いナデを施し、面をなす。色調は灰白色を呈する。135は硬質の須恵器鉢で、口径35cmに復原される。口縁端部の内外面に自然釉がかかる。

136は東海系と思われる陶器甕の底部である。平底で径14cmを測る。体部下半に暗灰緑色の釉がかかる。137は須恵器四耳壺または三耳壺の肩に付く把手飾りとみられる。平面が略五角形の扁平な粘土板を貼り付けるもので中央に円孔を穿つ。

138～143は中国製の白磁碗である。139の口縁端部は細身の玉縁口縁、140・141は端部を折り返した厚身の玉縁口縁をもつ。142・143は断面逆台形状の貼り付け高台をもつ。底部と体部下半は無釉である。144は中国製の白磁皿である。底部は無釉で一段削り込む碁笥底をなす。

145～147は土師器羽釜で、口径20～22cm前後を測る。口縁部は胴部から内傾しながら内上方へのびる。鐏部は水平にのび断面は扁平な逆台形を呈する。147の口縁端部の内面にはハケメを施す。口縁部外面には煤が付着する。このほか土器以外のものとして鉄滓(157)がある。

S D 11707から出土した遺物は、概ね11世紀後半～12世紀前半に属するものと考えられるが、130・131の須恵器杯は、奈良時代末から平安時代初頭の8世紀末頃に属するものみられる。

溝 S D 11703(第26図) 148は須恵器甗で径9.8cm、高さ2cmの底部の内側に器壁の厚い胴部がとりつく。底部には小坑を穿つ。

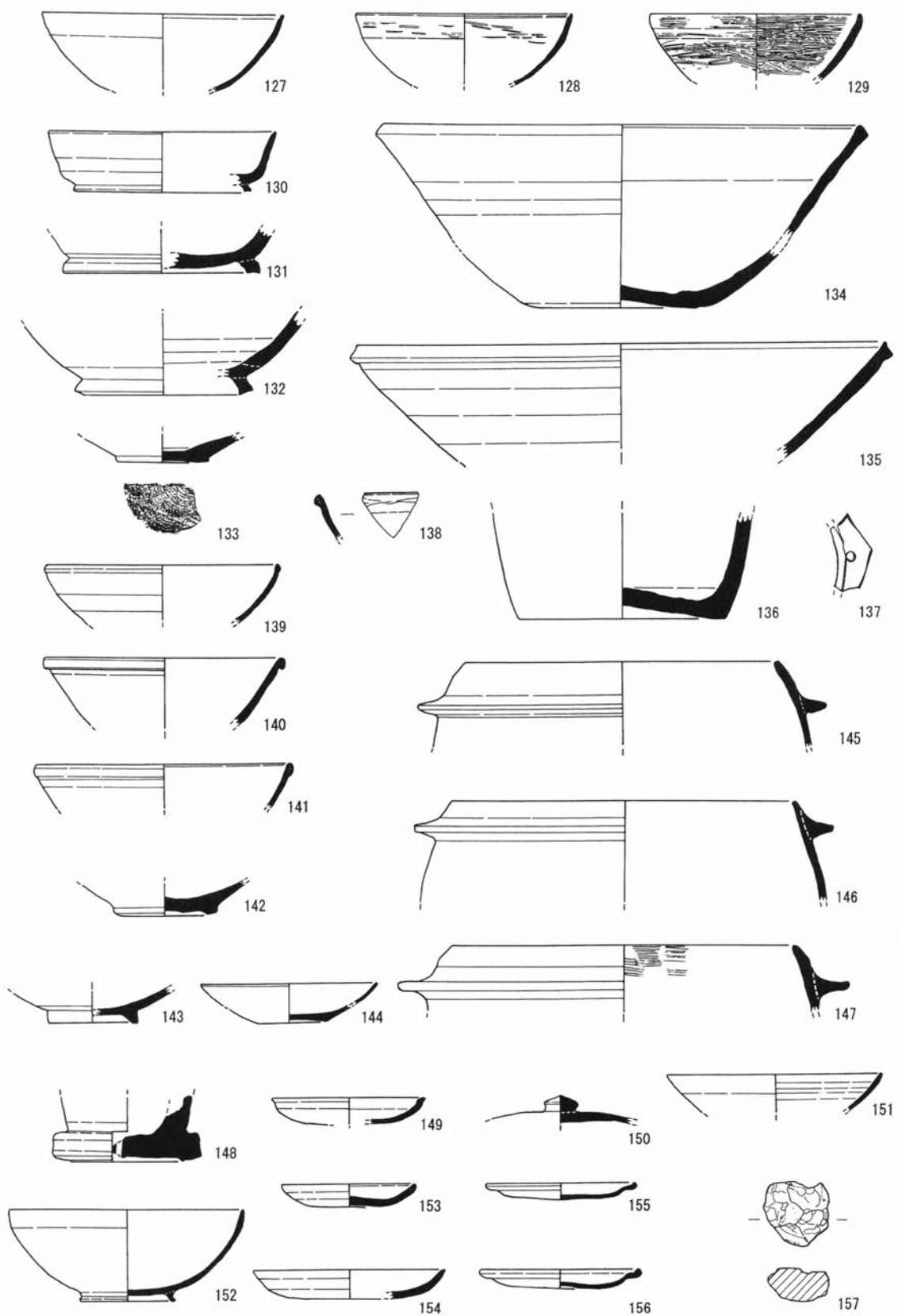
溝 S D 11704(第26図) 149は、土師皿である。口径10cm、器高1.3cmを測る。

溝 S D 11705(第26図) 150は、須恵器杯蓋である。頂部に宝珠状のつまみをもつ。

柵列11711(第26図) 151は、須恵器杯である。口径14.6cm、器高6cmを測る。

土器溜まり S X 11720(第26図) 152～154が出土した。152は瓦器碗である。口径15.6cm、器高6cmを測る。断面三角形状の貼り付け高台をもつ。153は土師器皿である。

柱穴 P 11732・P 11731(第26図) 155はP 11732から、156はP 11731から出土した。「て」の字状の口縁をもつ土師皿である。155は口径9.75cm、器高1.15cm前後を測り、156は口径10.3cm、器高1.3cm前後を測る。色調は乳白褐色を呈する。



127~147・157. S D11707 (128・129 同下層)
 148. S D11703 149. S D11704 150. S D11705
 151. S A11720 152~154. S X11720
 155. P11732 156. P11731

0 20cm

第26図 室橋遺跡出土遺物実測図 (5)

(2) 野条遺跡第13次

調査概要

今回の調査は、標高117m前後の水田地帯に幅3.6m、長さ56mの東西長の試掘トレンチを設定し、遺構、遺物の有無を確認することを目的とした。周辺は南北に細長い畦畔が見られ、一筆毎に序々に南に低くなる。調査の結果、溝跡3条、杭跡を検出したが、遺物は皆無であった。

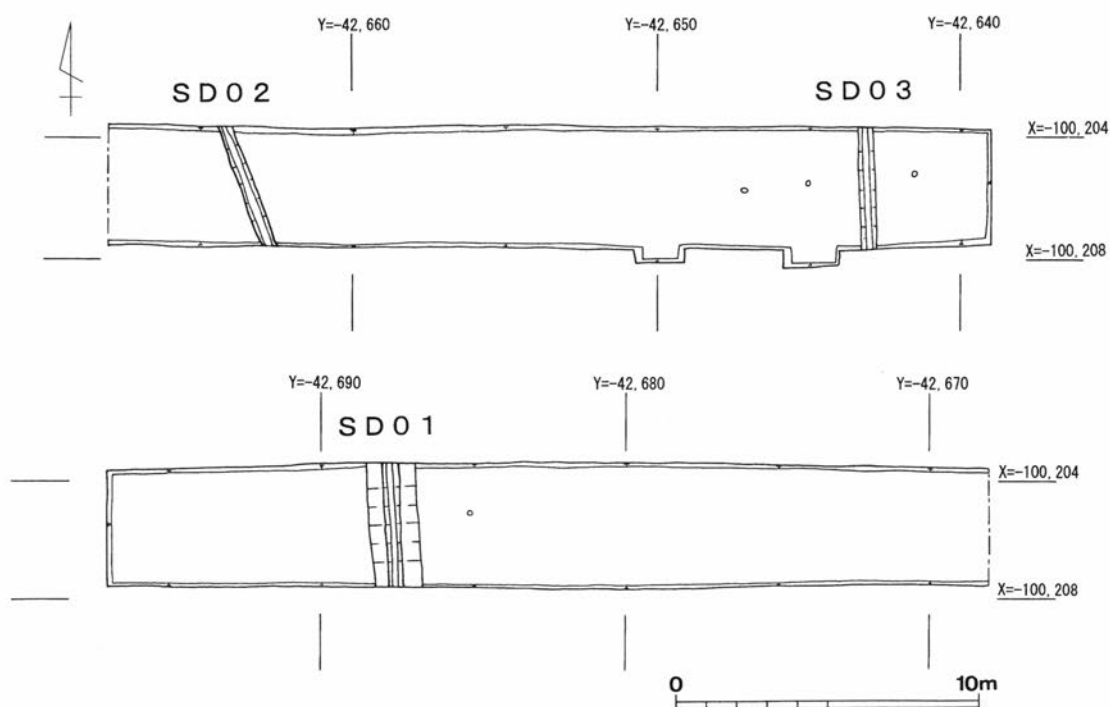
調査地の基本的な土層(堆積土)は、現代耕作土である暗黒灰色泥土(土層図には表示なし、1層の上層)以下、1層(明黄褐色粘質土)、2・3層(黒色粘性土、淡黒色粘性土)、4層(淡暗褐色粘質土)、5層(明黄褐色粘質土)である。1層は現代耕作土の床土、2・3層は削平による整地された旧耕作土、4層は一部黒ボク層が堆積する地山である。5・6層は、トレンチ東半部に堆積し、造成による整地層である。何れも、遺物は皆無である。

検出した遺構は溝SD01～03、杭跡等である。

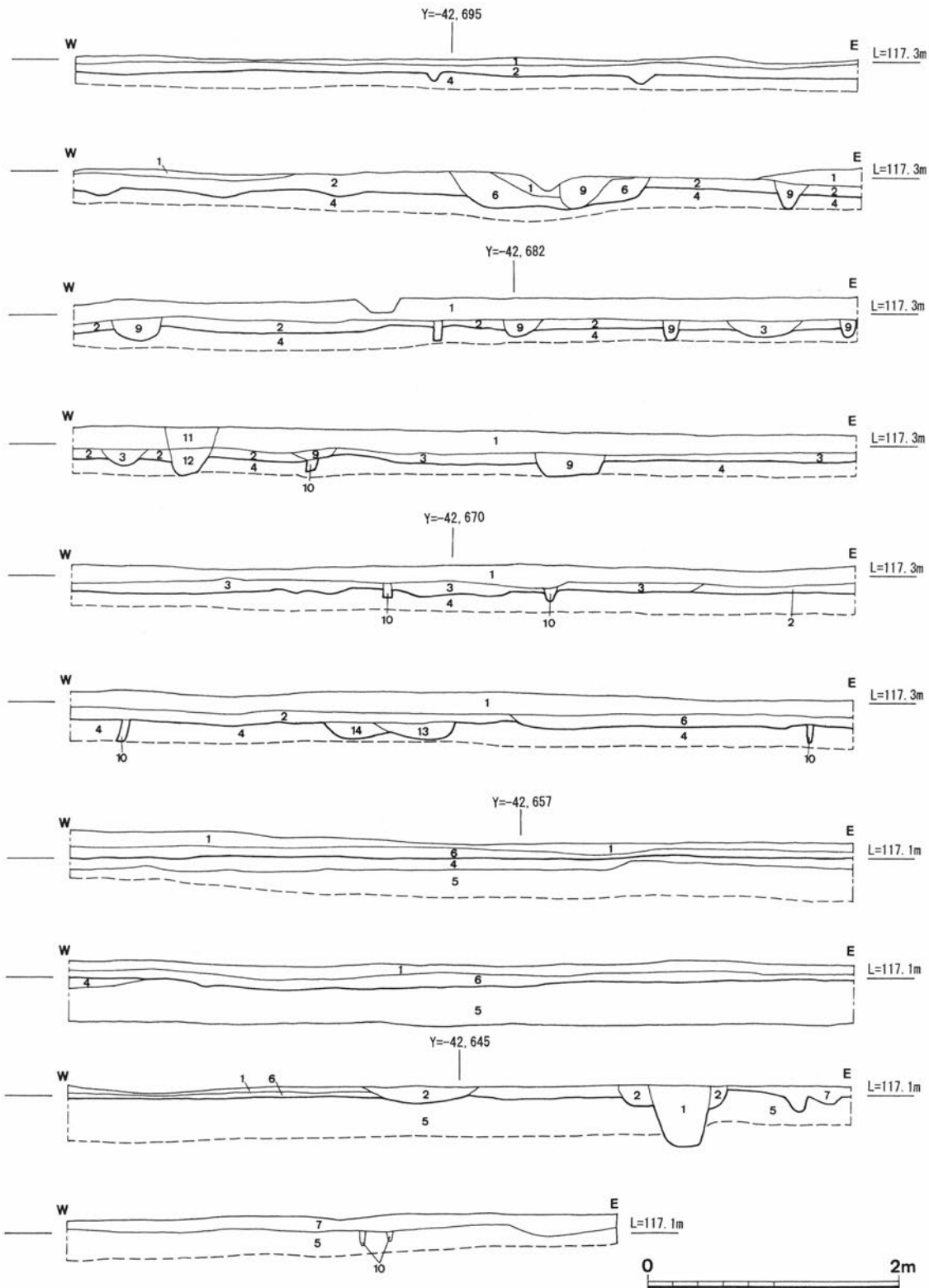
溝SD01 トレンチ西側で検出した南北方向(N3°W)の溝である。幅1.5m、深さ0.5mを測り、堆積土は、上層では現代の耕作土である暗黒灰色泥土、下層では1層と暗黒灰色泥土の混合層である。現代の用水路である。

溝SD02 トレンチ東側で検出した南北方向(N25°W)の溝である。幅0.3m、深さ0.35mを測り、堆積土は、上層では現代の耕作土である暗黒灰色泥土、下層では1・2層の混合層である。水田に関わる暗渠排水溝である。

溝SD03 トレンチ中央部で検出した南北方向(N1°W)の溝である。幅0.5m、深さ0.45m



第27図 野条遺跡第13次調査区実測図



- | | | |
|------------|----------------|-------------------------|
| 1. 明黄灰色粘質土 | 6. 淡暗褐色粘質土 | 10. 暗褐色粘質土 |
| 2. 黒色粘質土 | 7. 黄褐色粘質土 | 11. 黄灰色粘質土 |
| 3. 淡黒色粘質土 | + 黒色粘質土<小砂礫含む> | 12. 杭跡<1・2・4層の混合層> |
| 4. 淡褐色粘質土 | 8. 黒褐色粘質土 | 13. S D01<2・5層の混合層> |
| 5. 明黄褐色粘質土 | 9. 黒色粘質土 | 14. S D01<淡黒色粘質土, 砂礫含む> |

第28図 野条遺跡調査区土層断面図

を測り、堆積土は、上層では1層床土と黒色泥土の混合層である。底面には割り竹が据えられており、この溝も水田に関わる暗渠排水溝である。

杭跡 直径0.2m～0.3mの小柱穴を検出したが、柱の痕跡、埋土等は判然としなかった。およそ、稲木、立ち木の痕跡と思われる。

調査の結果、検出遺構、土層堆積状況から現代の水田は畦畔の改変、水田一筆の拡張等、近代に耕地整備が行われたものと思われる。S D01とS D02は大きく方位が異なる。出土遺物は無いが、土層堆積状況から時期差が認められ、耕地整備以前の水田が営まれていたことがうかがえる。

まとめ

今回の調査では、室橋遺跡の北部(1～6区)と南部(7区)で約2,000m²の調査を実施し、野条遺跡北端で試掘調査を実施した。

室橋遺跡北区の調査では、1区北端で弥生時代後期後葉～古墳時代初頭と推定される溝の南東延長部を検出した。断面形は台形状をなし、幅5～6mの規模をもつとみられる大規模な溝である。また2区でも、大規模な溝を検出したが、この溝は断面形がv字形をなす防御性が高い溝であり、北から南へ直線的に掘削されていることが判明した。第5次調査で検出した溝と連続し、最終的な埋没時期が古墳時代前期前葉と推定されている。溝の東側は集落の立地に適した高台となっており、これらは集落の西側縁辺に掘削された大溝と推定される。

北区の3・4・6区では、奈良～平安時代にかけての掘立柱建物跡群や柱列を検出した。過去の調査でも北区各所で奈良～平安時代前期の方形掘形の柱穴から構成される掘立柱建物跡群が検出され、一帯が奈良時代に新たに開発され、集落規模が大きく拡大すると考えられる。

北区では、5区で奈良～平安時代初頭にかけての灌漑用水とみられる大溝を検出した。また、5区では平安時代末期に再掘削されたとみられる溝状の落ち込みを検出した。出土遺物が少なく断定はできないが、平安時代中期～後期に開削された溝を再掘削している可能性がある。

室橋遺跡南区の調査では、古墳～平安時代にかけての遺構が検出され、室橋遺跡南部における集落の一端が明らかになってきた。7区では、古墳時代中期の竪穴式住居跡3基を検出し、南部に古墳時代中期の集落が広がること確認した。このうち、竪穴式住居跡S H11710は、造り付けの竈をもつ古墳時代中期前半の住居跡で、近畿地方のなかでも竈が普及する比較的早い時期に竈を導入したものであることが判明した。その構造には特色があり、近畿地方で一般にみられる掛け口を一つもつ形態ではなく、縦に二つの掛け口をもつ竈であることが判明した。燃烧部直上の掛け口を煮炊きに用い、後方の掛け口を保温に使用し、機能を使い分けたものと考えられる。室橋遺跡では、北区で行われた第4次調査でも、古墳時代中期前半の竈を有する住居跡が調査されているが、周辺の遺跡では諸畑遺跡で古墳時代中期前葉の最古級の竈が検出され、近畿地方でもいち早く竈を導入し、定着した地域として注目される。

奈良～平安時代にかけての遺構は、大小8条の溝を検出した。このうち溝S D11707は、幅約



第29図 室橋遺跡・野条遺跡主要遺構検出地点位置図

4 mの大溝で、主に平安時代後期の11世紀後半～12世紀前半に帰属する土器が出土した。この溝については、約200m離れた地点で調査された野条遺跡第10次・12次調査2区で検出した溝SD 201に繋がる可能性があり、11世紀後半に広範囲に灌漑用水が整備された可能性がある。7区では、このほかに幅2 mの溝1条、幅約1 mの溝2条、さらに幅約0.5m前後の小規模な溝群を検出したが、これらは出土土器から、奈良時代後半～平安時代前期に掘削された溝と推定される。

室橋遺跡の調査では、弥生時代から平安時代にかけての遺構を南北約600mにわたる広い範囲

で確認し、室橋遺跡が長期にわたって営まれた大規模な複合集落遺跡となることを確認した。古墳時代中期の住居跡は、これまでの第4～7次調査で北部や南部の各所で確認され、古墳時代中期～後期に新たな開発が進み、集落規模が急激に拡大することが判明した。また、奈良時代から平安時代初頭にかけては、北部を中心に掘立柱建物跡群の存在が明らかにされているが、今回の調査でも大形掘立柱建物跡の一部や、灌漑用水とみられる大規模な溝を検出した。平安時代末期の遺構は過去の調査ではほとんど確認されていなかったが、5区の調査で12世紀中頃に再掘削されたとみられる溝状の落ち込みを検出した。室橋遺跡周辺は、平安時代末期に存在した荘園「吉富荘」に含まれ、平安時代の伝承が多く残る地域であり、文治4年(1188年)には神護寺を再興した文覚の主導により灌漑用水が引かれたとされる。今回検出した遺構は、やや先行する時期ではあるが、現在の新庄用水と近接してほぼ平行に掘削され、同様な位置に古代に遡る灌漑用水が存在した可能性を示している。今回の調査では、奈良～平安時代の灌漑にかかわる再開発の可能性を具体的に示す資料が得られ、この地域の水田開発の歴史をひもとく貴重な資料が得られた。

注1 調査参加者は以下のとおりである(敬称略、順不同)

(作業員) 梅井ゆき子・西垣久江・松本敏子・松本安治・浅田節子・田中千枝子・松倉和美・浅田あさの・中山田健一・浅田忠晴・宅間文治・福本正吉・八木辰男・松本拓・三髯順子・平井美登里・野村治・平井義次・西田恵美子

(補助員) 蜂谷友佳子・中川慎也・廣瀬慶典・橋爪侑也・松本亨太・野中洋志・中居和志・井川怜・山下秀平・田中里奈・長谷川裕美・丹上新太・油井一貴

(整理員) 陸田初代・丸谷はま子・中島恵美子・荒川仁佳子・中居和志・長谷川裕美・堀川多津子・槻啓宏・川那辺由美子・井上祐子・村岡弥生

注2 高野陽子「野条遺跡第10・12次、室橋遺跡第5次」(『京都府遺跡調査報告集』第127冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2008

注3 測定は、(株)加速器分析研究所に委託した。測定結果は、B C 350～310年(13.1%)・同210～110年(55.1%)とB C 360～280年(46.2%)・同240～190(22.0%)である。

注4 測定結果は、A D 985～1025年であり、過去の調査の年代観と大きな隔たりを生じた。

注5 調査成果については、平成20年度に当センターから報告する予定である。

注6 測定結果は、A D 1255～1285年である。

注7 測定結果は、上層はA D 685～775年、下層はA D 895～925年(23.1%)・同940～995年(45.1%)である。

注8 福島孝行「府営農業整備事業関係遺跡 平成18年度発掘調査報告」(『京都府埋蔵文化財調査報告書』(平成18年度)－2 京都府教育委員会) 2007

注9 杉井健「竈の地域性とその背景」(『考古学研究』第40巻第1号 考古学研究会) 1993

2. 千束古墳群発掘調査報告

1. はじめに

今回の調査は、府道網野峰山線幹線道路改良事業に伴い、京都府土木建築部の依頼を受けて実施したものである。千束古墳群は京丹後市峰山町石丸千束谷に所在する。

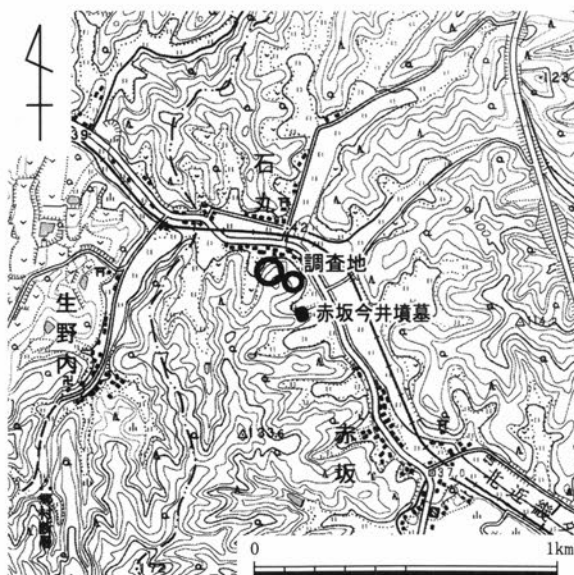
調査地は東西二つの尾根部にまたがり、西側尾根調査区に4か所、東側尾根調査区に3か所の古墳状隆起の存在を確認し、古墳の存在を確認するために試掘トレンチを設定し調査をすすめた。その結果、西側尾根調査区からは古墳を2基検出したが、東側尾根調査区では古墳の存在が確認されず、炭窯跡を検出したのみであった。なお、東側尾根調査区の上部に千束古墳群1～4・7号墳があるが、これらは調査範囲外である。

調査を担当したのは当調査研究センター調査第2課課長補佐兼調査第3係長石井清司、調査第1係長小池寛、主任調査員引原茂治・森島康雄、専門調査員黒坪一樹である。

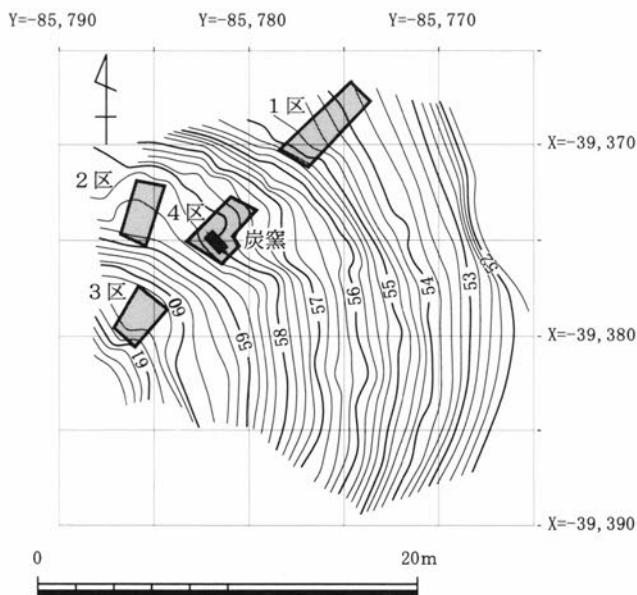
調査にあたっては、京丹後市教育委員会、京都府教育委員会、京都府立丹後郷土資料館、地元自治会をはじめとする関係諸機関からご協力、ご指導いただいた。また、多くの方々から専門的なご教示をいただいた。現地調査にあたっては、地元有志の方々に参加していただいた。衷心より御礼申し上げたい。現地調査は平成19年8月21日～12月6日で、調査面積は380m²である。調査にかかる経費は全額、京都府土木建築部が負担した。

2. 位置と環境

千束古墳群は、狭小な谷筋に面した尾根上に立地する。狭小な谷筋ながら、ここは網野銚子山古墳や浅後谷南遺跡などの遺跡群が展開する福田川水系の潟湖周辺と、竹野川支流の中郡盆地の平野部を結ぶ境界点にあたり、両地域を行き交う古代の道の要衝といえる。周辺には、調査地南東に小さな谷ひとつ隔てて、玉類による頭飾りなどの豪華な副葬品を出した弥生時代後期末の赤坂今井墳墓、その南東に特殊扁壺を出土した横穴式石室をもつ今井古墳(6世紀)、さらに調査地北東部には古墳時代中期から後期のホエケ谷古墳群(5～6世紀)などの調査例がある。その他にも未調査の古墳が非常に多く点在する地域である。古墳のほかには山城跡が知られているが、集落跡は狭小な谷部であるため現



第1図 調査地位置図
(国土地理院 1/25,000 峰山)



第2図 東尾根地区調査区配置図

の埋葬施設を検出した。また5号墳の上位に狭いながらも平坦面が2か所あり、その部分も試掘トレンチを設定して調査を進めたが、古墳の造作にともなう人為的な地形の改変は確認できなかった。東側尾根調査区でも古墳状隆起部分にトレンチを設定して試掘調査を実施したが、炭窯跡を検出したのみで、古墳は存在しなかった。

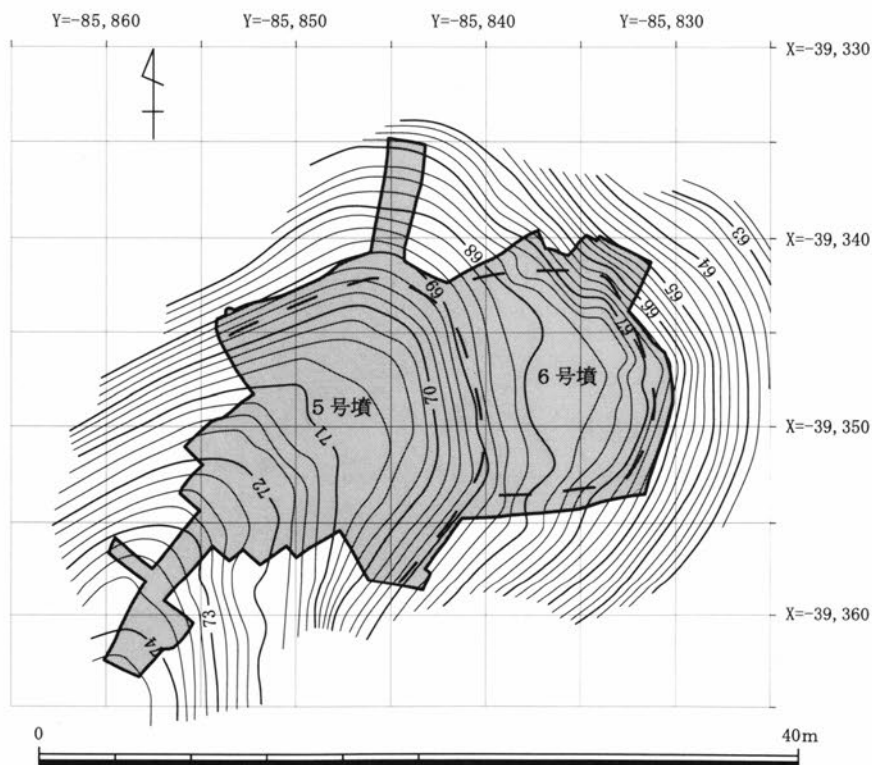
(引原茂治・黒坪一樹)

在のところ発見されていない。なお、今年度発掘調査を実施した弥栄町谷奥古墳群では千束5号墳と同時期の古墳が17基調査されている。

3. 調査の経過

現地調査では調査地の樹木伐採を行った後、掘削前の調査地の測量図を作成するため、空中写真撮影および図化作業を実施した。その後、人力により表土掘削にとりかかった。その結果、西側尾根調査区において、5・6号墳として確認されている地点で、2か所

4. 調査の概要

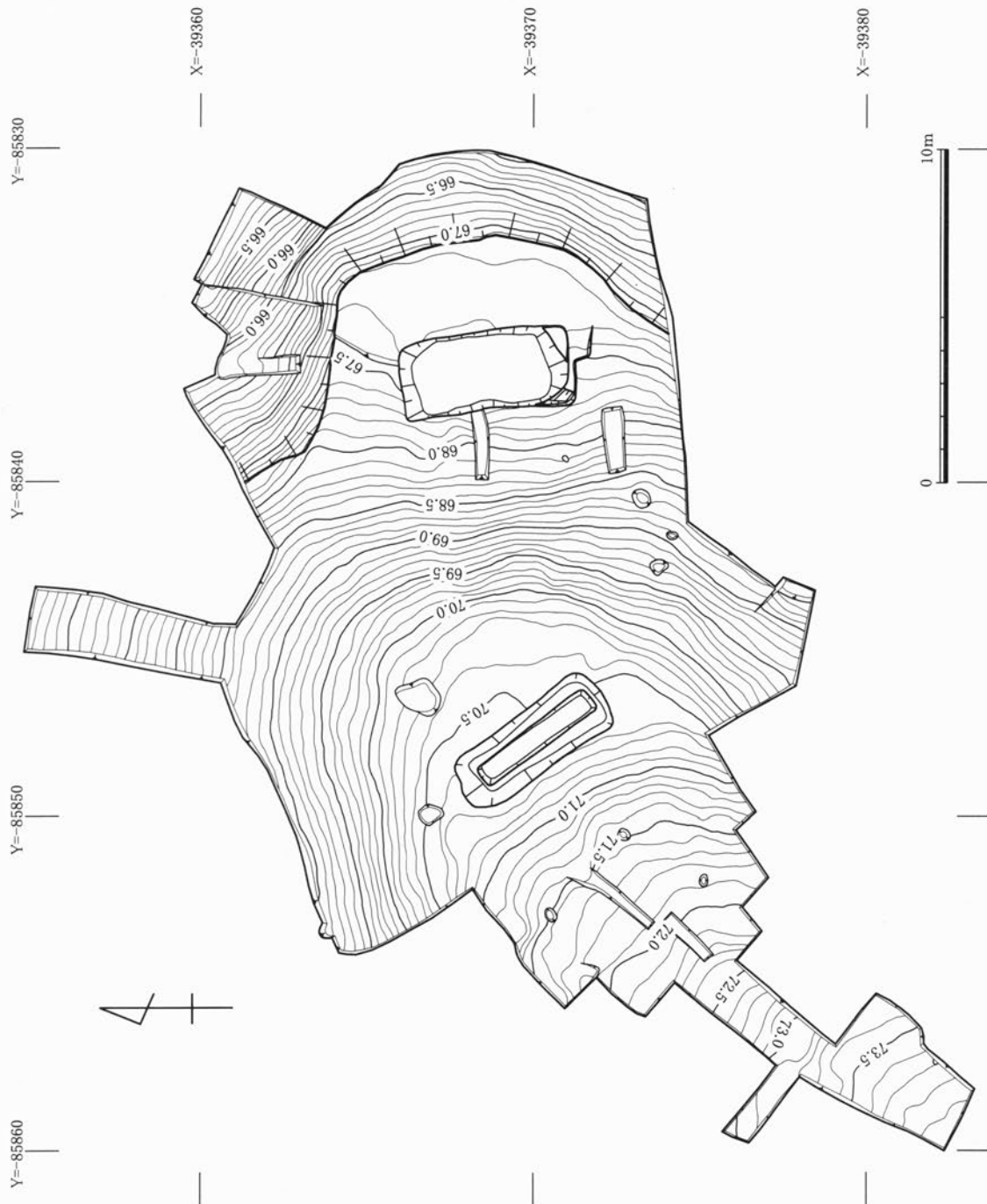


第3図 西尾根地区調査区配置図

A. 検出遺構

(1) 5号墳

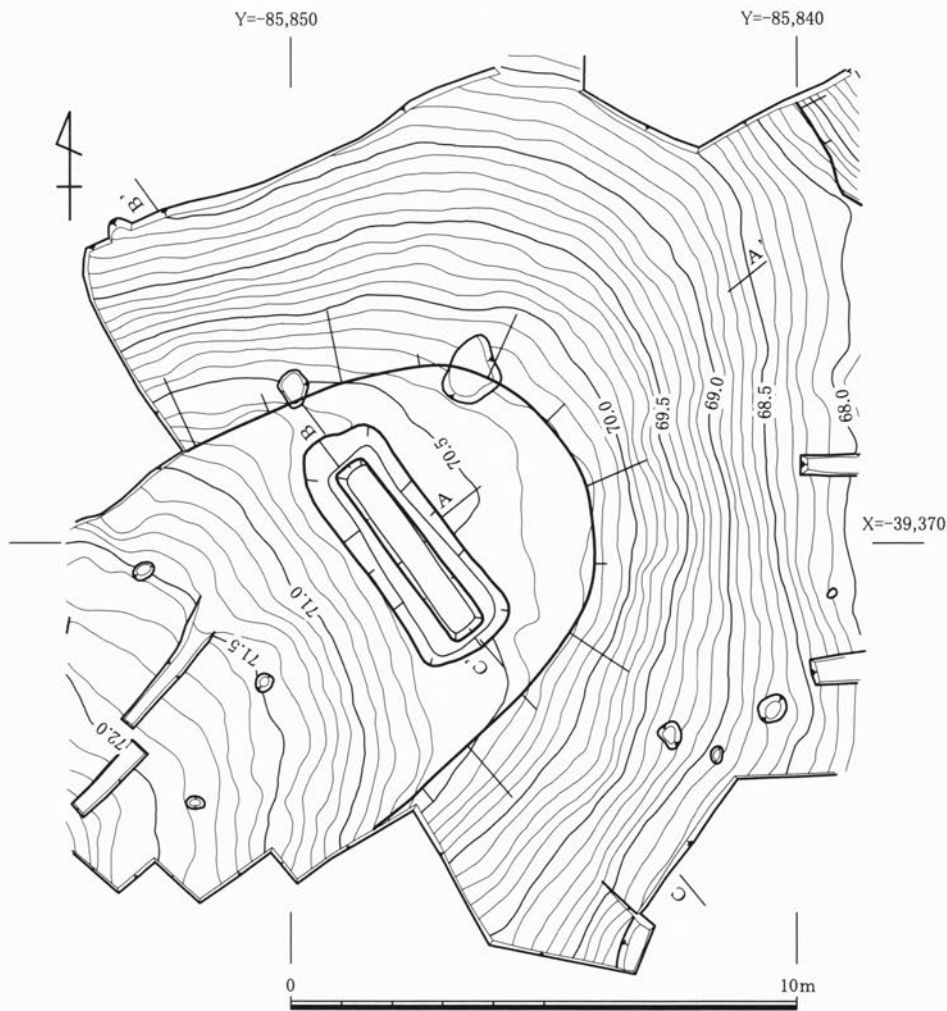
5号墳は、尾根筋を整形した小規模な古墳である。墳頂部に埋葬施設を設け、箱形木棺を埋納する。埋葬施設の主軸は北西から南東方向であり、遺体の頭位は北西側とみられる。推定頭部位置の東側から銅鏡、玉類、鉄製品が出土した。西側からも玉類が



第4図 5・6号墳平面図

出土した。この古墳の築造時期は5世紀前半頃と考えられる。

a. 墳丘 墳形は、直径13mの半円形状であり、円墳を意識しているものとみられる。尾根上部側には、尾根線を断ち切って墳丘を画するような区画溝はない。下部側にも明瞭な裾部は確認できない。墳頂部東側縁辺部には盛土の痕跡とみられる堆積層がわずかに残る。傾斜地のため、盛土が流失したものとも考えられるが、基本的には盛土は薄く、地山の削り出しによって墳丘を築造しているものとみられる。現況の黒色腐植土の表土下は、黄灰褐色系の粘質土および砂質土が20～25cmの厚さで堆積し、その下から埋葬施設1基を検出した。

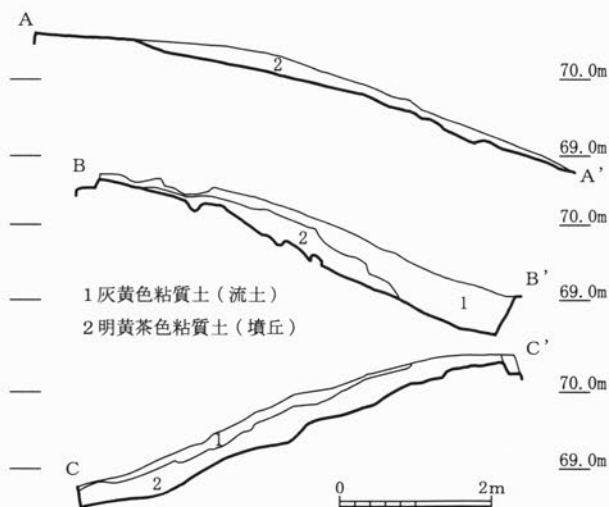


第5図 5号墳墳丘平面図

b. 埋葬施設

頂部平坦面の西寄りで木棺直葬の埋葬施設1基を確認した。主軸は尾根ラインにはほぼ直交する。主軸方位は北西から南東を示し、 $N-35^{\circ}-W$ となる。掘形は、長辺側は2段に掘り込むが、短辺側には明瞭な段は見られない。規模は、長さ5.2m、幅2.1m、深さ1.0mを測る。

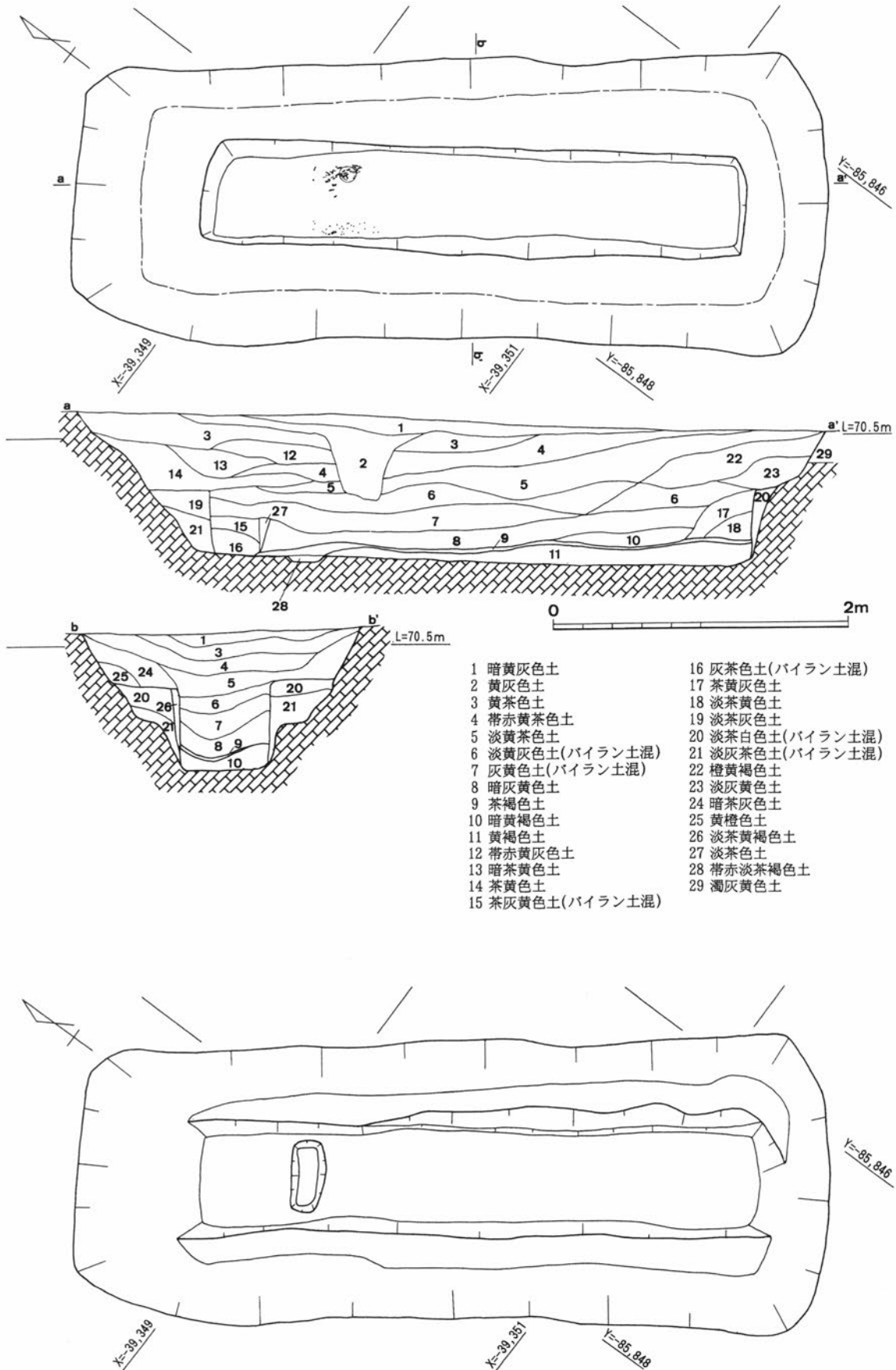
この埋葬施設



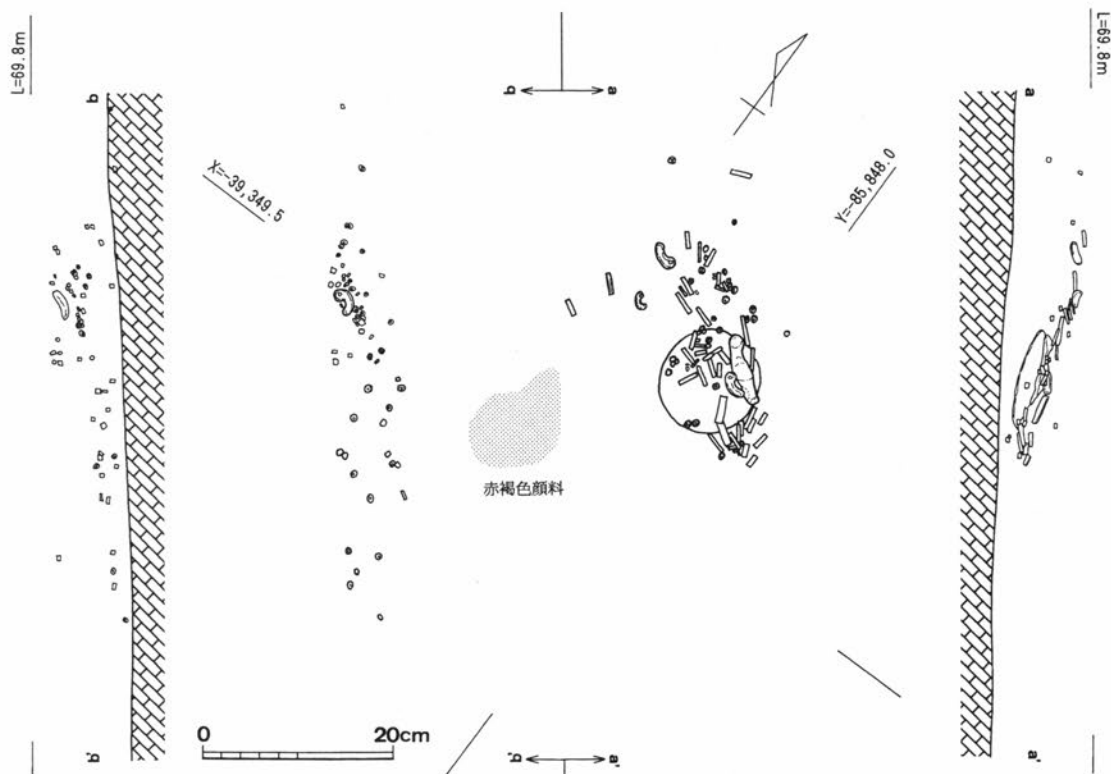
第6図 5号墳墳丘断面図

では、明確な棺痕跡は確認できなかったが、断面観察により、組合せ式木棺を埋納していたものと考えられる。埋葬施設底部北西端から0.7mの地点で、木口板を差し込んだ痕跡とみられる掘り込みが確認できた。棺の規模は推定長3.65m、幅0.6m、推定高0.6mを測る。副葬品の出土状況から、北西が頭位と考えられる。また、頭部位置と考えられる部分には、薄い赤褐色の顔料の痕跡が残存していた。顔料は酸化第二鉄(ベンガラ)とみられる。

c. 遺物出土状況 出土遺物は、銅鏡、装身具(玉類)および鉄製品である。これらの遺物は、被葬者の推定頭部位置とみられる北西側から出土した。頭部位置を示すとみられる赤褐色顔料の残存部分の東西両側に分布しており、頭側に副葬されたものと考えられる。



第7図 5号墳埋葬施設実測図



第8図 5号墳埋葬施設内遺物出土状況図

東側からは、銅鏡、玉類、鉄製品が出土した。銅鏡は、鏡面を上にし、南側にやや傾斜して出土した。鉄製品は、銅鏡の上に錆付いた状態で出土した。玉類は、ほとんどが銅鏡周辺の上部から出土しており、これらの中には勾玉3点が含まれる。勾玉は、翡翠製2点、碧玉製1点である。勾玉以外には、管玉、白玉、棗玉などが出土している。銅鏡下部からも白玉などが出土している。

西側からは、玉類が出土した。棺の長側板に沿うような状態で出土している。玉類には、碧玉製勾玉1点やガラス製小玉3点が含まれる。西側から出土した玉類の多くは白玉であり、細身の管玉が少量含まれる。

以上のように、特に玉類の出土状況や内容には、東西で相違がみらる。2種類の装飾品が副葬されたものとも考えられよう。(引原茂治・黒坪一樹)

(2) 6号墳

6号墳は、5号墳の東下方に延びる尾根上に立地する小規模な古墳である。墳頂部平坦面の標高は67～68mで、5号墳との比高差は約3mを測る。墳頂部に埋葬施設を設け、組合せ式の箱形木棺を納める。埋葬施設の主軸は、座標北から西に約8°振っている。木棺内の土器枕の状況から、棺内には北頭位と南頭位の2体が埋葬されていたと考えられる。北頭位の被葬者の土器枕付近からは鉄鏃などの鉄製品と銅釦が出土し、南頭位の被葬者の土器枕付近からは須恵器杯身・杯蓋が組み合わさった状態で出土した。また、墓壙上からは須恵器甕・ハソウ・短頸壺が出土した。この古墳の築造時期は、出土した須恵器の特徴から6世紀前半と考えられる。

a. 墳丘 この古墳は墳頂部の東辺と北辺を直線的に成形して一辺約10×7mの方形の平坦面

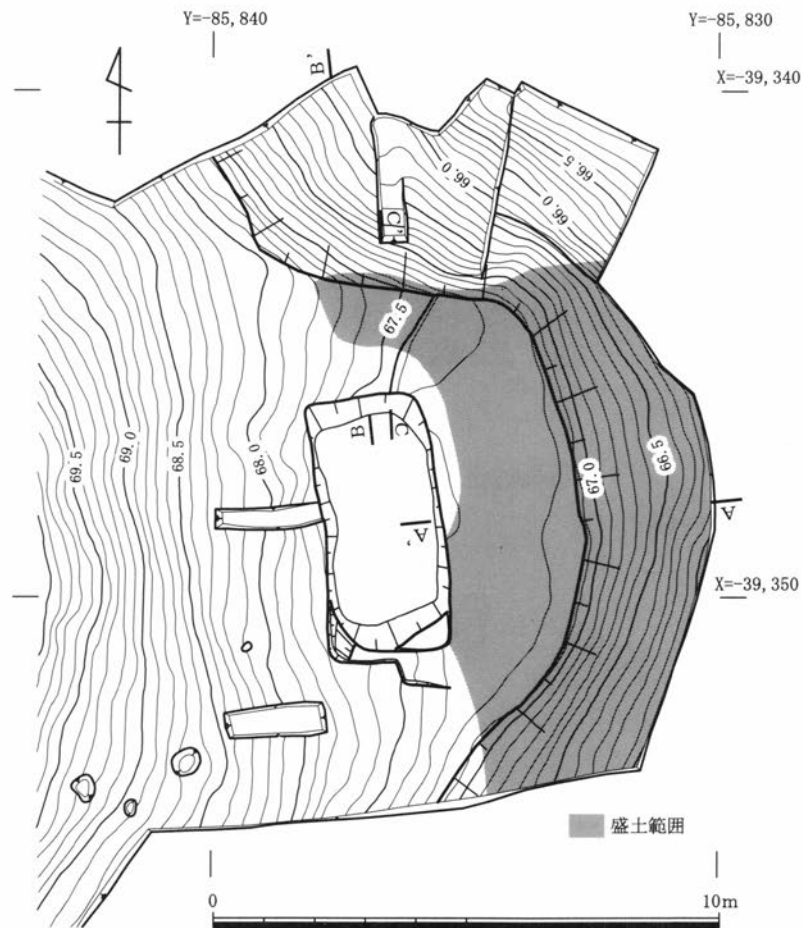
を造成していることから、方墳を意識しているものと思われる。しかしながら、墳丘裾は不明確で特に傾斜変換点を持たないまま尾根の斜面に続いている。

層序は約10cmの表土と約20cmの灰黄色粘質土を除去すると地山が現れるが、墳頂部平坦面の東半分は盛土して成形しているので、茶赤色粘質土の盛土が現れる。盛土範囲の一部では茶赤色粘質土の盛土の下に暗黄灰色粘質土の旧表土が残っている。盛土の厚さは最大0.9mを測る。6号墳墓塋の東側には鉄分を多く含む岩脈が風化して土壌化し

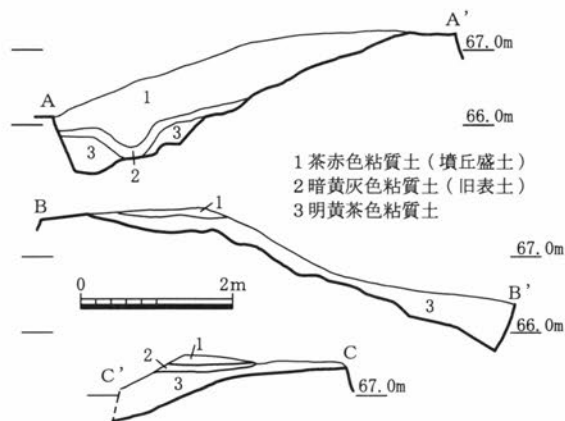
たとえられる茶赤色粘質土が幅約3mで南北に帯状に延びており、この土を削って盛土に用いたものと考えられる。この削平により、5号墳の墳丘の一部が直線的に削られている。

b. 埋葬施設 墓塋は墳頂部平坦面の中央で1基検出された。墓塋の規模は5.1×2.3mを測る。掘形は一部が盛土上面から切り込まれているが、大半は地山を切り込んでいる。深さは最大0.8mを測る。「H」形の平面形を呈する木棺の痕跡を確認し、長側板の間に小

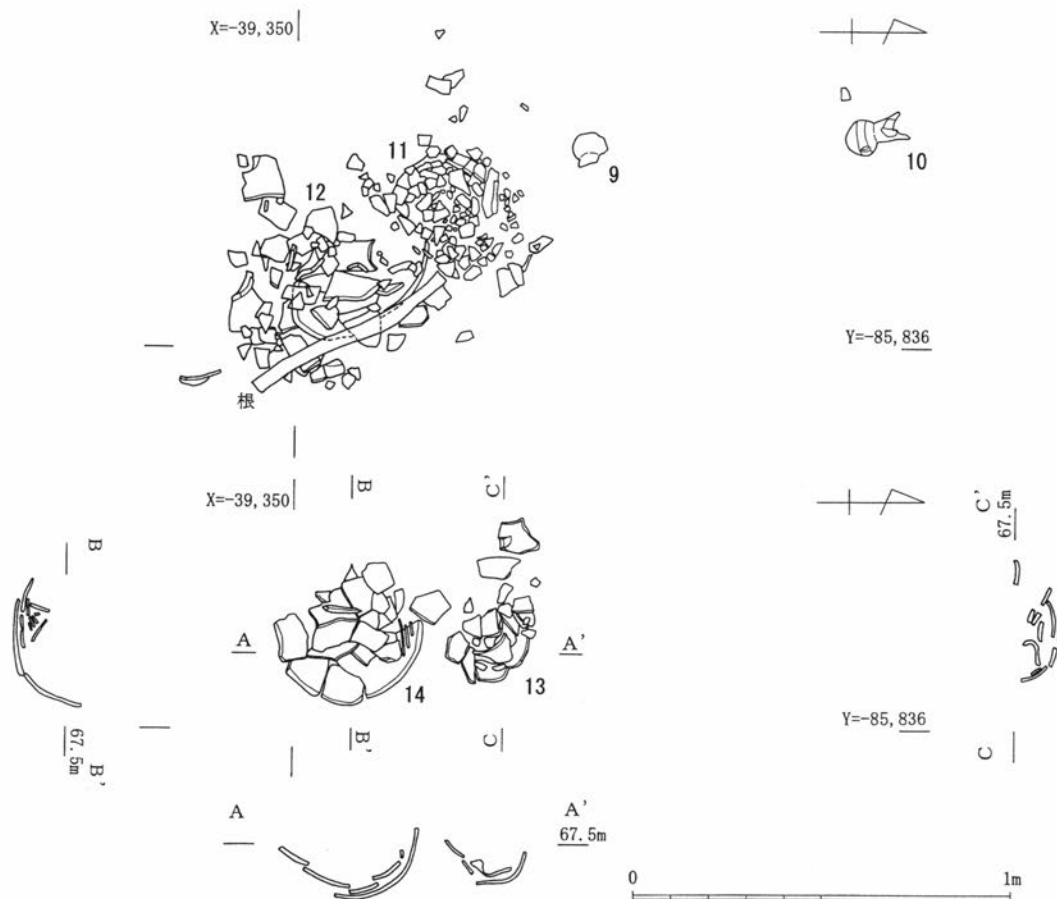
口板が挟まる構造の組合せ式木棺であることが判明した。木棺の外法は長さ約3.6m、幅は、北端で約0.9m、南端で約1.0mを測る。木棺の裏込めは、下から黄茶色粘質土、灰黄色砂質土、茶黄色砂質土が入られる。北の小口に認められた暗茶色粘質土は小口板が土壌化したものかもしれない。墓塋底は北側が南側より約4cm高い。木棺内部は下から黄赤色砂混じり粘質土、赤茶色粘質土が堆積している。前者は木棺内に流入して堆積した土で、後者は木棺が腐食したあとに墳丘盛土が崩落したものと考えられる。墓塋北部の赤茶色粘質土から、須恵器杯身・杯蓋が出土し



第9図 6号墳墳丘平面図



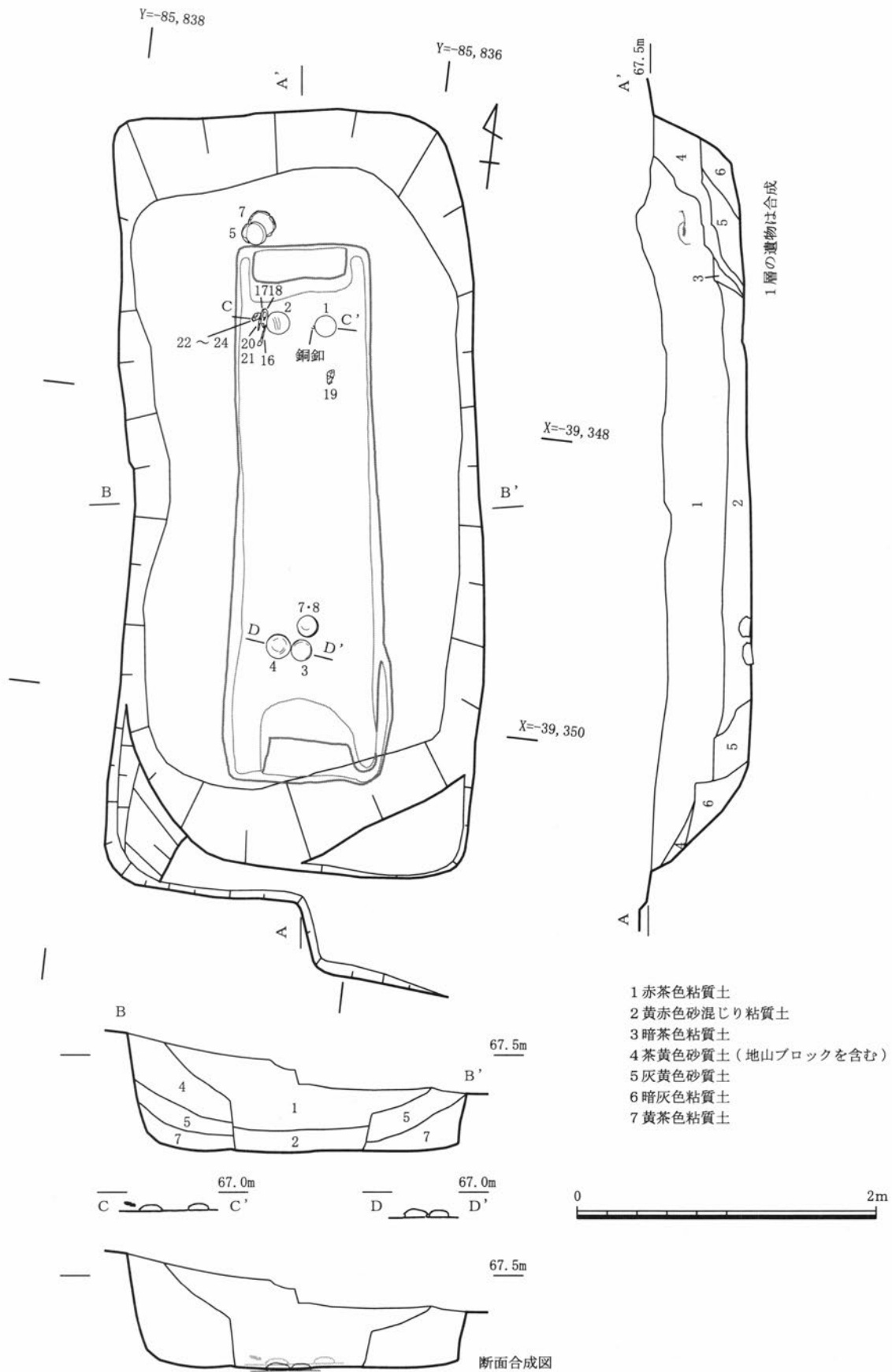
第10図 6号墳墳丘断面図



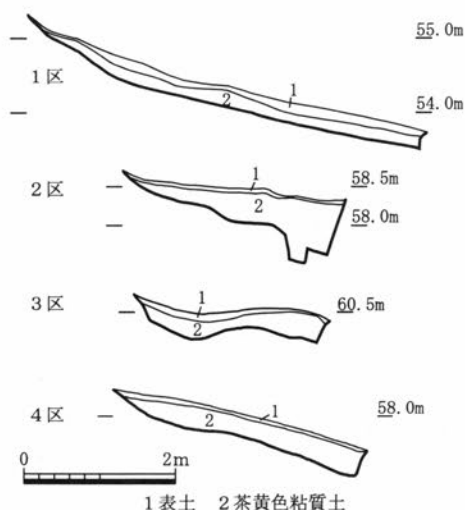
第11図 6号墳墳丘上面遺物出土状況図

た。これらは、木棺内に崩落した際に破損して互いにややずれているが、盛土内に組み合わせて埋められていたものと考えられる。赤茶色粘質土の上には灰黄色粘質土が堆積しているが、この層から須恵器甕・短頸壺・ハソウなどが出土した。須恵器甕は大・中・小3個体あり、南に大甕、北に小甕が並び、大甕の上から中甕が出土した。短頸壺、ハソウはやや離れた位置で、中甕に近い高さで出土している。大小の甕の底部は赤茶色粘質土に達しており、墳丘盛土上面に据えられていたものと思われる。なお、中甕の北西に隣接して、土師器鍋が口縁部を下にして出土した。平安時代後期頃のものと思われる。口縁部がほぼ水平に完周していることから、木棺陥没後にこの場所に据えられたものと思われるが、掘形は検出できなかった。3個体の甕の中では中甕の残存率が最も低い、失われた破片の多くはこの際に散逸したものと思われる。

c. 棺内遺物出土状況 墓壇底面の北部と南部で須恵器杯身・杯蓋を口縁部を下にして並べた土器枕が出土した。北枕と南枕の2遺体が埋葬されていたと考えられる。北の土器枕は約16cmの間隔をあけて東側に杯蓋、西側に杯身が並べられている。東側の杯蓋に接して銅釦と思われる半球形の銅製品が出土し、西側に置かれた杯身の西に接して鉄鏃・刀子・鉄鐸が出土した。また、東側の杯蓋から南に10cm余りのところで鉄鏃が出土した。南の土器枕は東側に杯蓋、西側に杯身がほぼ接して並べられている。杯蓋は南側が墓壇底にめり込むようにやや傾いている。杯身の北側にはほぼ接して須恵器杯身・杯蓋が組み合わされた状態で出土した。杯身の底は墓壇底からわずかに離れており、元位置を保っていない可能性がある。杯内からの出土遺物はない。



第12図 6号墳埋葬施設実測図

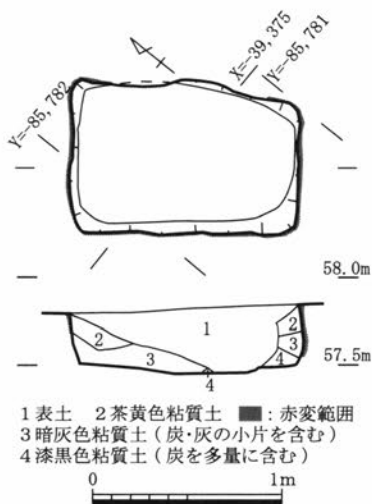


第13図 東尾根地区断面図

東尾根では4か所で調査を行った。層序はいずれも表土の下に茶黄色粘質土が堆積している。古墳が造られていた形跡はなく遺物も出土しなかったが、4区で長方形の土坑を検出した。壁の上部が赤く焼けており、底部付近には灰に混じって炭が出土した。出土遺物がなく時期は不明であるが、表土が深くまで入り込んでおり、近代以降の炭窯と考えられる。(森島康雄)

B. 出土遺物

(1) 5号墳出土遺物



第14図 炭窯実測図

a. 銅鏡(第15図) 出土鏡は、直径10.5cm、縁部の厚さ0.3cmを測る小振りな銅鏡である。鏡背には、外周に、外から内側に向かって傾斜する無文の斜縁が巡る。その内側には、鋸歯文帯、複線波文帯、さらに鋸歯文帯、櫛歯文帯が巡る。その内側には図像が表される文様帯が巡り、中心には、2条の圈線を巡らした鈕がある。

文様帯は、乳4個によって4区に区画される。鈕を挟んで対向する2つの区画には、神と侍者とみられる2体並列の図像が、それぞれ表されている。ほかの2区画には、龍と虎とみられる獣像が表される。このように2組の神像と2体の獣像が表出されており、「四神二獣鏡」とみられる。

この鏡では、文様帯の幅が狭く、図像が省略、デフォルメされて不明瞭になっている。したがって、この鏡は、中国鏡に倣って日本で作られた仿製鏡と考えられる。このような鏡は、古墳時代中期初頭から前葉頃に製作されたものと考えられている。

(引原茂治)

b. 玉類(第16図) 玉類には、勾玉4点、管玉44点、橐玉1点、ガラス小玉3点、白玉109点(内、破損品8点)がある。個々の法量・特徴は一覧表に示したとおりである。

勾玉は4点ある。材質は透明感のある翡翠製が2点、碧玉製が2点で、いずれも質・残存状況とも優良品である。穿孔方向は翡翠製の勾玉4のみ両側からで、残り3点は片側穿孔である。碧玉製の勾玉2は厚みをもち形も比較的精美に整ったもので、5世紀後半から6世紀代にはいってもみられるものであるが、翡翠製勾玉1・4は5世紀前半頃と考えられる。

管玉は、濃緑色で良質の碧玉を素材とするもの12点、淡緑色の緑色凝灰岩(グリーントフ)製とみられるもの29点、さらに黒色で蛇紋岩製とみられるもの3点がある。穿孔方向は8の片側穿孔

を除き、すべて両側穿孔である。

聚玉は1点ある。鉄分の付着が著しいが、碧玉製とみられる。

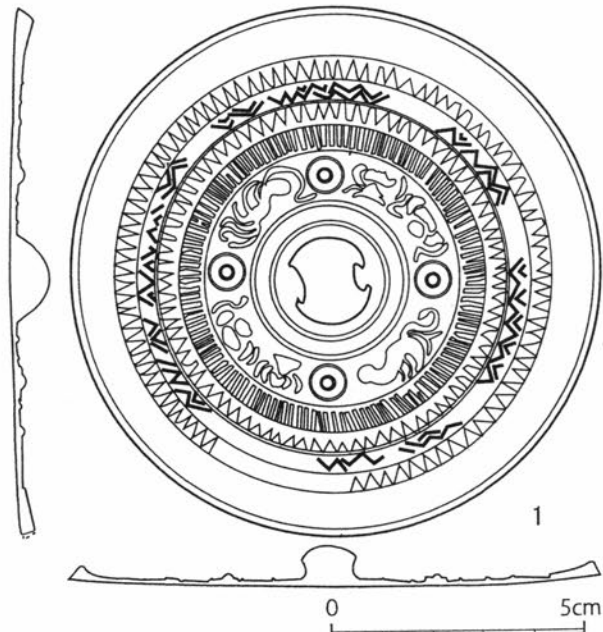
ガラス小玉3点のうち、15・16の2点は紺色のガラス製、17は青色のものである。17は扁平で形状は算盤玉に似る。

白玉はほとんどが滑石製であるが、蛇紋岩製とみられるものが6点ある。

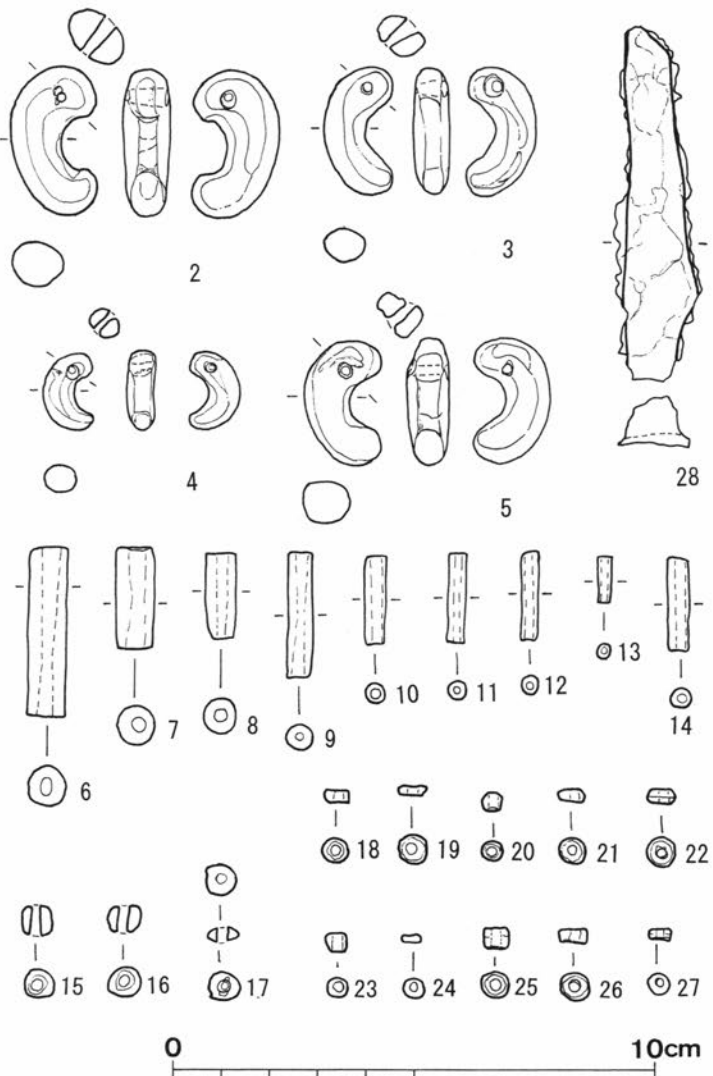
c. 鉄製品(第16図) 1点のみ出土した。銅鏡の上から出土したもので、残存状態が悪く、器種は特定できない。長さ7.4cm、最大幅1.8cm、最大厚さ0.15～0.25cmを測る。素材は薄く、縁辺が鋭利な点から、刀子または鎌形鉄製品と考えられる。(黒坪一樹)

(2) 6号墳出土遺物

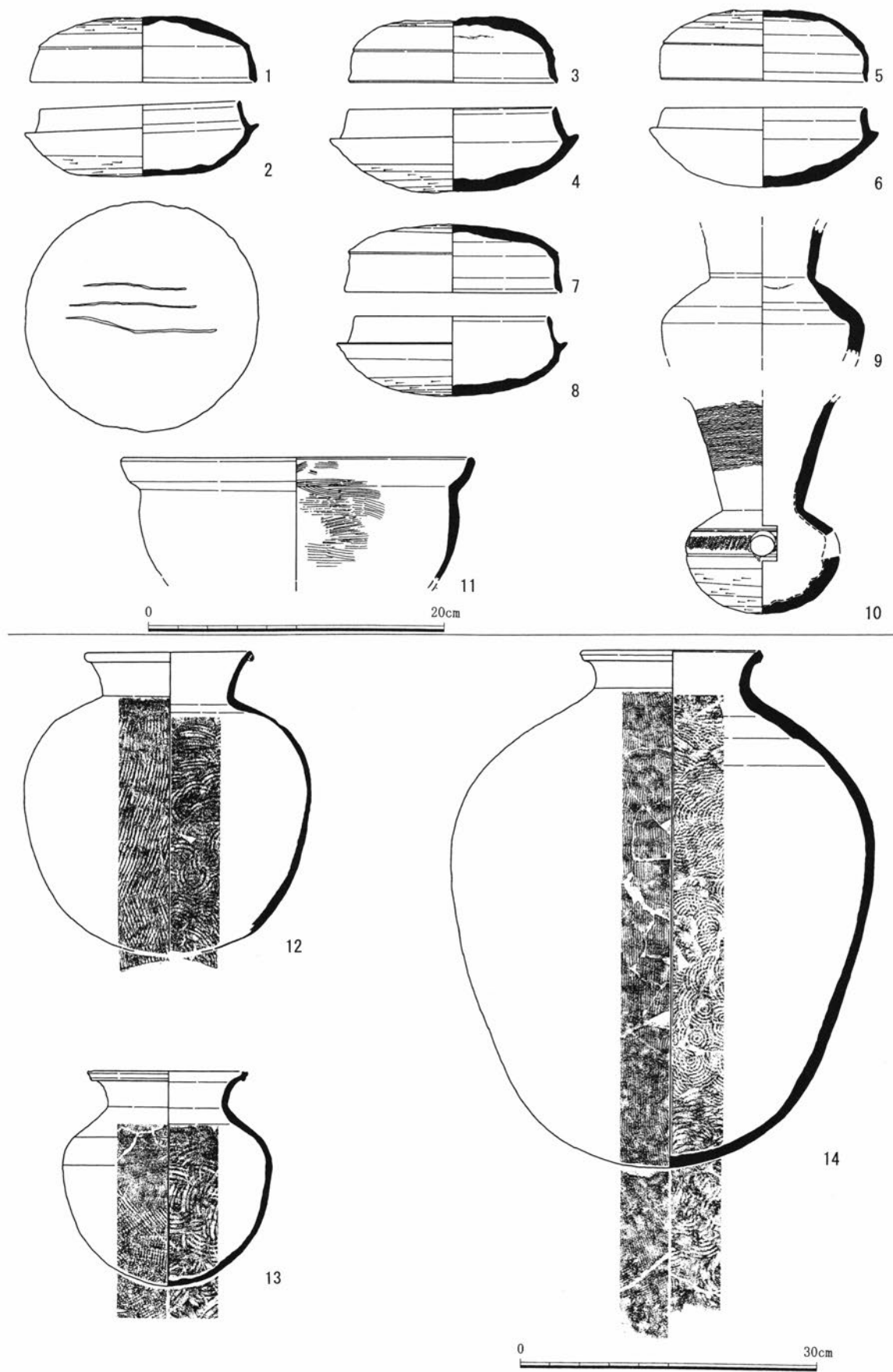
a. 土器(第17図) 1・2は北の土器枕に使われていた須恵器杯身・杯蓋である。杯身の底部外面に3条のヘラ記号が刻まれている。3・4は南の土器枕に使われていた須恵器杯身・杯蓋である。5・6は赤茶色粘質土から出土した須恵器杯身・杯蓋である。杯身は焼成が極めて甘く、灰黄色を呈し、器表面の磨滅が著しい。7・8は南の土器枕に近接して出土した須恵器杯身・杯蓋である。9～14は墳丘盛土上から出土した。9は短頸壺、10はハソウである。10の口縁部は一様に失われており、意図的に欠かれたものと思われる。11は土師器鍋である。口縁部は完存している。体部内面に粗い横方向のハケ調整を施し、受け口の口縁



第15図 5号墳出土遺物実測図(1) 銅鏡



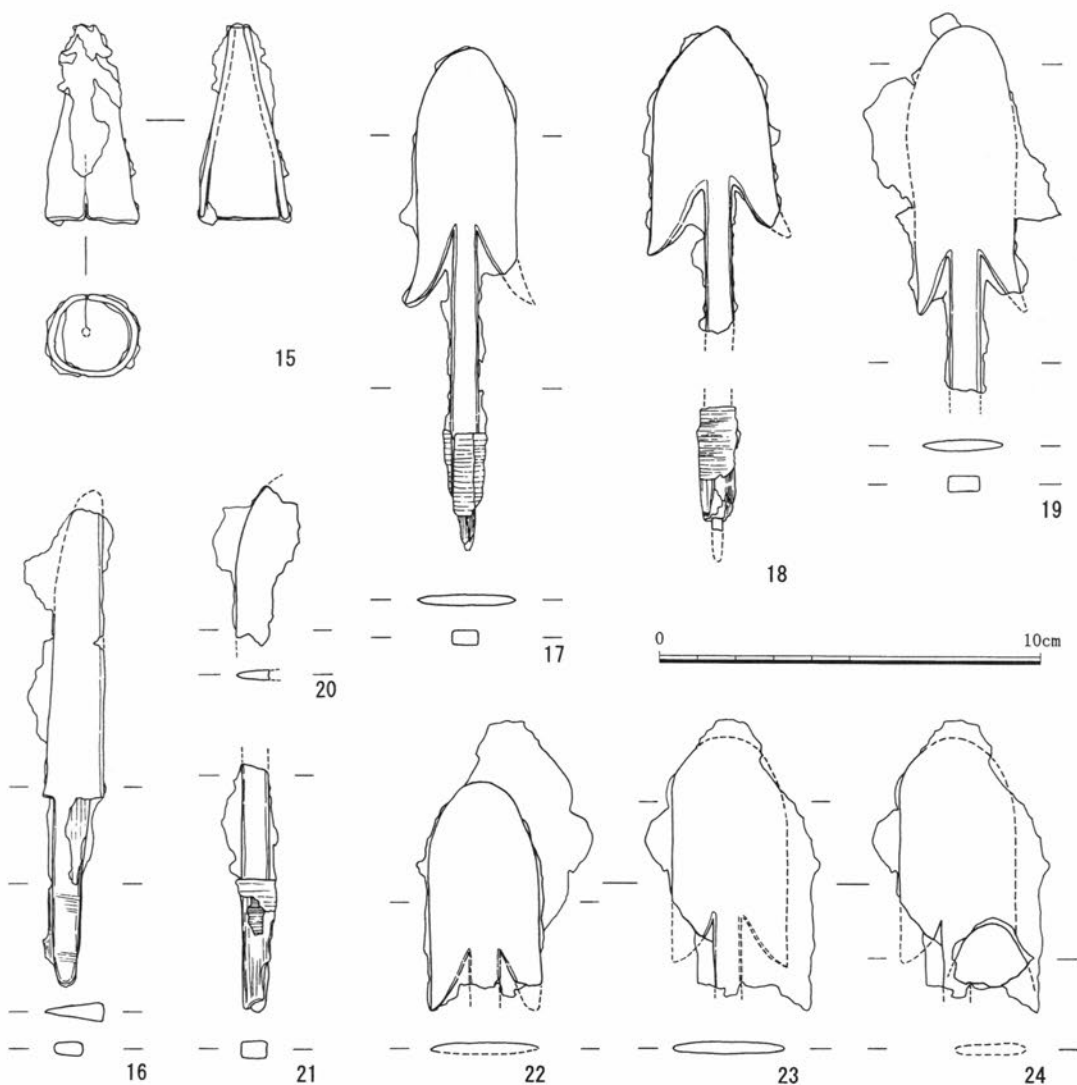
第16図 5号墳出土遺物実測図(2) 玉類・鉄製品



第17図 6号墳出土遺物実測図(1) 土器

部にはヨコナデを施す。体部外面は特に調整を施さない。12～14は須恵器甕である。12は球形の体部に短く外反する口縁部をもち、口縁端部は外側に折り返して玉縁状に丸く納める。タタキ成形で肩部付近はきわめて薄く仕上げられている。13は球形の体部に短く外反する口縁部をもち、口縁端部は上下に拡張して外傾する端面を形成する。12よりはやや肩の張る器形である。14は倒卵形の体部に短く外反する口縁部をもち、口縁端部はやや外側に肥厚する。焼成は甘い。

b. 金属器(第18図) 15は鉄鐸と思われる。北側土器枕の西側の鉄鏃の下から出土した。鉄板を円錐状に丸めており、先端は穴が開いている。上半部は革状のもので覆われ、内面には漆状の皮膜が付着している。舌は出土していない。16は刀子である。北側土器枕の西側に接して出土した。切先を欠くがほぼ完形である。茎部分に木質が遺存している。17～24は大形の腸袂柳葉形鉄鏃である。19は東側の杯蓋から南に10cm余りのところで出土し、他は北側土器枕の西側に接して出土した。17はほぼ完形である。全長13.2cm、刃部長6.7cmを測る。茎には木質が残存し、関部は観察できないが、X線写真によると台形関である。18は長さ6.0cmを測る非対称な刃部をもつ。頸部で折損している。同一個体と思われる茎部に木質が残存している。19は刃部長7.5cmを測る。



第18図 6号墳出土遺物実測図(2) 鉄製品

頸部で折損している。20・21は出土位置から同一個体の破片とみられるが接合しない。22～24はほぼ同形のものが3点銹着している。22の刃部長は6.2cmを測る。銅製品では銅釦が1点出土している。劣化が著しく実測図を提示することができないが、直径約2.4cmの半球形を呈する。

(森島康雄)

5. まとめ

今回は、海岸部と内陸部を結ぶ古代交通の要衝と考えられる谷部を見下ろす位置に築造されている2基の木棺直葬墳を確認した。以下、注目される事項を列記してまとめとしたい。

5号墳からは銅鏡が出土した。5号墳は規模も小さく簡素な古墳である。このような古墳に銅鏡が副葬されていることが注目される。古墳の規模や位置などから、被葬者は在地の有力者と考えられる。そのような被葬者にも銅鏡や豊富な玉類が副葬されるというのは、当時の丹後の豊かさの一端を表出しているものとも考えられよう。

出土した銅鏡は、上記の特徴から、仿製斜縁四神二獣鏡と考えられる。類例としては、岐阜県岩野田2号墳出土鏡や伝鳥取県西伯郡淀江町出土鏡などで、山陰地方からの出土がやや目立つということである。千束古墳群も日本海側の山陰地方に近い地域に位置しており、興味深い。なお、この銅鏡の鏡式、類例、製作年代等については、京都大学名誉教授樋口隆康氏、京都大学人文科学研究所研究員下垣仁志氏からご教示いただいた。記して感謝したい。6号墳は5号墳の直下に築かれているが、築造時期は1世紀余り隔たっている。6号墳の調査では、墳丘の造成に5号墳の裾の一部を直線的に削平して東側の墳丘盛土に用いていることや、墳丘盛土上部に須恵器甕などが置かれていたこと、「H」形の平面形をもつ組合せ式木棺に2遺体が埋葬されていたことなどが判明した。2遺体のうち、北枕の被葬者が鉄鏃や銅釦などの副葬品もっていることや棺底の傾きが南下りであることなどからこの古墳の主たる被葬者であろう。銅釦は、市内弥栄町溝谷の奈具岡北1号墳で2点出土しているほか、府内では京田辺市田辺天神山遺跡に弥生時代後期の例があるのみで、全国的にみても稀少な遺物である。また、鉄鐸は南丹市園部町町田東古墳、南丹市八木町城谷口2号墳について府内で3例目となる。小規模な古墳ながら稀少な遺物を副葬している点で注目される。

(引原茂治・森島康雄)

付表 5号墳出土玉類計測表

通番	種類	法量 (cm・g)				色調	素材・石材	挿図番号	取上番号	備考
		長さ	幅(径)	上・下孔径	重量					
1	勾玉	1.65	0.65	0・16・0.21	1.80	乳黄～明緑色	翡翠	4	T1	頭部厚さ0.58cm
2	勾玉	3.10	1.05	0.15・0.32	6.51	深緑～黒緑色	碧玉	2	T2	頭部厚さ0.95cm
3	勾玉	2.65	0.85	0.18・0.32	3.87	深緑色	碧玉	3	T3	頭部厚さ0.70cm
4	勾玉	2.65	0.95	0.25・0.27	4.19	乳灰～薄緑灰色	翡翠	5	T77	頭部厚さ0.90cm
5	管玉	0.95	0.35	0.15・0.10	0.12	淡緑色	グリーンタフ	13	T4	孔は楕円形
6	管玉	2.40	0.53	0.15・0.20	1.02	淡緑色	グリーンタフ		T5	孔口部一部破損
7	管玉	2.30	0.61	0.20・0.25	1.42	淡緑灰色	グリーンタフ	11	T6	
8	管玉	1.85	0.42	0.15・0.20	0.47	淡緑色	グリーンタフ		T7	孔部楕円形
9	管玉	1.80	0.40	0.20・0.25	0.41	淡緑色	グリーンタフ		T8	
10	管玉	2.35	0.41	0.20・0.25	0.55	淡緑色	グリーンタフ	12	T9	

11	管玉	2.20	0.61	0.21・0.25	1.31	淡緑色	グリーンタフ		T10	
12	管玉	1.45	0.43	0.17・0.21	0.44	緑色	グリーンタフ		T11	
13	管玉	2.70	0.58	0.30・0.32	1.31	濃緑色	碧玉か		T12	
14	管玉	2.65	0.54	0.23・0.26	1.26	淡緑色	グリーンタフ		T13	
15	管玉	1.65	0.42	0.15・0.18	0.31	淡緑色	グリーンタフ		T14	
16	管玉	1.45	0.50	0.20・0.23	0.65	濃緑色	碧玉か		T15	
17	管玉	1.10	0.34	0.12・0.14	0.20	淡緑色	グリーンタフ		T16	
18	管玉	3.55	0.61	0.34・0.38	1.97	濃緑色	碧玉か		T17	
19	管玉	2.40	0.51	0.17・0.18	1.13	淡緑灰～濃緑色	グリーンタフ		T18	
20	管玉	1.00	0.43-0.46	0.16・0.16	0.33	淡緑灰～濃緑色	グリーンタフか		T19	
21	管玉	0.95	4.70-5.30	0.25・0.26	0.61	淡緑～濃緑色	グリーンタフ		T20	石材層状 断面楕円形
22	管玉	1.90	0.45	0.22・0.23	0.32	淡緑色	グリーンタフ		T21	
23	管玉	2.50	0.45	0.24・0.24	0.70	濃緑灰	蛇紋岩か		T22	石材層状、一部破損
24	管玉	2.10	0.79	0.34・0.38	2.24	濃緑色	碧玉か	7	T23	
25	管玉	1.10	0.61	0.28・0.32	0.88	濃緑色	碧玉か		T24	
26	管玉	1.00	0.50	0.18・0.21	0.64	淡緑灰～濃緑色	グリーンタフか		T25	
27	管玉	2.50	0.55	0.28・0.30	1.30	濃緑色	碧玉か	9	T73	
28	管玉	1.80	0.42	0.16・0.17	0.23	淡緑色	グリータフ		T74	
29	管玉	2.25	0.41	0.16・0.17	0.47	淡緑灰色	グリーンタフ		T75	
30	管玉	3.45	0.89	0.34・0.36	4.81	濃緑色	碧玉か	6	T76	孔部楕円形
31	管玉	1.75	0.43	0.21・0.25	0.51	濃緑色	碧玉か	10	T86	
32	管玉	2.45	0.69	0.32・0.34	2.00	濃緑色	碧玉か		T87	
33	管玉	2.45	0.41	0.16・0.18	0.51	淡緑色	グリーンタフ		T88	
34	管玉	2.15	0.46	0.20・0.23	0.69	淡緑灰～濃緑色	グリーンタフか		T111	
35	管玉	0.83	0.43	0.13・0.14	0.17	淡緑色	グリーンタフ		T112	
36	管玉	2.25	0.39	0.11・0.12	0.34	淡緑色	グリーンタフ		T113	接合
37	管玉	1.75	0.67	0.13・0.29	1.43	濃緑色	碧玉か	8	T114	
38	管玉	1.40	0.43	0.18・0.19	0.41	濃緑灰色	蛇紋岩か		T115	石材層状・孔部破損
39	管玉	1.65	0.39	0.19・0.19	0.27	淡緑色	グリーンタフ		T116	
40	管玉	2.10	0.49	0.15・0.17	0.57	淡緑色	グリーンタフ		T117	接合
41	管玉	1.60	0.39	0.16・0.17	0.26	淡緑色	グリーンタフ		T118	
42	管玉	2.55	0.42	0.22・0.22	0.53	淡緑色	グリーンタフ		T119	孔部一部破損
43	管玉	1.85	0.46	0.19・0.21	0.66	濃緑灰	蛇紋岩か	14	T120	石材層状
44	管玉	1.15	0.60	0.28・0.36	0.63	淡緑色	グリーンタフ		T121	孔部楕円形
45	管玉	0.60	0.35	0.17・0.20	0.10	濃青緑	碧玉か		T139	
46	管玉	1.10	0.44	0.23・0.24	0.25	淡緑色	グリーンタフ		T147	孔部一部破損
47	管玉	2.00	0.38	0.12・0.15	0.35	淡緑色	グリーンタフ		T148	錆付着
48	管玉	0.90	0.54-0.59	0.12・0.18	0.79	濃緑色	碧玉か		T158	錆付着
49	霽玉	1.25	0.45-0.58	0.18・0.20	0.51	濃緑色	碧玉か		T159	なつめ玉、錆付着
50	白玉	0.17	0.46	0.16	0.06	灰色	滑石		T26	
51	白玉	0.23	0.47	0.15	0.08	灰色	滑石		T27	
52	白玉	0.22	0.44	0.13	0.06	灰色	滑石		T28	
53	白玉	0.25	0.47-0.51	0.17	0.10	灰色	滑石	18	T29	
54	白玉	0.34	0.33-0.42	0.14	0.09	灰色	滑石		T30	稜明瞭
55	白玉	-	-	-	0.03	薄灰色	滑石		T31	破損(6ヶ)
56	白玉	0.30	0.47	0.14・0.15	0.12	濃緑灰色	蛇紋岩か		T32	
57	白玉	0.24-0.29	0.47-0.51	0.13・0.15	0.11	灰色	滑石		T33	歪
58	白玉	0.26	0.51	0.17	0.11	灰色	滑石		T34	
59	白玉	0.16-0.22	0.57	0.16	0.10	灰色	滑石	19	T35	歪
60	白玉	0.24	0.42	0.17・0.18	0.06	灰色	滑石		T36	
61	白玉	0.28	0.43	0.2	0.07	灰色	滑石		T37	
62	白玉	0.40	0.37-0.43	0.17・0.19	0.10	灰色	滑石	20	T38	稜明瞭
63	白玉	0.17	0.53	0.19	0.09	濃灰色	滑石		T39	
64	白玉	0.31	0.44-0.48	0.13・0.15	0.10	薄灰色	滑石		T40	稜明瞭
65	白玉	0.16	0.53	0.19	0.07	薄灰色	滑石		T41	
66	白玉	0.26	0.53	0.16	0.12	濃緑灰色	滑石		T42	
67	白玉	0.27	0.47	0.14	0.10	灰色	滑石		T43	
68	白玉	0.30	0.56	0.13	0.15	灰色	滑石	21	T44	
69	白玉	0.26	0.50	0.13	0.11	濃灰色	蛇紋岩か		T45	
70	白玉	0.20	0.54	0.16	0.10	濃灰色	滑石		T46	
71	白玉	0.31	0.48	0.17	0.12	濃灰色	滑石		T47	やや稜あり
72	白玉	0.24	0.48	0.12	0.09	灰色	滑石		T48	
73	白玉	0.27	0.54	0.16	0.12	灰色	蛇紋岩か		T49	
74	白玉	0.14-0.19	0.15	0.11	0.09	緑灰色	滑石		T50	
75	白玉	0.27	0.52	0.11	0.13	濃灰色	滑石		T51	
76	白玉	0.30	0.55-0.60	0.18	0.17	緑灰色	滑石	22	T52	稜明瞭
77	白玉	0.32	0.44-0.52	0.17	0.14	灰色	滑石		T53	稜明瞭
78	白玉	0.31	0.40-0.44	0.15	0.08	淡緑灰色	滑石		T54	やや稜あり
79	白玉	0.34	0.40-0.45	0.16	0.09	緑灰色	滑石		T55	やや稜あり
80	白玉	0.40	0.44	0.15・0.18	0.11	灰色	滑石	23	T56	稜明瞭
81	白玉	0.28	0.50	0.12・0.14	0.11	灰色	滑石		T57	
82	白玉	0.23	0.46	0.13	0.06	緑灰色	滑石		T58	
83	白玉	0.23	0.43	0.15	0.06	緑灰色	滑石		T59	
84	白玉	0.25	0.54	0.14	0.12	灰色	滑石		T60	
85	白玉	0.27	0.52	0.14	0.12	灰色	滑石		T61	
86	ガラス小玉	0.32	0.62	0.15・0.17	0.13	紺色	ガラス	17	T62	算盤玉形
87	白玉	0.29	0.49	0.13	0.11	濃灰色	滑石		T63	

88	白玉	0.10 - 0.17	0.52	0.17	0.07	濃灰色	滑石		T64	歪
89	白玉	0.31-0.35	0.60	0.15・0.17	0.21	黒色	滑石	26	T65	
90	白玉	0.15	0.47	0.1	0.06	灰色	滑石		T66	
91	白玉	0.26	0.52	0.15	0.12	灰色	滑石		T67	やや稜あり
92	白玉	0.31	0.44	0.13	0.09	濃灰色	滑石		T68	
93	白玉	0.28	0.49	0.16	0.10	黒色	蛇紋岩か		T69	
94	白玉	0.31	0.41	0.15・0.16	0.07	黒色	滑石		T70	
95	白玉	0.31	0.42	0.16・0.21	0.07	黒色	滑石か		T71	
96	白玉	0.27	0.42	0.13・0.17	0.07	灰色	滑石		T72	
97	白玉	0.03-0.12	0.36	0.18	0.01	淡灰色	滑石		T75	計測後破損(3ヶ)
98	白玉	0.19	0.51	0.12・0.14	0.08	緑灰色	滑石		T78	
99	白玉	0.19	0.57	0.15・0.17	0.10	淡緑灰色	滑石		T79	
100	白玉	0.22-0.26	0.49	0.14・0.18	0.09	灰色	滑石		T80	
101	白玉	0.32	0.40-0.44	0.17・0.19	0.08	淡灰色	滑石		T81	稜明瞭
102	白玉	0.32	0.53	0.17	0.13	濃灰色	滑石		T82	
103	白玉	0.17	0.51	0.17	0.07	灰色	滑石		T83	
104	白玉	0.42	0.44	0.16・0.19	0.12	淡灰色	滑石		T84	
105	白玉	0.22	0.48	0.13・0.16	0.08	灰色	滑石	27	T85	
106	白玉	0.13	0.46	0.11・0.14	0.05	濃灰色	滑石		T89	
107	白玉	-	-	-	0.05	淡緑色	滑石		T90	破損(2ヶ)
108	白玉	0.14-0.21	0.44	0.14	0.05	淡灰色	滑石		T91	
109	白玉	-	-	-	0.02	濃緑灰色	滑石		T92	破損
110	白玉	0.42	0.41-0.44	0.17・0.21	0.12	灰色	滑石		T93	
111	白玉	0.36	0.56	0.18・0.21	0.17	淡緑灰色	滑石		T94	
112	白玉	0.39	0.40	0.16	0.06	淡灰色	滑石		T95	破損(2ヶ)
113	白玉	0.31-0.36	0.44	0.20	0.09	淡緑灰色	滑石		T96	
114	白玉	0.29	0.44	0.15・0.17	0.08	淡灰色	滑石		T97	
115	白玉	0.43	0.53	0.15・0.16	0.19	淡灰色	滑石		T98	
116	白玉	0.28	0.50	0.19・0.22	0.10	灰色	滑石		T99	
117	ガラス小玉	0.53-0.62	0.65	0.17・0.19	0.32	青色	ガラス	15	T100	
118	ガラス小玉	0.55	0.61-0.68	0.18・0.20	0.31	青色	ガラス	16	T101	
119	白玉	-	-	-	0.10	灰色	滑石		T102	破損
120	白玉	0.28	0.50	0.18・0.20	0.10	淡灰色	滑石		T103	
121	白玉	0.28-0.32	0.53	0.15・0.17	0.15	灰色	滑石		T104	
122	白玉	0.22	0.44	0.16・0.18	0.07	淡緑灰色	滑石		T105	
123	白玉	0.28	0.54	0.13・0.15	0.14	灰色	滑石		T106	
124	白玉	0.32	0.43	0.18	0.08	淡灰色	滑石		T107	
125	白玉	0.28	0.49	0.12	0.11	灰色	滑石		T108	
126	白玉	0.24	0.51	0.17	0.10	灰色	滑石		T109	
127	白玉	0.18	0.41	0.15・0.16	0.04	暗灰色	滑石	24	T110	
128	白玉	0.37	0.42	0.20	0.07	灰色	滑石		T122	
129	白玉	-	-	-	0.02	淡灰色	滑石		T123	破損
130	白玉	0.22-0.27	0.42	0.15・0.16	0.07	灰色	滑石		T124	
131	白玉	0.26-0.3	0.59	0.16・0.18	0.11	灰色	滑石		T125	
132	白玉	0.31-0.4	0.60	0.12・0.18	0.22	淡灰色	滑石		T126	
133	白玉	0.37	0.42	0.18	0.08	淡灰色	滑石		T127	
134	白玉	0.50	0.42	0.20	0.11	淡灰色	滑石		T128	
135	白玉	0.37-0.41	0.44	0.18・0.19	0.11	淡灰色	滑石		T129	やや稜あり
136	白玉	0.49	0.50-0.55	0.21	0.22	淡灰色	滑石	25	T130	
137	白玉	-	-	-	0.09	淡灰色	滑石		T131	破損(3ヶ)
138	白玉	0.37	0.40-0.44	0.16・0.20	0.10	淡灰色	滑石		T132	やや稜あり
139	白玉	0.16-0.23	0.54	0.16・0.21	0.10	淡灰色	滑石		T133	歪
140	白玉	0.26	0.48	0.14・0.15	0.08	灰色	滑石か		T134	
141	白玉	0.27	0.53	0.15	0.12	灰色	滑石		T135	
142	白玉	0.31-0.36	0.42-0.52	0.15・0.16	0.15	灰色	滑石		T136	稜明瞭
143	白玉	0.25-0.31	0.53	0.16・0.17	0.14	淡灰色	滑石		T137	歪
144	白玉	0.30	0.53	0.16	0.13	灰色	滑石		T138	
145	白玉	0.30	0.51	0.13・0.17	0.12	濃灰色	滑石		T140	
146	白玉	0.15	0.42	0.18	0.04	灰色	滑石		T141	
147	白玉	0.33	0.50-0.54	0.15・0.18	0.14	淡灰色	滑石		T142	
148	白玉	0.30	0.53	0.15	0.13	濃灰色	滑石		T143	
149	白玉	0.41	0.43	0.2・0.21	0.09	灰色	滑石		T144	
150	白玉	0.23	0.51	0.16・0.18	0.10	濃灰色	滑石		T145	
151	白玉	0.28-0.35	0.39-0.45	0.16	0.08	灰色	滑石		T146	楕円形
152	白玉	0.23	0.44	0.15・0.17	0.06	黒色	蛇紋岩か		T149	
153	白玉	0.26	0.48	0.17・0.19	0.09	淡灰色	滑石		T150	
154	白玉	0.21	0.48	0.14・0.15	0.08	濃灰色	蛇紋岩か		T151	
155	白玉	0.29	0.50	0.16・0.17	0.12	緑灰色	滑石		T152	
156	白玉	-	-	-	0.04	淡灰色	滑石		T153	破損
157	白玉	0.36	0.42	0.19・0.20	0.08	淡灰色	滑石		T154	
158	白玉	0.33-0.38	0.39-0.44	0.18・0.19	0.09	淡灰色	滑石		T155	歪
159	白玉	0.41	0.43	0.18	0.11	淡灰色	滑石		T156	
160	白玉	0.33	0.42	0.16・0.18	0.09	淡灰色	滑石		T157	孔部片側破損
161	白玉	0.25	-	-	0.03	淡灰色	滑石		T158	

石材については、肉眼観察によるもので分析したものではない。

長さ及び幅については、肉眼で見て明らかに歪なもののみ、範囲で示した。

3. 河守北遺跡第5次発掘調査報告

1. はじめに

この調査は、国道175号線の改修工事に伴い、京都府中丹西土木事務所の依頼を受けて実施した河守北遺跡の調査である。

調査地は福知山市大江町河守ほかに含まれる国道175号線の北側に接した現在の集落域で、由良川左岸の平野部および台地上に営まれた河守北遺跡の範囲に含まれている。河守北遺跡ではこれまでの4次にわたる調査で、弥生時代から平安時代に至る各時代の集落関係の遺構・遺物が検出されている。また、布目瓦片が数多く出土しており、古代の寺院跡または官衙跡が近くに存在するものと推定されている遺跡である(第1・2図)。

調査は、当調査研究センター調査第2課第2係長森 正、同主任調査員戸原和人、専門調査員黒坪一樹が担当した。現地の調査では、地区内を水路や道路が通じているため、4地区に分け南西側から第1トレンチ420㎡、第2トレンチ530㎡、第3トレンチ530㎡、第4トレンチ100㎡の合計1,580㎡となり、平成18年7月24日から同年12月23日の現地調査期間を要した。また、12月23日には現地説明会を実施した。

本報告は戸原、黒坪が執筆し、縄文土器については、同志社大学文学部大本朋弥が執筆した。

調査にあたっては、京都府教育委員会、福知山市教育委員会、同大江支所、地元自治会、近隣住民の方々の御協力、御指導を得た。

2. 調査の概要

道路新設予定地内に上記の通り4か所のトレンチを設定し面的調査を実施した。

第1トレンチ(第3図)

重機で近現代の盛り土と水田耕作土を取り去り、その下の遺物包含層(暗褐色粘質土)を掘り進めた。包含層の中からは、弥生時代、古墳時代、飛鳥時代、奈良・平安時代、鎌倉時代の遺物が出土した。遺物には、弥生土器(高杯・甕)や石器(削器)、古墳時代～平安時代の土師器・須恵器(杯・甕・高杯・皿)、さらに格子目叩きをもつ布目瓦などがある。

包含層下は橙黄褐色粘質土の地山面となり、この面で柱穴・土坑・溝等の遺構を検出し、掘立柱建物跡・竪穴式住居跡の存在が明らかとなった。

竪穴式住居跡S H03(第5図)

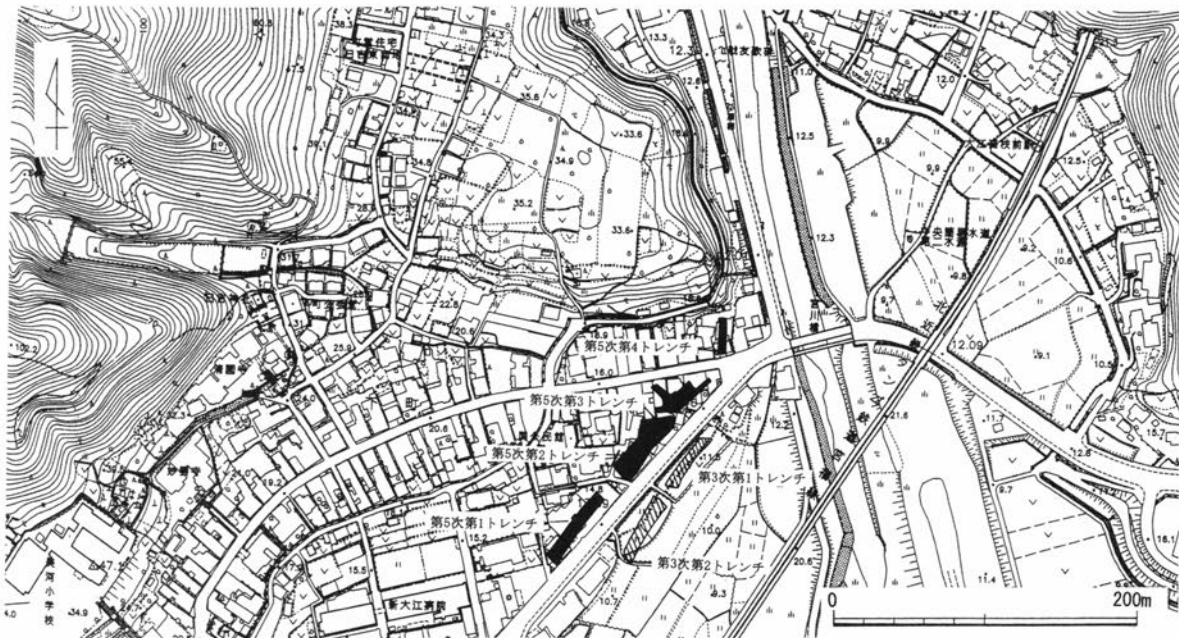
調査地の西端で検出した。平面はほぼ長方形(5×3.5m)で、残存する深さは20cmを測る。住居跡の床面では、屋根材などを支えていた柱穴や焼土坑を検出した。出土遺物には弥生時代後期の甕・台付壺・高杯および石器(敲き石)がある。

掘立柱建物跡S B01(第7図)

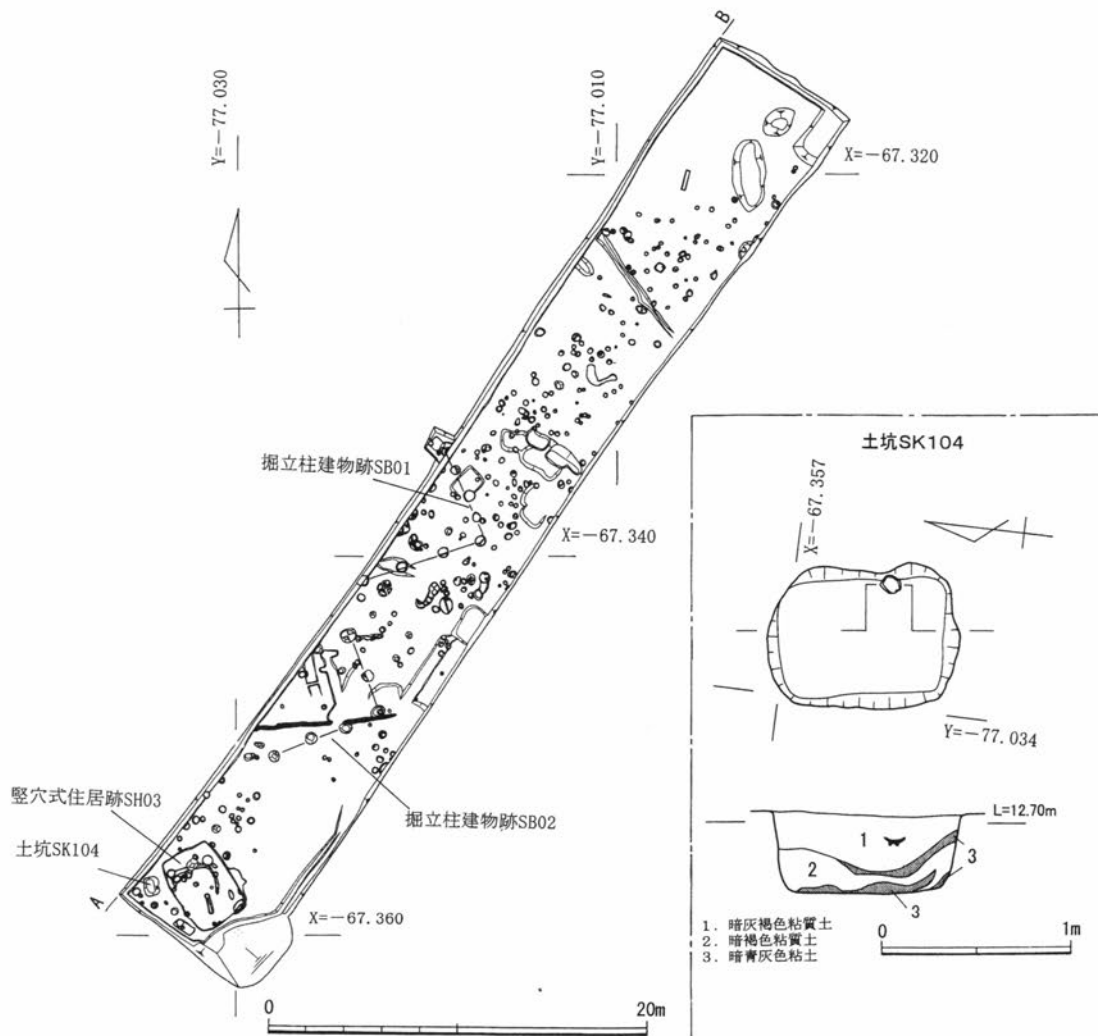


第1図 調査地位置図 (『京都府遺跡地図』第3版第1分冊より)

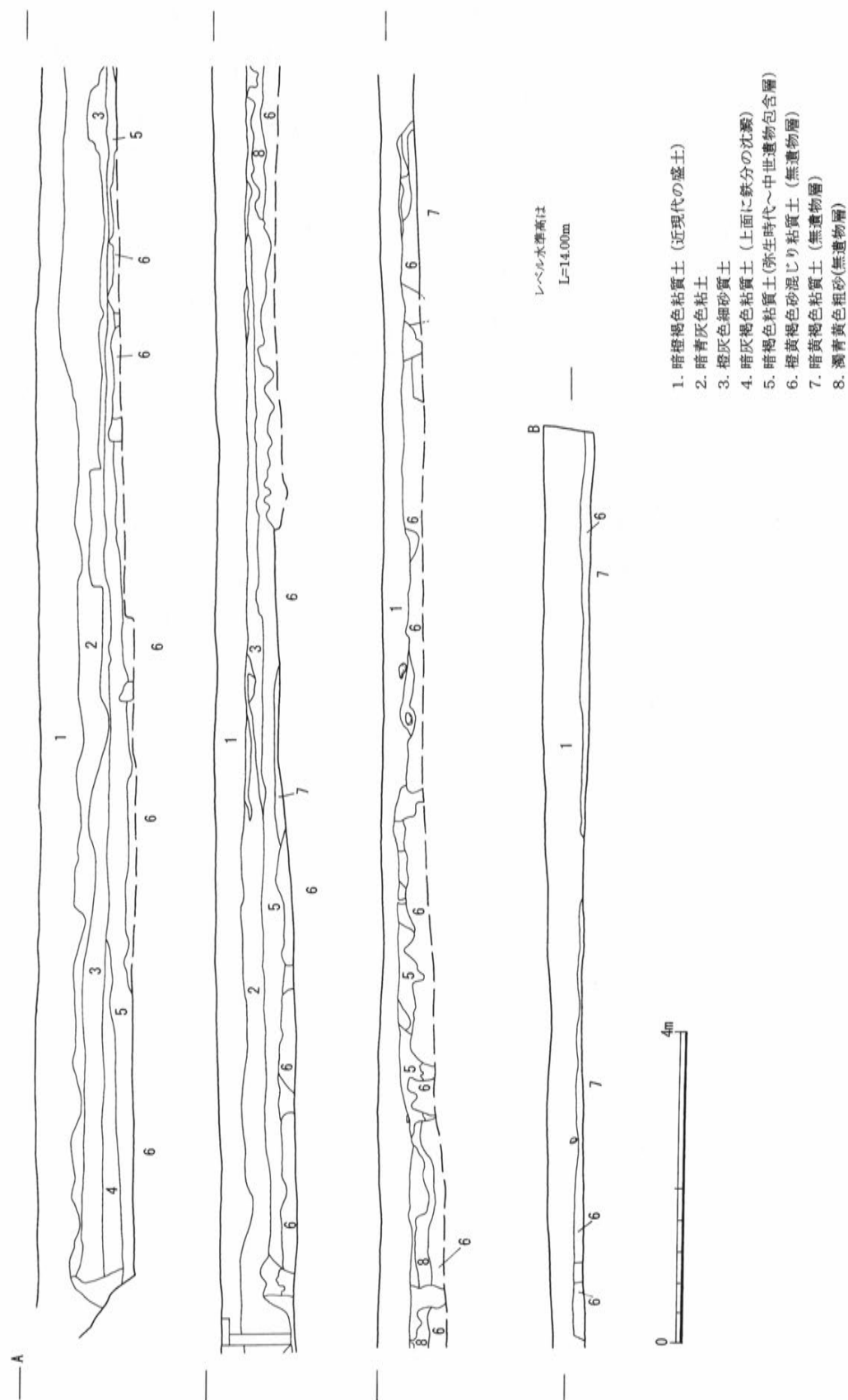
- 6.河田谷遺跡 7.深田遺跡 12.天田内遺跡 14.段遺跡 16.河守城跡 17.新治城跡
 19.河守北遺跡 20.河守遺跡 22.蓼原遺跡 23.蓼原城跡 25.金屋城跡 27.柏谷古墳群
 29.金屋波美遺跡 36.平遺跡 38.上野古墳 39.阿良須城跡 42.阿良須遺跡 55.高川原遺跡
 71.千原城跡 74.大石北遺跡 75.大石遺跡 78.常津城跡



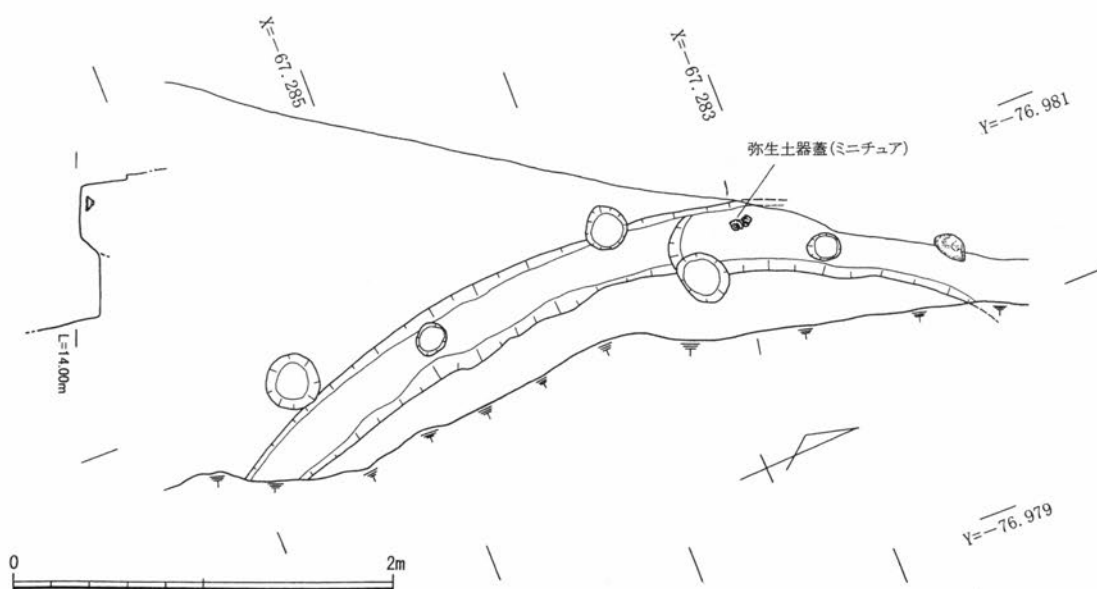
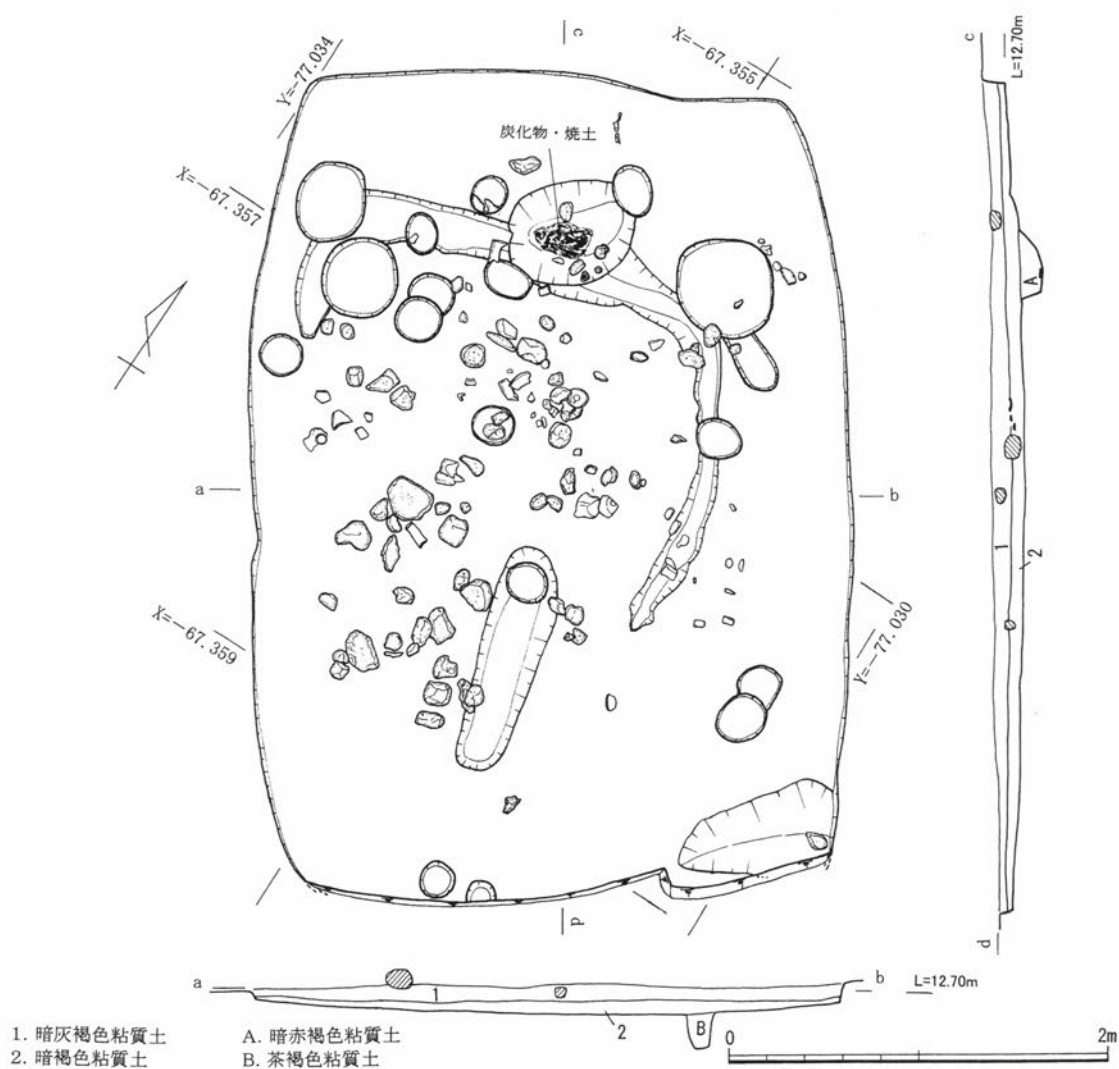
調査トレンチ配置図
第3次トレンチ(斜線部)は大江町教育委員会(当時)による



第2図 調査トレンチ配置図(上段)・第3図 第1トレンチ平面図(下段)



第4図 第1トレンチ断面図



第5図 竪穴式住居跡SH03実測図(上段)・第6図 竪穴式住居跡SH04実測図(下段)

南北2間分、東西4間分を検出した。柱列のラインは真北軸より約18°西に振れている。柱穴(径45~70cm)の間隔は、東西2.1~2.3m、南北2.3mを測る。柱堀形内からは平安時代の土師器・須恵器の破片が出土した。

掘立柱建物跡 S B02(第7図)

南北2間分、東西3間分を検出した。柱列ラインは真北軸から約22°西に振れている。柱穴(径50cm)の間隔は、東西2.1m(一部2.3m)である。掘形内からは平安時代の土師器片が出土している。

第2トレンチ(第8図)

現在の地形は近現代の開発で削平を受け、宅地造成による顕著な段が生じている。上段面および、下段の国道寄りの部分から、削平による消滅を免れた柱穴や土坑を検出する事ができた。柱穴は平安時代から中世とみられ、直径20cmほどの小さなものが大部分である。

竪穴式住居跡 S H04(第6図)

調査地の上段部分で検出した。確認できたのは一部分であるが、円形竪穴式住居跡とみられる。弥生時代の後期の土器が僅かながら出土している。

土坑 S K201(第8図)

調査地の北東隅で検出した。約5×3mの大きさで、隅丸方形に掘り込まれている。残存している深さは20~25cmを測る。池などの壁面を塗ったように灰白色の石材がすじ状に検出された。人頭大の礫が多量に投棄されており、それらとともに布目瓦・須恵器杯・土師器皿や中世の陶器製鉢(越前焼)の破片などが出土した。

第3トレンチ

調査地の中に水路があるため二か所に分け調査を実施した。

第3-1トレンチ(第9図)

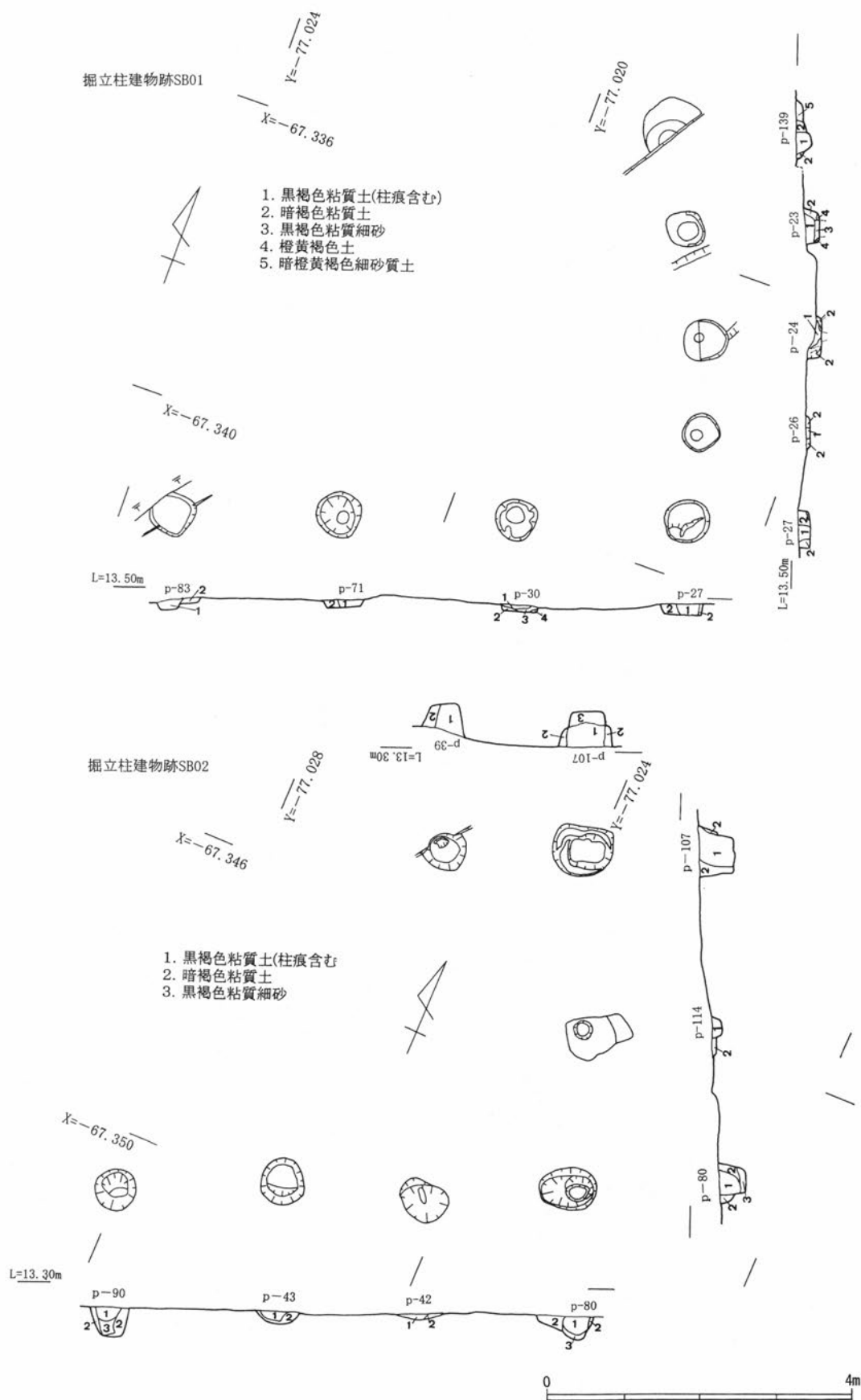
地形は西から東に下がっているが、西側は大きく削平されており、東側では数多くの柱穴とともに2条の柵列を検出した。

柵列 S A11 調査地の東よりで検出した。柱穴の直径は約30cmで、深さ約50cmを測り、北で約15°東に振れている。合計10基を検出した。この柱列は第2トレンチの整地による削平を受けており南の状況はわからない。柱間は約1.5mを測り、敷地境にあたる2間分が約3mを測る。

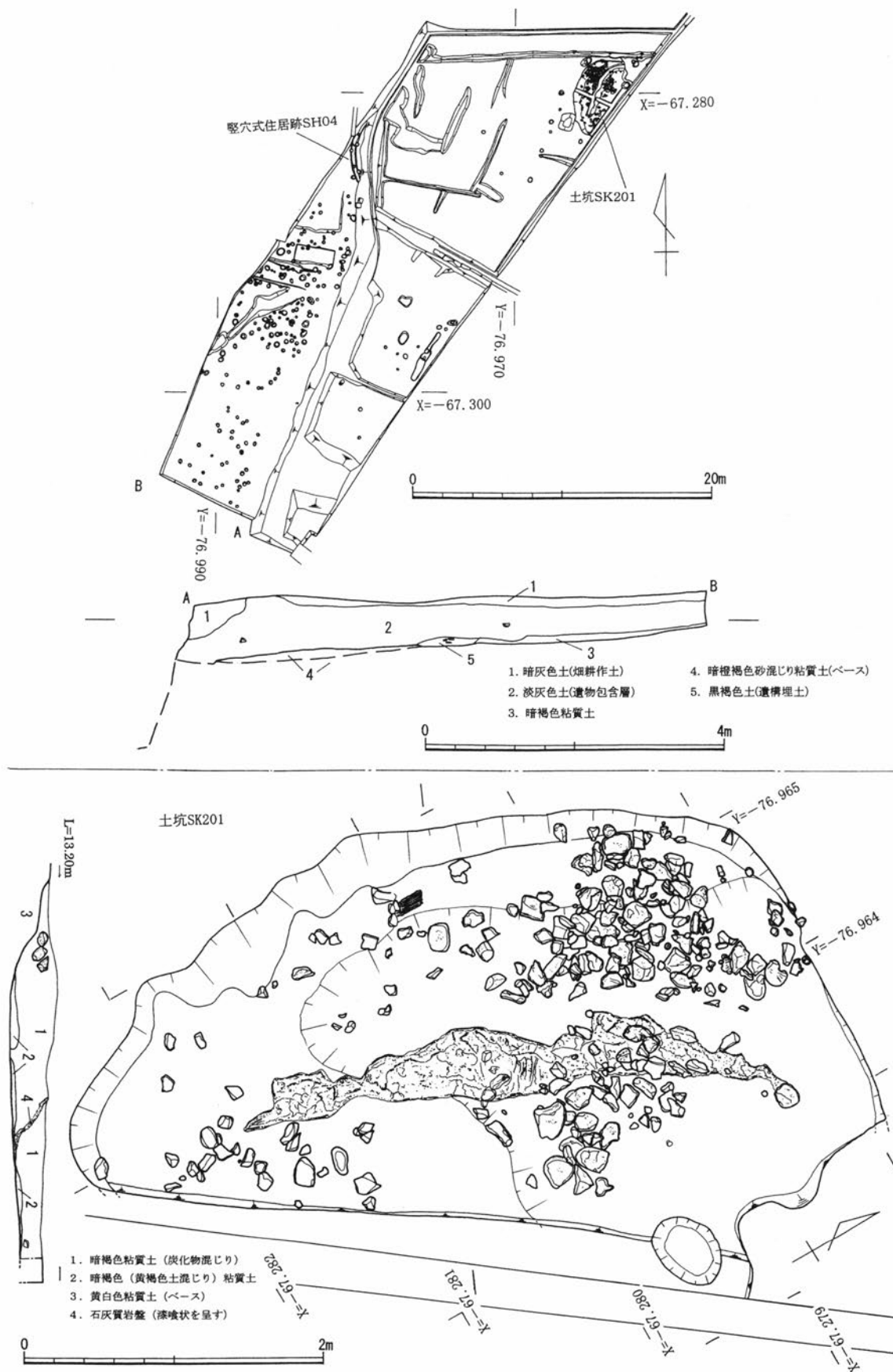
柵列 S A12 S A11の西で検出した。柱列は北で約20°東に振れている。この柱列は第2トレンチの土坑 S K201の西側まで延長しており、第3-1トレンチ内で5基、第2トレンチ内で5基の合計10基を検出した。柱間は北端と南端からそれぞれ3間までが約2m、敷地境にあたる2間分が約3mを測る。

第3-2トレンチ(第10図)

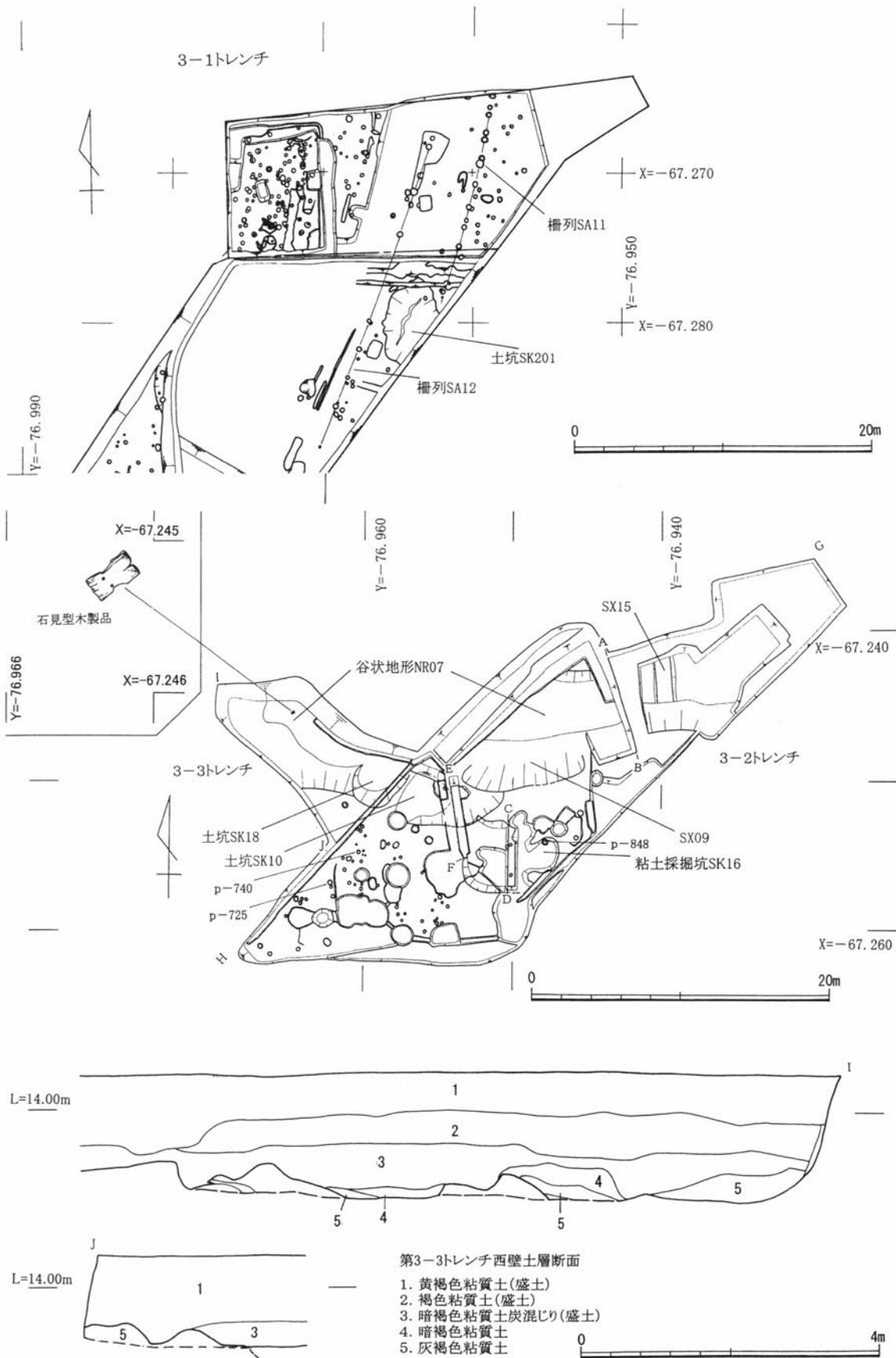
平安時代から中世の数多くの柱穴・土坑(粘土採掘土坑を含む)、弥生時代から古墳時代にかけて埋まった谷状地形(NR07)・谷底の堰状遺構(SX15)・谷の肩部で見つかった土器溜まり(SX09)・土坑(SK10)などを検出した。

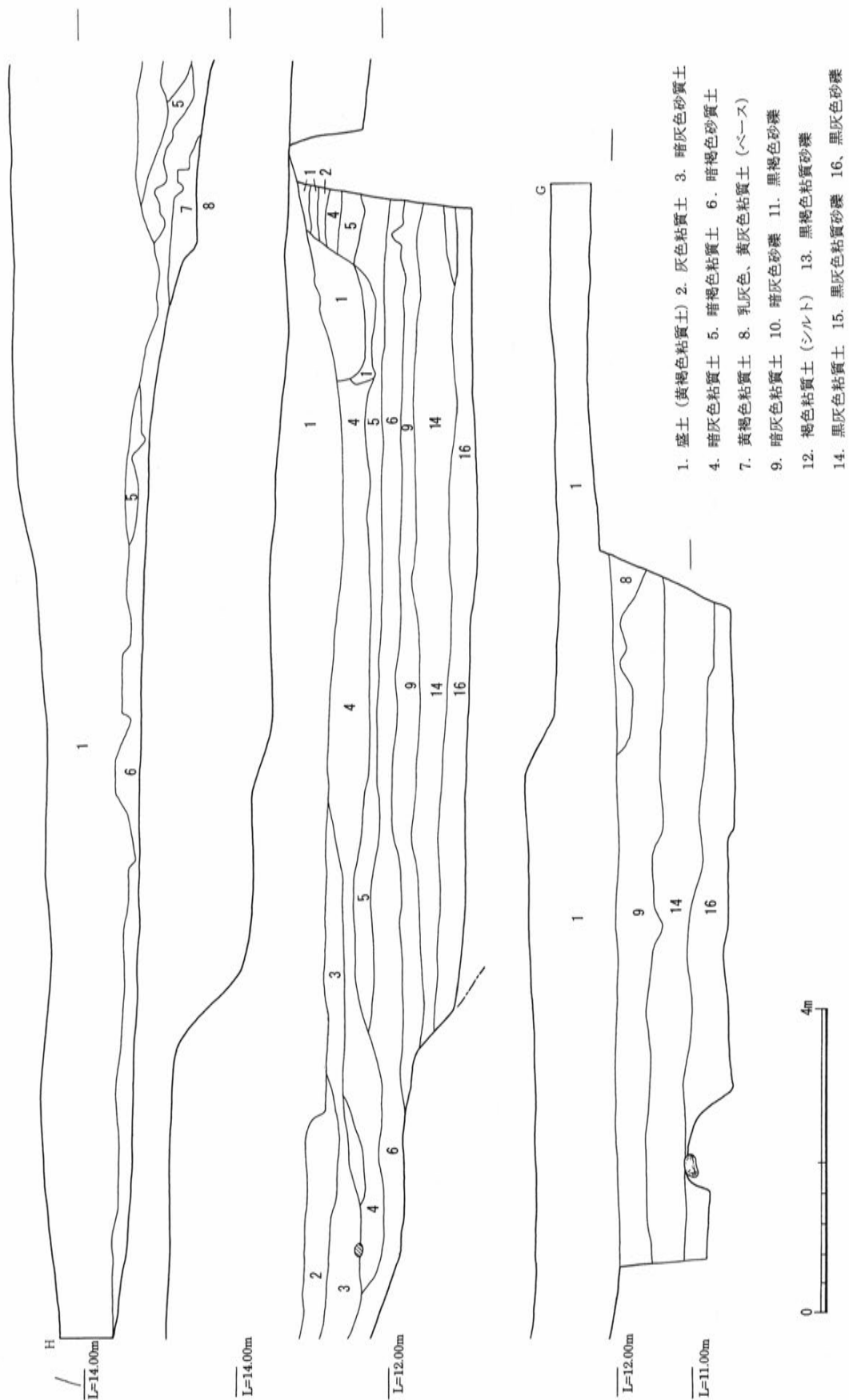


第7図 掘立柱建物跡S B01・02実測図



第8図 第2トレンチ実測図



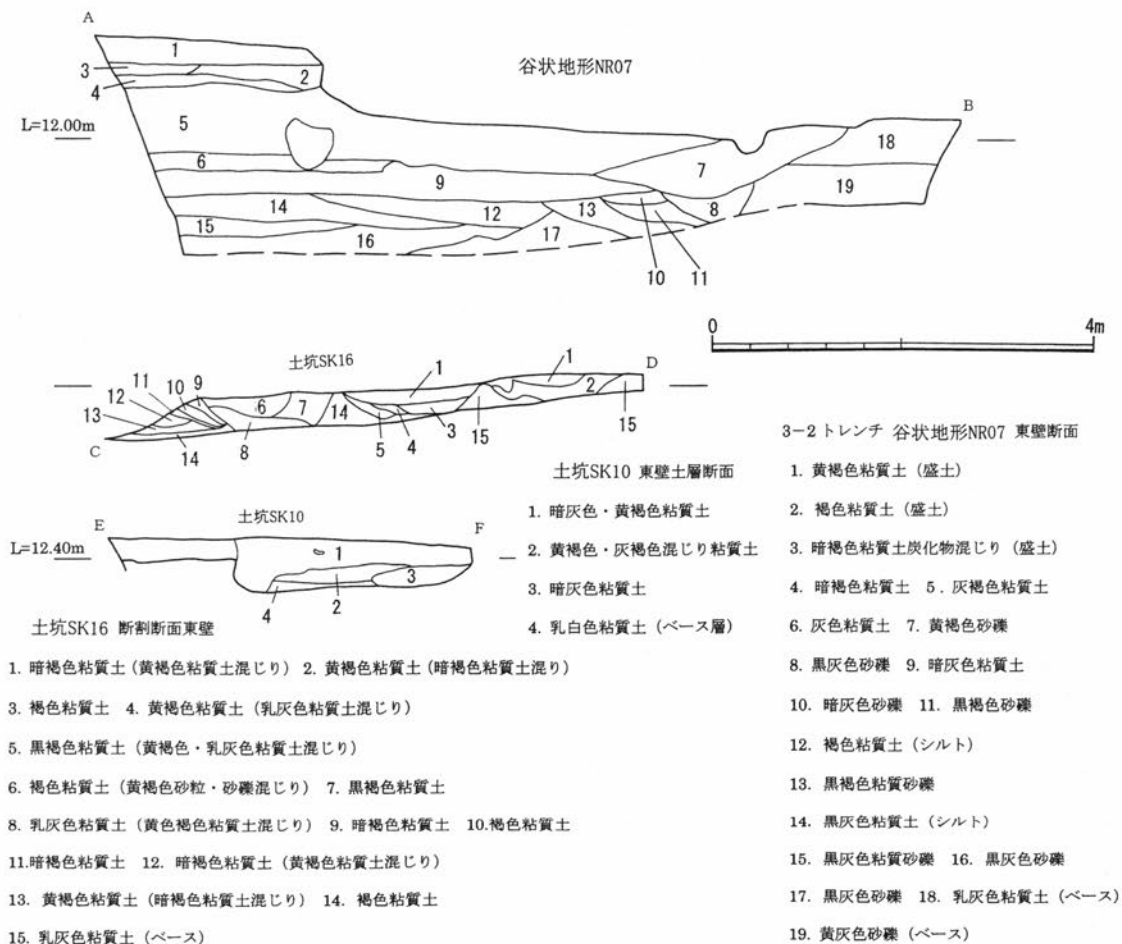


第11図 第3-2トレンチ断面図

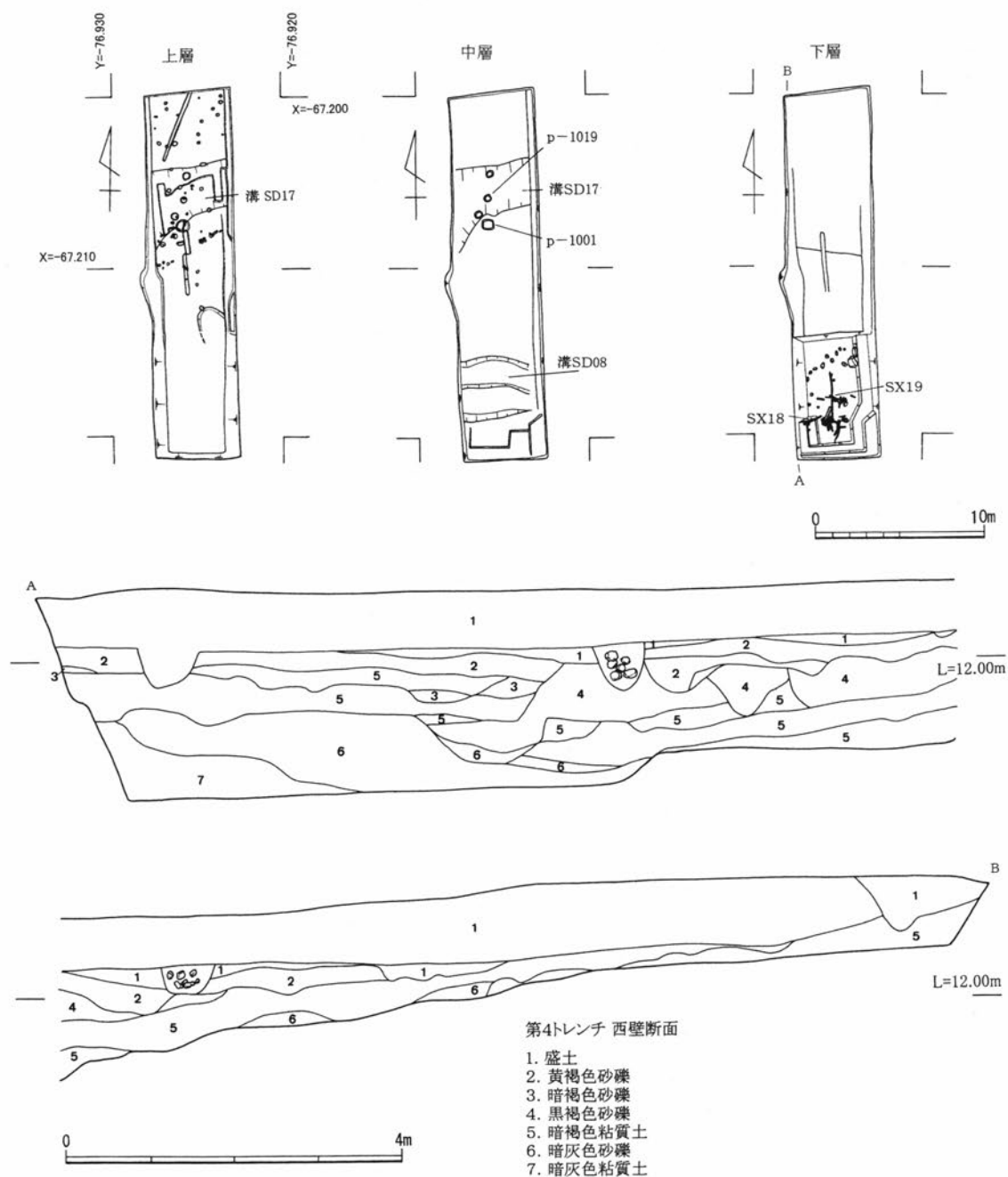
粘土採掘土坑SK16 調査地の中央部分で地山の乳白色の粘土層を大きく掘り込んだもので、東西4m、南北3mの範囲で不定形に掘り込まれている。埋められた土の中には割れたり焼けひずんだ瓦片や須恵器杯、鉢などが出土した。

谷状地形NR07 西側の山麓から東に向かったのびる低位段丘に平行する開析谷が現在の市道の下に埋没しており、現標高は12m前後である。検出した幅が約8m、深さ約2mを測る。第3-2トレンチと合わせ38mを検出した。堆積層は上位の3層が盛土、第4層から第6層までが最終段階の埋め土である。第7・8層は最終段階の流路で、砂礫によって埋まっている。この流れの肩部は南ではベースが地山。北側は第9層の粘質土で谷側が比較的安定している状況である。以下の層では砂礫やシルトが交互に堆積して最下層では砂礫が厚く堆積している。第3-2トレンチ内では地山土は確認できていない。中層では時々淀んだ状態の腐植土層や泥土が溜まっていた状況である。調査した範囲の最下層の黒灰色砂礫層からは縄文時代後期の土器、概ね中層の暗灰色砂礫層、黒褐色砂礫層からは弥生時代中期の土器、上層の灰褐色粘質土、灰色粘質土層や南岸の肩部からは古墳時代の土師器が出土している。

堰状遺構SX15 谷に直交するように幅約1mで円礫と木杭・板で土手を構築している。川底はこの堰を境に下流側で宮川に向かって深く、滝壺状になっている。堰の上流側はダム状になっていたと考えられ、埋土の中には水さらしをおこなっていたと考えられる堅果類がまとまって出



第12図 第3-2トレンチ遺構断面図



第13図 第4トレンチ実測図

土した。

土器溜まりS X09 谷状地形N R07の南岸土手部が幅約1.4mでテラス状の二段になっており、ここに南に想定される集落から6mにわたって土器を捨てたと考えられる場所である。

土坑S K10 谷状地形N R07の土手部を整地した埋め土の一部で、S X09の西に位置する。直径約3mの範囲に黒色の粘質土層を検出した。

第3-3 トレンチ(第10図)

南側で地山の肩部を検出し北に向かって下がる谷状地形(N R07)の延長を検出した。

第4 トレンチ(第13図)

調査地の全体が黒褐色の粘質土に覆われており、ベースの黄褐色土までの掘削を行った段階で初めて遺構の輪郭を確認する事ができた。奈良から平安時代にかけての2条の溝(S D08・17)・柱穴や古墳時代に杭や板を使用した護岸施設(S X18・19)などを検出した。

溝 S D08 調査地の南よりで検出した。西から東に流れる。幅約3m、深さ約0.5mの東西溝で、砂と礫によって埋まっていた。溝内からは須恵器杯B、杯A、軒丸瓦、板などが出土した。

溝 S D17 調査地の北よりで検出した。北東から南西に流れる。幅約3m、深さ約0.5mの溝で、砂と礫によって埋まっていた。溝内からは土器では須恵器杯B、杯A、皿A、稜椀、墨書土器が、木製品では人形、鳥形、斎串、荷札と瓦類などが出土した。

護岸施設(S X18・19) 調査地の南端、深さ約1.5～2.0mで検出した。杭と板によって西側を土手として構築されている。周辺には直径が1m近い岩が流れていることから宮川の旧流路に伴う土手として造成されたものと考えられる。埋土中から古墳時代の土師器高杯・甕などが出土した。

3. 出土遺物(第14～26図)

第1トレンチでは、包含層の中からは、弥生土器(高杯・甕)や石器(削器)、古墳時代～平安時代の土師器・須恵器(杯・甕・高杯・皿)、さらに格子目叩きをもつ布目瓦などが出土した。竪穴式住居跡(S H03)から弥生時代後期の甕・台付壺・高杯および石器(敲石)が出土した。掘立柱建物跡の柱堀形内から平安時代の土師器・須恵器の破片が出土した。

第2トレンチでは、竪穴式住居跡S H04から、弥生時代のミニチュア土器、土坑(S K201)から布目瓦、陶器が出土した。

第3トレンチでは、包含層の中から弥生時代から、鎌倉時代の遺物が出土した。土坑内からは多くの布目瓦とともに平安時代の糸切り底の椀や黒色土器が出土した。瓦や土器の中には焼けひずんだ土器や瓦も含まれている。谷状地形(N R07)からは、縄文時代前期の土器・弥生時代中期の土器が出土した。一番最後に埋まった土層からは古墳時代前期の土器が出土している。また堰状遺構(S X15)周辺では堅果類(トチ・モモ・シイ)の皮や種とともに木製容器の槽・有頭棒・板や杭などが多数出土した。土器溜まり(S X09)からは、弥生時代中期から後期、古墳時代にかけての土器が土手にゴミを捨てるように層を成していた。土坑(S K10)からは、弥生土器に混じって縄文土器も出土した。

第4トレンチでは、包含層の中から平安時代の糸切り底の椀や黒色土器・布目瓦などが出土した。溝(S D08・17)・柱穴からは須恵器の杯蓋・杯・稜椀・壺・甕、土師器の杯などとともに布目瓦などが出土した。護岸施設(S X18・19)の周辺からは古墳時代の土師器高杯・甕などが出土した。

第1トレンチ

遺構内では、竪穴式住居跡(S H03)、土坑、掘立柱建物跡などから遺物の出土がみられる。掘立柱建物跡の柱穴内からは、図示できるものがなく、ここでは竪穴式住居跡と土坑(S K104)か

ら出土したものについて述べる。

竪穴式住居跡 S H03 1～9・23は、竪穴式住居跡 S H03から出土した。上層の埋土中から須恵器杯が出土したが、基本的に弥生時代後期の資料群である。1～8は甕である。肥厚させた口縁端部に2～3条の擬凹線が施されたもの(1～3)、凹線はもたないが面を形成するもの(6～8)、さらに後期の土器の特徴をよく示すもので、帯状の広い面が形成された口縁端部に沈線や擬凹線が施されたもの(4・5)などがある。いずれも全周の4分の1に達しない断片で、復元径は15.5～18cm内外を測る。9は蓋である。つまみ部の径は6cm、下端部の径は14.2cmを測る。11～14は壺底部断片である。11は穿孔がみられ、甕または甗とみられる。12～14は甕または壺である。底部径は11から14の順に3.0・4.4・6.0・6.6cmを測る。15と16は高杯で、杯部の口縁端部である。15は推定口径34cmを測る。17は壺か鉢の台部である。底径は10.2cmである。18は器台の下部である。底径は9.8cmを測る。19～21は高杯の脚柱部である。21は磨滅が著しいが、19と20には外面に細かなヘラミガキ痕をとどめる。これら弥生土器の特徴から畿内第V様式前半から中頃に併行するものであろう。

22と23は、住居の上面から出土した須恵器杯蓋である。22は口径11.9cm、器高3.4cmを測り、およその形式・年代はTK209型式、6世紀末から7世紀初頭である。23は欠損しているがつまみをもつもので、口径16.2cm、残存器高3.8cmである。形式・年代は8世紀とみられる。これら2点は混入したものといえる。

24は、土坑(S K104)から出土した中国製青磁碗の体部下半から底部の断片である。底径6.8cmを測る。

第2トレンチ

竪穴式住居跡 S H04 10は小型(ミニチュア)の蓋形土器である。つまみ部の径2.2cm、下端部の径6.2cmである。

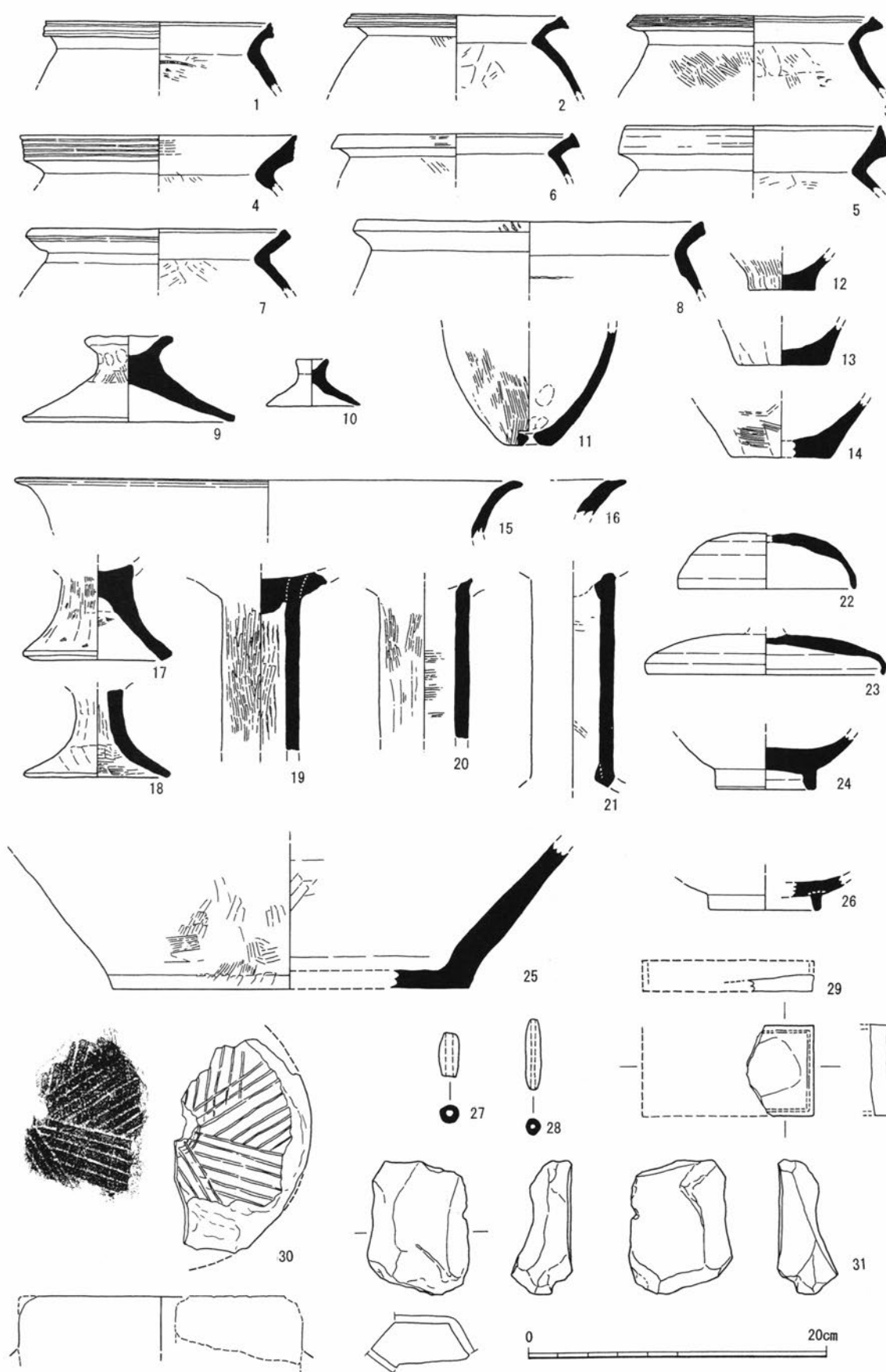
土坑 S K201 25～37は土坑 S K201中から出土したものである。

25は越前焼の壺で、体部下半～底部の断片である。底部径は24cmを測る。26は中国製陶磁器碗の底部断片である。底部径は7.6cmである。27と28は管状土錘である。重さは27が4.7g、28が4.9gを測る。29は頁岩ないし粘板岩の硯の断片で、陸(摺り面)が確認される。30は石臼片である。31は砂岩製の砥石である。表裏面および側縁部に滑らかな砥面が形成されている。

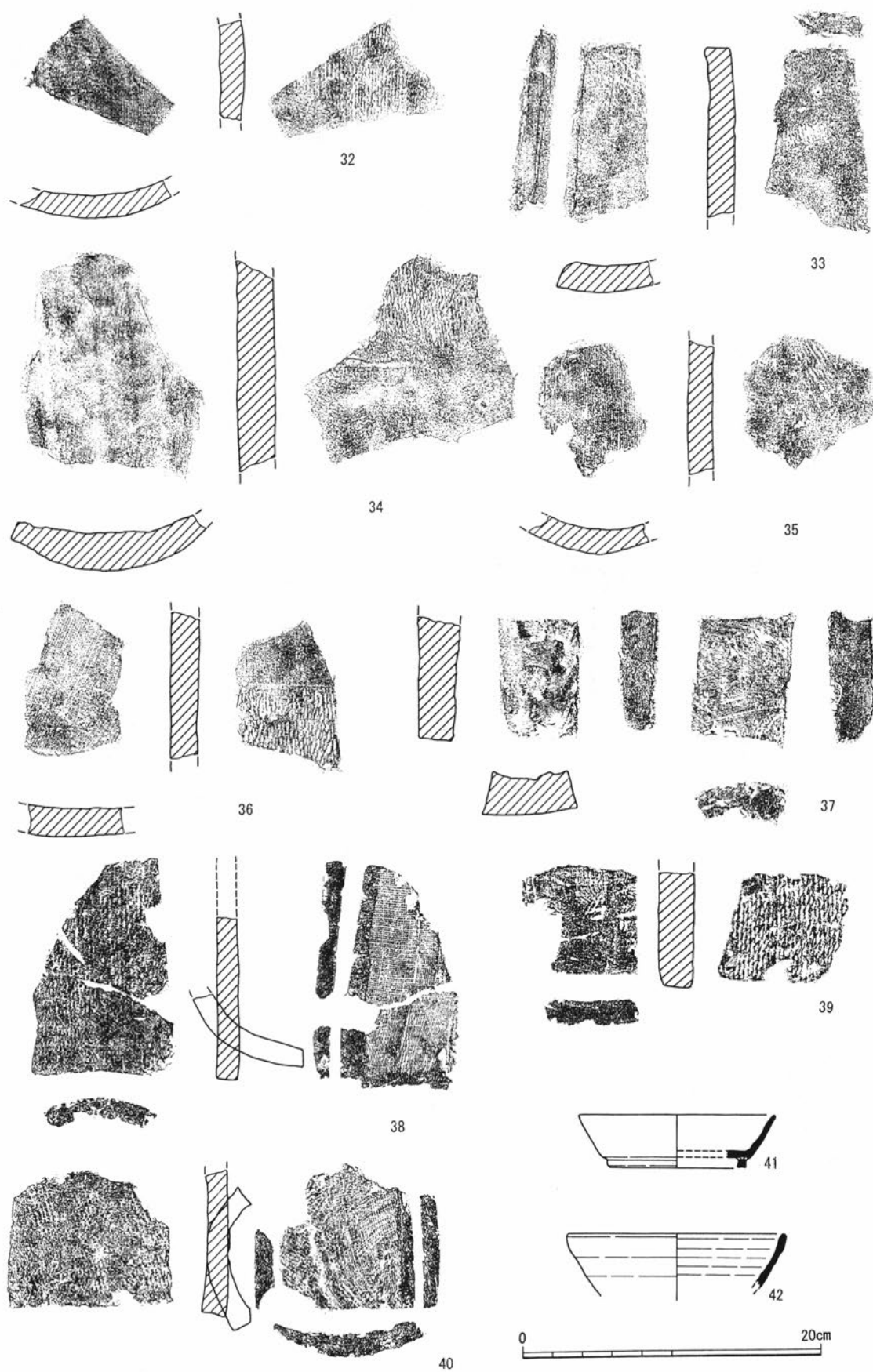
32～37は大小の布目瓦の断片である。種類はすべて平瓦で、凹面には布目圧痕、凸面側には縄目たたき痕が明瞭に認められる。時期は奈良～平安時代である。

第3トレンチ

粘土採掘坑 S K16 38は丸瓦。凸面縄タタキ、凹面布目で端部内面にヘラケズリを施し暗茶灰色を呈す。残存長10.8cm、器厚1.5cmを測る。39は平瓦。凸面縄タタキ、凹面布目で明灰色を呈す。残存長7.5cm、器厚2.3cmを測る。40は小型の平瓦で鬘斗瓦か。凸面縄タタキ、凹面布目で暗灰色を呈す。残存長10.0cm、幅9.8cm、器厚1.3～1.6cmを測る。41・42は杯Bである。41は口径13.1cm、器高3.5cmを測る。42は口径14.4cm、残存高3.9cmを測る。



第14図 出土遺物実測図(1)

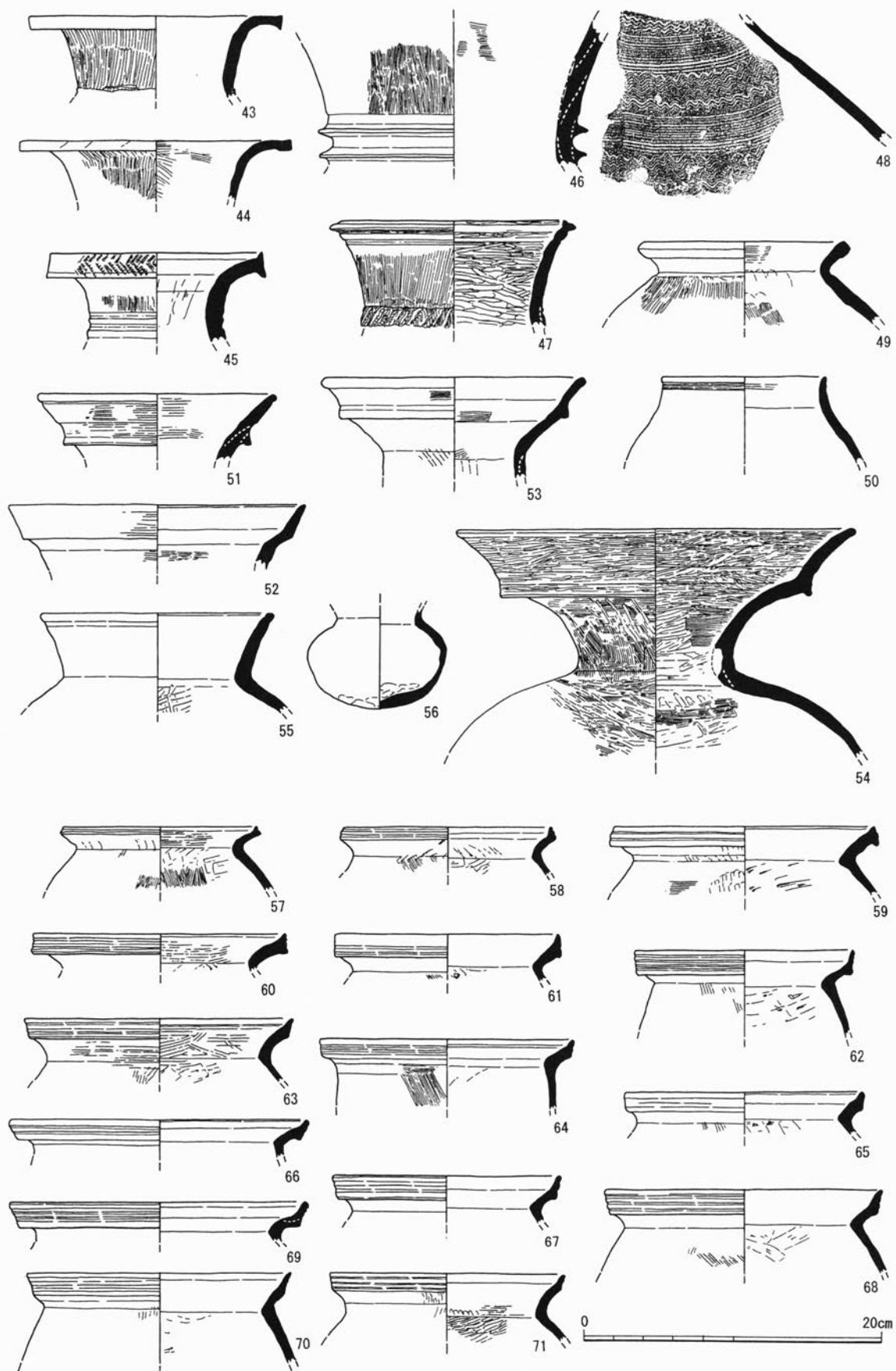


第15図 出土遺物実測図(2)

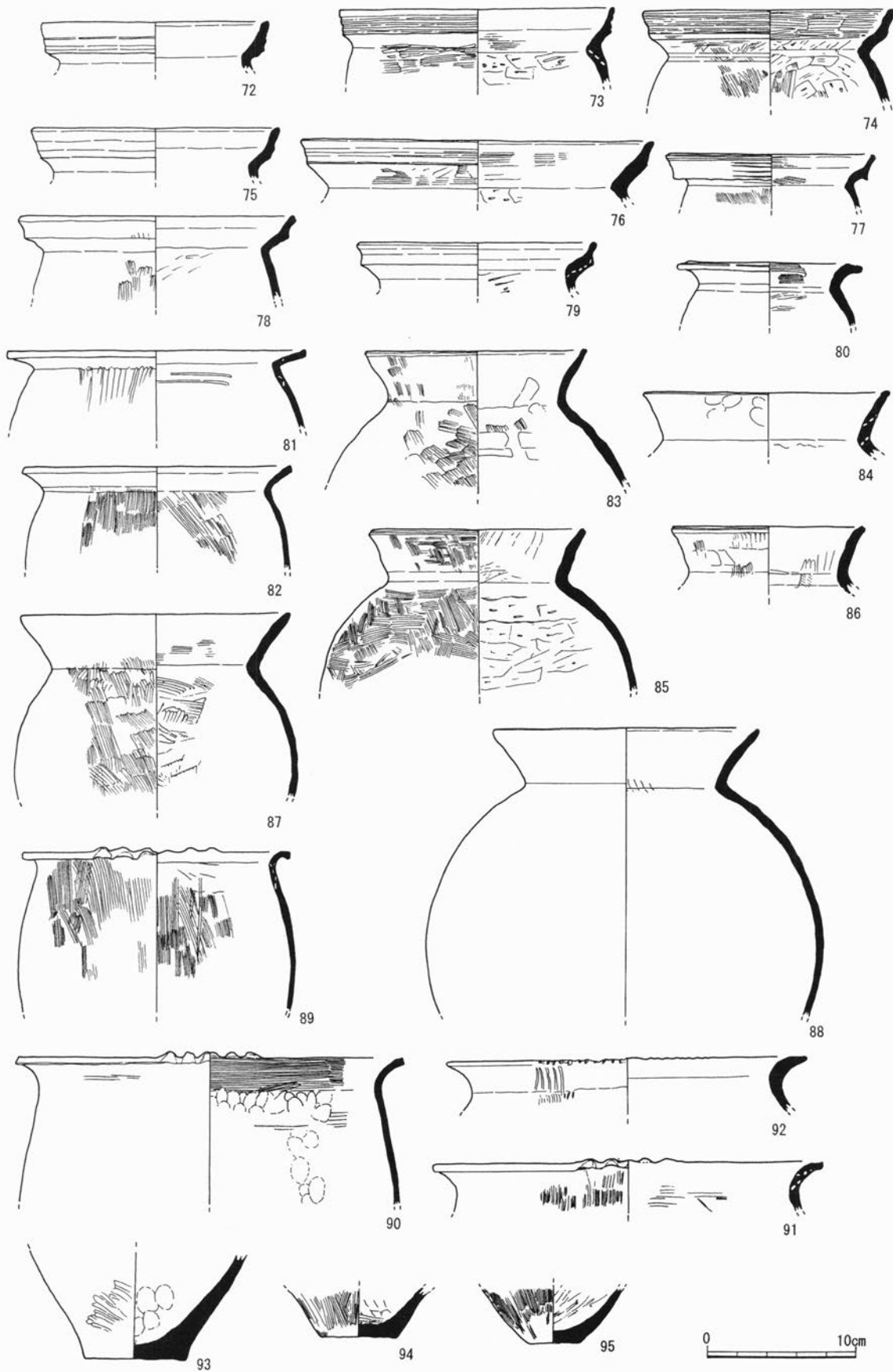
谷状地形N R07 埋土内より縄文土器、弥生土器、古墳時代の土師器、木製品、植物遺体などが出土している。縄文土器と木製品については別項でまとめる。

43～45は、弥生土器広口壺で、内面横方向のハケ目痕、外面縦方向のハケ調整、43は頸部に粘土帯貼付け痕が認められ暗橙灰色を呈する。口径16.8cm、残存高5.4cmを測る。44は内面灰白色外面黄灰色を呈する。口径18.2cm、残存高5.1cmを測る。45は頸部に凹線を施し口縁端面に櫛状工具による刺突で綾杉文を施している。淡褐色を呈し、口径18.2cm、残存高5.1cmを測る。46は壺頸部である。2帯の貼付け凸帯を施している。内外面ハケメ調整、暗灰色を呈し、頸部径16.1cm、残存高9.6cmを測る。47は頸部に貼付け凸帯を口縁端部下段に二条の凹線文を施す。内面ナデの後横方向のヘラミガキで外面縦方向のハケ調整を施す。内外面とも褐色を呈し、口径15.1cm、残存高6.8cmを測る。48は壺の肩部片である。14本の櫛による波状文3帯、直線文2帯が認められる。内面淡灰褐色、外面暗茶褐色を呈する。49は「く」の字口縁に内面横ハケ、体部の内外面縦方向のハケメ調整で内面黄橙色、外面灰黄褐色を呈する。口径13.0cm、残存高5.4cmを測る。50は無頸壺で口縁部外面に3条の沈線を施し、内外面ともにぶい橙色を呈する。口径11.0cm、残存高5.8cmを測る。51～54は二重口縁壺である。51～53は口縁部の内外面とも横方向のハケ調整を施す。54は口縁部の内外面ともハケ調整の後、横方向のヘラミガキを施し、頸部は縦、体部で斜めのヘラミガキを施している。51は淡灰色を呈し、口径11.0cm、残存高5.8cmを測る。52は橙色を呈し、口径19.8cm、残存高4.3cmを測る。53はにぶい黄橙色を呈し、口径17.6cm、残存高6.7cmを測る。54は内面暗褐色～橙褐色、外面淡灰褐色を呈し、口径26.6cm、残存高15.3cmを測る。55は内面横方向のハケメでにぶい黄橙色、外面ナデ調整でにぶい橙色を呈する。口径15.4cm、残存高6.7cmを測る。56は小型丸底壺で、N R07の南側肩部から出土した。明茶褐色を呈し体部径9.4cm、残存高6.9cmを測る。57～79は、丹後系の二重口縁甕で、口縁部外面の擬凹線の特徴とする。口縁端面が断面ほぼ直角になるタイプA（57～61）、外開きになり上方につまみ上げるタイプB（62～76）、外面を強く押さえ擬凹線がほとんど消失するタイプC（77～79）に分類される。80～88は「く」の字口縁甕である。89～91は口縁端部を3か所一対で山形に隆起させる。口縁部内面横ハケ、体部内外面に縦方向のハケメを施す。92は口縁端部にヘラ状工具による刻み目を施す。93～95は底部片である。内底面指押さえで外面ヘラミガキの壺(93)と内底面ヘラケズリで外面ハケ調整の甕(94・95)と考えられるものがある。96・97は口縁端面に擬凹線をもつ鉢もしくは高杯の杯部である。98は高杯もしくは台付き鉢の脚部で凹線文を施す。100～104は高杯、105は低脚高杯の脚部。108～110は蓋、106・107は脚台。111～116は底部に穿孔をもつ。

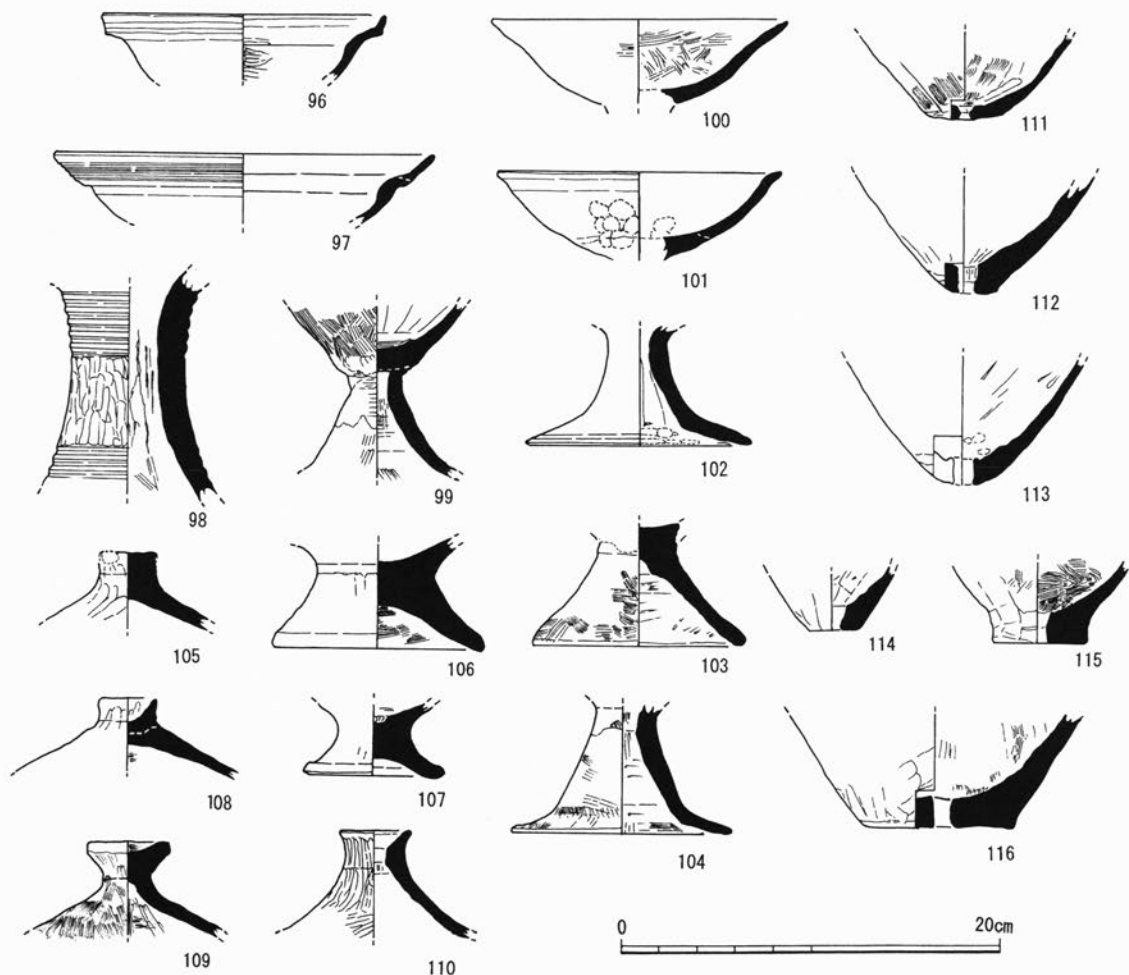
ピット・包含層 数多くの布目瓦や黒色土器、陶磁器、弥生土器などが出土した。117はピット内出土で丸瓦。凸面縄タタキ、凹面布目で淡灰褐色を呈す。残存長6.9cm、器厚1.4cmを測る。118は包含層出土で平瓦。凸面平行タタキ、凹面布目に糸切り痕で青灰色を呈す。残存長14.0cm、器厚1.9～2.2cmを測る。119は包含層出土で平瓦。凸面縄タタキ、凹面布目に糸切り痕で淡橙褐色を呈す。残存長8.0cm、器厚1.5cmを測る。120は包含層出土で平瓦。凸面平行タタキ、凹面布目に糸切り痕で黄灰褐色を呈す。残存長7.3cm、器厚1.8cmを測る。121は包含層出土で須恵質の



第16図 出土遺物実測図(3)



第17図 出土遺物実測図（4）



第18図 出土遺物実測図(5)

平瓦。凸面縄タタキで青灰色、凹面布目で暗灰色を呈す。残存長7.1cm、器厚1.0～1.1cmを測る。122は包含層出土の丸瓦で玉縁部。凸面ナデ、凹面ナデ・ケズリで灰褐色を呈す。残存長7.5cm、器厚2.0cmを測る。

123は、3-2トレンチP740出土の染付碗。底径4.8cm、残存高1.8cmを測る。124は3-2トレンチ包含層出土の青磁碗。底径5.7cm、残存高2.8cmを測る。125・126は3-2トレンチ包含層出土の黒色土器碗。125は内外面ミガキ調整で底部糸切り。底径7.0cm、残存高2.0cmを測る。126は内外面ミガキ調整で高台径7.2cm、残存高1.8cmを測る。127は3-2トレンチP725出土の唐津皿。淡赤褐色を呈し、内底面に離れ砂痕が残る。底径5.0cm、残存高1.9cmを測る。128は3-2トレンチP848出土の丹波すり鉢。淡褐色を呈し内面に1本ヘラ引き。底径11.2cm、残存高6.9cmを測る。129は包含層出土の弥生土器甕。口縁部外面に擬凹線、淡褐色を呈し。口径19cm、残存高4.3cmを測る。

土器溜まり S X 09 130～141がS X 09出土である。弥生時代後期の壺(130・131)、甕(132～137)、高杯(138～141)が出土している。

130は頸部から上方に開く二重口縁の外面に擬凹線。淡褐色を呈し、口径14.6cm、残存高5.2cmを測る。131は、頸部から上方に開く口縁外面に擬凹線。暗褐色を呈し、口径15.9cm、残存高

2.2cmを測る。132～135は頸部から上方に直線的に開く「く」の字口縁を持つ甕。132は口縁内外面は横方向のハケ目調整、体部内外面に縦方向のハケ目調整を施す。暗灰茶色を呈し、口径15.8cm、残存高4.6cmを測る。133の口縁内外面は横方向のナデ調整、体部内面に縦方向のケズリを施す。淡褐色を呈し、口径14.6cm、残存高4.2cmを測る。134の口縁内外面は横方向のハケ目調整、体部内面縦方向のケズリ、外面に縦方向のハケ目調整を施す。淡灰茶褐色を呈し、口径14.8cm、残存高12cmを測る。135は大きく外方に開き端部に面を持つ口縁部、口縁内外面はナデ調整、体部内面縦方向のケズリ、外面に縦方向のハケ目調整を施す。明灰褐色を呈し、口径24.6cm、残存高5.4cmを測る。136は口縁端部を2か所一対で山形に隆起させる。口径24.6cm、残存高5.4cmを測る。

土坑S K 10 壺(142～144)、鉢(145)、甕(146～152)、高杯(153)などがある。

142は大きく開く口縁部の内面斜め方向のハケ調整の後上半を横ナデ、外面にハケ調整を施している。内面灰白色、外面黄灰色を呈し口径18.2cm、残存高5.1cmを測る。145は黄灰色を呈し口径15.2cm、残存高9.0cmを測る。甕は口縁部横ハケ、体部縦斜め方向のハケ調整を施す。153は淡黄褐色を呈し杯部の口径15.8cm、器高4.7cmを測る。

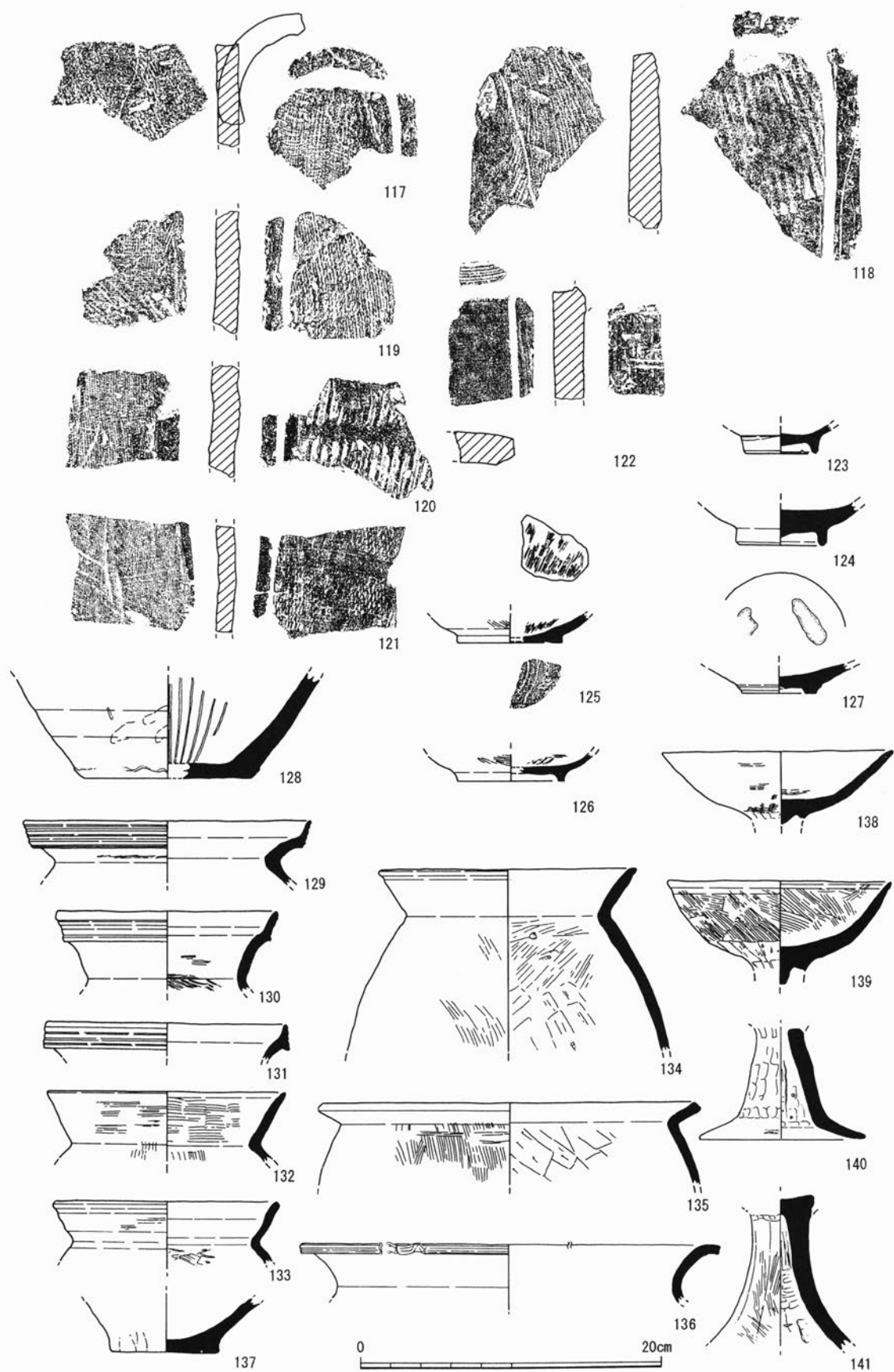
第4トレンチ

溝S D 08 須恵器杯A(154)・杯B(155)・皿B(156)、軒丸瓦(157)などが出土している。木製品については別項にまとめた。

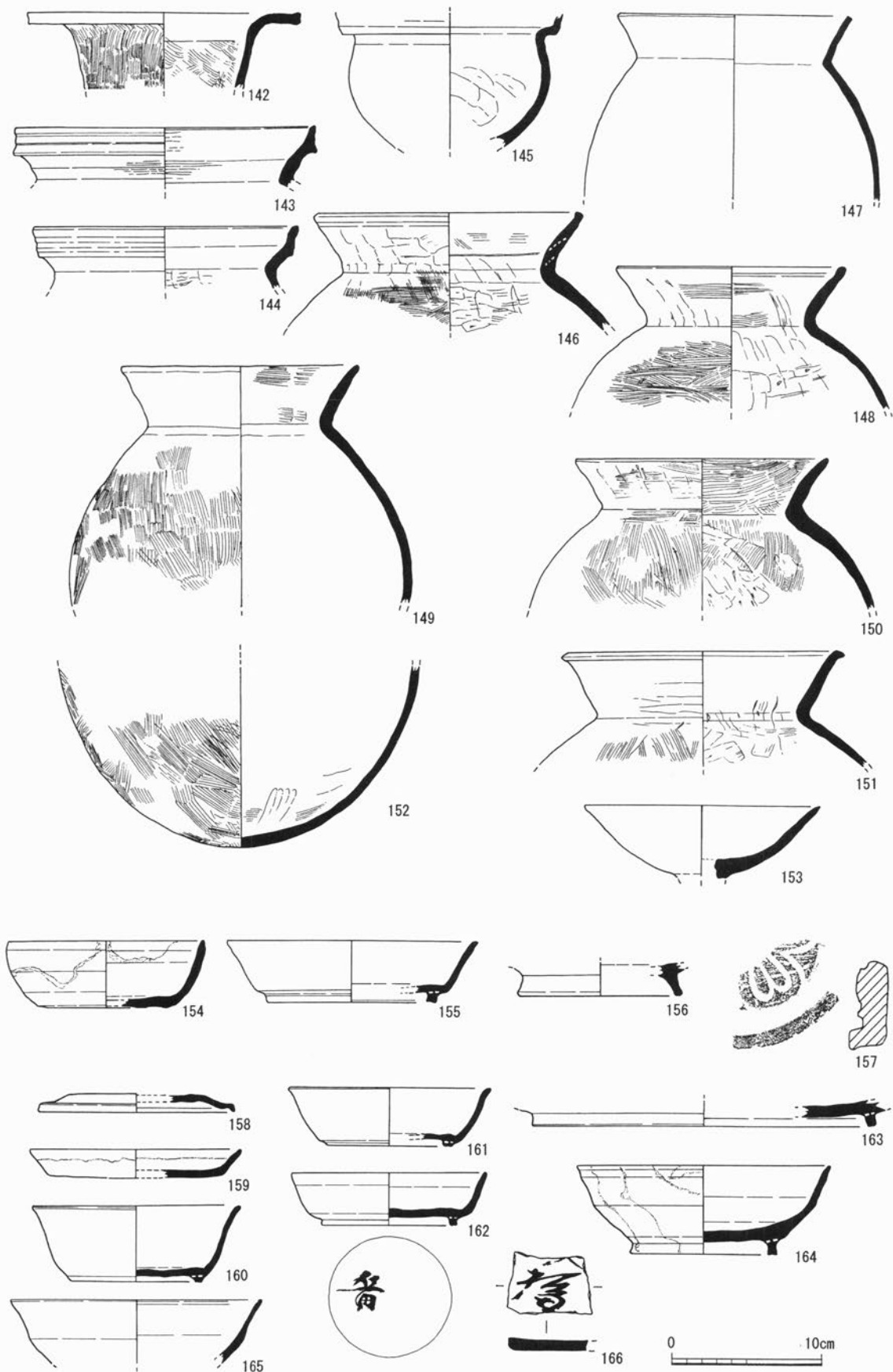
154は内湾ぎみの杯部を持つ。二次的な火を被っており内面が暗褐色、外面黒から暗褐色に変色している。口径13.0cm、器高4.5cmを測る。155は杯の底部から内による高台と外反する杯部からなり、内面灰白色、外面青灰色を呈する。口径16.6cm、器高4.1cmを測る。156は高台付き皿の高台部である。S D 17上面出土遺物に全体の形状がわかる類例(168)がある。本品は焼成が悪く内面灰白色から青灰色、外面灰白色から赤褐色を呈し、断面に多量の炭素を吸着している。底径11.0cm、残存高2.3cmを測る。157は複弁蓮華文軒丸瓦であるが、周縁と蓮弁部のみの破片であり全体の形状をうかがう事ができない。復元径13.6cm、周縁の幅1.4cm、深さ0.9cm、瓦当の厚さ2.5cmを測る小振りである。瓦当の表現は肉彫りにならず溝彫になっており、周縁や蓮華が凸線の表現になっている。また乾燥時に付いたものか瓦当表面に布目が認められる。対応する弧文軒平瓦がS D 17上面の出土遺物にあるが、中央に一条の凹線が施され上下二条の凸表現をしている。これらの瓦の組み合わせは、周辺地域では出土が確認されていない。

溝S D 17 須恵器杯蓋(158)、皿A(159)、杯B(160～162)、皿Bと考えられるもの(163)、稜椀(164・165)、墨書土器(162・166)などが出土している。また、溝掘り方が確認される以前の調査段階で地区名を付して取り上げた遺物に溝内遺物と考えられる一群(167～179)がある。木製品については別項にまとめた。

158は宝珠を欠いている。内面に広く墨痕があり転用硯として使用されていた。口径13.2cm、残存高1.2cmを測る。159は焼成時の自然釉が付着しており口径14.1cm、器高1.9cmを測る。160は内外面灰色を呈し口径13.8cm、器高5.1cmを測る。161は内外面青灰色を呈し口径13.4cm、器高



第19図 出土遺物実測図 (6)



第20図 出土遺物実測図 7

3.8cmを測る。162は底部外面に「丘田」の文字が認められる墨書土器である。内面灰色、外面暗灰色を呈し口径13.0cm、器高3.5cmを測る。163は高台付きの底部片で高台径23.0cm、残存高1.7cmを測る大型品である。高台や器壁の厚さから壺甕でなく皿と判断した。164は焼成時の自然釉が付着しており内面茶灰色、外面黒色を呈し口径17.0cm、器高5.9cmを測る。165は焼成があまり内面灰白色、外面青灰色を呈し、口径16.8cm、残存高4.3cmを測る。166は4.2×5.7cmの杯または皿の底部片である。「□福」の文字が認められる墨書土器である。福の上に「人」のはねが認められることから「大」の可能性があり吉祥句かと考えられる。

S D 17上面出土遺物 須恵器杯A (167)、皿B (168)、蓋(169～172)杯B (173～178)、稜碗(179)などがある。

167は焼成時に火ダスキを施している。内外灰色を呈し口径12.8cm、器高3.6cmを測る。168は器高の約半分を高台が占める。内外灰色を呈し口径17.2cm、器高4.65cmを測る。169は宝珠つまみ部片、170～172は宝珠つまみを欠く。170は内面暗灰色、外面灰白色を呈し口径13.6cm、残存高2.0cmを測る。171は内外面灰色を呈し口径17.6cm、残存高2.7cmを測る。172は内外面暗灰色を呈し口径16.6cm、残存高1.1cmを測る。173は内外面灰色を呈し口径11.7cm、器高5.3cmを測る口径に比して器高の高い器種である。174は内面灰白色、外面灰色を呈し口径13.0cm、器高3.6cmを測る。175は内外面青灰色を呈し口径13.4cm、器高4.25cmを測る。176・177は内外面灰色を呈し口径14.0cm、器高3.5cmを測る。178は内外面灰白色を呈し口径14.4cm、器高4.1cmを測る。

包含層や建物としてまとまらないピットの中などからの出土遺物として、P-1019から土師器皿(181)、P-1001から須恵器杯(180)、包含層中から輪状つまみを持つ須恵器蓋(182)、同蓋(183)、杯B (184～186)、稜碗(187～189)、壺(190・191)、土師器皿(192)、糸切りの底をもつ須恵器碗(193)、土師器甕(194・195)などがある。

また、古墳時代の須恵器杯蓋(196・197)、砂目をもつ唐津皿(198)、丹波すり鉢(199)、土鍾(200)がある。

184は内面全体に黒茶色漆の付着が認められ、漆塗り作業に使用されたと考えられる。土器は暗青灰色を呈し口径14.2cm、器高3.7cmを測る。

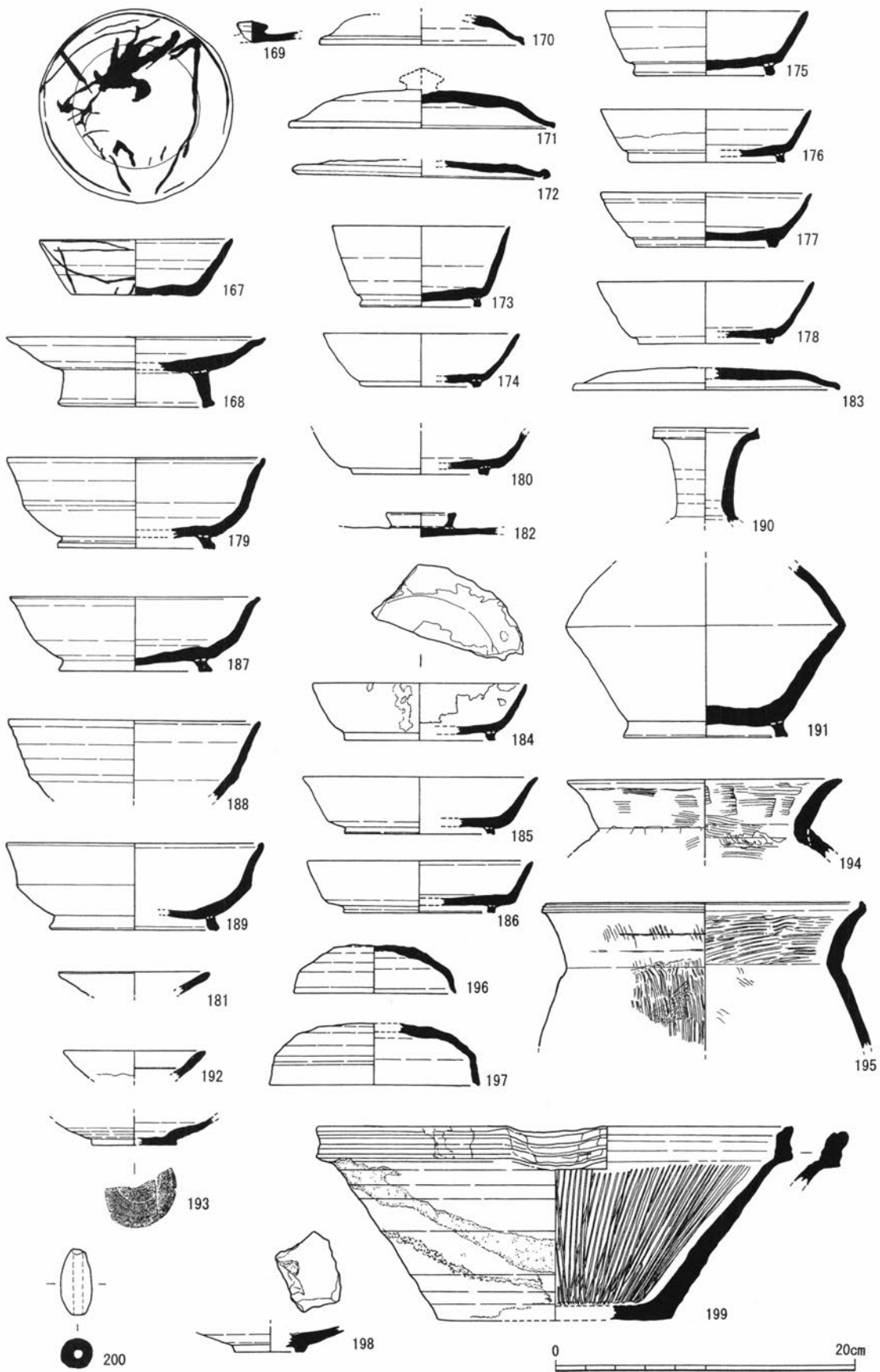
瓦では丸瓦と軒平瓦、平瓦がある。204は弧文軒平瓦である。凹面に布目、凸面に約1cm角の格子目タタキを施す。瓦当面は中央に一条の凹線を施し上下二段の凸線としている。瓦当面には乾燥時に付いたと思われる布目が認められる。にぶい橙色を呈し、厚さ3.0cmを測る。

瓦のタタキ目には縄タタキ(207・208)、格子タタキがあり、格子のタタキ板にも複数の種類がある。203・204などの1cm角の格子目や205・206などの2cm角の格子目などがある。

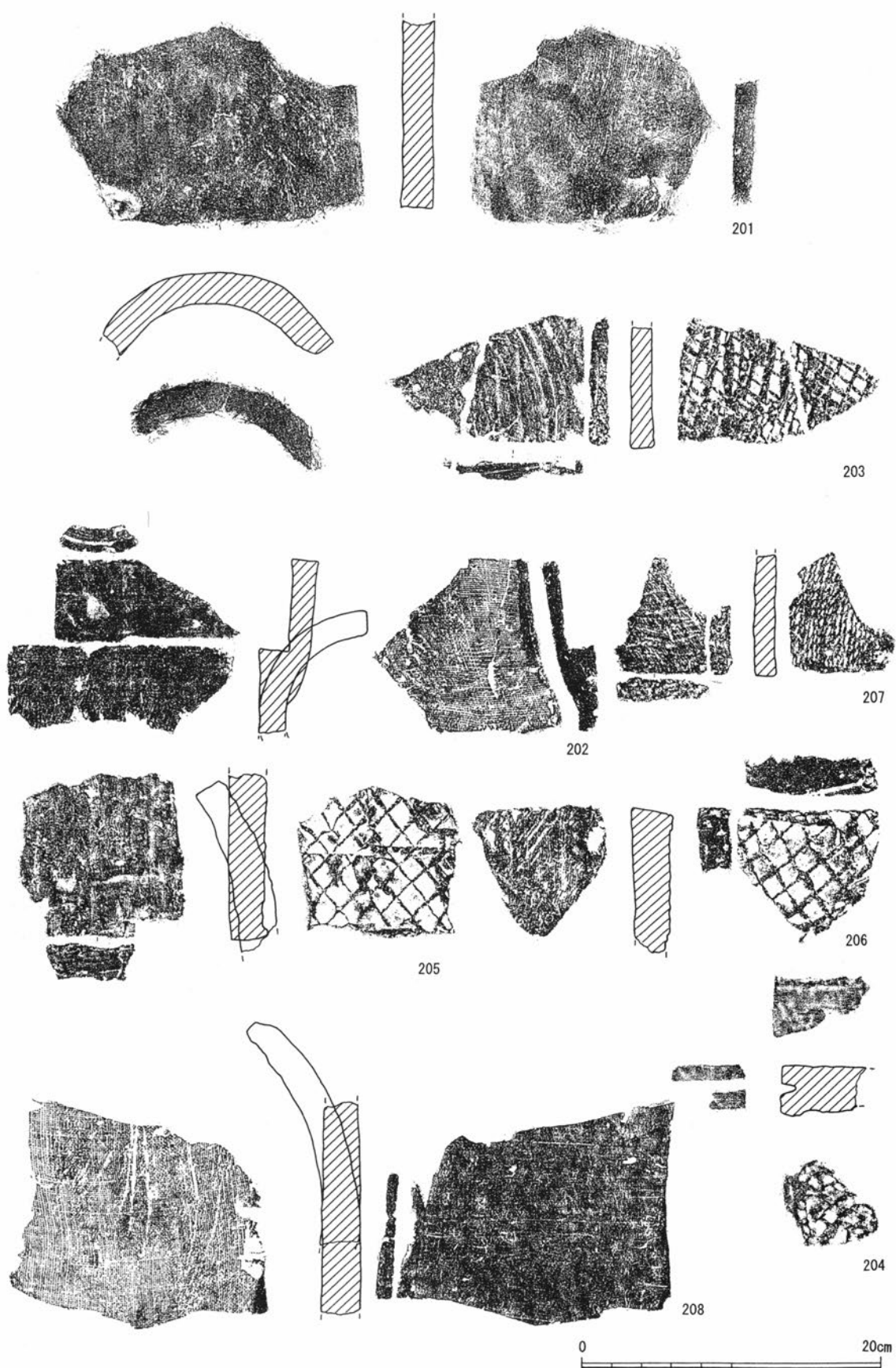
縄文土器(第23図)

縄文土器は主に第3トレンチの谷状地形NR07より出土しており、土器片で104点を数える。時期的には後期～晩期にわたる。

焼成は概ね良好である。色調は灰黄褐色・黒褐色・にぶい黄橙色といった色名で表現されるものが主体を占めている。胎土には白色の砂粒が普遍的に見られ、砂粒の円磨度が比較的高い。角



第21図 出土遺物実測図(8)



第22図 出土遺物実測図(9)

閃石は見られない。調整手法はナデが多いが、「細密条痕」やケズリもある程度見られる。

有文土器

有文土器は土器片で25点出土している。器形、文様によって6つに分類した。

第1類土器(1～5)

沈線で直線的・曲線的区画文を描き、縄文を充填する土器。1は波状口縁の波頂部で内外面ともにナデ調整。1～4の縄文の撚りの方向はRLで無文部はナデ調整だが、5はRで無文部をケズリ調整している。灰白色。1・3～5は中津式に比定できる。2は水平口縁であり、口縁部内面がやや肥厚している。中津式もしくは縁帯文土器か。

第2類土器(6)

沈線で直線的・曲線的な文様を描く土器。1点のみである。磨滅著しい。中津式か。

第3類土器(7～10)

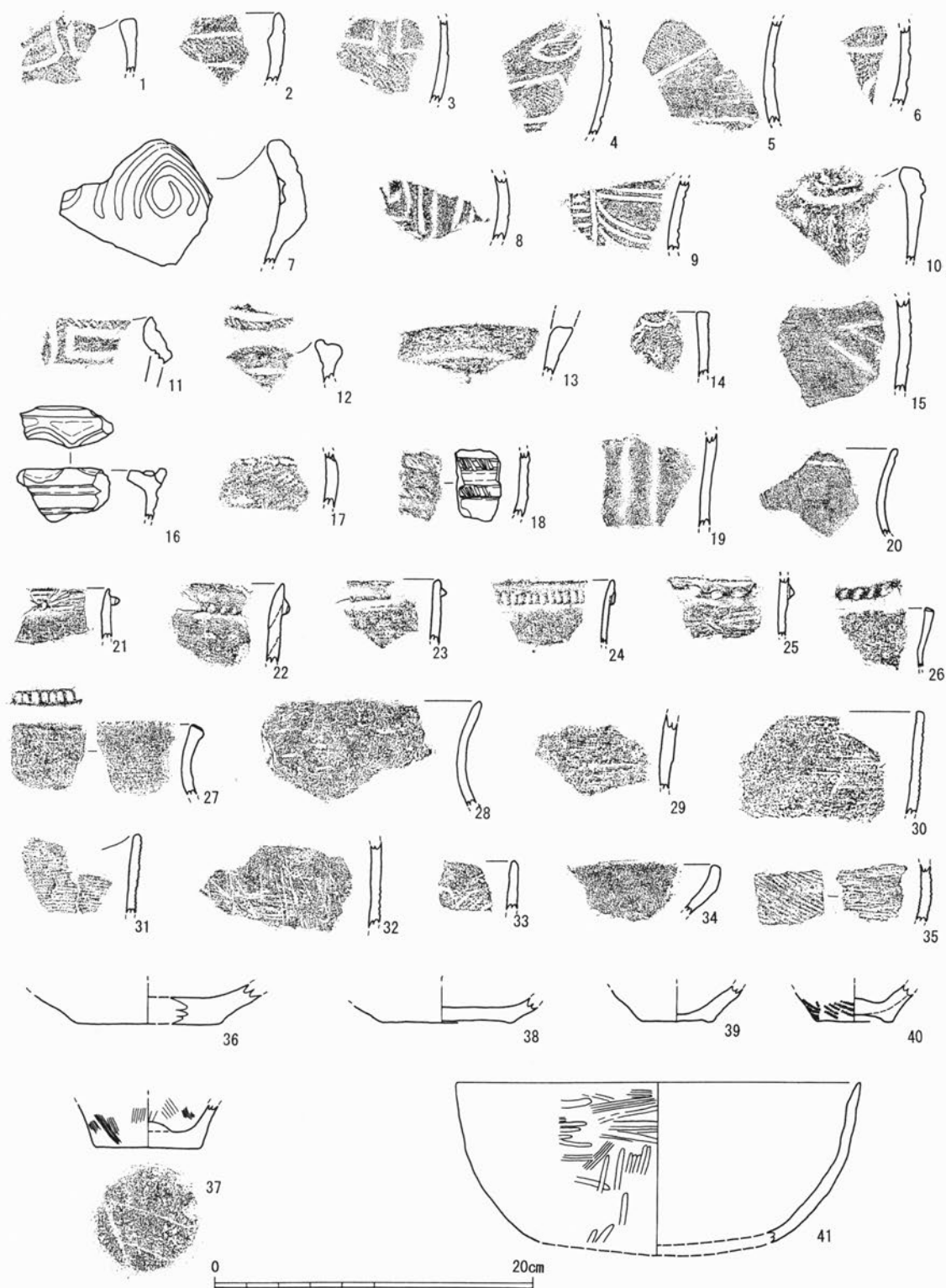
縁帯文土器で、口縁部は肥厚し、沈線をいくつかの単位で施し波状口縁を呈す。胴部は沈線で複雑なモチーフを描く。7は、渦巻文と弧線文の組み合わせを文様の主体として口縁部に施す。口縁内面中央部には楕円形刺突が施される。焼成は不良で非常にもろい。布勢式～津雲A式の間と考えられる。8は入り組み文の周囲を方形に区画する文様に復原できる。芥川遺跡出土縄文土器No.13・15の胴部モチーフの一部に類似する。布勢式か。9は外反する器形で、梯子状の沈線文にそれぞれ3条の直線文・弧線文を組み合わせしており、小森岡遺跡出土の縄文土器No.237のモチーフに類似する。福田KⅡ式～布勢式か。10は口縁部に3条の弧線文を施し、口頸部には弧線文より垂下する2条の沈線と区画文がみられる。内外面ともナデ調整が施される。北白川上層式1～2期か。

第4類土器(11～13)

縁帯文土器で口縁部ないし口唇部にRLの縄文を施し、沈線が横位に走る。内外面ともナデ調整。11は「く」の字形に屈曲する口縁部であり、長方形の沈線文を施す。縄文が施されるが、沈線区画内及び沈線下部ではナデ消されている。北白川上層式1～2期か。12は波状口縁の波頂部であり、沈線を挟み口唇部内面に縄文が施される。また口縁部内面にも沈線が施される。13は口頸部と考えられ、一条の横走沈線が施される。磨滅が著しく調整不明。灰白色。

第5類土器(14～20)

上記の4類とは形態・文様構成を異にし、時期が正確に比定できない土器片をまとめた。14は弧線文より2条の沈線がそれぞれ斜位に走る。口唇部は丁寧に面取りされており、内面はナデ調整、外面には圧痕が見られる。明赤褐色を呈する。15は3本の浅い沈線による区画文が描かれる。16は三角形に張り出した部分(以下凸部)と凹んだ部分が交互に連続する肥厚した小波状口縁部を呈する。凸部の口縁上面にはその形状に沿う形で三角形の凹みが作られる。丁寧なナデ調整。類例を発見しえない。17は、LRの縄文を地文とする胴部で、沈線内に刺突が施されている。18は2条の浅い凹線内に斜位の刻み目が見られる。ナデ調整。19は浅い沈線が2条縦位に走る。20は反時計回りの押引文を施す。



第23図 出土遺物実測図(10)

1・3・5・6・8・9・11・12・15・27・30・32・34・36・38・39・41：NR07
 4：SX18 7・13・37：H-12 10：G-11 14・28：SX9 29・40：SK10

第6類土器(21～25)

突帯文土器。口唇部よりやや下がった所に刻みを有する突帯が付く。21では突帯の直上に一条の横走沈線が施される。丁寧なナデ調整。暗赤褐色。25は突帯に棒状工具による深い押捺が施される。

無文土器**無文深鉢(26～35)**

土器片で73点出土している。器形は外反するもの、直線的に立ち上がるもの、内湾するものがある。調整はナデのものが40点と半数以上を占め、細密条痕のものが14点、ケズリ仕上げが13点ある。条線地のものも2点出土している。ナデ・細密条痕は全器形に見られる調整技法だが、条線地は直線的に立ち上がる器形のみで見られる。口唇部に刻み、浅い押捺を施すもの(26・27)もみられる。

無文浅鉢(41)

1点のみ出土している。頸部が大きくカーブして立ち上がる器形である。丸底を呈すると考えられる。内面はナデ調整、外面は細密条痕及びミガキが施される。ミガキは器面全体ではなく、主に頸胴部に施される。口縁部は黒色、頸胴部は褐色を呈する。縁帯文期のものか。

底部(36～40)

5点出土している。平底と凹底のものがある。36は木の葉状圧痕が見られる。細密条痕が施され、内面中央には粘土瘤が貼り付けられている。凹底は底縁が高台状になっているもの(38・39)と底縁から中央に向かってドーム状に立ち上がるもの(40)がある。

(大本朋弥)

木製品(第24～26図)

ほとんどが第3トレンチの谷状地形NR07から出土している。弥生時代から古墳時代のものが中心である。律令期のものは第4トレンチの溝SD17からの出土が中心である。

1～5、13～16、19、22～26はNR07からの出土である。6、9、10、12、18、20、21は第4トレンチのSD17からの出土である。17はSD08からの出土である。

1はNR07内の堰状遺構SX15の下流で出土した。容器盤の未成品である。針葉樹の芯去り材を用い、木表側に脚部を削り出す途中までの半製品である。長さ41cm、幅22.9cm、厚さ19.6cmを測る。

2も同じくSX15の下流で出土した。盤の未成品である。容器の内側を削りぬく手法として火を用い、炭化した部分を削ぎ落とす方法をとっているが、底が抜けてしまい失敗作である。長さ39.2cm、幅25.7cm、厚さ8.2cmを測る。

3は農具鋤もしくは漁労具櫂の半成品である。広葉樹を用い、下方の刃部と上方の柄を削り出す途中の未成品である。長さ66.4cm、幅15.5cm、厚さ3.9cmを測る。

4は第3～3トレンチから出土した。通称石見型木製品である。頂部中央の切り込み、両側面から上下に向かってカーブをもつての削り出しを特徴とし、2か所の紐を通す穴をあけている。

下方は二次的な加工が認められ本来の製品の途中で切断されていると考えられる。本来古墳に樹立された埴輪名称からの呼称であるが、当製品は出土状況から古墳に樹立したものとは考えられない。長さ32.7cm、幅18.8cm、厚さ1.0cmを測る。年輪年代の鑑定結果は478年である。

5は矢板の先端部である。長さ65cm、幅18.7cm、厚さ2.1cmを測る。

6は鳥形木製品である。図の左端で頭部から肩部にかけ表現し、中央下部に両側から削り出して足を表現している。右半部が尾の表現となっている。長さ18cm、幅2.5cm、厚さ0.35cmを測る。

7は第4トレンチ包含層の出土で独楽形木製品である。高さ6.2cm、直径3.6cmを測る。

8はS D08の出土である。板目取りで薄く割った木筒状の材である。残存長18.4cm、幅1.8cm、厚さ0.2cmを測る。

9・10は斎串と考えられる。9は残存長9.8cm、幅1.35cm、厚さ0.6cmを測る。10は残存長14.6cm、幅1.9cm、厚さ0.6cmを測る。

11は桶もしくは曲物の底板である。残存長10.9cm、残存幅3.25cm、厚さ0.7cmを測る。直径13cmに復元できる。

12は人形である。頭頂部を山形に削り顔から首にかけて細く削り込み、肩部で直角に切り落としている。手の表現は腰から脇の下に向かって切り込みを入れる事で表現し、足は股下に8mmの幅を持たせ板の中央部を切り落として表現している。残存長12.3cm、幅2.6cm、厚さ0.5cmを測る。

13は先端部加工の針葉樹の板物である。残存長16.5cm、幅4.45cm、厚さ1.5cmを測る。

14は丸い棒状品である。先端部が丸く摩耗しており中位に紐ずれ状の摩耗が認められる。長さ28.2cm、最大幅5.9cm、厚さ2.3cmを測る。

15は組み具である。中央部分に削り込み両端に2個一対の穴を穿つ。穴の中には桜の表皮を通して結束に使用している。長さ26.15cm、残存幅3.15cm、厚さ1.1cmを測る。

16は有頭棒である。断面カマボコ状を呈しており、織機の部材、緯経具と考えられる。残存長27.5cm、幅3.0cm、厚さ1.0cmを測る。

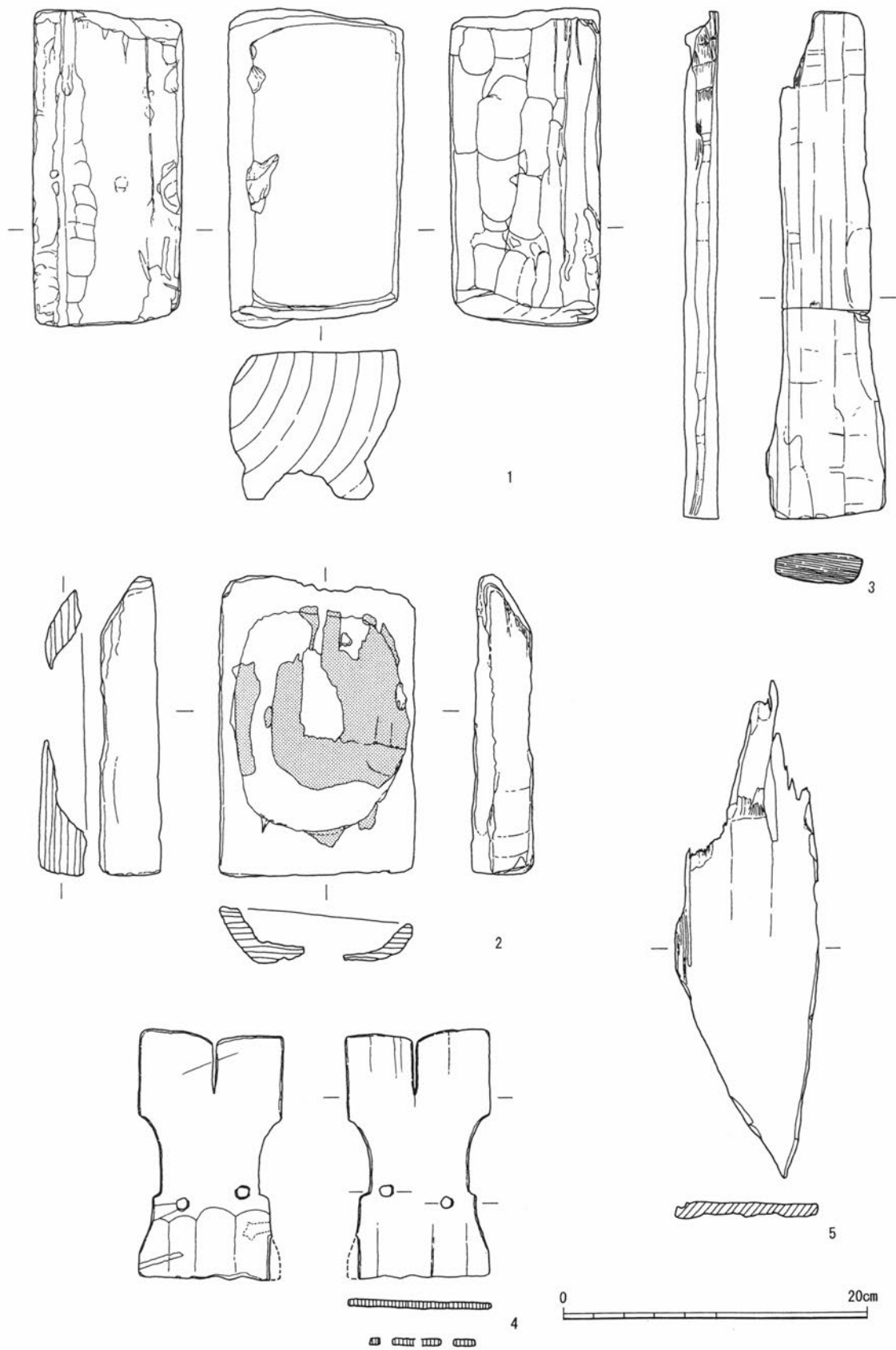
17はS D08出土の板状木製品である。長さ19.3cm、幅5.5cm、厚さ1.0cmを測る。

18は荷札状木製品である。上部中央に紐通し穴を穿ち、その上部に紐ずれ痕が観察できる。両側面に紐かけ用の切り込みを施している。墨書等は観察できない。残存長18.4cm、幅3.4cm、厚さ0.9cmを測る。

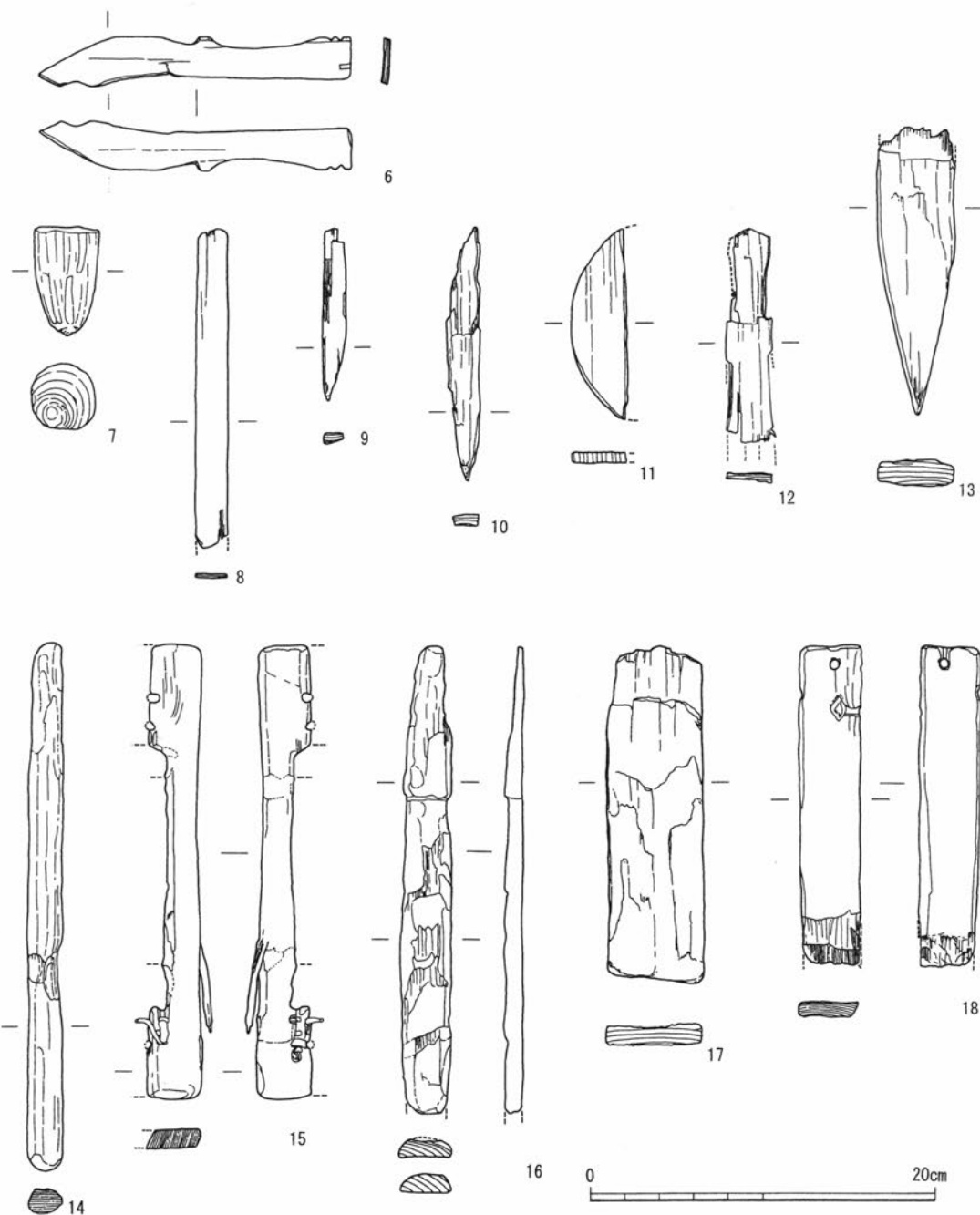
19・20は有頭の製品である。19は棒状、20は板状でそれぞれの製作された時代も違い、使用用途も異なると考えられる。19は長さ33.1cm、幅3.35cm、厚さ1.65cmを測る。20は二枚に割れており接合しないが残存長40.4cm、幅5.8cm、厚さ1.2cmを測る。

21は先端部加工の板である。鋭角に削り出した側面には鉄製工具による加工の特徴である刃こぼれによる刃線痕を止める。長さ47.8cm、幅4.5cm、厚さ0.7cmを測る。

22は平面の形が隅丸を呈する桶または曲物の底板である。残存長25.0cm、残存幅5.3cm、厚さ1.0cmを測る。



第24図 出土遺物実測図(11)



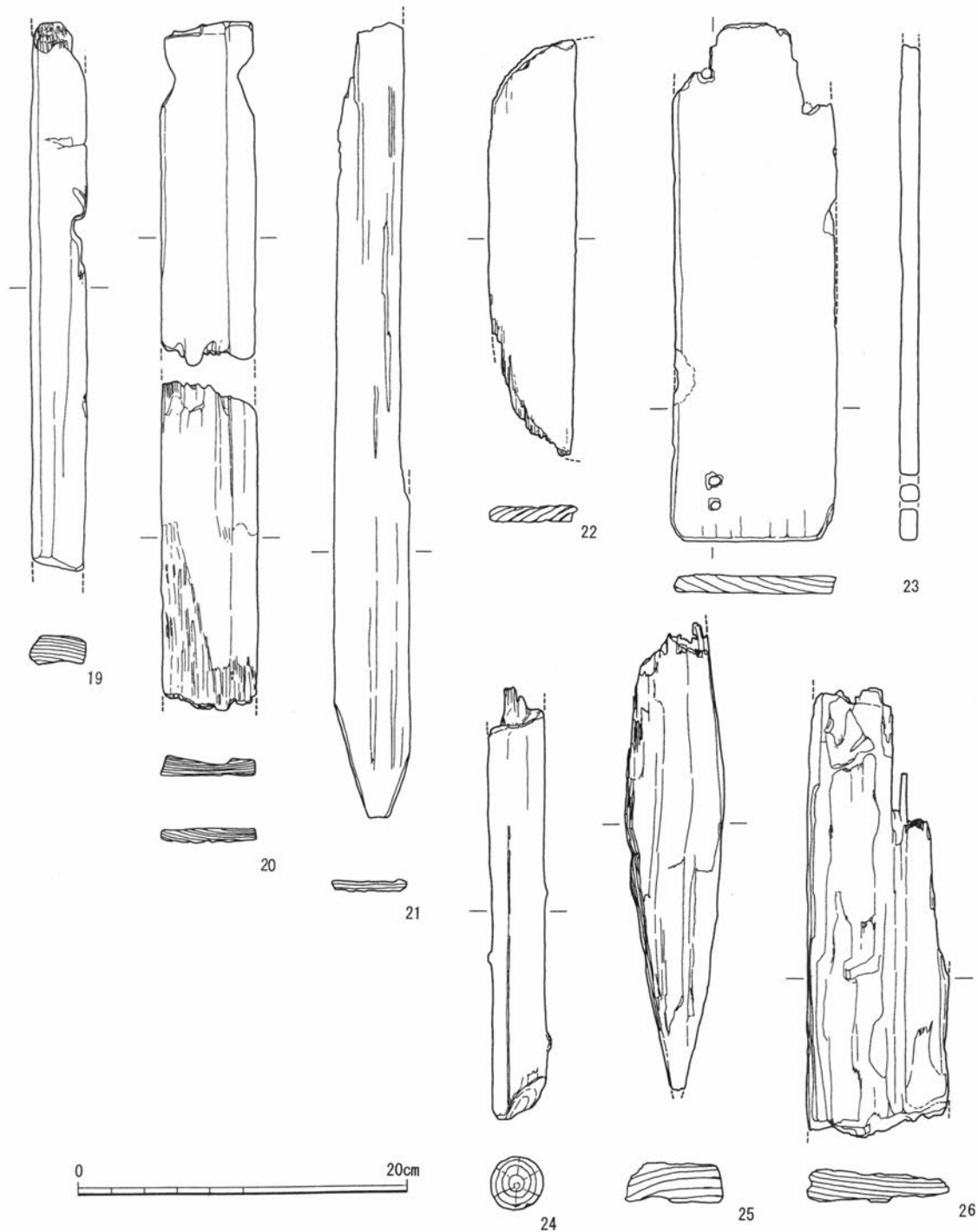
第25図 出土遺物実測図(12)

23は組具の板である。一方は両側面よりそれぞれ穴を穿っている。2個一対の穴の可能性はあるが両辺とも欠損しており明らかでない。もう一方は片側1か所に2個一対の穴を穿っている。長さ31.3cm、幅10.0cm、厚さ1.2cmを測る。

24は広葉樹の芯持ち材で先端部の加工痕に刃線痕を止める。ヌルデ等のしなりのある材質である。残存長26.2cm、直径3.2cmを測る。

25は杭状の加工品で、手斧による加工痕を止める。材質は針葉樹、木取りは板目である。残存長28.2cm、残存幅5.3cm、厚さ2.3cmを測る。

26は25同様で、矢板の破損品の可能性が考えられる。材質は針葉樹、木取りは板目である。残存長25.0cm、残存幅5.3cm、厚さ1.0cmを測る。



第26図 出土遺物実測図(13)

4. まとめ

今回の調査では、弥生時代の竪穴式住居跡2基、土器溜まり、谷状地形、古墳時代の護岸施設2か所、奈良・平安時代の掘立柱建物跡2棟、溝2条や柵列などを確認することができた。調査地周辺部において弥生時代・古代の集落跡が存在する可能性を示すことができた。また、布目瓦片の出土や粘土を採掘したと考えられる土坑の検出は、この調査地のごく周辺に瓦や須恵器を焼いた窯が存在したことや、墨書土器・稜椀・人形・鳥形などの出土から古代官衙、寺院等の施設

の存在をうかがわせるものであり、その解明については今後の調査に期待をしたい。

縄文土器の型式名・時期の認定については立命館大学文学部教授の矢野健一氏にご助言をいただいた。木製品の年輪年代測定にあたっては、独立行政法人奈良文化財研究所の協力を得た。文末ではあるが記して感謝したい。

(黒坪一樹・戸原和人)

調査参加者 八瀬由香里・小島健之助・丸谷はま子・村上優美子・清水友佳子・陸田初代・中島恵美子・
槻 啓宏、村岡弥生

参考文献

「河守遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第20冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1986

「河守遺跡第2次発掘調査概要」(『大江町文化財調査報告書』第3集 大江町教育委員会) 1997

「河守遺跡第3次発掘調査概要」(『大江町文化財調査報告書』第5集 大江町教育委員会) 1998

「河守北遺跡発掘調査概要」(『大江町文化財調査報告書』第5集 大江町教育委員会) 1998

「河守北遺跡・河守遺跡発掘調査概要」(『大江町文化財調査報告書』第11集 大江町教育委員会) 2003

高槻市教育委員会・高槻市立埋蔵文化財調査センター(「高槻市文化財調査報告書第18冊 芥川遺跡発掘調査報告書ー縄文・弥生集落の調査ー」) 1995

竹野町教育委員会(「竹野町文化財調査報告書第8冊 小森岡遺跡」) 1990

圖

版



(1)室橋遺跡遠景(北西から)



(2)室橋遺跡近景(南東から)



(1) 1区・2区調査地全景(上が北東)



(2) 3区調査地全景(上が南西)



(1) 3区・4区・5区調査地全景(上が北東)



(2) 5区調査地全景(上が北東)



(1) 室橋遺跡北部近景(北西から)



(2) 6区調査地全景(上が北東)



(1) 1区溝 S D11101(東から)



(2) 5区溝 S D11501・落ち込み S X11502(北西から)

室橋遺跡第11次・野条遺跡第13次



(1) 室橋遺跡北地区調査前風景
(北西から)



(2) 1区東壁土層断面(北西から)



(3) 1区調査地全景(南東から)

室橋遺跡第11次・野条遺跡第13次



(1) 1区溝 S D11101 (南東から)



(2) 1区溝 S D11101 (東から)



(3) 1区溝 S D11101 土層断面
(東から)



(1) 2区調査地全景(南東から)



(2) 2区調査地全景(南東から)



(3) 2区溝 S D11201土層断面
(南から)

室橋遺跡第11次・野条遺跡第13次



(1) 3区調査地全景(北西から)



(2) 3区柱列S B11302(北東から)



(3) 4区調査地全景(南東から)



(1) 4区調査地北部全景
(上が南西)



(2) 4区掘立柱建物跡 S B11407
(南東から)



(3) 4区掘立柱建物跡 S B11405-P1 遺物出土状況(上が北西)

(1) 4区土坑 S K11409・
S K11410(北西から)



(2) 4区 S K11410(西から)



(3) 4区土坑 S K11408(南西から)





(1) 5区東壁土層断面(南西から)



(2) 5区溝 S D 11501(南東から)



(3) 5区溝 S D 11501(南東から)

室橋遺跡第11次・野条遺跡第13次

(1) 5区落ち込みS X11502と
新庄用水(南東から)



(2) 5区落ち込みS X11502
(南東から)

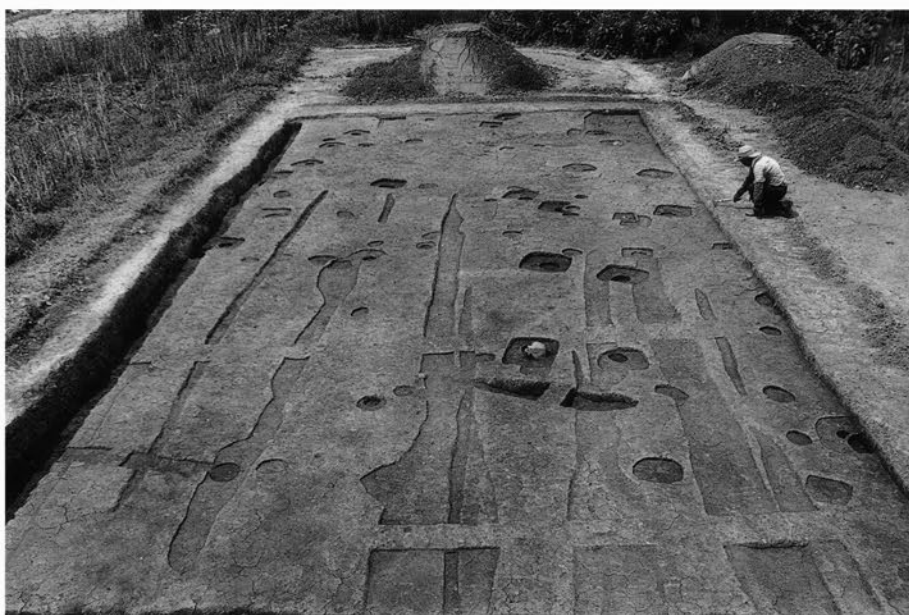


(3) 5区落ち込みS X11502
遺物出土状況(南東から)





(1) 室橋遺跡北地区北東部近景
(西から)



(2) 6区調査地全景(南東から)



(3) 6区調査地全景(北西から)

室橋遺跡第11次・野条遺跡第13次

(1) 6区掘立柱建物跡 S B11601
(南から)



(2) 6区掘立柱建物跡 S B11602-
P12(東から)



(3) 6区柱列 S A11603-P 9
(北から)





(1) 7区調査地全景(南から)



(2) 室橋遺跡南地区近景(南東から)



(1) 7区調査地全景(上が北)



(2) 7区調査地全景(上が西)



(1) 7区竪穴式住居跡群(上が西)



(2) 7区北西部溝群(上が西)



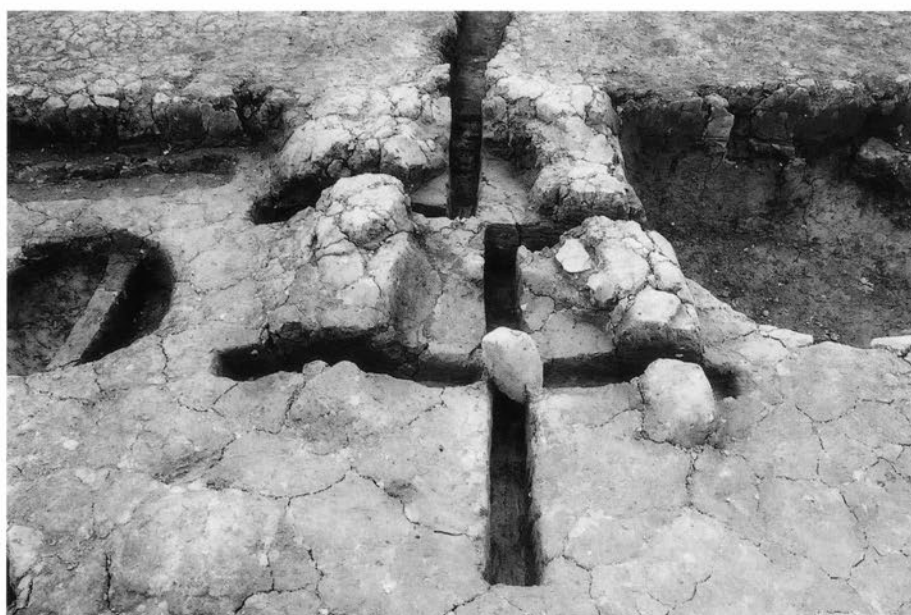
(1) 7区竪穴式住居跡S H11710(東から)



(2) 同上造り付け竈(東から)



(1) 7区竪穴式住居跡 S H11710 竈
(北から)



(2) 同上竈断ち割り(東から)



(3) 7区竪穴式住居跡 S H11710
貯蔵穴 K 1 内土器出土状況
(東から)

室橋遺跡第11次・野条遺跡第13次

(1) 7区竪穴式住居跡 S H11706
(北東から)



(2) 7区竪穴式住居跡 S H11711
遺物出土状況(南から)



(3) 同上床面検出状況(北東から)



室橋遺跡第11次・野条遺跡第13次



(1) 7区溝 S D 11705・S D 11707
(北西から)



(2) 7区溝 S D 11707(北西から)



(3) 7区溝 S D 11707(南東から)

室橋遺跡第11次・野条遺跡第13次

(1) 7区溝S D11707溝内集石
検出状況(西から)



(2) 同上溝内瓦器出土状況
(北から)



(3) 7区溝S D11714・11715・
11717・11718(北から)



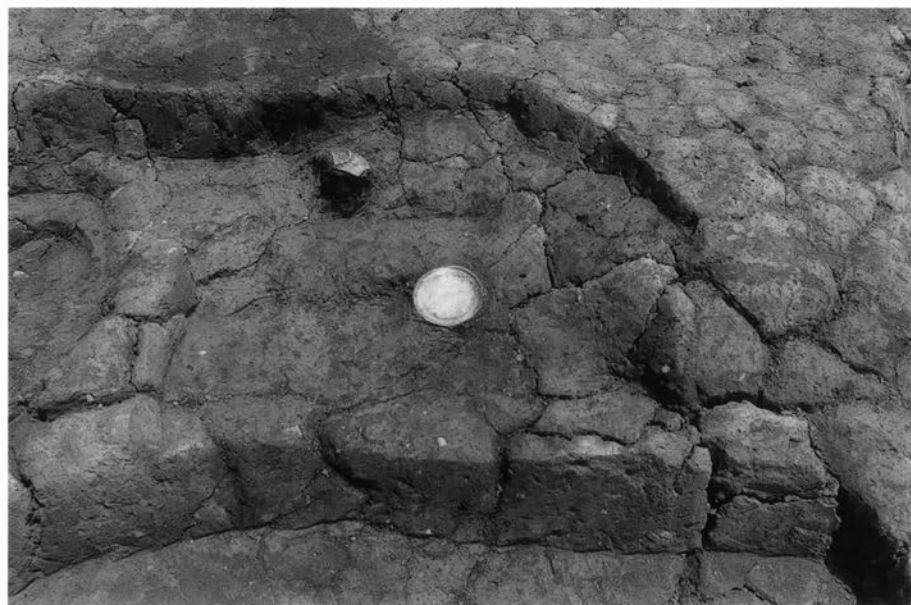
室橋遺跡第11次・野条遺跡第13次



(1) 7区溝 S D11715・S D11717・
S D11718(西から)



(2) 7区土器溜まり S X11720
(北西から)



(3) 7区土坑 S K11709遺物
出土状況(南東から)

室橋遺跡第11次・野条遺跡第13次



(1) 7区溝S D11707土層断面
(南東から)



(2) 7区溝S D11705土層断面
(南東から)



(3) 7区溝S D11701土層断面
(南東から)

室橋遺跡第11次・野条遺跡第13次



(1) 野条遺跡調査地全景(東から)



(2) 野条遺跡調査地全景(西から)



(3) 調査地東部遺構検出状況
(東から)



24



24



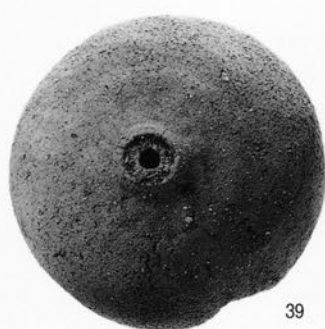
61



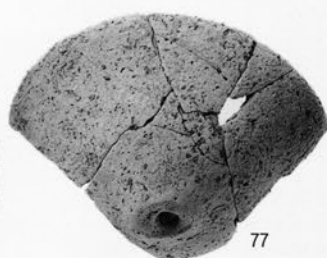
27



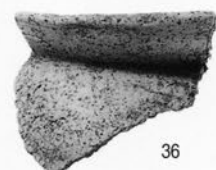
28



39



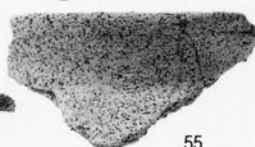
77



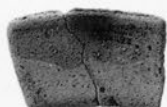
36



56



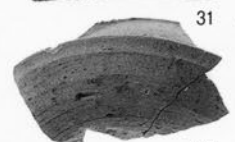
55



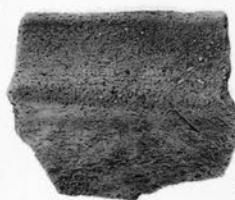
47



31



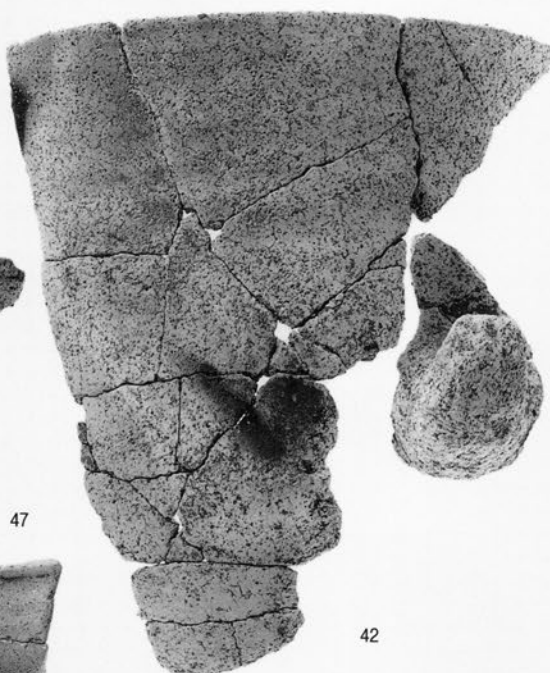
64



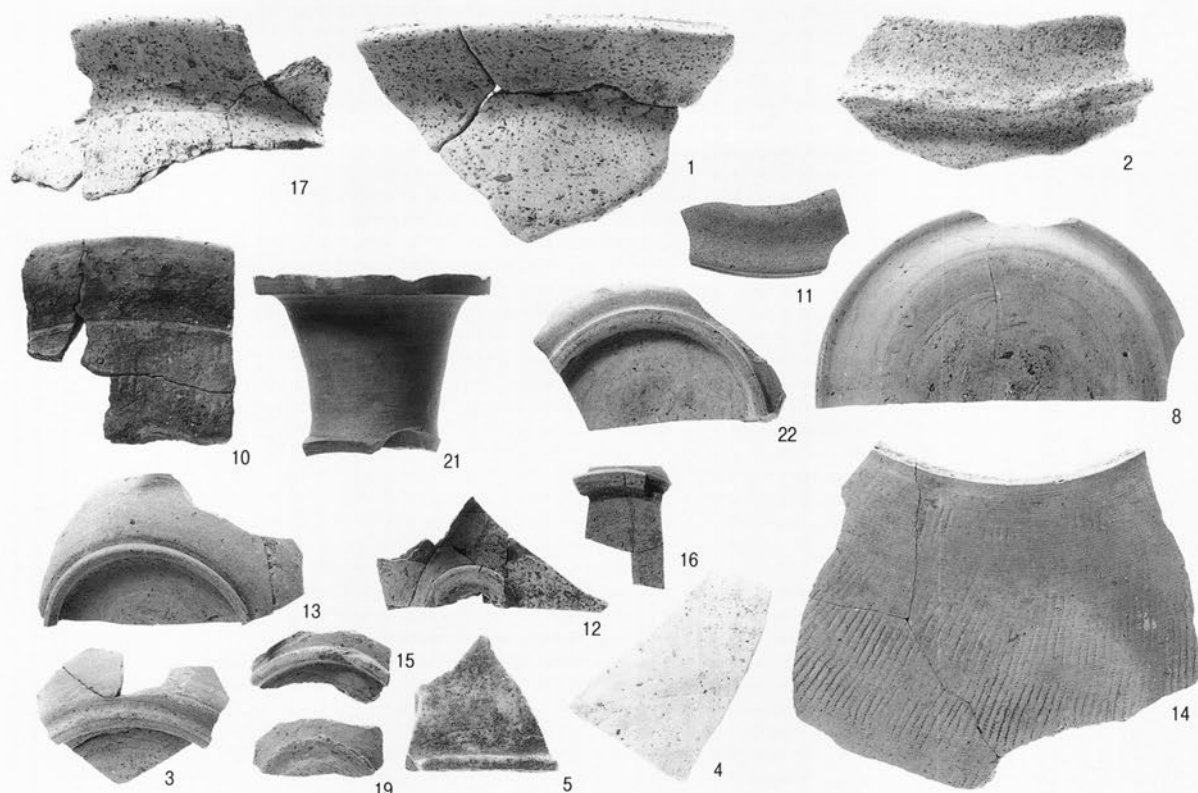
46



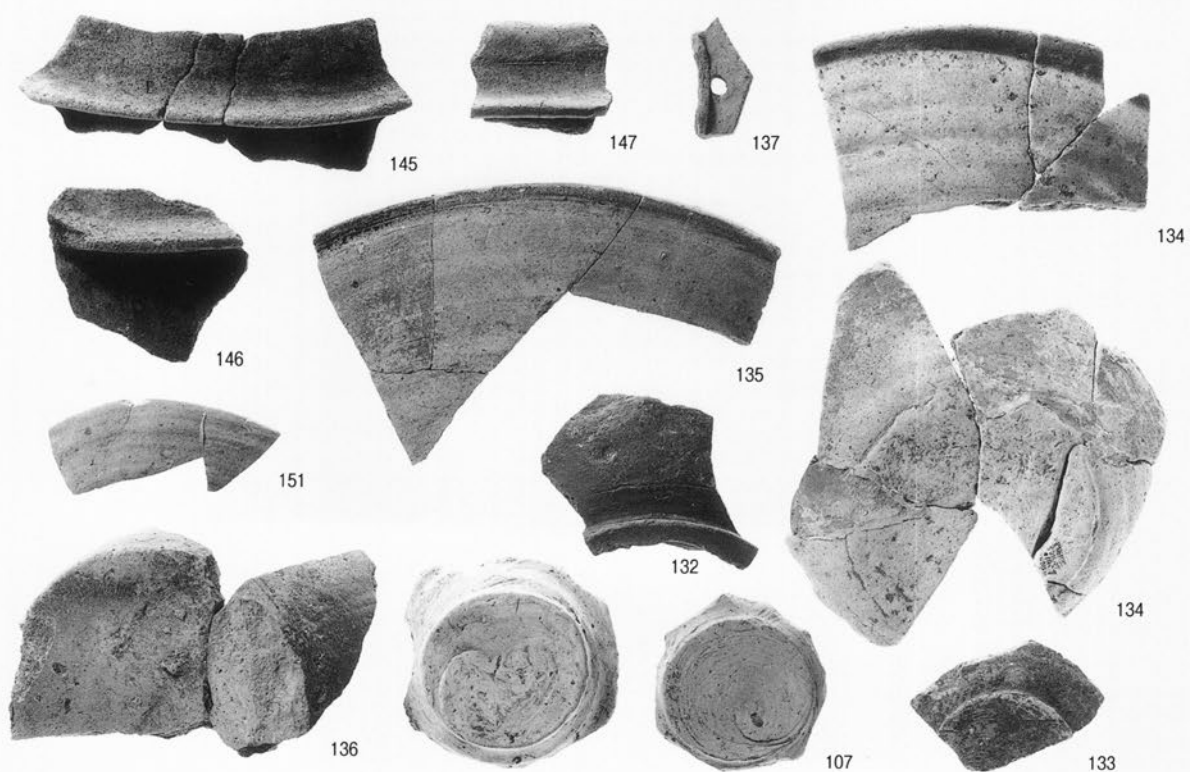
29



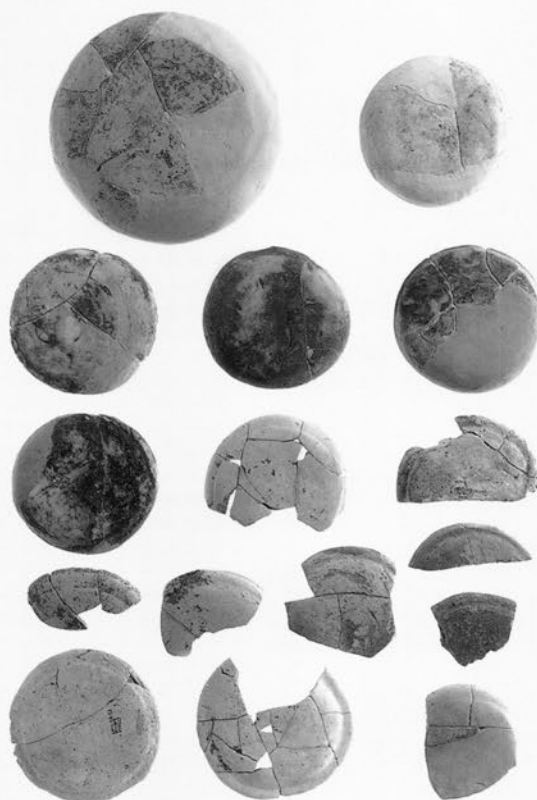
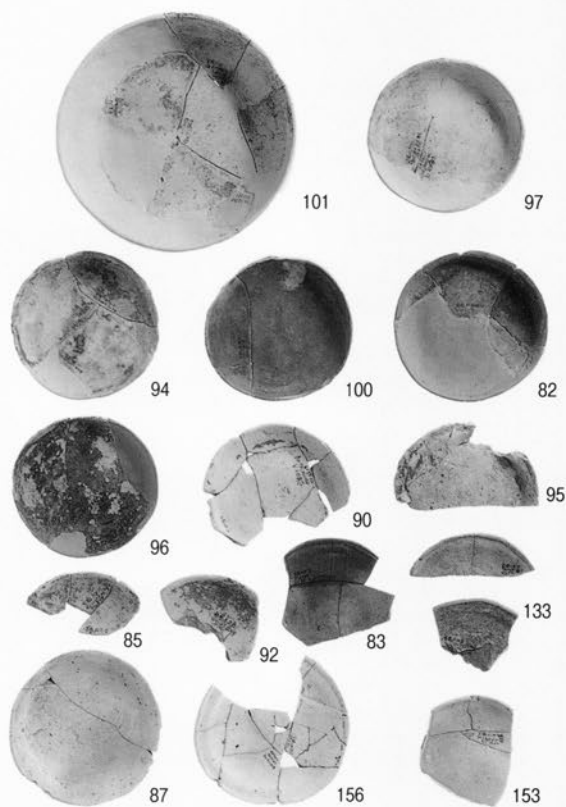
42



(1) 1～6区出土遺物



(2) 7区出土遺物



116



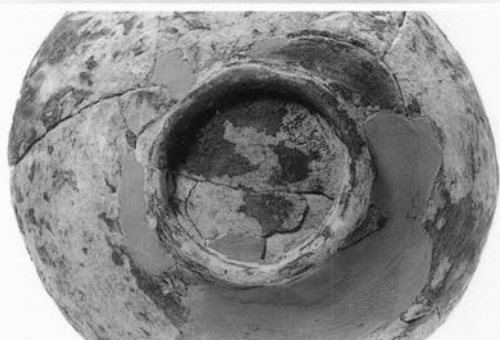
113



111



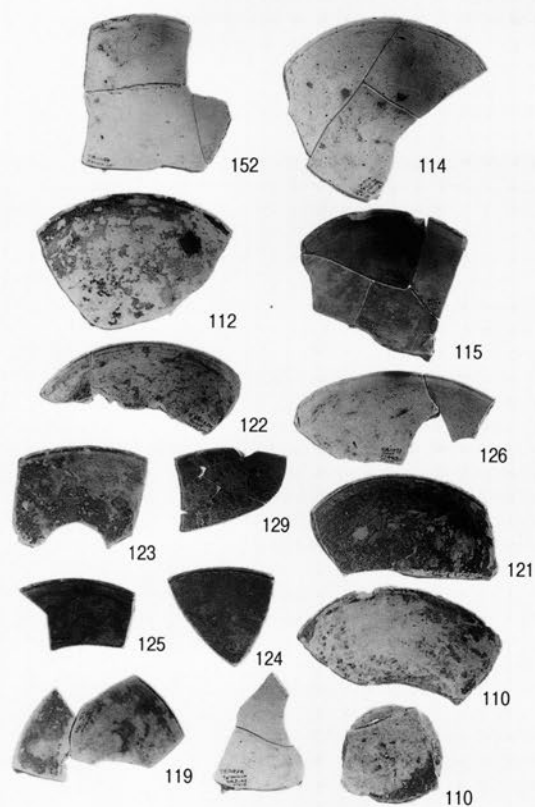
18



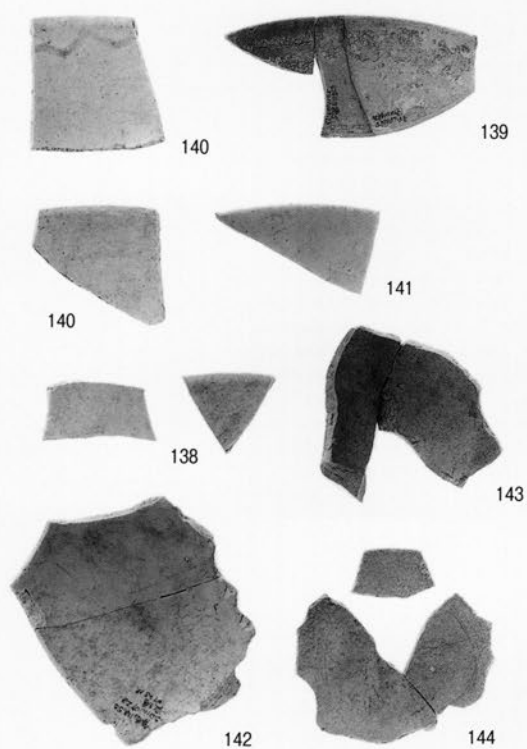
111



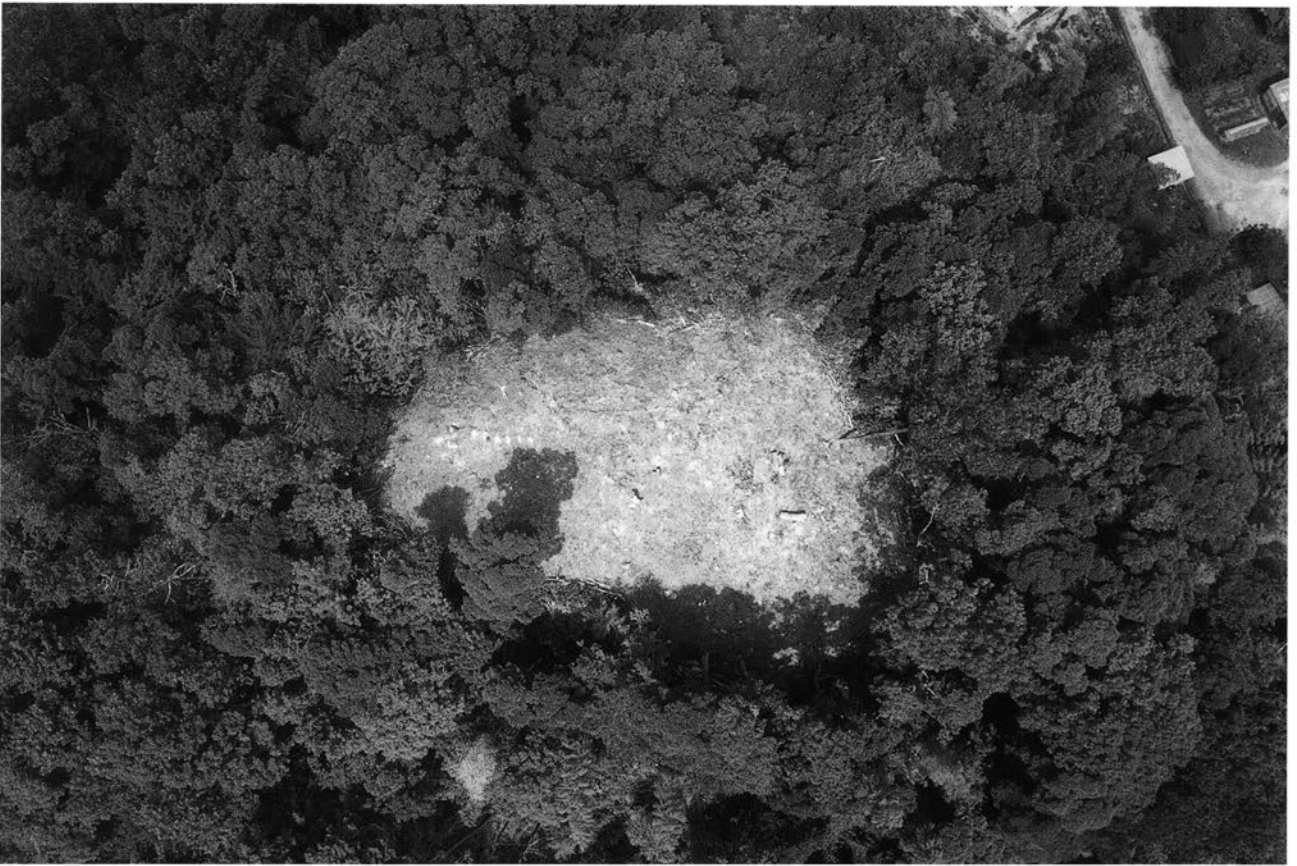
18



(1) 7区出土遺物 瓦器碗



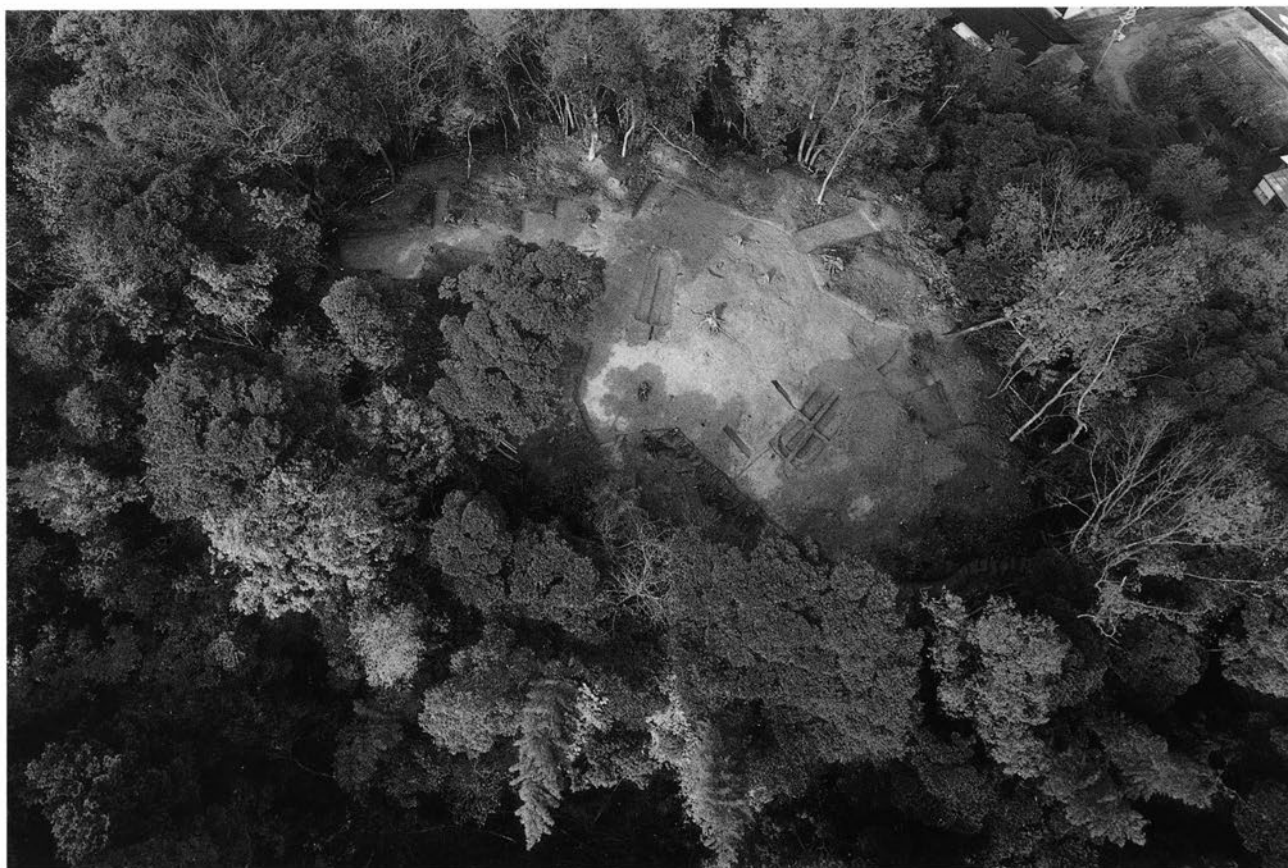
(2) 7区出土遺物 白磁類



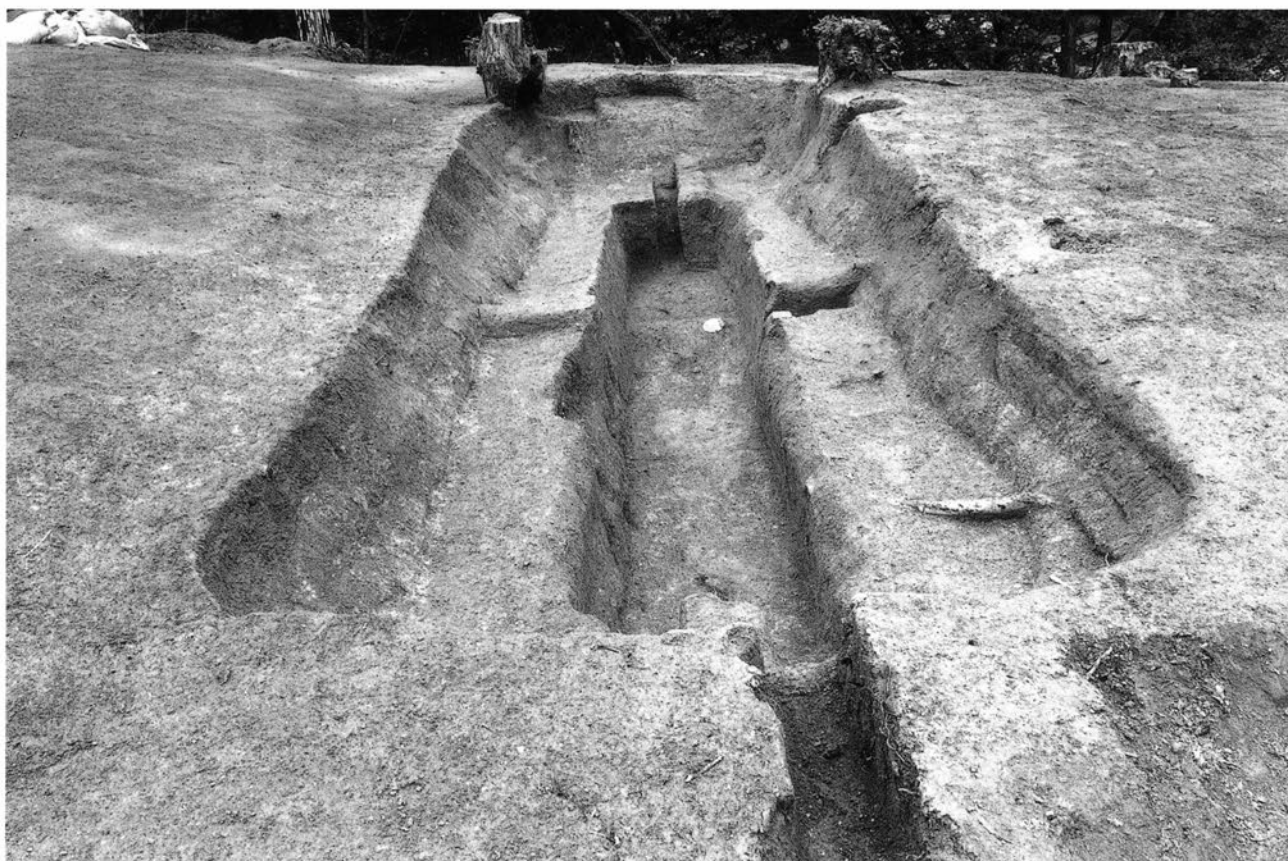
(1) 西尾根地区調査前全景(空撮、右上が北)



(2) 調査地遠景(空撮、北から)



(1) 西尾根地区調査地全景(空撮、右上が北)



(2) 5号墳埋葬施設全景(南東から)

(1) 5号墳埋葬施設玉類出土状況
(南東から)



(2) 5号墳埋葬施設銅鏡等
出土状況(南東から)



(3) 5号墳埋葬施設完掘状況
(北西から)

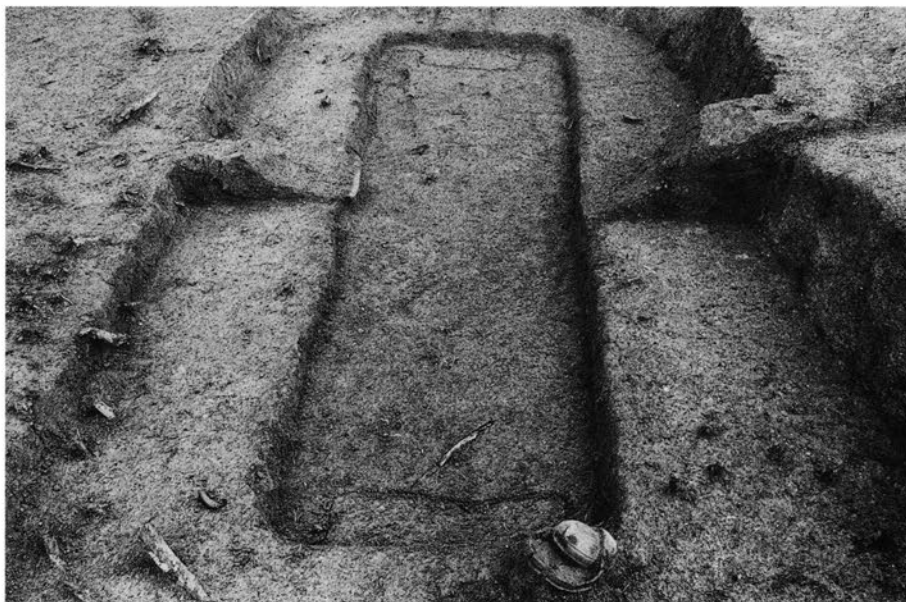




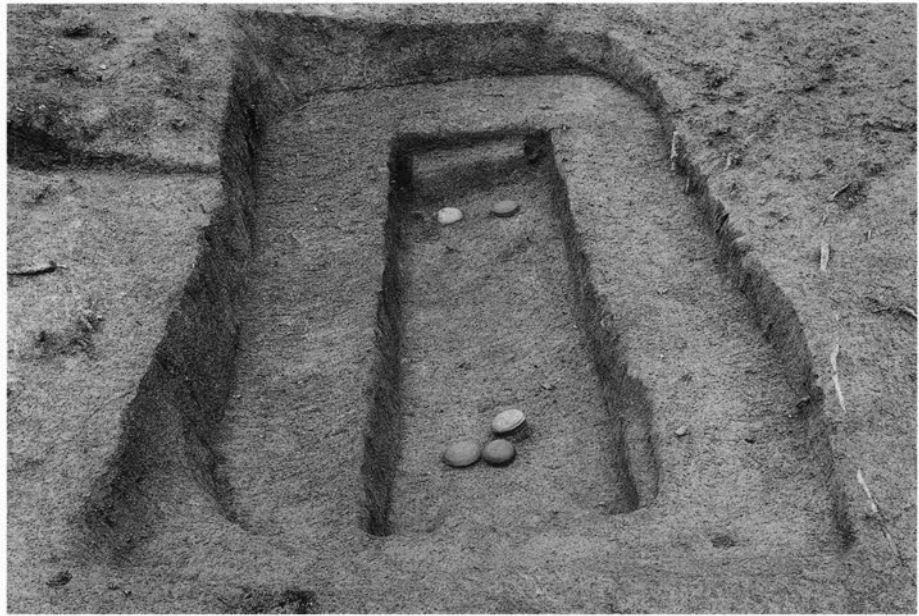
(1) 6号墳墳丘上面遺物出土状況
(東から)



(2) 6号墳墳丘上面遺物出土状況
(西から)



(3) 6号墳木棺痕跡検出状況
(北から)



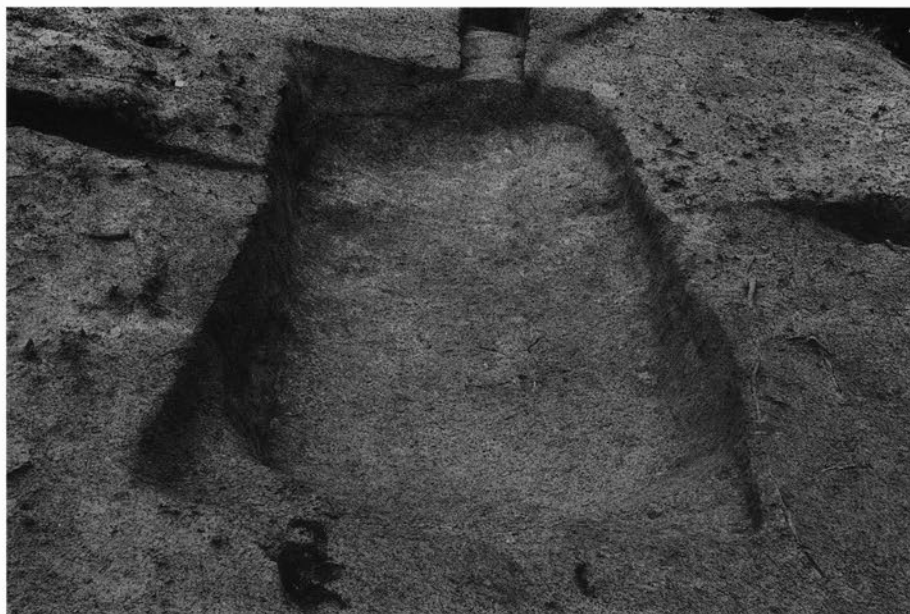
(1) 6号墳埋葬施設全景(南から)



(2) 6号墳埋葬施設須恵器
出土状況(北から)



(3) 6号墳埋葬施設鉄製品
出土状況(西から)



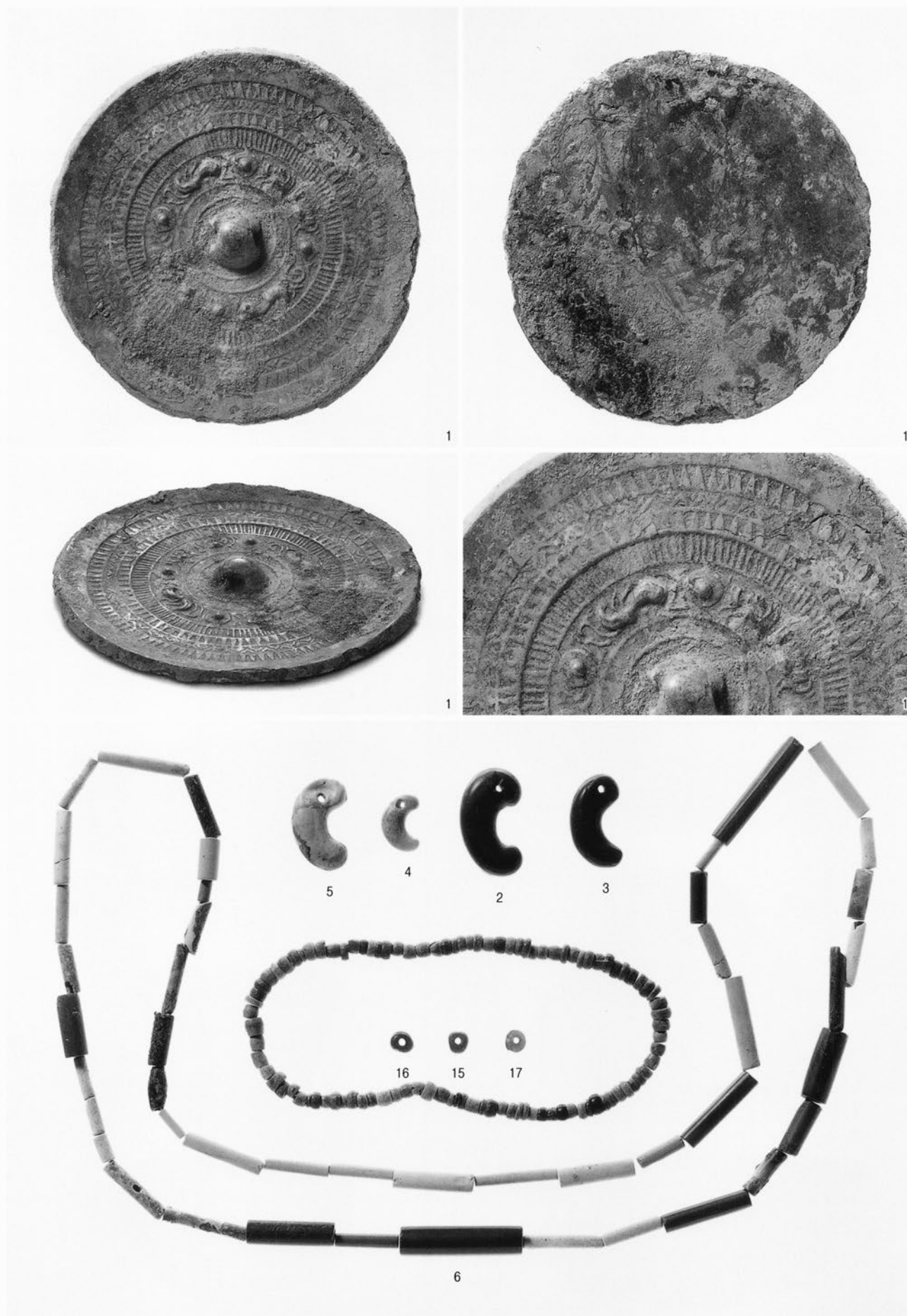
(1) 6号墳埋葬施設完掘状況
(南から)



(2) 東尾根地区調査地全景
(空撮、上が北)



(3) 東尾根地区4区全景
(南西から)



5号墳出土遺物



1



5



2



6



3



7



4



8



9



11



10



12



13



14



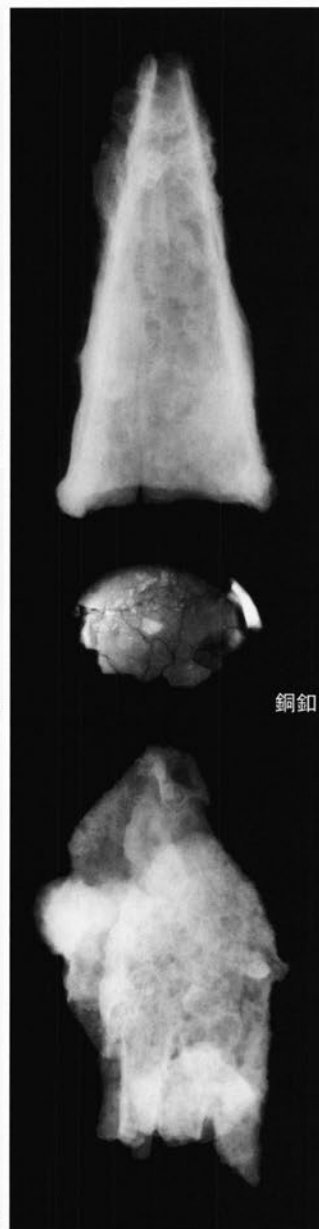
15



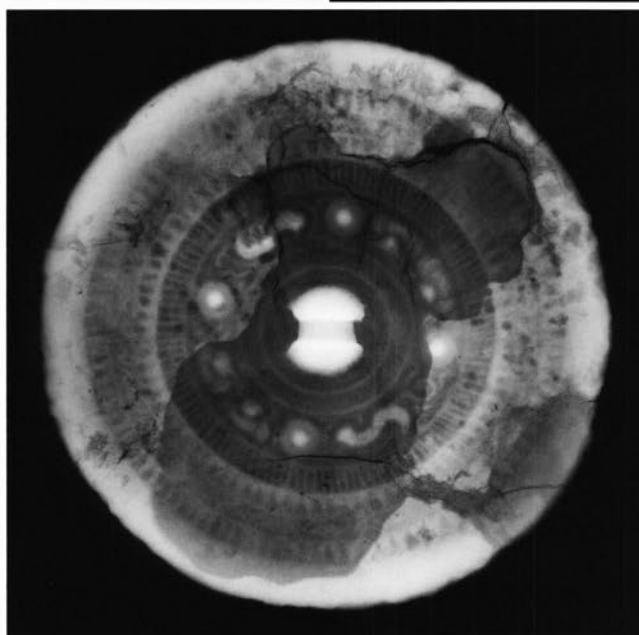
15

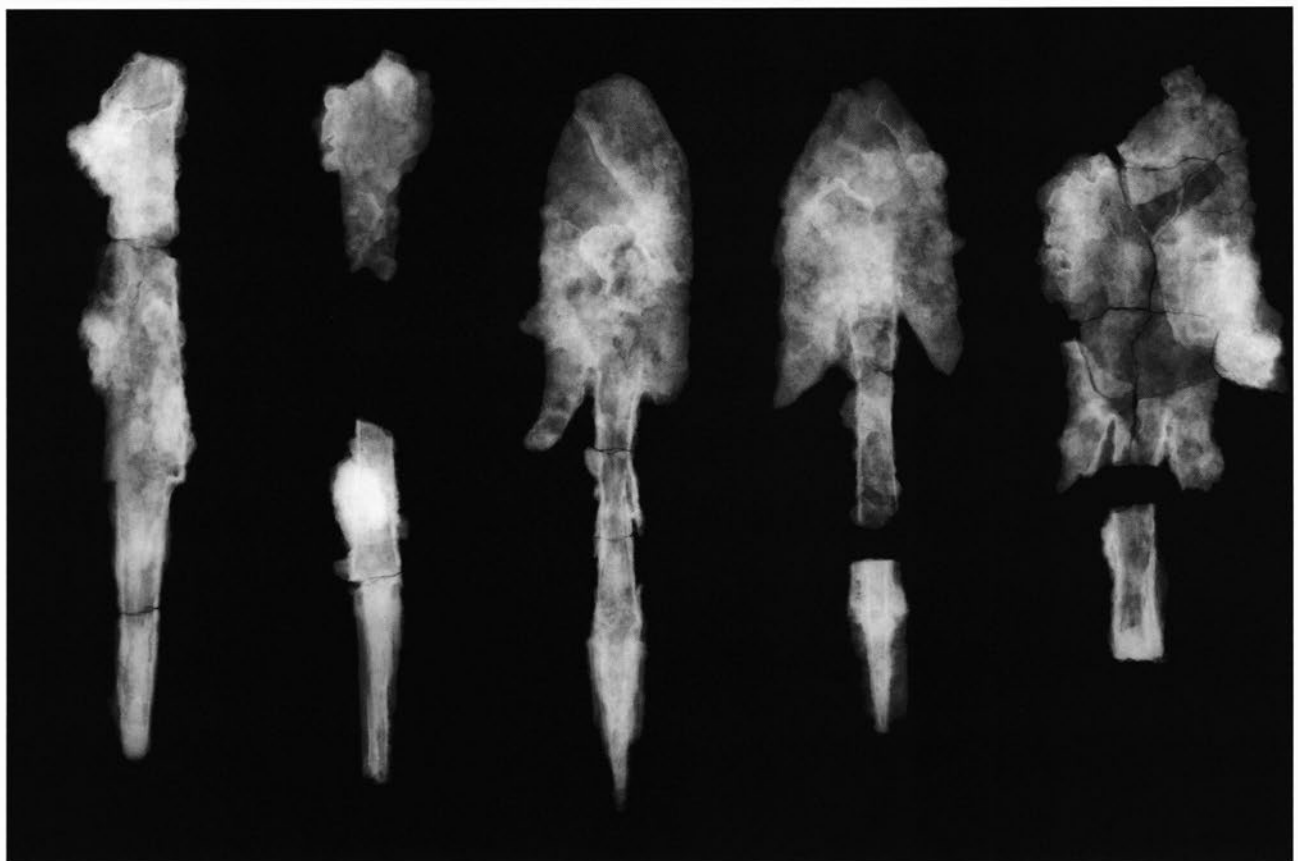
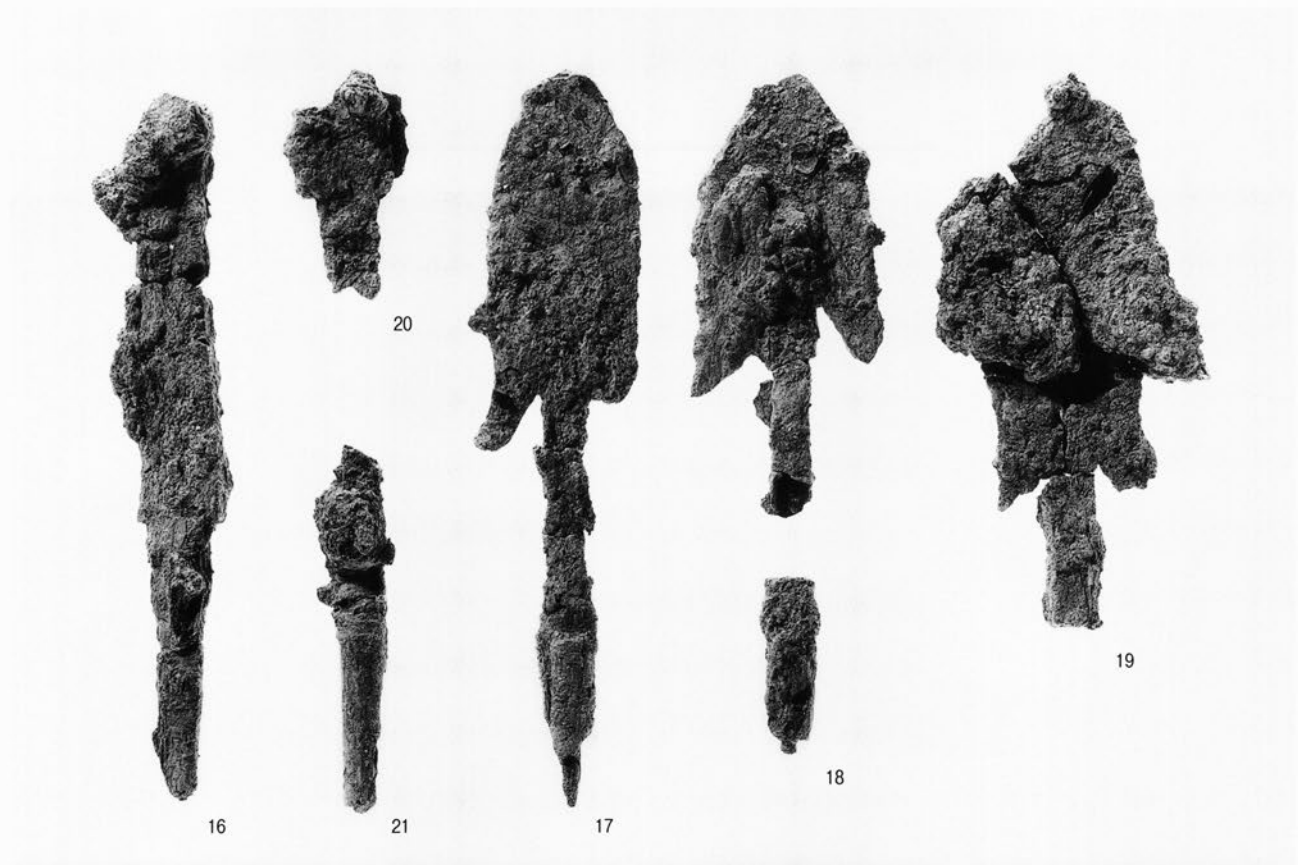


22~24



銅釦





6号墳出土遺物3(鉄製品)



(1) 第1トレンチ全景(北東から)



(2) 掘立柱建物跡 S B01(南から)



(3) 掘立柱建物跡 S B02(東から)



(1) 竪穴式住居跡 S H03-1
(北西から)

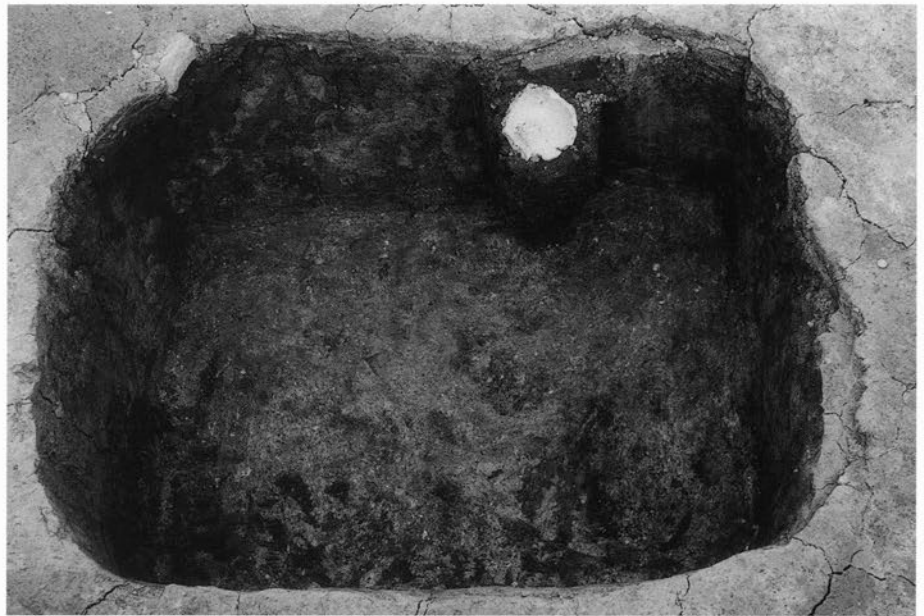


(2) 竪穴式住居跡 S H03-2
(北西から)



(3) 竪穴式住居跡 S H03
遺物出土状況(北東から)

(1) 土坑 S K104 青磁出土状況
(西から)



(2) 第2トレンチ全景(上が北西)



(3) 第2トレンチ全景(南西から)





(1) 竪穴式住居跡 S H04 (東から)

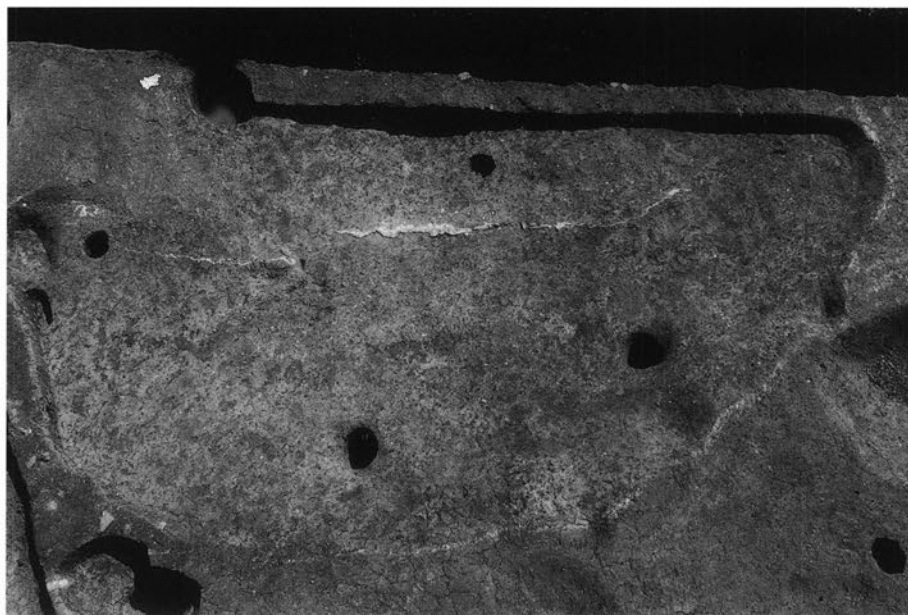


(2) 竪穴式住居跡 S H04
遺物出土状況 (北から)



(3) 土坑 S K201 検出状況
(北東から)

(1) 土坑 S K 201 完掘状況
(北西から)



(2) 第3トレンチ全景(上が西)



(3) 土坑 S K 16 全景(西から)





(1) 谷状地形N R07(南西から)



(2) 第3-3トレンチ検出状況
(南東から)



(3) 石見型木製品出土状況
(南から)



(1) 堰状遺構 S X15(南から)



(2) 土器溜まり S X09検出状況
(西から)



(3) S X09遺物出土状況(東から)



(1) 第3-3トレンチ完掘状況
(南東から)



(2) 第4トレンチ全景(上が西)



(3) 第4トレンチ全景(北から)

(1) 溝 S D17 遺物出土状況 2
(南から)



(2) 漆土器184出土状況(南から)



(3) 護岸施設 S X18・19 検出状況
(南から)





9



99



21



SH03



102



29

30

31



138



150



148



154



157



158



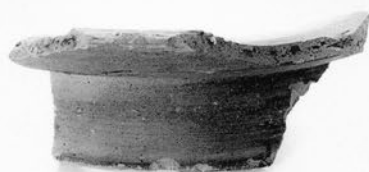
164



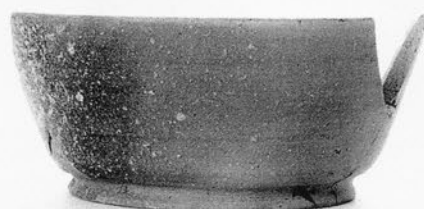
162



166



168



173



175



167



177



184



167



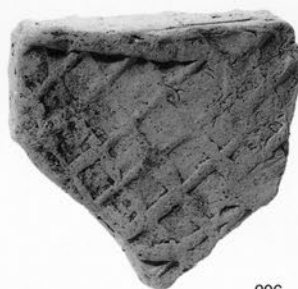
202



203



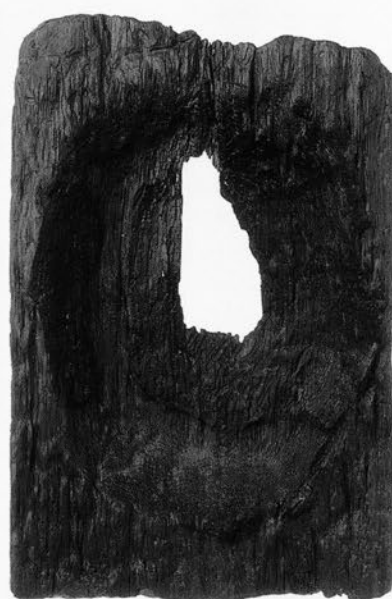
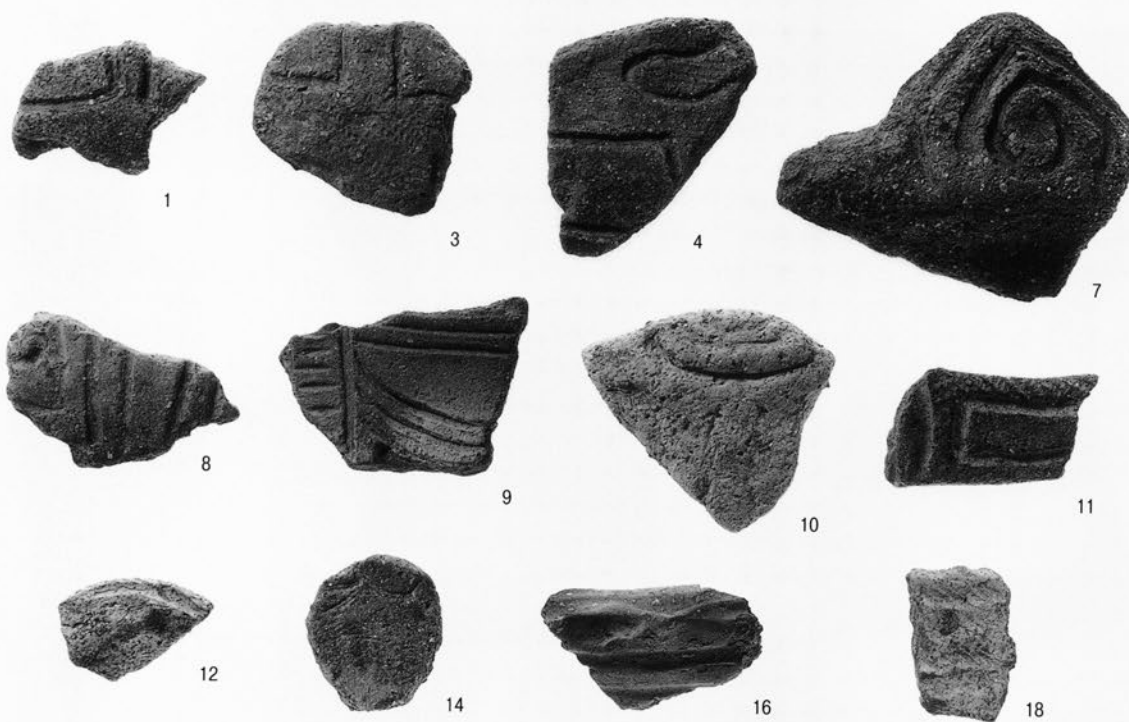
205



206



204



1

2

3



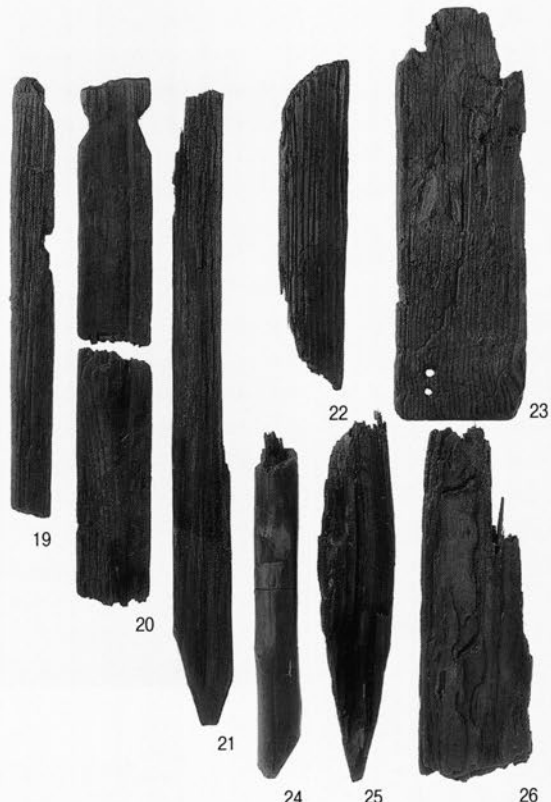
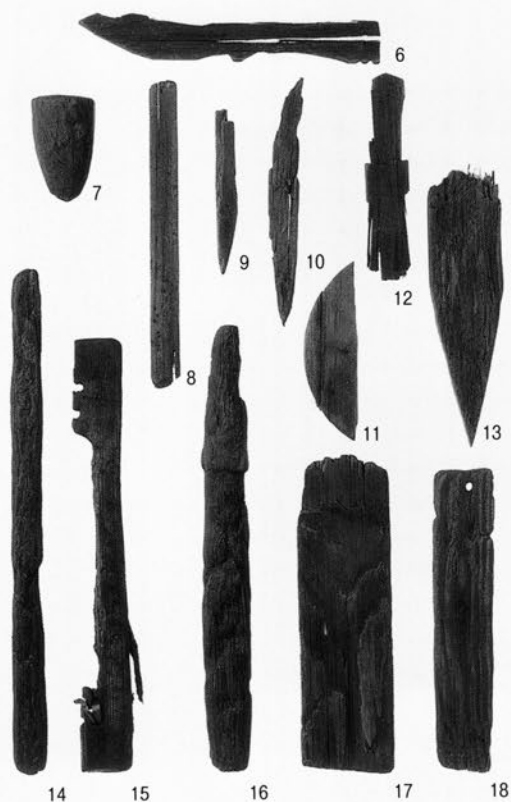
4



4



5



報告書抄録

ふりがな								
書 名								
副書名								
巻 次								
シリーズ名	京都府遺跡調査報告集							
シリーズ番号	第130冊							
編著者名								
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40-3				Tel 075(933)3877			
発行年月日	西暦 2008 年 3 月 31 日							
ふりがな	ふりがな	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
むろはしいせき だいじゅういち じ・のじょうい せきだいじゅう さんじ	なんたんしやぎ ちょうむろはし							
室橋遺跡第11 次・野条遺跡第 13次	南丹市八木町室 橋	26213	6	35° 06′ 07″	135° 31′ 43″	20070423 ～ 20070907	2,200	ほ場整備
せんぞくこふん ぐん	きょうたんごし みねやまちょう いしまるせんぞ くだに							
千束古墳群	京丹後市峰山町 石丸千束谷	26481	10	35° 38′ 41″	135° 02′ 56″	20070821 ～ 20071206	380	道路建設
こうもりきたい せきだいごじ	ふくちやましお おえちょうこう もり、せき							
河守北遺跡第5 次	福知山市大江町 河守、関	26201	19	35° 23′ 37″	135° 09′ 00″	20060724 ～ 20061223	1580	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
室橋遺跡第11次・野条遺跡第13次	集落	弥生/古墳/奈良/平安/中世	竪穴式住居跡/掘立柱建物跡/溝	土師器/須恵器/瓦器/石鏃	用水路と見られる大溝を確認
千束古墳群	古墳	古墳時代中期～後期	円墳/方墳	銅鏡/勾玉/管玉/ガラス小玉/白玉/鉄鏃/鉄刀子/鉄鐸/銅釦/須恵器/土師器	近接する古墳2基の築造には100年余りの時期差がある。小規模な古墳から銅鏡が出土。
河守北遺跡第5次	集落	縄文/弥生/古墳/奈良/平安/中世	竪穴式住居跡/掘立柱建物跡/谷状地形	縄文土器/弥生土器/土師器/須恵器/瓦/木製品	石見型木製品が出土
<p>室橋遺跡・野条遺跡の調査では、古墳時代のかまどを造り付ける竪穴式住居跡や奈良時代の掘立柱建物跡、弥生時代から平安時代にわたる数多くの溝などを検出。溝は、幅5m・深さ2mを測るものから幅1m・深さ1mほどのものまであり、灌漑用水路の可能性が高い。</p> <p>千束古墳群の調査では、2基の古墳を調査。5号墳は、5世紀前半の直径13mの半円形の低墳丘の古墳で、木棺墓1基から倣製鏡と勾玉・管玉などの玉類が出土。6号墳は、10×7mの平坦面をもつ6世紀前半の方墳で、木棺墓1基から須恵器、鉄製品などが出土。</p> <p>河守北遺跡の調査では、弥生時代後期の竪穴式住居跡や古墳時代の護岸施設及び奈良・平安時代の掘立柱建物跡などを検出。出土遺物は多彩で、縄文時代後期の土器、弥生時代中期の土器・木製品、古墳時代前期の土器・木製品、白鳳期の瓦類などがある。</p>					

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

京都府遺跡調査報告集 第130冊

平成20年3月31日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141